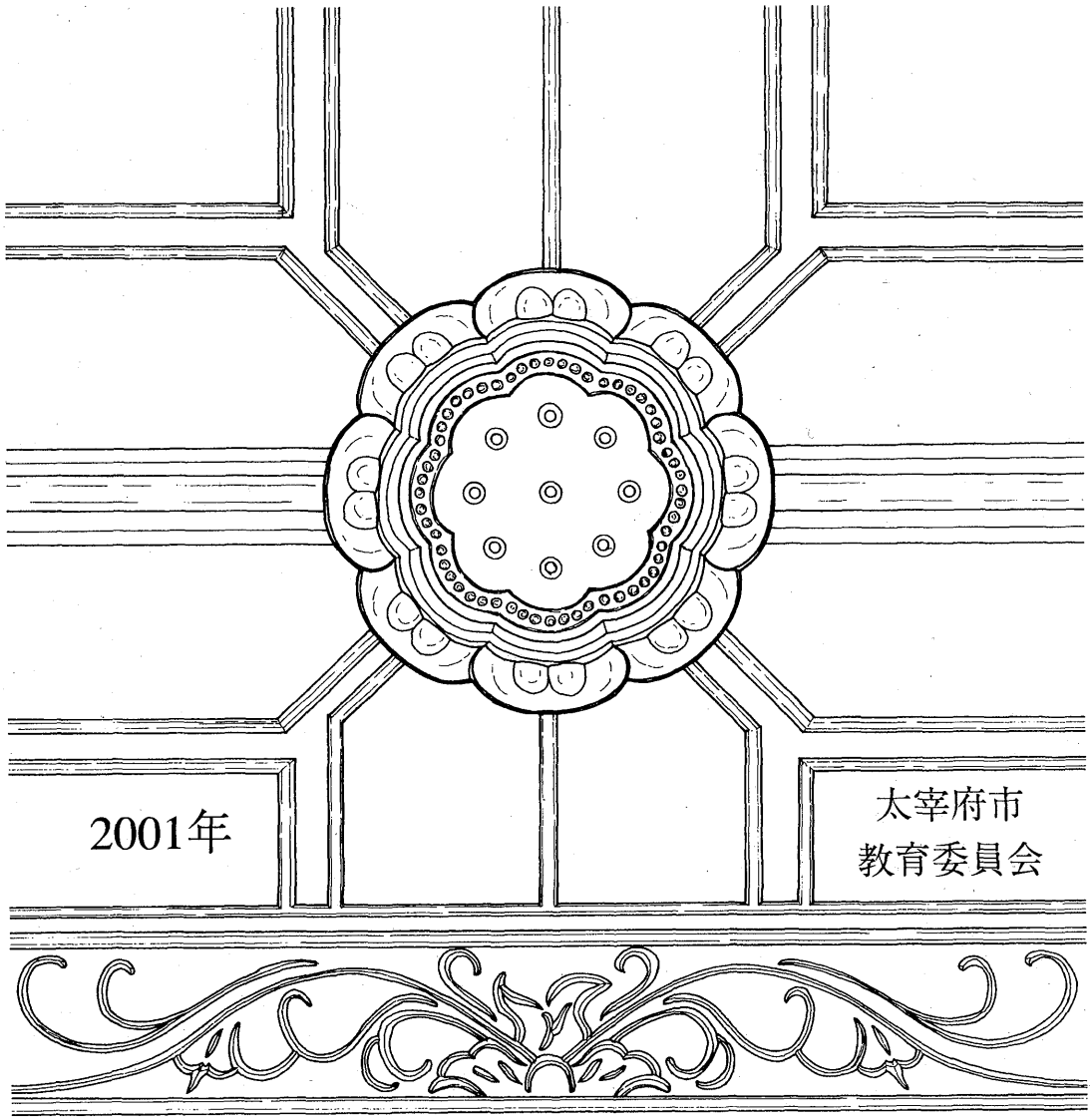
太宰府市の文化財第53集

大宰府条坊跡XVII

－鉾ノ浦遺跡（大宰府条坊跡第47次調査）－



2001年

太宰府市
教育委員会

太宰府市の文化財第53集

大宰府条坊跡XVII

－鉾ノ浦遺跡（大宰府条坊跡第47次調査）－

2001年

太宰府市教育委員会

序

鉾ノ浦遺跡が世に知られたのは昭和58年度の終わりで、当時国内でも数例しか知られていなかった梵鐘を鋳造した工房遺跡として新聞に大きく報道されたことによります。あれからすでに18年という歳月が流れてしまい、いまでは同様の遺跡も各地でみつかり、その度ごとに当遺跡の報告書刊行を待ち望む声が聞かれました。その間、本市では観世音寺地区土地区画整理事業、佐野地区土地区画整理事業をはじめとする広域な公共事業やバブル時代の民間開発に対応する事前調査を優先し、専門職員も当時２名であったものが最大時には８名にまで達し、最近にいたってようやく徐々にではありますが遅れていた報告書を刊行できるようになりました。

今回の報告書は労働省の緊急雇用対策費を活用し、さらに民間活力を導入して報告書の刊行をめざしました。こうした方法は本市では初めての試みでありますが、今後も遅れている報告書刊行に向けて、さまざまな方法を模索し、試行錯誤しながらも進めて参りたいと考えております。

拙い冊子でありますが、本書が鉾ノ浦遺跡の理解の一助となるだけでなく、学術・研究分野はもとより、郷土史を考え、理解する資料として活用いただき、今後の文化財行政の発展に寄与できれば望外の喜びであります。

最後になりましたが、調査を承諾くださいました地権者の方をはじめ、調査や整理にご苦労いただいた皆様、ご指導いただいた諸先生方に対し、厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

太宰府市教育委員会

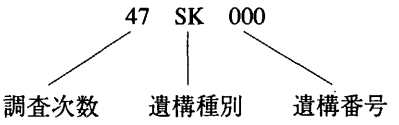
教育長　關　敏治

例言

1）本書は、昭和58（1983）年度に太宰府市教育委員会が直営で実施した鉾ノ浦遺跡の発掘調査報告書である。

2）遺跡及び調査の事務手続き上の名称は大宰府条坊跡第47次調査であるが、新聞報道及び本報告書刊行までに発表した刊行物で鉾ノ浦遺跡（字名から命名）の名称を使用しているため、本書もそれに準じた。ただし遺物への注記や報告書での遺構番号、収蔵庫内での整理収納等々はすべて大宰府条坊跡第47次調査であることを前提として整理されている。

なお本書に掲載される遺構番号は以下の要領で理解される。



3）遺構実測の基準点は国土調査法第II座標系を用いている。したがって本書に記載される方位（図・文とも）はすべて座標北を表す。

4）遺構の実測（1／20）は鐙り方測量によって、山本信夫、岡部大治、狭川真一、狭川麻子が行い、遺構の写真撮影は、山本信夫、狭川真一、気球を用いた調査区全体の撮影は（有）空中写真稲富が行った。

5）整理及び報告書の作成は、平成11年度まで随時直営で実施していたが、平成12年度に本格的作業を行うにあたり、作業全般を（株）海援社に委託した。

6）出土遺物の実測は、山本麻里子、酒井三保子、福井円、相川寿美子、阿部浩子、時津裕子、森部純子、白水文恵、井上由紀子、今岡一恵、武田浩子、糟屋尚子、束原真希子、内田真雄、宮本飛鳥、山本信夫、狭川真一が行った。浄書は上記の者のほか、一部デジタルトレースを行った。

7）本書の執筆は4（1）を中島恒次郎、他を狭川真一が担当したが、4（2）については山本信夫及び狭川真一の既発表原稿をベースとし加筆、再編集したものである。

8）本書の編集は城戸康利が監修し、狭川真一が担当した。

目次

1、遺跡の位置と環境 …… 1
2、調査の経過と体制 …… 3
3、調査の概要 …… 6
4、小　結 ……239

1、遺跡の位置と環境

調査地は福岡県太宰府市大字太宰府字鉾ノ浦2987番地の1・5に所在する。地理的には現在の太宰府中学校が建つ丘陵の北側麓部分に位置し、調査前の地目は水田である。一部埋め立てられてはいたが、概ね東に高く西に下る地形である。調査地南側の丘陵は高尾山から西側に舌状に張り出すもので、現在の標高は約86m（最高所）で、調査地との比高差はおよそ47mである。中学校建設以前にすでに養鶏場として開発されており、この丘陵状での遺跡の展開は明らかではない。しかし、やや東側に位置する丘陵基部付近では13～14世紀と考えられる石組墓が検出され、陶製の五輪塔も出土している。また丘陵を分断するかのように中世山城の空堀と思しき遺構も検出されている（五条遺跡2次調査）。

調査地のすぐ西側は西鉄五条駅で学生の乗降が多く、近年の再開発に伴ってその地下から中世の居館に伴うと見られる濠が見出され、多数の掘立柱建物や井戸、土坑、ピットなどが検出されている（大宰府条坊跡第132次ほか）。

この五条駅の北側には通称「どんかん道」と呼ばれる道路があり、太宰府天満宮から榎社に御霊を遷す祭礼で行列が通過するものである。この行事は11世紀代には開始されていることが分かっており、平安期における大宰府の条坊が存続している時期と重なることや、この道に近接して当該期の道路遺構が見出されることから、これが当時の条坊痕跡の一部であることが判

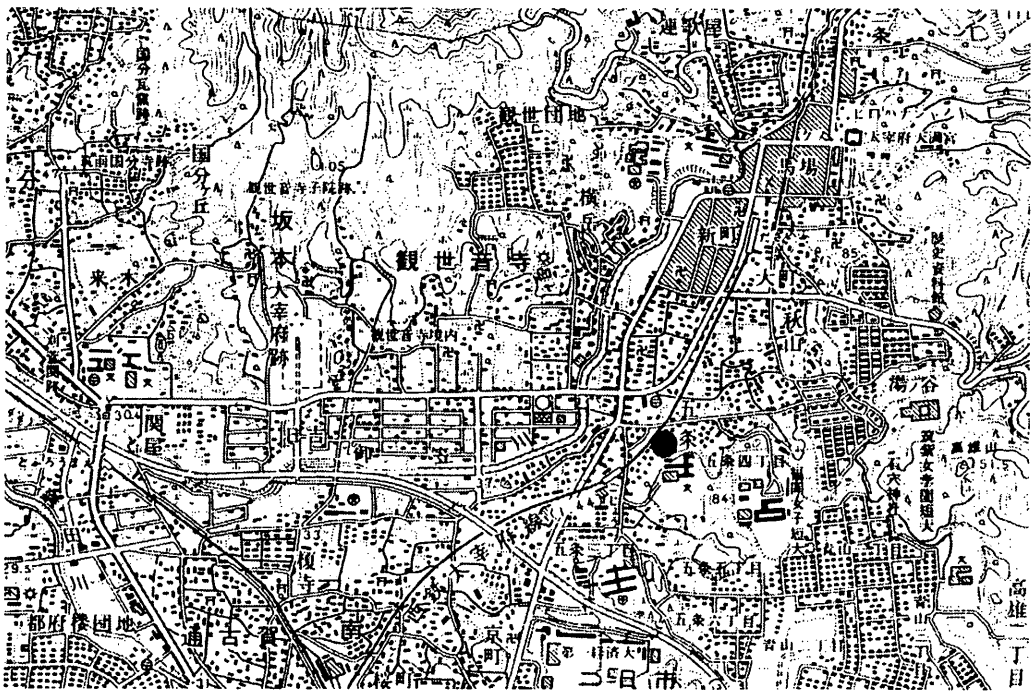


Fig.1　鉾ノ浦遺跡位置図（1/25,000、●が調査地）

明するとともに五条駅北側を通過していることから考えると、先述した居館や今回報告する鉾ノ浦遺跡は、この道路に近接して存在していたことがわかる。

同様の時期には太宰府の平野の東側に集中して遺跡の密度が高くなる。この五条駅周辺では他に、太宰府南条坊遺跡があげられる。現在は国道3号線の高架橋下になっているが、周辺の調査と併せるとここにも13世紀代の生産遺跡が展開していたことが判明している。また、観世音寺の東側と南側からも鋳型を中心とする生産関連遺物が多数検出されており、ここに報告する鉾ノ浦遺跡と併せると、観世音寺の南側から東側一帯には多くの生産者集団が存在していたことが窺われる。

なお太宰府には近世まで六座とよばれる手工業者の組織が存在していた。そこには当然のことながら鋳物師も含まれており、それとの関連も注目されるところである。

とにかく鉾ノ浦遺跡の発見は、中世の太宰府像を大きく塗り変えただけでなく、博多を含めた北部九州の中世像にも一石を投じる役目をはたすものと考えたい。

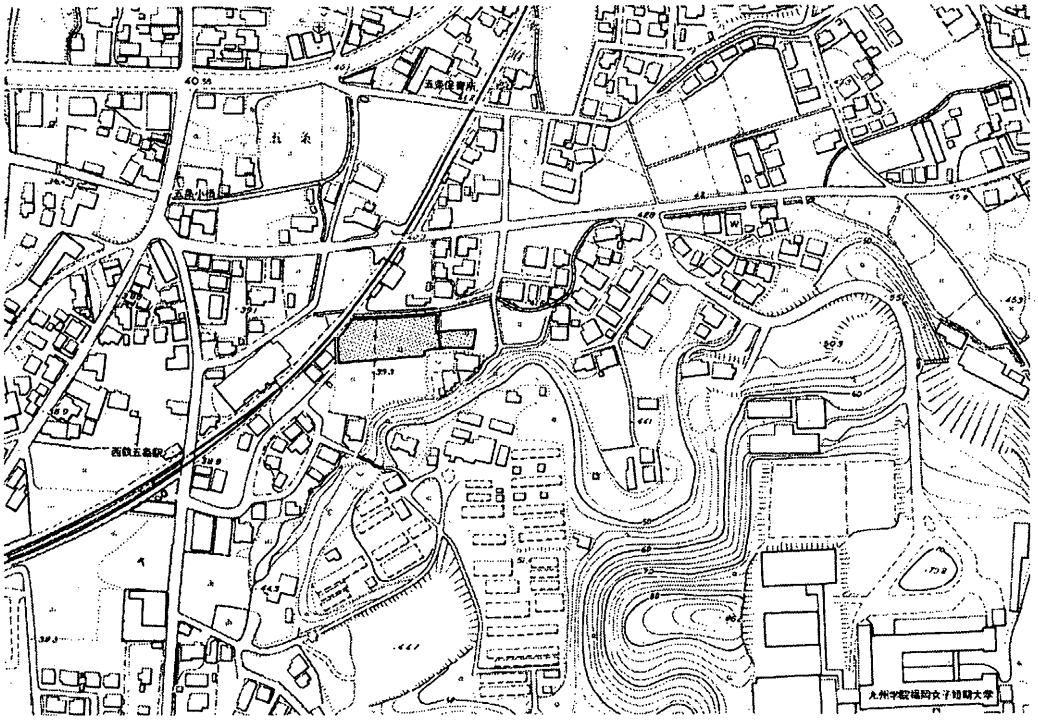


Fig.2　鉾ノ浦遺跡調査地位置図（1/5,000、昭和52年調整都市計画図に加筆・縮小）

2、調査の経過と体制

(1) 調査経過

昭和59（1984）年2月25日、県立九州歴史資料館では開館十周年記念展示として太宰府観世音寺梵鐘と共にその兄弟鐘とされる京都妙心寺の梵鐘が並列展示された。両鐘は先学の研究によって製作地が同一と考えられているものであり、それが事実とすれば両鐘が再会するのは実に1300年ぶりということになる。この話題に多くの人々の高い関心が太宰府の地に向けられることとなった。このような中、同じ市内で今度は梵鐘の鋳造遺跡が発掘されることとなったのである。これはまったくの偶然であるが、我々は歴史的な因縁のようなものを感ぜずにはいられなかった。

さて、鉢ノ浦遺跡を調査した昭和58（1983）年度は年度当初から小規模な開発に伴う調査が密集し、春には商工会館建設に先立つ調査（大宰府条坊跡第42次調査／以下条42次のように略す）、続いて榎社隣接地での調査（条43次）、市役所改築に伴う調査（条35-2次）のほか、筑前国分寺跡隣接地（国分寺9次）、御笠団印出土地隣接地での調査などがあり12月まではほとんど隙間なく調査が続くことになっており、技師2名ではやや過酷なスケジュールと言える年であった。そこに当該地で共同住宅建設の話が持ち上がり、教育委員会（当時は社会教育課文化財係）に遺跡の有無について照会があった。鏡山猛氏による大宰府条坊跡復原案では左郭六条十一・十二坊にまたがる土地であり、当時の段階ではまだ皆無に近かった大宰府条坊に関わる痕跡が見出される可能性があったことや、周辺での調査件数が乏しく具体的な遺構分布の状況が教育委員会サイドで把握できていなかったこともあり、まず試掘調査を行って直接遺跡の有無を確認することを伝え、合意を得ることができたため、昭和58年12月に重機を搬入して遺構の有無を確認した。はたして遺構は検出され、しかもかなりの密度で残存していることが判明したことから再度協議を行い、年度末の数カ月を使って発掘調査を行い、さらに調査に関わる費用は原因者（地権者安武光彦氏）が負担することで合意を得た。

これによって現地での調査は、昭和59（1984）年1月9日に重機による表土除去を開始し、完全に埋め戻しまで終了したのは年度が開けた5月11日、さらに排土置き場にしていた隣地水田の清掃作業まで終了したのは6月9日であった。これは調査開始直後に当時九州では検出例がなかった梵鐘の鋳造遺跡であることが判明したことや、しかもその遺構の密度がきわめて高かったことなど多くの要因によって年度を跨いでしまった。その間、根気よく調査終了を待っていただいた地権者に感謝の意を表するものである。しかも調査終了後、設計事務所との協議で地下遺構の保全についてもテーブルに就いていただくことができた。その協力的な姿勢には感謝するばかりである。

最後に、調査地は福岡県太宰府市大字太宰府字鉢ノ浦2987番地-1・5（現在は太宰府市五条

四丁目10番13号）で、調査面積は1,630m²で、調査は山本信夫・狭川真一が担当した。なお調査の中間段階で新聞発表を余儀なくされ、2月18日付の新聞各紙を賑わし、同月26日には現地説明会を実施した。当日は小雨にも関わらず多くの見学者があり、その様子は翌日の新聞にも掲載された。

(2) 調査組織

（発掘調査／昭和58年度）

総括	教　育　長	陶山直次郎
庶務	社会教育課長	西山義則
	文化財係長	黒板　力
	主　　事	岡部大治
調査	技　　師	山本信夫
		狭川真一

（整理報告作業／平成12年度）

総括	教育長	長野治己（～12月24日）
		關　敏治（12月25日～）
	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫（～10月23日）
		神原　稔（11月1日～）
	主任主事	藤井泰人　野寄美希
	嘱　　託	鈴木弘江
	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮　中島恒次郎　井上信正
		高橋　学　宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子　森田レイ子　佐藤道文

(3) 既存の報告

本報告書作成までにこの鉾ノ浦遺跡に関してコメントしたものは次のとおりである。これらと本書に異同がある場合は、本書をもって正とする。

（口頭発表）

1985年3月4日　山本信夫「太宰府市の文化財」（九州歴史資料館開館十周年記念・大宰府アカデミー／於：太宰府天満宮）

1989年3月19日　山本信夫「大宰府における鋳物生産遺跡－鉾ノ浦遺跡を中心に－」（梵鐘の

音は時を超えて／於：美原町中央公民館）

1991年9月14日　山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺跡」（第1回鋳造遺跡研究会／於：京都造形芸術大学）

1994年2月8日　狭川真一「鉾ノ浦遺跡」（平成5年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修「鋳造遺跡調査過程」／於：奈良国立文化財研究所）

1994年5月10日　狭川真一「大宰府の鋳物生産」（考古学講演会／於：九州大学文学部考古学研究室）

（誌上発表）

山本信夫・狭川真一　1984　「鉾ノ浦遺跡梵鐘鋳造遺構発掘調査速報」『古代研究』27号　（財）元興寺文化財研究所

山本信夫・狭川真一　1987　「鉾ノ浦遺跡（福岡県）－筑前大宰府鋳物師の解明－」『仏教芸術』174号　毎日新聞社

山本信夫　1987　「太宰府市の文化財」『大宰府の歴史』7　西日本新聞社

山本信夫　1990　「大宰府における鋳物生産遺跡－鉾ノ浦遺跡を中心に－」『梵鐘の音は時を超えて』　美原町教育委員会

山本信夫　1992　「生産の町・大宰府（鉾ノ浦遺跡における梵鐘の鋳造）」『太宰府市史』考古資料編　太宰府市

狭川真一　1994　「大宰府の鋳造品生産」『考古学ジャーナル』372号　ニューサイエンス社

狭川真一　1998　「福岡県鉾ノ浦遺跡」『季刊考古学』62号　雄山閣

※報告にあたって

この報告書の作成準備はかなり以前からわずかづつだが実施しており、本文中あるいは一覧表中の陶磁器分類記号は、その作業を実施した年度の段階で記録したものを採用している。したがって1999年度に刊行した『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』の分類成果は反映されておらず、従来からの分類記号であることをお断りしておく。

3、調査の概要

(1) 層序

顕著な堆積を見せるのは調査区中程から西側で、微視的にはかなり細かく分層でき、しかも場所によって様々な顔を持っている。しかし、巨視的に見た場合には、表土、床土を除去した以下は大きく3層に分層が可能である。これにはそれぞれ遺構面と関連しており、まず上層は黄色土層※でその下が茶色土層となる。茶色土層上面からはピットを中心とした若干の遺構が切り込んでおり、これらの多くは埋土が概ね黄色土で構成されている。この下層にある茶色土層は東端の一角を除いてすべてのエリアに存在し、本遺跡の中心となる遺構面の上面に主体的に被る層位として捉えられる。この土層中には多くの鋳型、鉱滓、炉壁をはじめとする生産用具類が包含されていた。また鋳造土坑のすべてはこの層を除去した段階で検出されている。

この茶色土層を除去すると基本的には地山（花崗岩風化土またはその堆積土）に達するが、鋳造土坑群が南北に並ぶ東側の一角から西についてはさらに暗灰色土層が堆積している。基本的な遺構は暗灰色土層の上面から切り込んでいるが、暗灰色土層を除去した段階でも遺構は確認でき、一部ながらさらに下層遺構のあることが認識できている。

しかしながら、今次の調査はきわめて緊急性が高かったこと、費用と時間の面で多くのご協力をいただいたにも関わらず、複雑で難解な遺構の連続であり、調査事例も少なかったこともあって手間取り、必ずしも満足のいく調査結果とは言えない。特に暗灰色土層と茶色土層の分層は一部のエリアで概ね成功しているが、遺構が複雑に絡み合う場所では確実に分離できなかった箇所も多く、今回の報告でもうまく分離して整理できなかった。さらに上面の黄色土層となるとなおさらであり、ほとんど調査すらできなかったのが現状である。辛うじて深い遺構に関しては、先述のとおり埋土が確実に異なっているという幸いする状況から分離できたにすぎない。残念な結果であるが、ここに調査段階での事実を記し、今後に備えることとしたい。

※　厳密には黄色土のみで構成されず、茶褐色土層や黄灰色土層など複数の層位からなる。また調査区中程には検出されず（上面削平によるか）、西側に偏って認識できた。しかし、調査記録の便宜上、次の茶色土層の上面にあるものを黄色土層として分離した形で取り上げており、実際に存在しない範囲にも土器の取り上げ記録の上では存在するということになっている。特に東半部ではその傾向が顕著で、実際には表土除去後ほぼすぐに遺構面（花崗岩風化土）が顔を出し、メインの茶色土層が存在しないこともあって遺構面検出段階の遺物はすべて黄色土層の名称で取り上げるに至っている。先述したとおり、便宜上の名称であることを認識されたい。

(2) 検出遺構

鋳造土坑

単独で存在するものと複数が切り合って存在するものとがあり、ここでは図版作成の関係上遺構番号の順番には報告せず、ある程度のまとまりを踏まえて記述することとした。

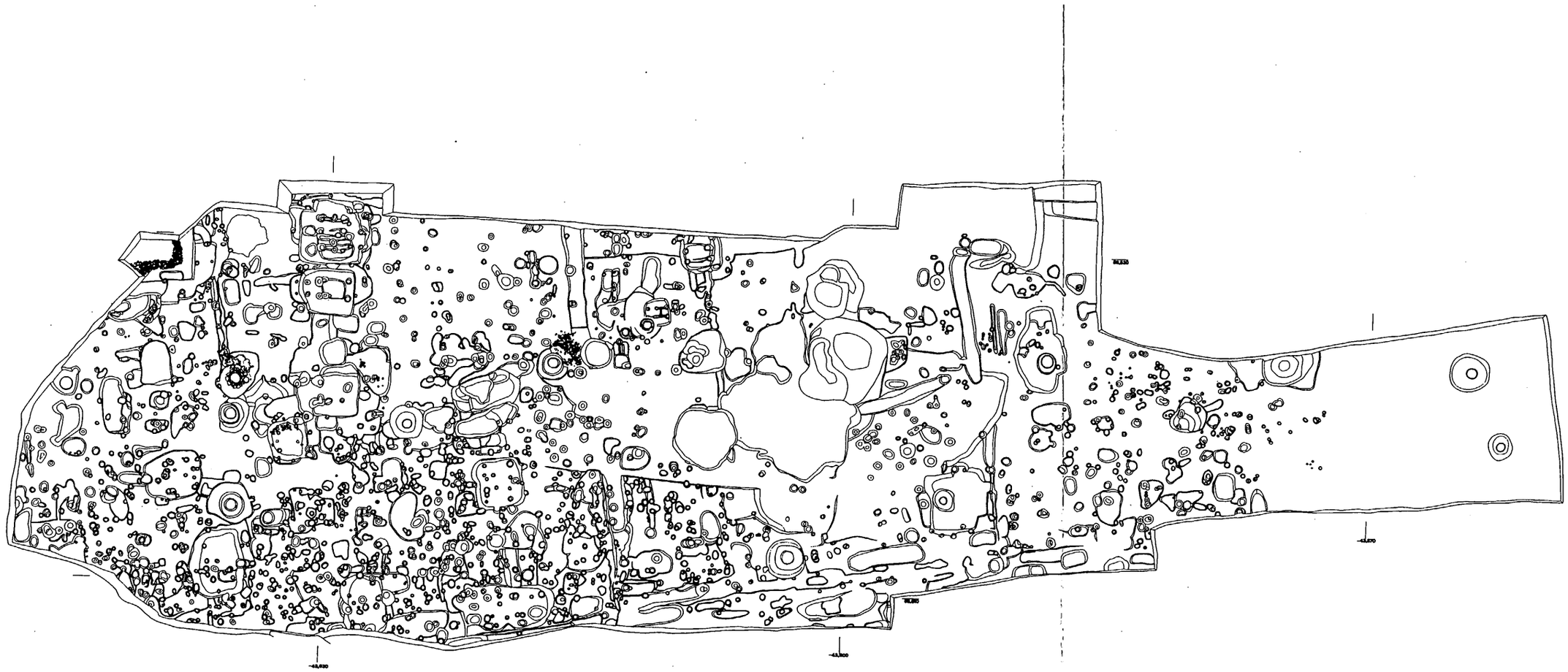
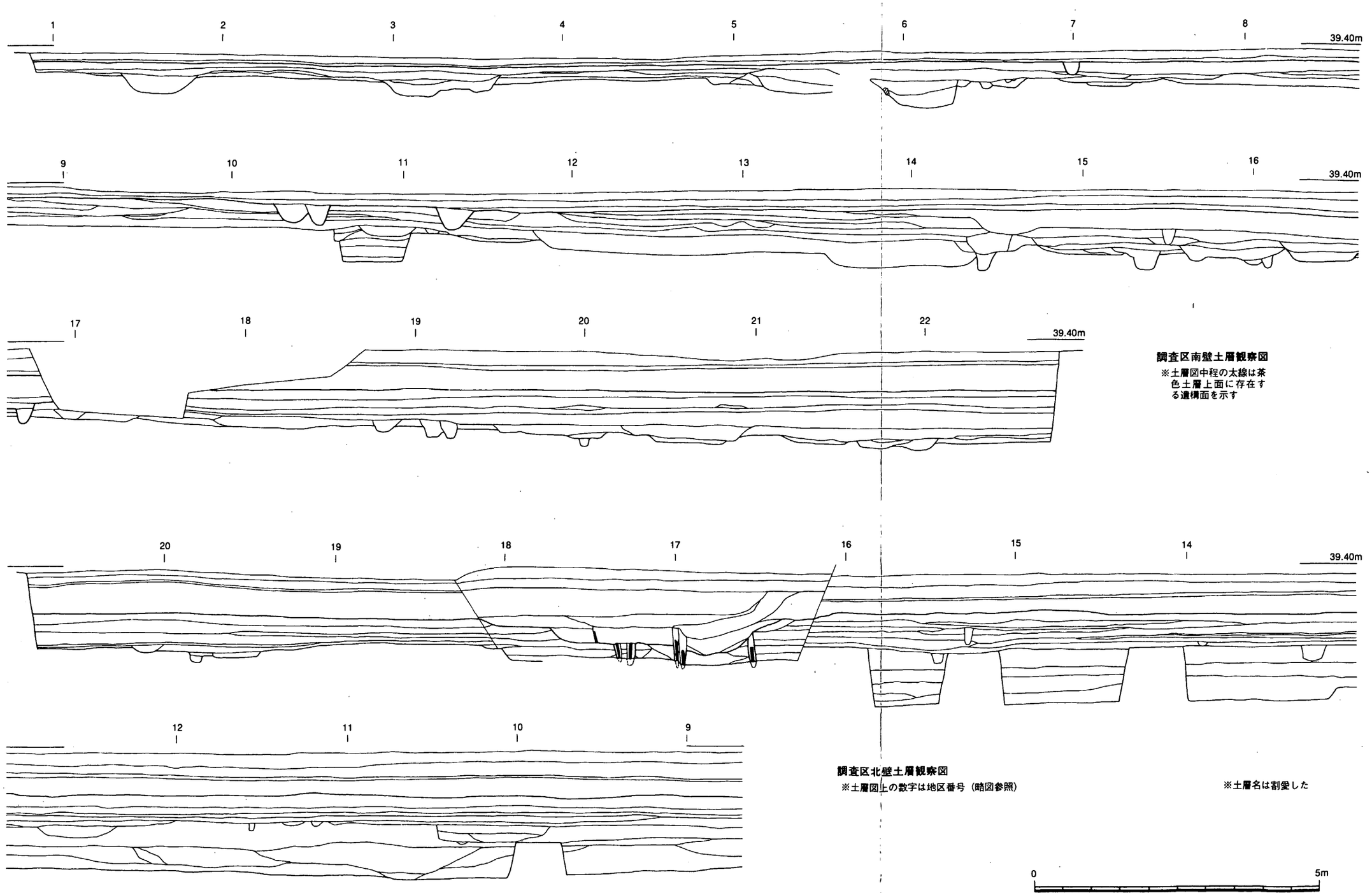


Fig.3　鉾ノ浦遺跡遺構配置全体図（1/200）



調査区南壁土層観察図

※土層図中程の太線は茶色土層上面に存在する遺構面を示す

調査区北壁土層観察図

※土層図上の数字は地区番号（略図参照）

※土層名は割愛した

Fig.4　鉾ノ浦遺跡土層観察図（1/80）

凡例

47SK378→K378
47SX374→X374
のように略して記載

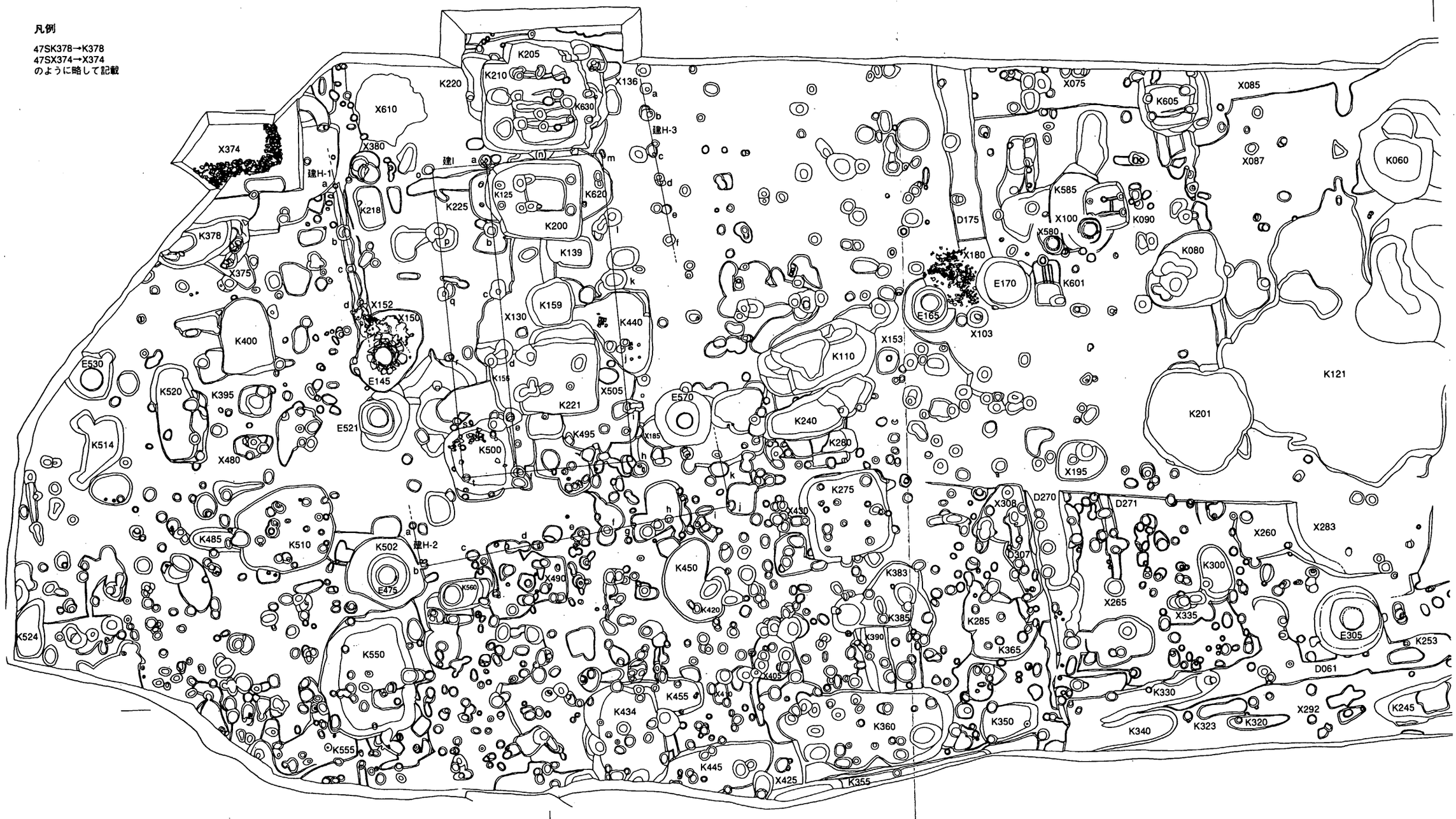


Fig.5　鉾ノ浦遺跡調査区西半部遺構配置図（1/150）

Fig.6　鉾ノ浦遺跡調査区東半部遺構配置図（1/150、主要遺構のみ表示）

47SK020（Fig.7）

東西3.1m、南北3.0m内外（掘削段階で気付かず、47SK460や南側の別遺構とともに掘り下げたため正確な規模は不明）で不整隅丸方形を呈する土坑で、深さは0.35～0.5mを測る。床面に円形及び不定形な浅いピットがあるが、関連は不明である。北側の47SK460よりも新しい可能性がある。また南側に1.1mほど張り出している部分は別遺構の可能性があり、これには含めず、南寄りの床面で検出された径1.15m、深さ0.73mの円形土坑（47SK591）も別遺構と判断される。

47SK460（Fig.7）

47SK020の北側に接して位置する土坑で、東西1.85m、南北1.7m以上の隅丸方形を呈する。深さは検出面から約0.5mあり、床面の中央及び北側に偏ってわずかに深くなっている（比高差3～6cm）。埋土中から多くの梵鐘の鋳型が出土した。

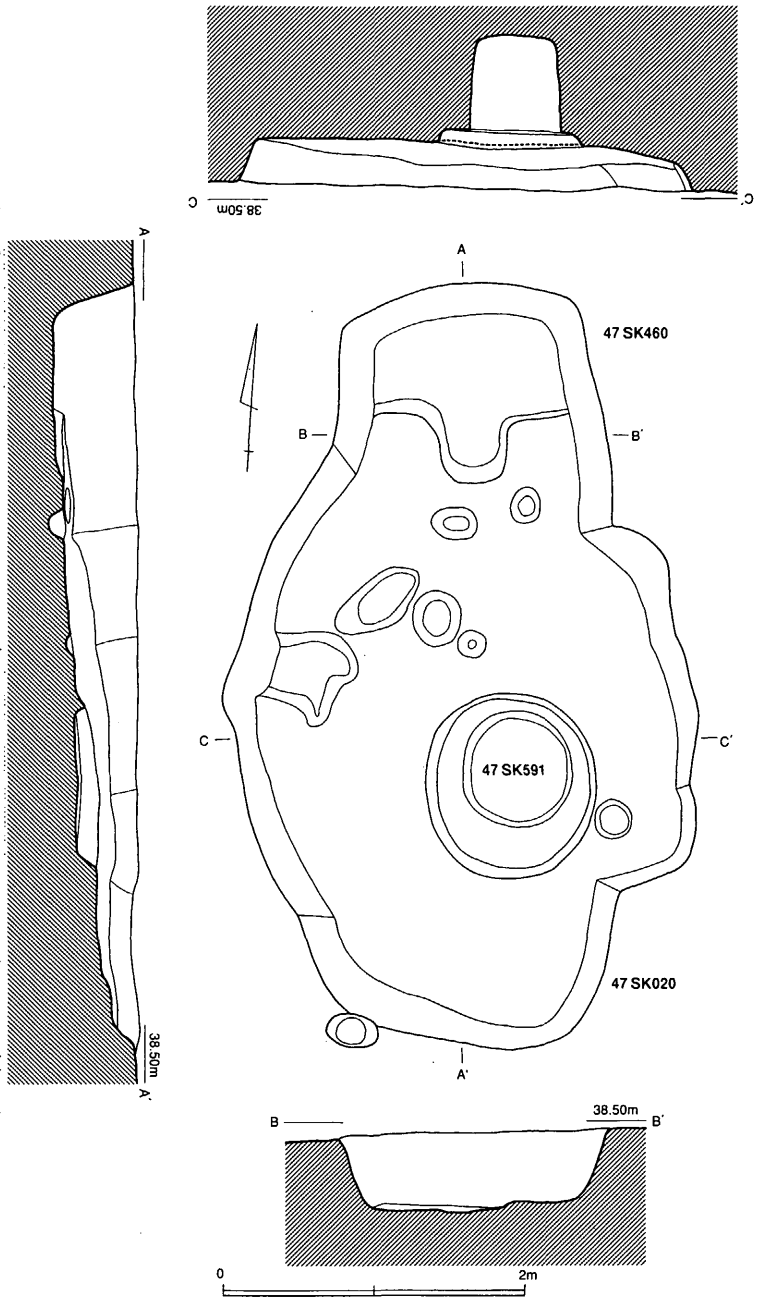


Fig.7　47SK020・460実測図（1/50）

47SK090（Fig.8）　土坑はやや胴張りのある方形で、東西1.5m、南北1.6m、深さ0.3mを測る。床面には並行した小溝2条とそれに直交する小溝が検出され、いずれも深さは2cmほどときわめて浅い。また並行する溝の先端部には径0.2～0.3m、深さ6～10cmの浅いピットがあり、各々の

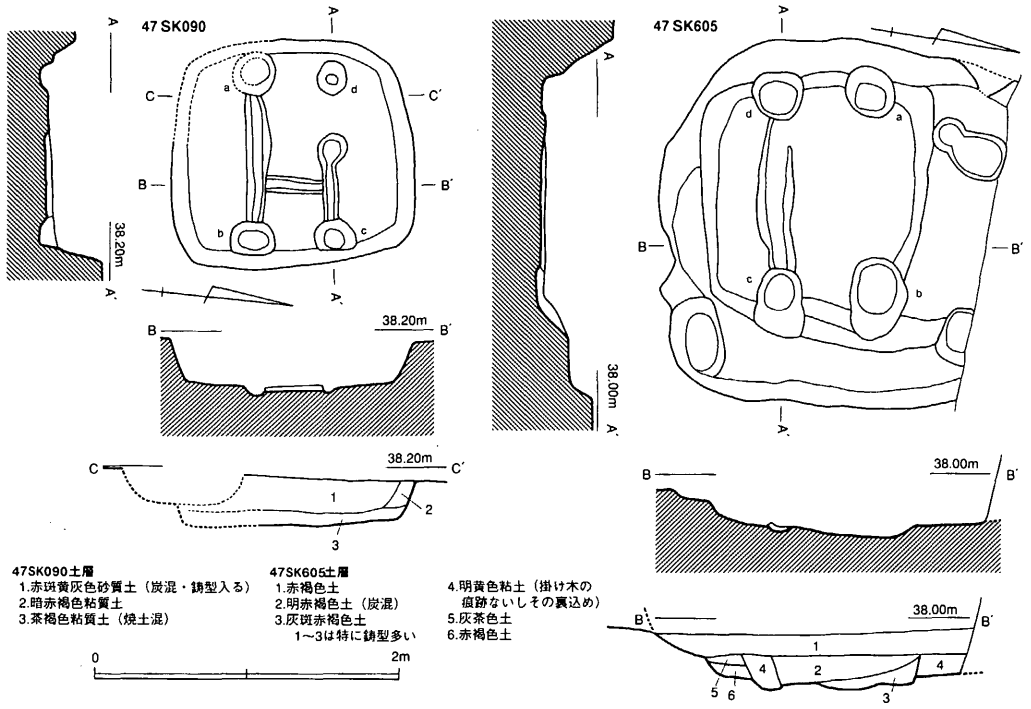


Fig.8　47SK090・605実測図・土層観察図（1/50）

真々距離はa～bが1.05m、b～cが0.5m、c～dが1.1m、d～aが0.5mを測る。この「H」形になる小溝は井桁状に組まれた掛木の痕跡と考えられる。埋土の観察から最後に埋まった土（赤斑黄灰色砂質土）中から鋳型が多く出土し、炭化物も混じっていた。製品を取り出した後、埋め戻された土層と考えられる。47SX100溶解炉によって南西隅を切られているほか、47SK585・590土坑を切っている。

47SK605（Fig.8）　北側が調査区外にあって全容はわからないが、おそらく隅丸方形を呈する掘り方と思われ、検出面での規模は東西2.45m、南北2.2m以上を測る。埋土を掘り下げると土坑は3段になっており、2段目は約0.4m小さくなり、さらに1.7×1.5mの略方形の落ち込みになる。落ち込みの東西辺には各2個のピットがあり、径0.3～0.5m、深さ10～15cmを測る。ピットの真々距離はa～bが1.25m、b～cが0.65m、c～dが1.25m、d～aが0.6mを測り、また南側のピット（c・d）間には幅0.2～0.25m、深さ3～4cmの小溝があり繋がっている。さらに上段（東側）や中段（北側）の底面にも深さ5cm弱で、径0.3～0.5mのピットがある。埋土は、図の1～3層に鋳型が多く含まれるところから製品取り出しのために穿たれ、その後に埋め戻されたことがわかり、5・6層は鋳型等を固定するための裏込土とみられる。北側の4層も裏込土と考えるが、北側にある未知の遺構の埋土と捉えることもできる（今回は同一遺構と判断しておく）。

47SK120（Fig.9）　東西1.8m、南北1.3mの不整楕円形状を呈するもので、深さは0.1～0.15mを測る。鋳造土坑として報告するが、他の鋳造土坑のように床面にピットや小溝といった施設

は確認できていない。47SK630の埋土上面から切り込んでおり、この付近では47SK620と並んで最新期に位置付けられる。

47SK630（Fig.9）　東西3.25m、南北2.12mで、47SK120を2倍に拡大したような不整楕円形状を呈してる。深さは最も深いところで検出面から約0.4mを測る。床面の東端で径0.3～0.4mの略円形を呈し、深さ5～6cmのピットを2箇所（a・b）確認できた。これらと対になるピットは確認できなかった。両ピットの真々距離は0.85mを測る。埋土は土層図に見る1・2層が特に多くの鋳型を含んでおり、これらは製品取り出しのために穿たれ、破壊した鋳型とともに埋め戻されたものと考えられる。これに対し、3・5（4・6）層には鋳型の破片がほとんど含まれていないことから、鋳型固定のための裏込土と考えておきたい。47SK120に切られ、47SK205・210を切っている。

47SK205（Fig.10）　47SK210を切り、47SK630に切られるもので、掘り方は北辺部分が残存する程度である。土坑の規模は東西2.65m、南北は明確ではないが土層観察の結果から2.3m以上のものであることは確実である。深さは最も深い部分で約15cmである。床面には他の鋳造土坑と同様に4箇所のピットがあるが、47SK210と重複している関係で近辺には複数の類似するピットがあるため、土層等の観察から最も妥当と判断されるピットを特定した。ピットは略円形もしくは不整円形で径0.4～0.5m、深さは10～20cmを測る。ピットの真々距離はa～bが1.4m、b～cが1.0m、c～dが1.05m、d～aが0.75mを測り、ピットa・b間には幅15～22cm、長さ1.0m、深さ3～6cmを測る小溝が検出された。c・d間についてはよくわからなかった。堆積土層の観察では16層としたものが主たる埋土となるが、そこには鋳型や焼土が含まれており、製品取り出し後に埋まった層と考えたい。

47SK210（Fig.10）　47SK220を切り、47SK205・630に切られる鋳造土坑で、平面形は隅丸の長方形を呈する。土坑の規模は東西3.7m、南北3.0mで、深さは検出面から約0.35mである。床面の施設は切り合いによって複雑になっているが、土層等の判断から図のように判断できる。まずピットは不定形で長さ0.6～0.85mで他よりやや大きめで、深さは10～14cm程度である。土坑の西に寄って2基が存在し、その真々距離は1.1mであるが、対になる東側のものはわからない。このピットのすぐ東側にはややいびつな隅丸方形の窪み（東西2.15m、南北1.8m、深さ3～6cm）があり、その中程に2条の小溝が並行して穿たれる。小溝は幅0.3m前後、深さ4～7cmを測る。小溝の端部はピット状を呈しわずかに深くなるが、底部の差は3cm以下であり、溝の一部と捉えるのが妥当であろう。この窪みあるいは小溝に複数のピットが切り込むがいずれも10～15cmと一連のピットよりも深い。埋土は遺構の切り合いにより詳細は明らかにできなかったが、土層図にみる19・20層には焼土や灰が混入しており、製品取り出しに伴う二次的な掘り込みを埋め戻したものと考えられる。

47SK220（Fig.9）　南北2.2m、東側の大半は47SK210によって破壊されており東西長は0.9m

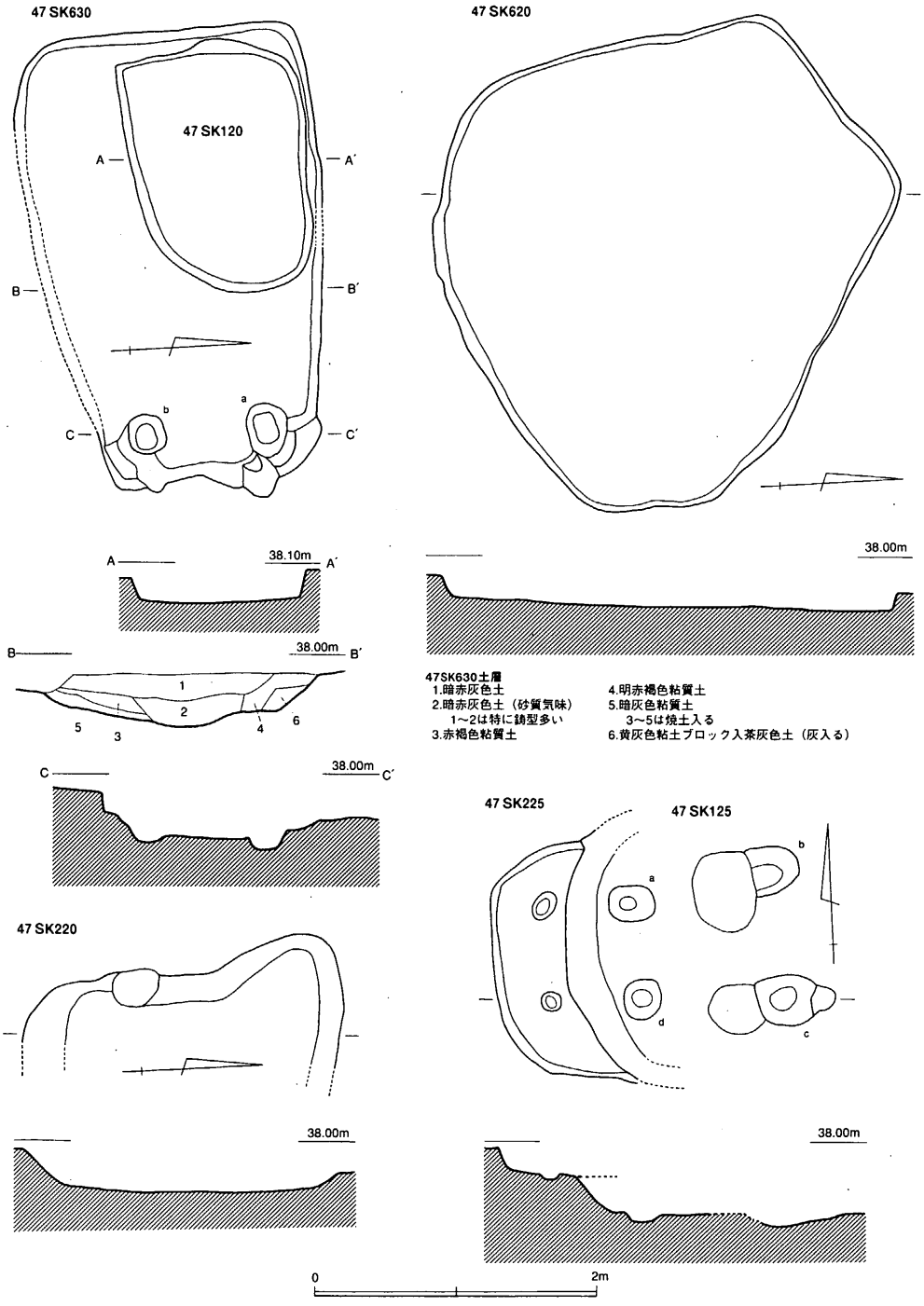


Fig.9　47SK120・630・620・220・225・125実測図（1/50）

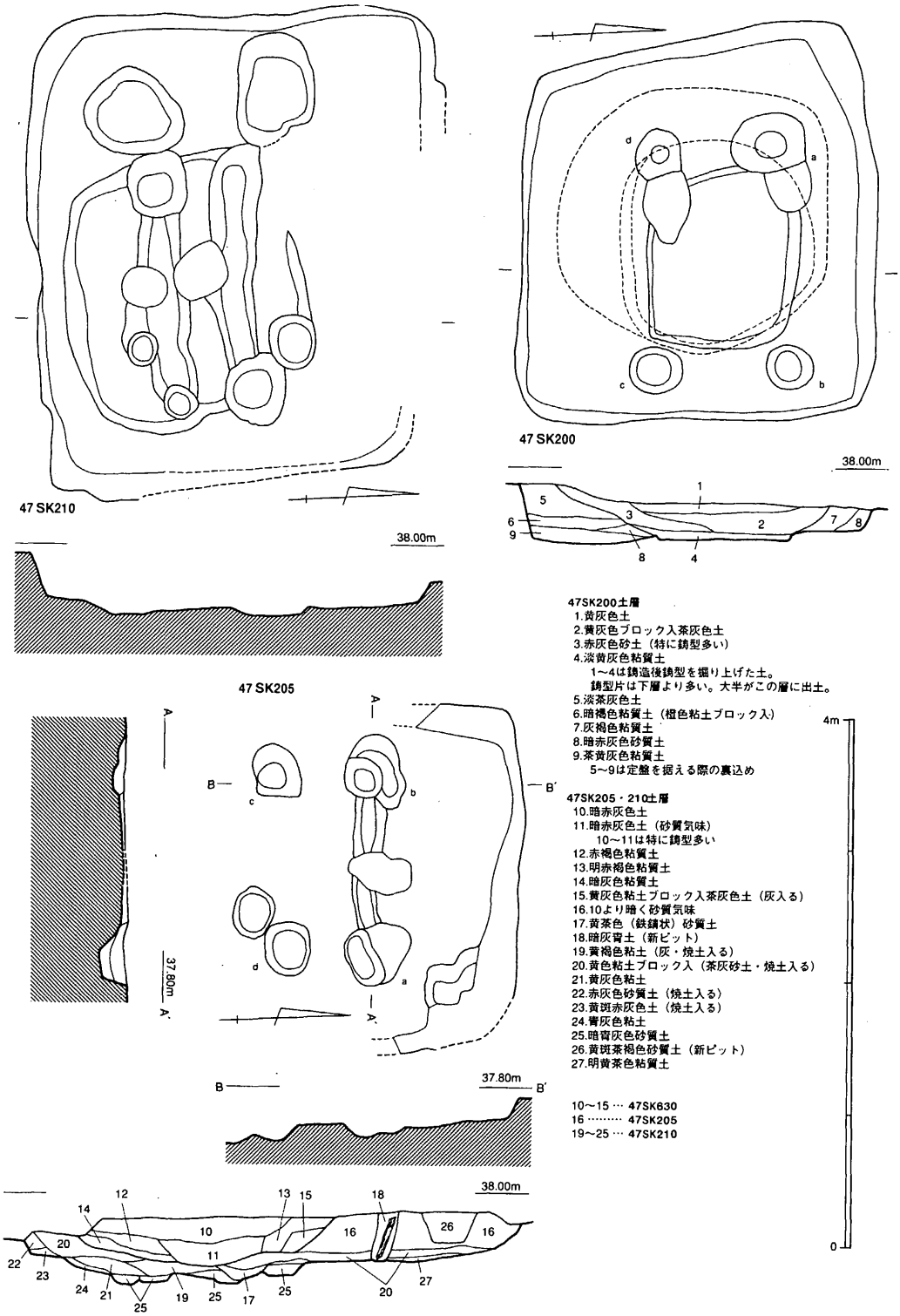


Fig.10　47SK200・205・210実測図・土層観察図（1/50）

まで確認できるだけである。土坑の深さは最深部で約0.3mである。床面にピット等の施設は確認できていない。この一群では最古期の土坑である。

47SK620（Fig.9）　47SK200の上面に穿たれた不整形な土坑で、東西3.5m、南北3.3m、深さ0.1～0.15mを測る。埋土中から鋳型を多く出土したため鋳造土坑として報告するが、他の鋳造土坑のように床面にピットや小溝といった施設は確認できていない他、掘り方の肩もやや不明瞭である。

47SK200（Fig.10）　上面を47SK630に削られているがほぼ全容の知れる鋳造土坑である。掘り方は長方形で東西3.0m、南北2.68m、深さは最もよく残存するところで0.46mを測る。床面の中央よりやや北東に寄って東西1.4m、南北1.15m、深さ1～3cmのごく浅い長方形の窪みがあり、その四隅に径0.35～0.6mのピットがある。ピットはいずれも2～8cmと浅いもので、各ピットの真々距離はa～bが1.7m、b～cが1.0m、c～dが1.65m、d～aが0.85mを測る。長方形の窪みは掛木を井桁に組んだ痕跡と考えられる。埋土の様相は土層図に示すが、検出時に土坑の中央付近で不整形な落ち込み（2.0×2.0m／破線で表示）を検出しており、これが土層図の1～4層に該当する。このうち3層には鋳型が多数認められたことから、この1～4層は鋳造後に埋没したものと考えられ、鋳造後鋳型の周囲から掘削を開始し、鋳型を壊し製品を取り出した後、定盤、掛木、支柱などを解体し掘り出した後、埋め戻したものと理解できる。これに対し5～9層は鋳型をほとんど含まず、人為的な水平に近い堆積を示す点などから、定盤や掛木を固定するための裏込土と考えられる。47SK225・47SK125を切っている。

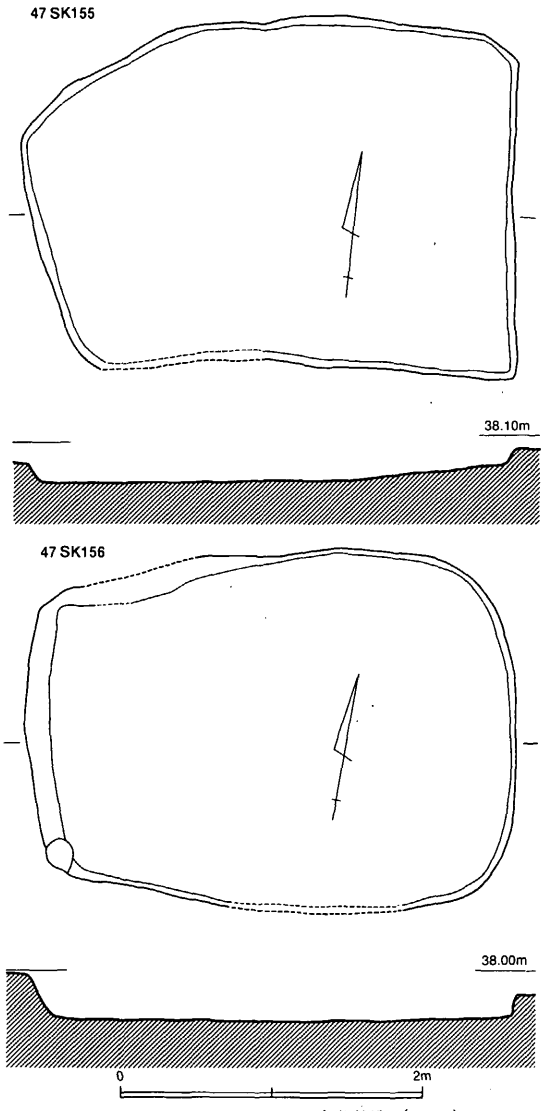


Fig.11　47SK155・156実測図（1/50）

47SK125（Fig.9）　47SK200にそのほとんどを破壊されており当初の規模は明らかでないが、

47SK225の東側に掘り方の一部を見せ、深さは約0.25mで、47SK200の床面に重複して4つのピットを残している。ピットは径0.3～0.4mの不整円形を呈し、深さは6～8cmときわめて浅い。ピット間の真々距離はa～bが1.0m、b～cが0.85m、c～dが1.0m、d～aが0.7mを測る。ピットa・dから唯一残存する掘り方西肩までがおよそ0.5mを測ることから、この遺構の東西長は2m程度に復原できるものと考えたい。

47SK225（Fig.9）　47SK125及び47SK200に切られており、遺構の東側の大半を失っているがこの一群の鋳造土坑では最も古期に属する。残存する掘り方の規模は南北1.65m、東西1.0m以上を測り、深さは約0.15mである。床面には2つのピットが残存しており、径0.15～0.2mの略円形で、深さは5cm以下と浅い。両ピット間の真々距離は0.7mを測る。

47SK155（Fig.11）　ややいびつな長方形を呈するもので、東西3.3m、南北2.35mを測り、深さは7～17cmである。47SK156を切っている。床面にピット等の施設は確認できなかった。

47SK156（Fig.11）　47SK155に切られるが、それと同じような形状を呈しており、規模も東西3.25m、南北2.35mと近似している。深さは最深部で約0.3mである。床面にピット等の施設は確認できなかった。

47SK221（Fig.12）　47SK155・156等に切られており、全容は明らかでない。残存する情報から東西2.4m、南北3.25mのやや南北に長い隅丸長方形を呈していたものと考えられ、検出面からの深さは5～10cm程度である。北側に段があり、一段下がった床面に径0.25～0.6mで深さ

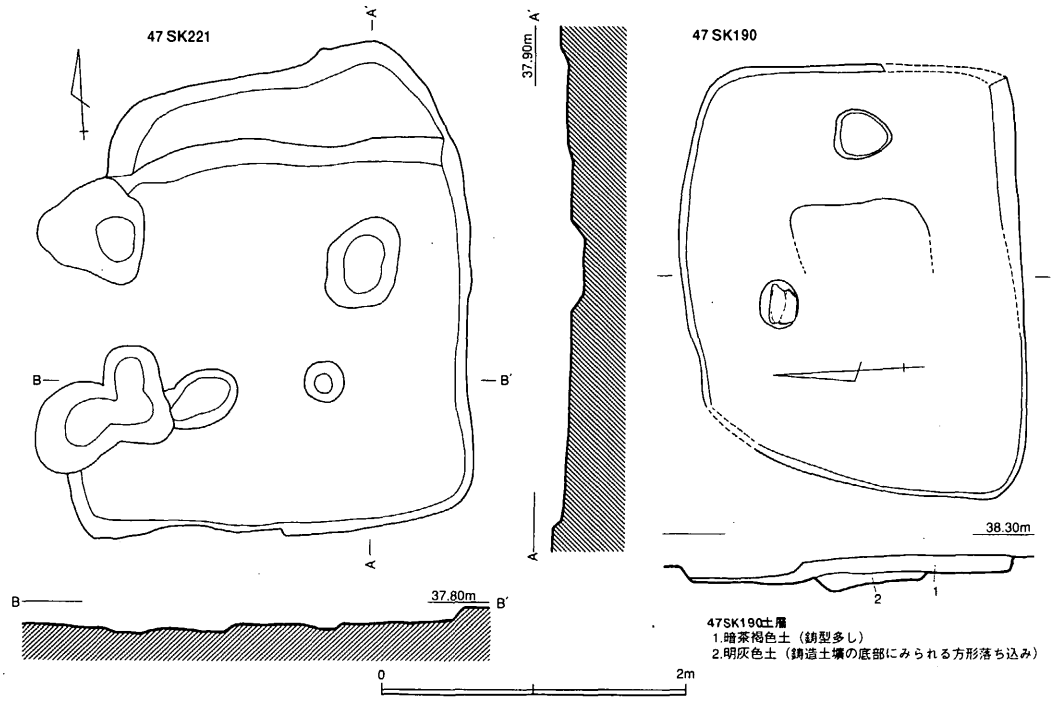


Fig.12　47SK221・190実測図（1/50）

5cm前後の略円形のピットがあるが、他の鋳造土坑のような配置にはならず、直接関連するものかどうか判断に苦しむ。

47SK190（Fig.12）　47SK110・240の上面に被るように検出された土坑で、一連の鋳造土坑群とはやや距離をおいて存在している。土坑の平面形は不整方形で、東西2.82m、南北2.2m、深さ13～20cmを測る。埋土は暗茶褐色土を主体とし、鋳型を多く含んでいる。底部に一辺0.8m前後、深さ5cm強で略方形の窪みがあり、明灰色土が堆積していた。他の鋳造土坑にみられる中央部の方形の窪みに通じるものと考え、これも鋳造土坑として報告した。

溶解炉等

47SX100（Fig.13）　鋳造土坑47SK090、土坑47SK095・585等を切る形で検出された溶解炉で炉の底部が残存する。残存している炉の底部付近の径は0.68m（内径0.53m）、現存する深さは14cmで、上面を大きく失っていることが理解できる。また炉底部外面には、箍とみられる痕跡が確認できた。炉を据えたピットは、径0.8mで炉よりもわずかに大きい程度であり、深さも同様に炉を固定できる程度しかないものと推定される。なお遺構は切り取り保存している。

47SX150　47SE145に切られ南側を失い、西側の一部も47SX152に切られるため全容は不明である。残存する遺構の長さは東西2.2m、南北2.0m、深さは5～10cmで、埋土中に鉱滓や炉壁、焼土などが多量に詰まっている。溶解炉とする決定要素には欠けるが、炉を破壊して埋めた場所の可能性も考えられるためここで報告した。なお、47SX152とは小礫の有無で分けられる程度で47SX152下面までこの遺構の埋土は侵入しているようであり、明確な区別は付けがたい。

47SX152　47SX150を切るように検出された長円形のピット状を呈するもので、南北1.0m、東西0.65mで、深さは数cm以下で浅い。埋土中に焼土や炉壁、鋳型等を含み、小石も目立つ。47SX150の埋土の一部が変色している部分を指摘しているに過ぎない可能性もあるが、検出段階で分離できたことを優先して別遺構として報告しておく。

47SX180（Fig.13）　井戸47SE165・170の両者に切られ、溝47SD175埋土上面に被るように検出された集石遺構である。石の集中する範囲は南北2.0m、東西1.9mほどであるが本来の平面形状は明らかでない。石は数cm程度の小石が主体をしめるが、10～25cmの大きなものも散見する。また小石は焼けたものが多く、それに混じって炉壁や鉱滓がみられた。石が集まる範囲は明確に遺構として窪むわけではないが、石や炉壁等は直接地山に置かれるのではなく、4～8cmほどの厚さを有する暗茶褐色土の上にあり、意識して地山上に整地し、石等を配したものと考え、炉床のようなものを想定している。

47SX250（Fig.13）　47SK275方形竪穴状遺構の埋土上面に穿たれた浅い楕円形を呈する土坑で、遺構の中央やや西寄りを他のピットで破壊されているが、残る埋土中から炉壁が集中して出土したことから、溶解炉を破壊した跡ではないかと考えここで報告した。土坑の規模は、南北1.2m、東西0.82m、深さ6～10cm程度である。なお埋土中には鋳型も若干混じっている。北

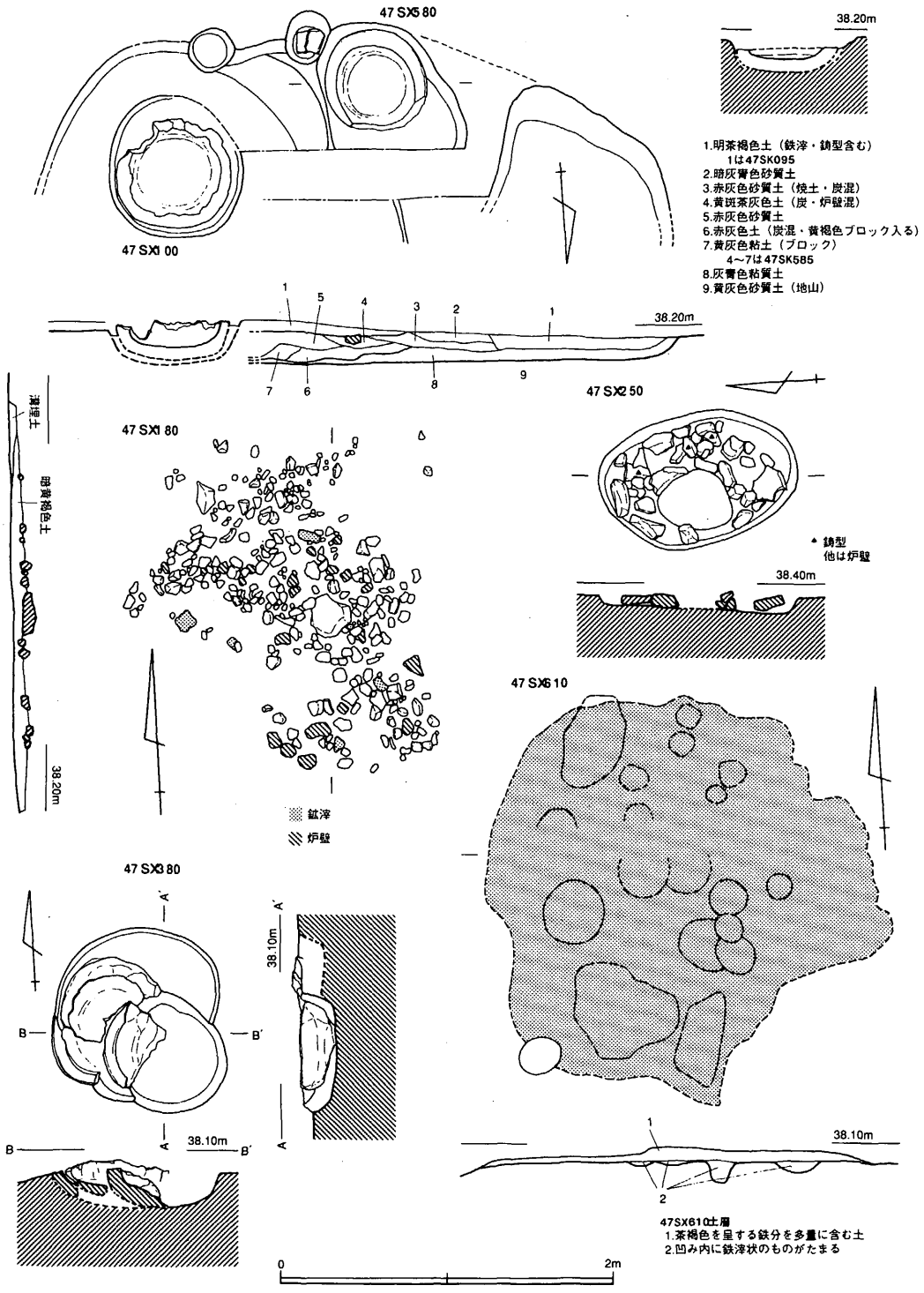


Fig.13　溶解炉等実測図（1/40）

側に近接して廃棄土坑47SK110があり、土坑の南側から鉱滓が投棄されており、この遺構との関係が注目される。

47SX380（Fig.13）　西側の鋳造土坑群や後述する47SX610に近接して存在する溶解炉である。遺構は3つの炉が切り合っているように検出された。切り合うピットのうち最も新期のものは径0.75m、深さ約0.2mの略円形を呈し、ピットの西に偏り外面をピット壁に沿うようにして炉底部の断片が置かれている。これに切られるピットは径1.0m程度のやはり略円形を呈するもので、西側に偏って約半分ほど残存する炉底部が検出された。さらにこれに切られるものはその規模を明らかにしにくいが、炉底部の一部が辛うじて残存している状況である。しかし、各炉底部の残存部をみると同一個体が3つに壊れ、それが何らかの要因で寄せ集められ再利用されたことを窺わせるような状況を呈している。ただ遺構自体をこのまま切り取って持ち帰っており、遺構から炉底部を切り離していないため3者の接合関係は確認できていない。さて、残存する炉の観察結果を記すと、内面底部付近は凹凸が目立ち、酸化して明茶褐色を呈している。立ち上がり部分は暗灰色で硬質、部分的ながら斑点状に茶褐色の付着物が観察される。炉の断面部分を見ると、胎土は暗青灰色を呈するが、内側が明茶褐色に変色している。

47SX580（Fig.13）　47SX100の西側に近接して検出された溶解炉の底部で、47SX100が切り込んでいた土坑47SK095の埋土（明茶褐色土）を除去した段階で検出された。したがって47SX100より古いものであることは確実である。溶解炉は底部のみを残すもので、外径0.6m、内径0.44mで深さは7cm前後と浅く、多くが失われているものと考えられる。炉を据えるための土坑は炉の外径よりわずかに大きく0.7m前後である。なお、遺構を切り取り保存したことから底部に関する情報を収集し得ていない。ちなみに47SK095の下で見出された土坑47SK585よりは新しく、その埋土上面から当該遺構が切り込んでいる。

47SX610（Fig.13）　東西2.45m、南北2.4mの範囲にきわめて硬く焼け、作業道具も歯が立たない（実際に掘削時には火花が飛び散っていた）ほどの硬化面を検出した。平面形状は略円形ながら輪郭は出入りが多く、不明瞭である。遺構は掘り窪めるのではなく、地山から盛り上がるように残存しており概ね4～6cm程度の厚さであるが、中央部付近がやや高く8cmほど盛り上がる。表面は全体的に鉄分が酸化したような茶褐色を呈しており、これがそのまま盛り上がる部分の土層となる。硬化部分を除去すると下面から、径0.1～0.6mで略円形のピット状を呈する輪郭が多数見出された。一部を掘り下げた結果、埋土は鉄滓状のものが充満し固まっており、掘削はきわめて困難な状況であった。しかし掘り下げが行えたピットでは深さ4～7cmの浅いものが主流である。上面の硬化部分との関連を明確には押さえられていないが、内部に類似質のものが詰まっていることを考えると、両者の関連は深いものであろうと想像される。炉に関連する施設と捉えておきたい。

溝

47SD029　撹乱で北端を失い、南側は47SD052に切られて終わる。検出長6.9mで、幅は北半分が0.65m前後、南半分が細くなって0.15～0.35mを測る。溝底は南に高く北に低い。

47SD030　検出長7.8m、幅0.85m内外、深さ0.1～0.15mを測り、南が高く北に低い。北端でやや東側に蛇行し、約5cmほど深くなって終わる。南側は撹乱で欠失するが、規模や高低差を踏まえると47SD029に続くものと思われる。47SD029を含めた全長は17.1mである。

47SD052　茶色土上面から切り込んでおり、他の遺構より新期に位置する。検出長14.9m、幅0.5～0.6mを測る東西方向の溝である。下層にある47SD061とは平面的に近似した位置にあり、関連する機能が考えられる。

47SD061　調査区南端部を東西に走る溝である。検出長23.8m、幅0.5m前後、深さ5cm程度で、東が高く西に低い。西端は47SK330、東端は47SD066、中程で47SK253に切られる。

47SD066　47SD061を切る東西方向の溝で、わずかに蛇行している。検出長7.1m、幅0.5m前後、深さ2～3cm程度と浅い。東が高く西に低い。47SK045・050等に切られる。

47SD076　47SK055・121の上面に検出された東西方向のほぼ直線を呈する溝状遺構である。検出長6.0m、幅0.3mできわめて浅い。畝状遺構と思われる。

47SD077　47SK121の上面に検出された東西方向のほぼ直線を呈する溝状遺構である。検出長6.0m、幅0.3mできわめて浅い。畝状遺構と思われる。

47SD078　47SK121の上面に検出された東西方向のほぼ直線を呈する溝状遺構である。検出長6.8m、幅0.3～0.4mできわめて浅く、西端はやや不明瞭。47SD076・077と同規模で3者は南北にほぼ平行して並んでおり、畝状遺構と思われる。

47SD147　南北方向の溝で、検出長4.0m、幅0.3～0.4m、深さ4～5cmを測り、溝底部は北に低い。溝埋土の上面からピット（略円形で径0.3～0.5m、深さ0.1～0.15m）がほぼ等間隔（0.8～1.1m）で穿たれており、両者は関連するものとみられる（建物H-1）。溝自体の埋土には焼土や黄色砂が入る。北側は大きな窪み状遺構（47SX561）によって切られ、南側も47SX152によって切られている。

47SD175　検出長6.4m（さらに北側に延びている）、幅0.9～1.3m、深さ5～20cmで北側に低い。47SE170に切られ、47SX180が被っている。47SE170以南に類似する溝が検出されたが、やや浅いことと連続性を確認できないことから、同一遺構とは言いがたい。

47SD270　北側を試掘トレンチで失っているが、検出長6.4m、幅0.9～1.25m、深さ5～20cmを測る南北溝で、溝底は南側が高く北側が低い。検出範囲の中程に段があり一段深くなっている。埋土は茶褐色土で、茶色土の上面から切り込んでいる。47SD307を切っている。47SD175あるいはその南側に検出された溝と平面的には連続するように見えるが、切り込む層位が異なるため別遺構と認識するべきである。

47SD271　検出長2.9m、幅0.35～0.4m、深さ7～9cmの南北溝で、溝底は南側が高く北側が低

い。北側を試掘トレンチで失っているため全容はわからない。

47SD307　北側を試掘トレンチで失っているが、検出長4.0m、幅0.7～0.95m、深さ10cm前後を測る南北溝で、溝底は南側が高く北側が低い。北側では西肩がやや乱れている。47SD270に切られている。この溝は47SD175に関連する可能性も残される。

井戸

47SE145（Fig.14）　調査区西端近くで検出したもので、掘り方の形状は略円形を呈し検出面での径は1.8～2.0m、底までの深さは1.6mを測る。検出段階で掘り方中央やや北寄りに内法径0.8m内外で円形の石組みが確認され、それを掘り下げると下位に径約0.65mの桶が枠として使用されていた。桶は幅6cm前後で、厚さ1.5～2.0cmの板目板を使用し、長さ約0.7mで桶の外側で下から約15cmと50cmの位置に箍が残存していた。石組みは石の平坦面を内側に揃え隙間を小石で埋めており、これをもって正式な枠としたものと考えられ、現状で4～5段分が残存している。桶の裏込として投入された石ではない。埋土は大きく3つに分けられ、底から茶色粘土、茶褐色粘質土、茶灰色粘質土の順に堆積する。47SK150を切る。

47SE165（Fig.14）　別遺構（S-168）との位置関係で3段を呈するように見えるが、実際は南北1.3m、東西1.2mの略円形を呈するもので、底部に径0.6～0.7m、深さ0.3mの曲物を据えたとみられる痕跡がある。隣接して存在する炉床状遺構47SX180を切る。

47SE170（Fig.14）　径1.75～1.85m、深さ約1mで略円形を呈している。枠の痕跡を確認できていないが掘り方の規模から井戸として捉えておく。隣接して存在する炉床状遺構47SX180を切る。

47SE222（Fig.14）　東側に拡張した調査区の北端で検出したもので、花崗岩風化土の地山に直接穿たれるかたちで検出された。掘り方の形状は略円形を呈し検出面での径は2.9m前後で北半が調査区外にある。底までの深さは約1.8mを測る。検出面から0.8mは淡茶色土に淡灰色ブロックが混在する堆積土で、それを除去すると掘り方の中央付近に直径約1.4mの青灰色粘土の堆積があり、それが枠内に堆積した埋土であることは容易に認識できる。ただその部分を詳細に観察すると堆積の境目（青灰色粘土と裏込土との境目）に幅5～10cmの茶褐色に変色する環状帯があり、しかもその外側は酸化して暗茶褐色を呈していた。また埋土を除去すると竹製の箍が境目に貼り付いて残っている部分もあった（2段分が確認され、その間約0.2m）ことから、変色部分は枠の痕跡と考えられ、枠本体は残存しないものの桶を用いたものであったと考えられる。裏込土は淡茶色土である。

47SE227（Fig.15）　東側に拡張した調査区で検出したもので、花崗岩風化土の地山に直接穿たれるかたちで検出された。掘り方の形状は略円形を呈し検出面での径は2.25～2.30m、底までの深さは3.5mを測る。検出段階で掘り方の中央に直径約0.65mの淡茶色に変色する部分があり、そこが井戸枠の痕跡であることは容易に認識できたが、検出面から約0.6m（標高38.0m付

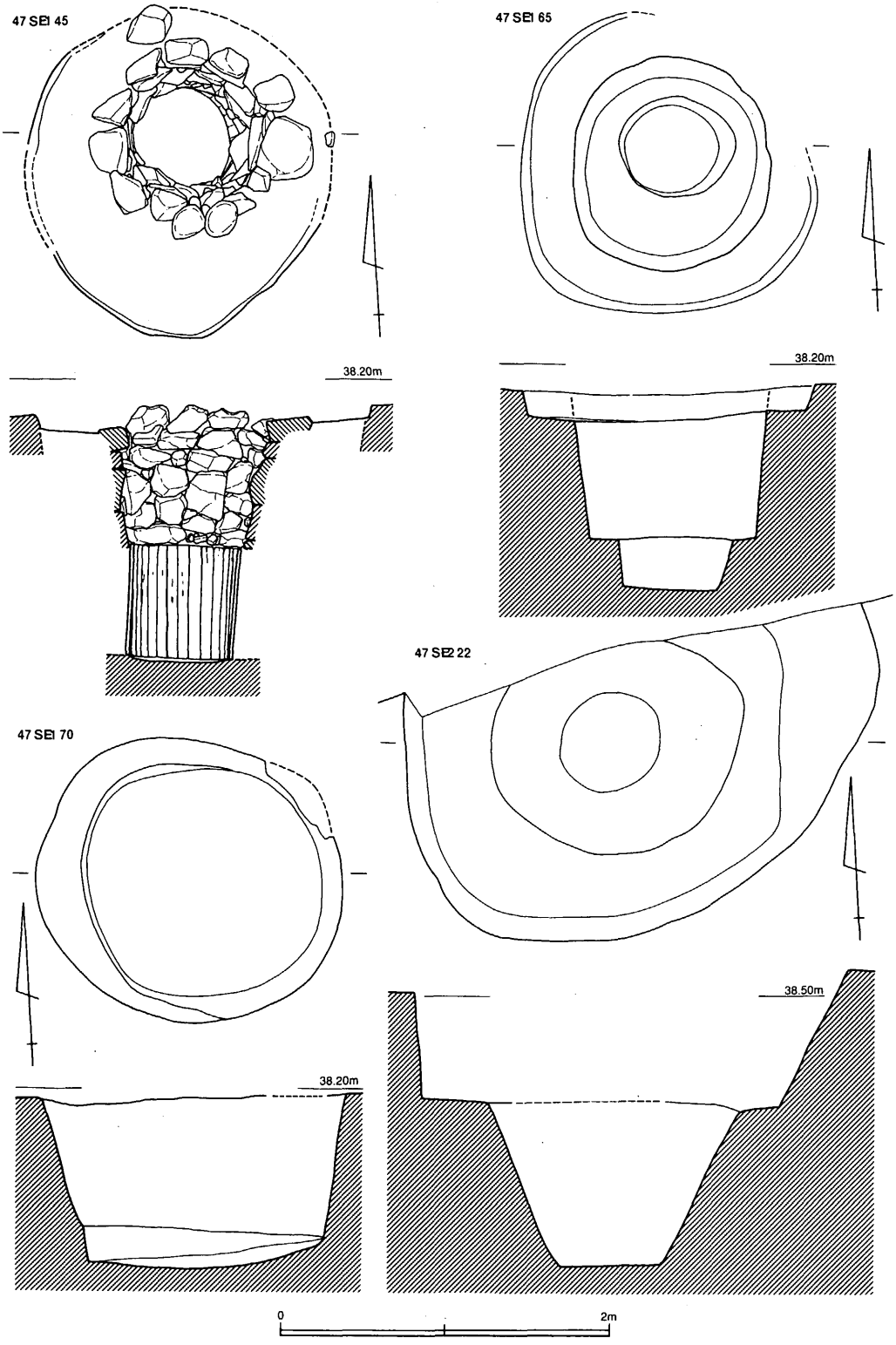


Fig.14　47SE145・165・170・222実測図（1/40）

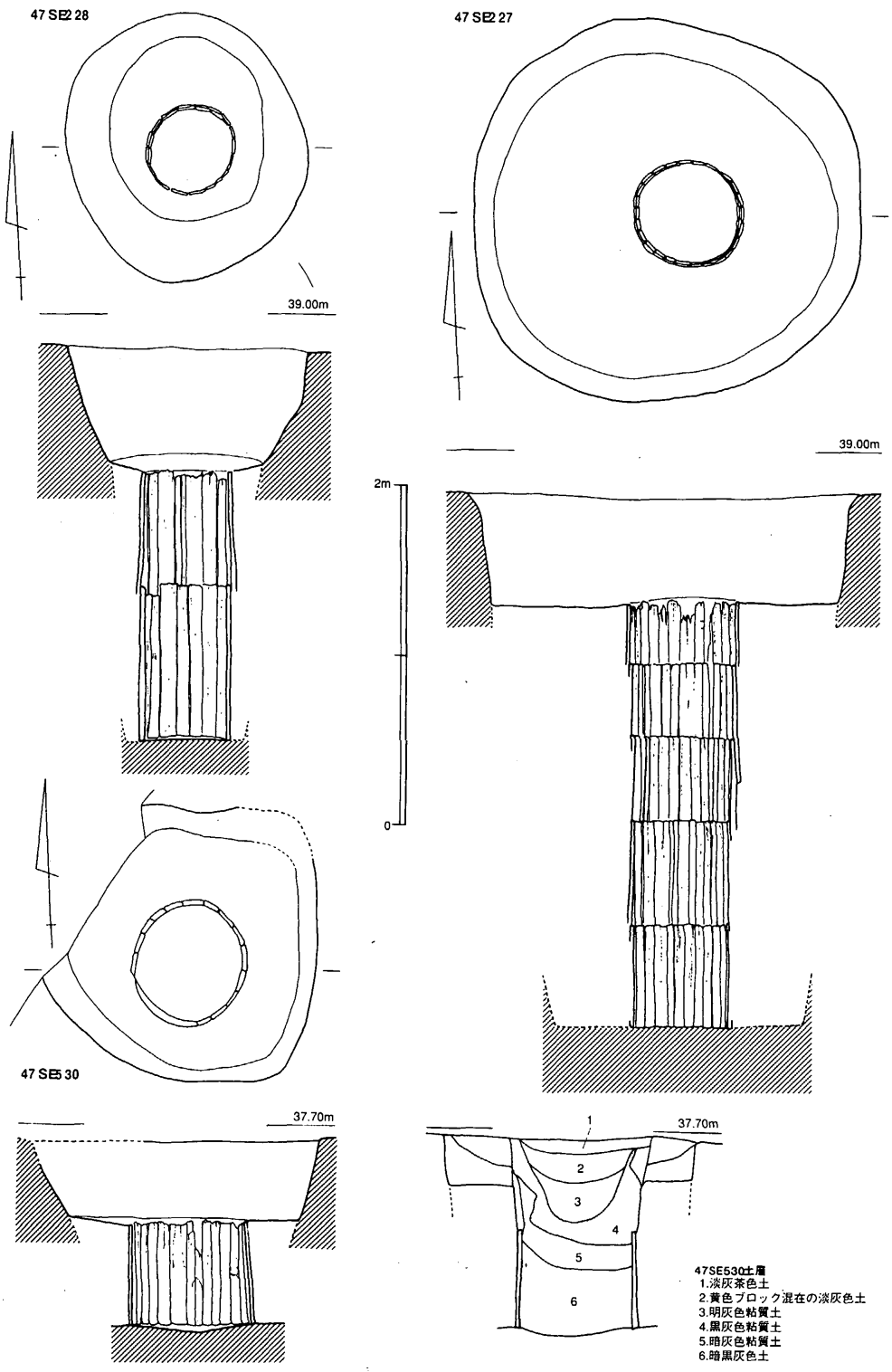


Fig.15　47SE227・228・530実測図（1/40）

近）の深さまで枠は残存していなかった。枠は桶を重ねたもので5段分が残存しており、遺構面の削平状況からみると当初はさらに2段以上あったようである。桶は径0.55～0.65mで、幅6～9cm、厚さ1.5～2.0cmの板目板を使用し、長さの判明する最下段のもので長さ約60cmを測る。各桶を構成する板目板の枚数は下から27枚、28枚、27枚、28枚、26枚の順でその規模はほぼ類似したものである。下から3段目の桶は板が1枚欠損しており、その隙間から箍が観察され、それが竹製であることが知られた。

さらにこの井戸に関して特筆すべきこととしては、埋土と出土遺物の関係がある。まず最終埋没土は淡茶色土、次に茶色砂があり、上から1・2段目の桶までは暗灰色粘質土が堆積する。この暗灰色粘質土の下部に集中して土師器小皿が多量に出土し、さらに箸類を中心とした木器も同時に出土した。こうした遺物の大量出土は次の灰茶色粘質土上面付近で一旦終息し、灰茶色粘質土中では混じり込んだ遺物以外はほとんど出土していない。しかしその下位にある灰茶色粘質土下層に至ると再び同様な傾向の遺物が多数出土した。そして最下層は井戸使用時の粘土層が堆積し底に至る。枠内に入って調査するのは危険度が高いため具体的な遺物の位置は明らかにできなかったが、少なくとも土師器小皿や箸等の木製品を多量に廃棄するという行為を2度行っており、しかもそこには大きな時間差を配慮する必要がなく、井戸埋めの祭祀行為に関連した埋没状況ではないかと推量される。

なお裏込土は黄色土（ただし検出面付近のみの観察で、下位は未調査）で構成されていた。

47SE228（Fig.15）　47SE227の南南東約3mにあり、掘り方の形状は略円形を呈し検出面での径は1.4～1.6m、底までの深さは2.3mを測る。やはり検出段階から掘り方の中央に径約0.5mで淡茶色を呈する枠の痕跡が確認され、検出面から約0.7m（標高38.0m付近）の深さまでは枠は残存していなかったが、それ以下に桶を重ねたものが2段分残存していた。桶は径0.5～0.55mで、幅6～10cm（10cmに近いものが多い）、厚さ1.5～2.0cmの板目板を使用し、長さの判明する最下段のもので長さ約90cmを測る。桶を構成する板目板の枚数は下から16枚、19枚である。埋土は上位から淡茶色粘質土、黄茶色粘質土、青灰色粘土の順に堆積し、裏込土は淡茶色土であった。

47SE305（Fig.16）　掘り方の平面形状はほぼ円形で径2.25～2.3m、その中央付近に径0.8m程度で円形の枠痕跡があり、それが桶であったことが理解できる。検出面から約0.5mほど掘り下げた段階で掘り方は急に狭くなってやや東にずれ、そのことによって西側にテラス状の段が生まれる。深さは検出面から最深部までで約1.4mを測る。

47SE475（Fig.16）　47SK502のちょうど中央付近にあり、その埋土の上面から穿たれている。一見47SK502が裏込土を思わせるが、別遺構と考えられる。さて井戸は径約1.5mの円形を呈する掘り方を有し、その中央部に径0.8mほどの円形の枠痕跡がある。痕跡底部の東壁に桶の部材が残存しており枠の種類が理解できる。深さは検出面（47SK502埋土上面）から最深部ま

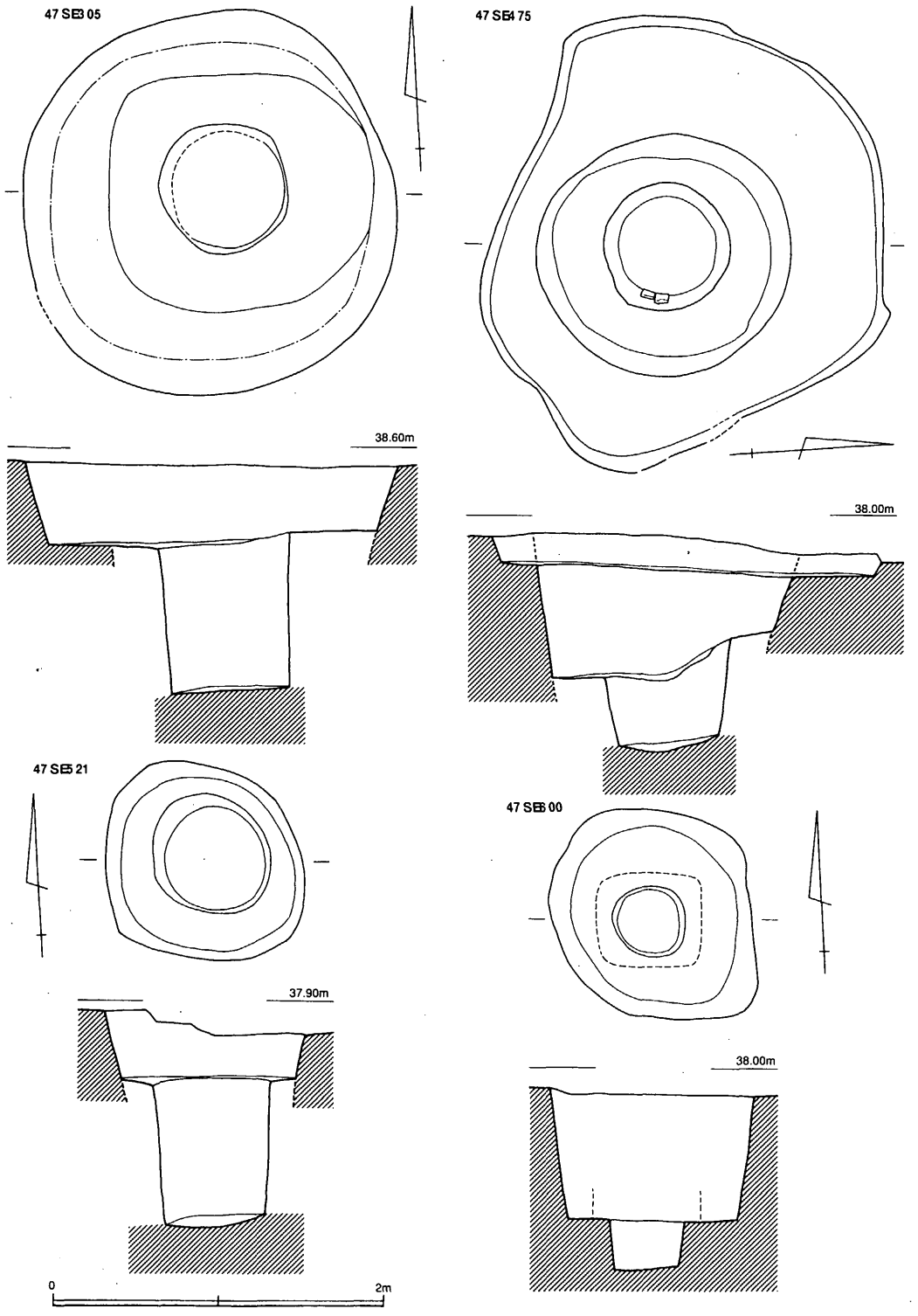


Fig.16　47SE305・475・521・600実測図（1/40）

で1.3mである。

47SE521（Fig.16）　47SE145のすぐ南側で検出された井戸で、径1.2～1.35mの略円形を呈する。検出面から0.5mほど掘り下げた段階で、径0.7～0.8mで円形の枠痕跡を確認したことから、桶を使用したものであったと推定できる。検出面から底部までの深さは1.3mである。

47SE530（Fig.15）　掘り方は1.6～1.8mほどの略方形で、検出段階から中央に略円形の変色部分が確認され、枠内に堆積する埋土であることが認識された。埋土は土層図にあるように埋め戻し途中で何らかの祭祀行為を行ったようで、炭化物を多量に含む黒灰色粘質土が埋土の中程に盆状に堆積していた。枠は1段分のみ残存しており径0.65mの桶を使用し、幅10cm以下、厚さ2cm以下の板目材23枚を用い、長さはほぼ0.6mである。

47SE570（Fig.17）　掘り方は径約1.9mの略円形を呈し、検出面から約0.6m掘り下げたところで枠を検出した。枠は1段分のみ残存しており径0.58m前後の桶を使用し、幅6～8cm、厚さ2cm以下の板目材21枚を用い、長さは最大で0.7mである。桶材は何かの転用材とみられ、6枚に4×8cm前後の臍穴が穿たれている。ただし穴はすべて桶の下方にくるように揃えられている。

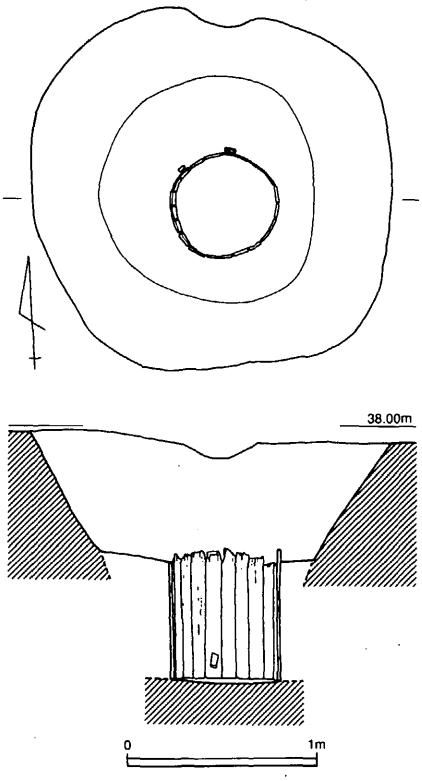


Fig.17　47SE570実測図（1/40）

47SE600（Fig.16）　47SK040の埋土をすべて除去した段階で検出された。検出面での掘り方の形状はいびつな隅丸方形で、東西1.2m、南北1.25mを測り、最深部までの深さは47SK040床面から約1.1mである。底部に径0.42m、深さ0.3mの曲物を据えたと思われる痕跡があり、その検出面には一辺0.6m内外で方形の枠痕跡とみられる変色部分があった。出土土器から今回検出した井戸のうち最も古いものであることが知られる。

土坑

47SK001　東西1.7m、南北1.2mの略楕円形を呈し、深さ0.1m前後を測る。埋土中に焼土が混じる。

47SK010（Fig.18）　47SK040を切る不整形な土坑で、南北2.9m、東西2.65mで東側半分が深く最大で約0.2mを測り、この部分が土坑の主体をなす。この床面に接して灰層が薄く堆積し、それに混じって数cm～30cm前後の石が散乱している。埋土には焼土が混在している。

47SK025　47SK020を切る土坑で、東西1.0m、南北0.7mの楕円形を呈し、深さ約0.2mを測る。

埋土中に焼土が混じっているが、47SK020の覆土が混在したものと考えられる。

47SK040（Fig.18） 47SK010が遺構の北東部分に重複し全容を知り得ないが、南北3.6m、東西3.75m、深さ0.25～0.3mを測り、東側に張り出しを持つ隅丸方形を呈する竪穴状の土坑である。床面は緩やかに中央付近が窪んでいる。なお埋土を除去した段階で床面西寄りに47SE600が検出された。

47SK050（Fig.18） 東西1.55m、南北0.95m、深さ約0.25mでやや胴張りのある隅丸長方形を呈している。47SD066を切っている。

47SK053（Fig.18） 南半分が調査区外にあって全容はわからないが、東西1.4m、南北0.75m、深さ0.2～0.25mを測る。床面から15cmほど浮いた位置に数cm～20cm大の石が散乱し、それに混じって鋳型（梵鐘下半部）が出土している。

47SK055 南北4.8m、東西4.7mの不整形な土坑で、深さは約0.6mを測る。埋土は粗い砂である。一連の大きな土坑では最新期に穿たれる。

47SK058（Fig.18） 南半分が調査区外にあって全容はわからないが、東西2.05m、南北0.65m、深さ0.15～0.25mを測る。土坑の東側半分が一段深くなっている。

47SK060 南北3.5m、東西3.3m、深さ約0.8mを測る不整形な土坑で、埋土は粗い砂である。検出段階で47SK055に切られることを確認したが、埋土はきわめて類似しており、ほとんど時期差はないものと考えられる。

47SK063（Fig.18） 東西方向に軸を持つ不整長円形を呈する土坑で、東西4.45m、南北1.0～1.2m、深さ7～25cmを測る。47SD052に切られている。

47SK080 径約2.6m、深さ約0.2mの土坑で、埋土中に焼土が混在している。

47SK110（Fig.19） 東西4.1m、南北1.8～2.1mを測る楕円形土坑で、床面に凹凸があり深さは最も浅いところで約0.15m、深いところでは0.55mを測る。埋土は土層図に見るように特徴的で、最初に炭混じりの暗茶褐色土（下層）がわずかに堆積した後、厚さ20cm（Max）もの炭層があり、続いて鉱滓を含んだ茶褐色土が堆積している（第II層）。次にこれと全く同じ状況の堆積が繰り返され（上層）、いずれも南側からの投棄である点も共通する。この遺構のすぐ南側には鋳造土坑と推定した47SK190があるが、これとは切り合い関係がある（47SK190が新しい）ため同時併存は困難であることから、さらに南側約1.5mの位置にある47SX250とした炉跡と推定される遺構との関係が注目される。また東側に偏って暗灰褐色土層がみられた。これは上層よりも古い堆積だが他の層との前後関係は確認できなかった。なお南側に近接する土坑47SK240とは検出段階でわずかながら切り合いが認められ、47SK110が新しく位置づけられることが判明している。

47SK121 不整形な大土坑で、南北10.5m、東西8.9mを測る。埋土は粗い砂で、底までは完掘していない。

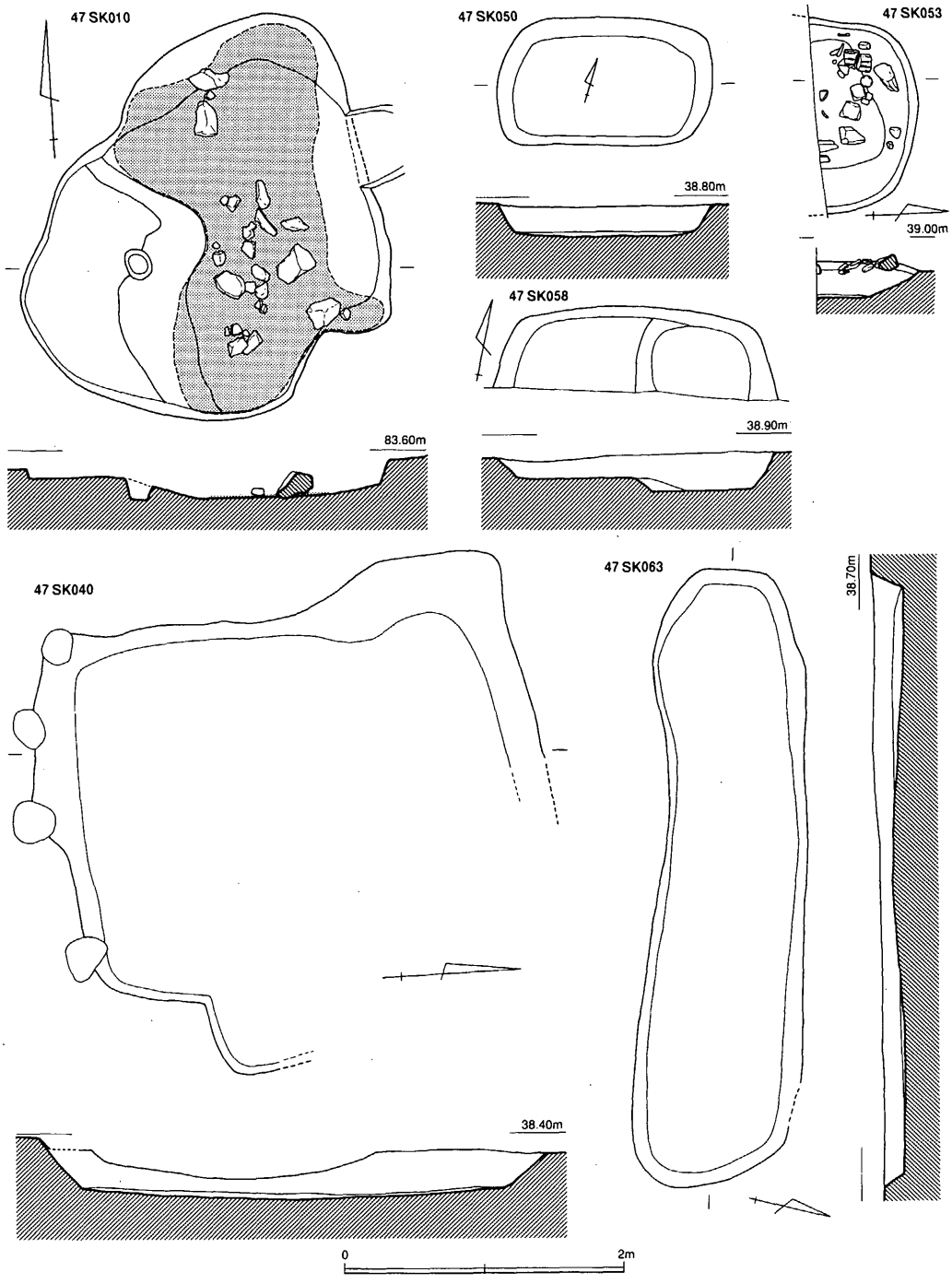


Fig.18　47SK010・040・050・053・058・063実測図（1/50）

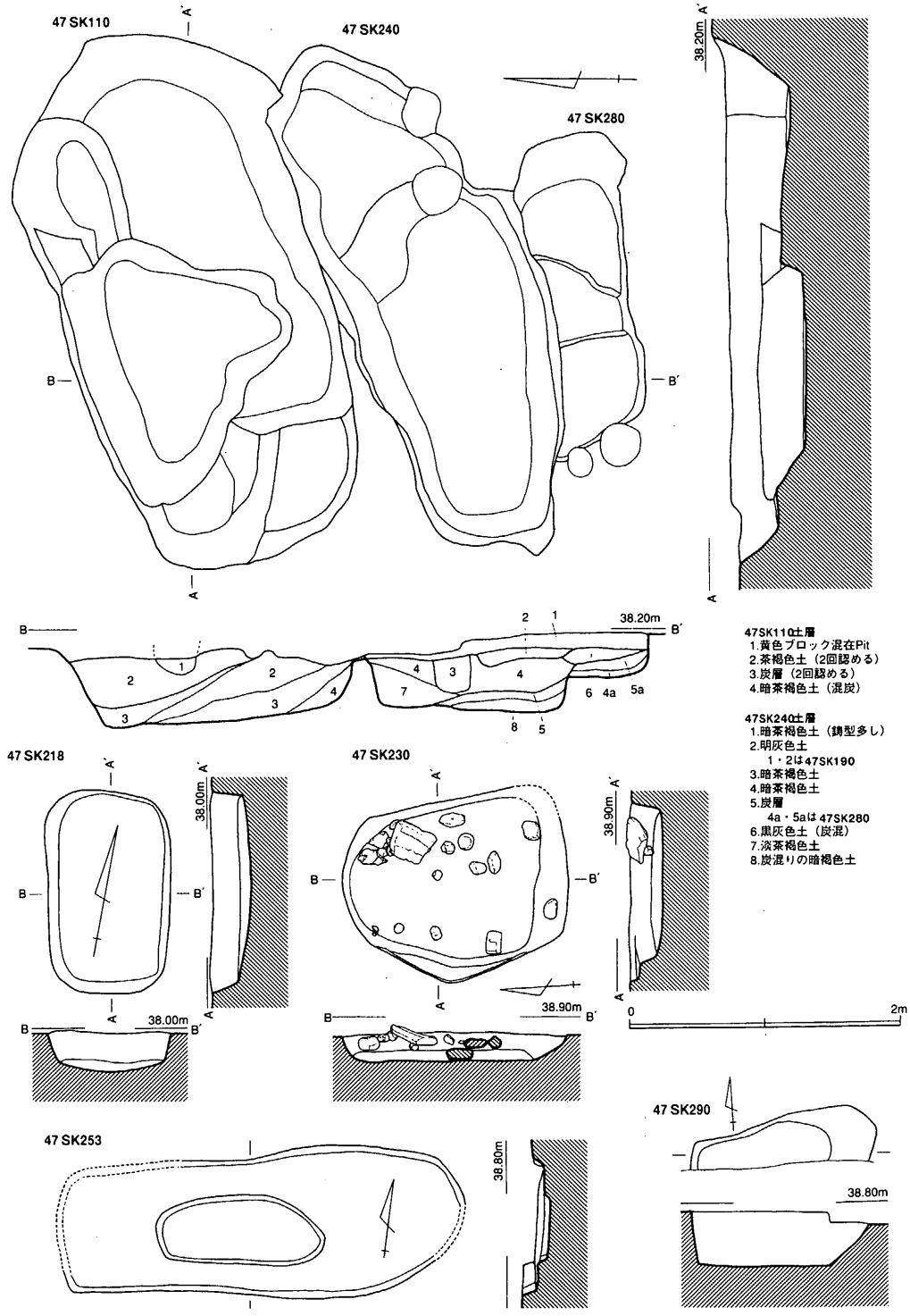


Fig.19　47SK110・218・230・240・253・280・290実測図（1/50）

47SK139　鋳造土坑群の一角にある隅丸長方形を呈する土坑で、東西1.5m、南北1.0m、深さ0.1mを測る。47SX130を切っている。

47SK159　47SK139の南側にある略円形を呈する土坑で、1.6×1.6m、深さ0.1mを測る。

47SK201　略円形を呈する大土坑で、東西3.8m、南北3.9mを測る。埋土は粗い砂で、底までは完掘していない。

47SK218（Fig.19）　隅丸長方形を呈する土坑で、南北1.5m、東西0.9m、深さ約0.3mを測る。埋土中には焼土が多く混じっていた。北側に炉跡47SX380があり、同じく炉跡47SX580の南側にあるこれと類似した形状の土坑47SK601との位置関係が近似しており注目される。

47SK230（Fig.19）　西側にやや胴張りのある隅丸長方形を呈する土坑で、南北1.68m、東西1.35m、深さ約0.2mを測る。埋土中に10～15cmの石が散乱し、床面からやや浮いた状態で大型の鍋の鋳型が土坑北東隅から出土し、完形の土師器小皿も鋳型と同じレベルから出土している。鋳型のある埋土上面には黒色土が堆積していた。鋳造に関わる遺構の可能性がある。

47SK235　47SK275の上面で検出されたもので、南北1.8m、東西1.2mで、わずかに掘り下げた段階で南西側に大きく落ち込み、土坑状を呈している。埋土中に焼土を多く含み、上層は灰白色土が薄く被る。下段の土坑（南北1.5m、東西0.7m）からは多くの鋳型片が出土した。

47SK240（Fig.19）　東西4.15m、南北1.5mの不整楕円形を呈する土坑で、床面の西側がやや深くなり、深さは0.35～0.5mを測る。埋土は最初に暗褐色土が若干堆積した後、炭層が南から投棄された状況で堆積し、さらに淡茶褐色土を介して鉱滓を多く含む暗茶褐色土の堆積となる。初期の堆積は47SK110に近似し、類似した性格を暗示する。出土遺物は底部に堆積したものを「底」の表示で掲げたほか、東側の浅い部分の堆積土を灰色土層とし、他は埋土として提示した。前後関係は埋土より灰色土が先行するが、灰色土と「底」の関係は不明である。なお北側に近接する土坑47SK110よりも古く、南側の47SK280よりも新しい。また鋳造土坑47SK190はこの土坑の埋没後に構築されている。

47SK245（Fig.20）　東西4.7m、南北1.2～1.5m、深さ0.4～0.55mの不整長円形を呈する土坑である。床面の一部が不定形に窪んでおり、その部分の深さは床面から約0.1mほどである。埋土中に焼土が混在している。

47SK253（Fig.19）　東西3.5m、南北0.95～1.15m、深さ0.15m内外の不整長円形を呈する土坑である。床面の一部が楕円形状に窪んでいる。47SD061を切っている。

47SK258　47SK245に切られる土坑で、東西1.7m、南北0.7m、深さ5cm内外を測り楕円形を呈する。

47SK280（Fig.19）　47SK240に切られる土坑で、東西2.4m、南北0.85m程度を測る。深さは床面にやや凹凸があり、0.2～0.3mを測る。埋土は床面に接して炭層、次に鉱滓を含んだ暗茶褐色土が堆積しており、47SK110・240に類似した埋土であることが指摘できる。

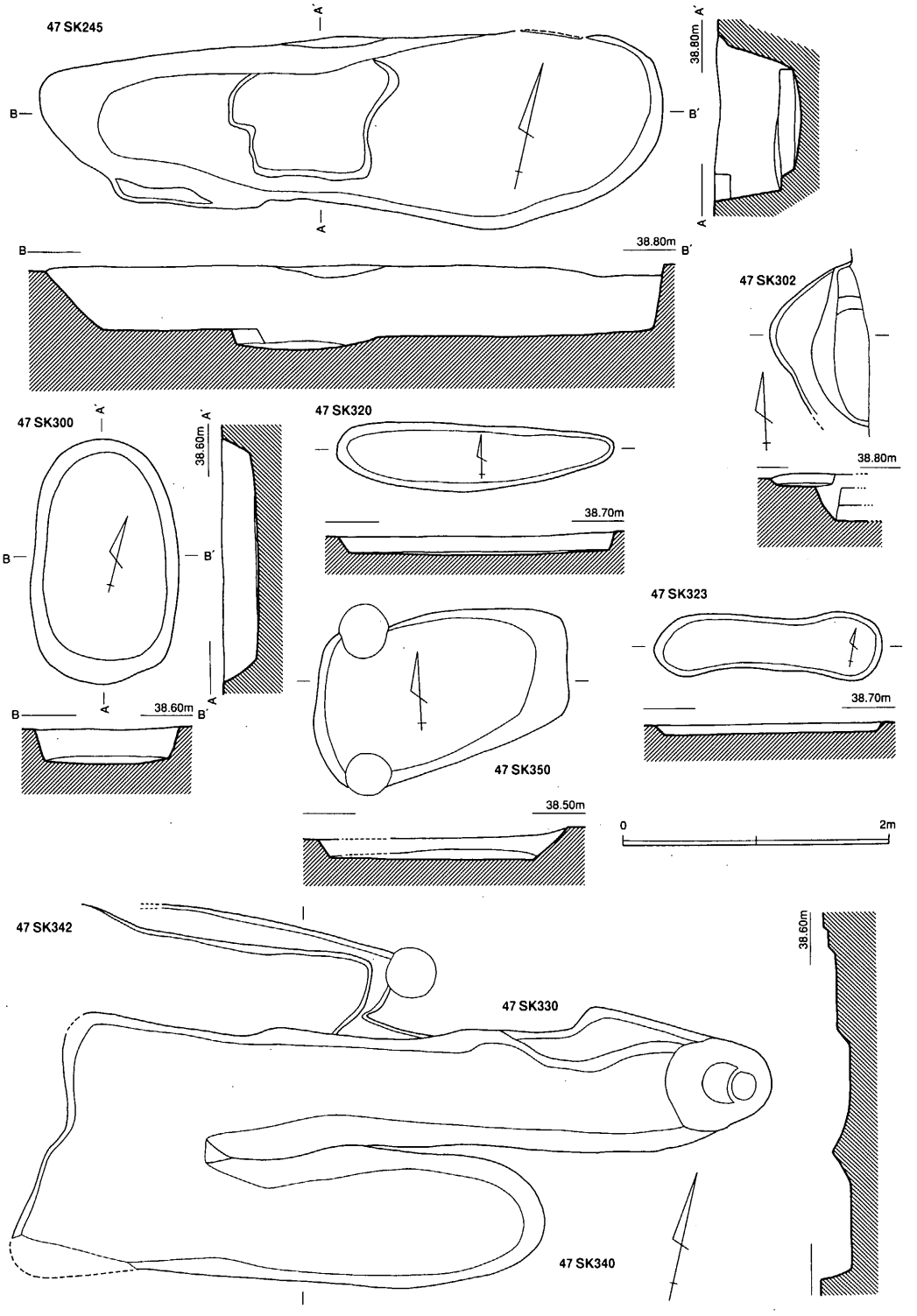


Fig.20　47SK245・300・302・320・323・330・340・342・350実測図（1/50）

47SK285　47SX276ピットに切られる不整楕円形を呈する土坑で、南北1.5m、東西0.75m、深さ0.15mを測る。

47SK290（Fig.19）　遺構の南半分は調査区外にある。東西1.4m、南北0.45m、深さ0.3～0.4mを測る。

47SK300（Fig.20）　南北1.85m、東西1.1m、深さ0.2～0.3mを測る楕円形土坑である。埋土は褐色土を基調とし、土坑床面付近から瓦質の火舎が出土した。

47SK302（Fig.20）　東半分が調査区の外にあり、南端は47SK290に接している。東西0.75m以上、南北1.4mで、土坑内は2段になり、最も深い部分では深さ0.3mを測る。埋土は灰褐色土を基調とする。

47SK320（Fig.20）　東西2.1m、南北0.5m、深さ0.15mを測る不整長円形を呈する土坑で、埋土は灰茶色粘質土である。

47SK323（Fig.20）　東西1.7m、南北0.4～0.5m、深さ0.1m弱を測る瓢箪形を呈する土坑で、埋土は褐色土である。

47SK330（Fig.20）　47SK340・342と並列して存在するもので、47SK340が最も古く、47SK330・47SK342の順に新しい。東西5.3m、南北0.9mの東西に長い不整楕円形を呈するもので、東端がピット状に窪んでいる。深さは0.2～0.25mで、東端の窪みは床面から約0.35mの深さがある。

47SK340（Fig.20）　東西3.95m、南北1.1mの東西に長い不整楕円形を呈する土坑である。床面までの深さは0.17～0.25mを測り、埋土は茶褐色土である。

47SK342（Fig.20）　東西2.4m程度、南北0.9mの不整隅丸長方形を呈する土坑である。一部二段になっており床面までの深さは0.1mを測り、埋土は茶褐色土である。

47SK350（Fig.20）　西側が広がる隅丸長方形を呈する土坑で、東西1.9m、南北0.8～1.2m、深さ0.25mを測る。

47SK355　遺構の南側大半が調査区外にあるが、長さ（東西）7.3m、幅0.4m以上の長い土坑である。西端の一部が一段深くなり深さ約0.3m、他の部分は約0.1～0.15mを測る。

47SK360（Fig.21）　東西5.5m、南北最大2.7m、深さ0.1～0.25mを測る楕円形土坑で、埋土は大きく4層に分けられ、茶褐色土、暗茶褐色土、暗灰色粘質土、炭混じりの茶褐色土の順に堆積し、いずれも東側からの堆積である。床面には多数のピットが検出されたが、埋土は灰色粘質土（●）、茶褐色土（▲）、混炭黒色土（■）の3種で土坑埋土に連続するものはなく、土坑に直接関連するものを特定できない。

47SK365　47SX346に切られ北側が不明瞭だが、東西1.9m、南北1.2m、深さ0.1～0.15mの不整隅丸長方形を呈する土坑である。

47SK378（Fig.21）　西側の一部が調査区外にある。東西2.4m以上、南北1.5m、深さ0.45～

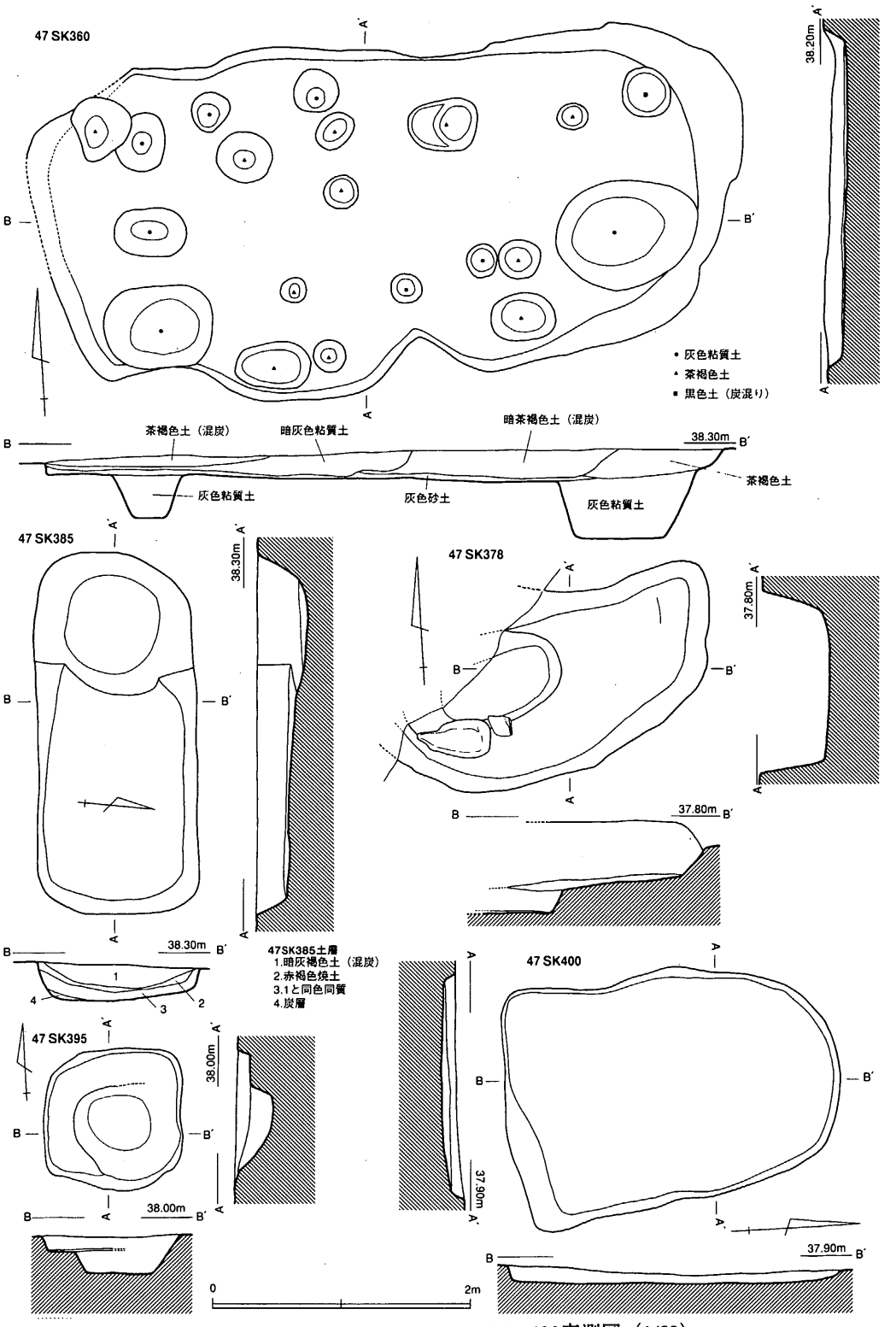


Fig.21　47SK360・378・385・395・400実測図（1/50）

0.5mを測る。床面の一部が楕円形に窪んでおり（1.25×0.7m）、その部分の深さは約0.2mである。床面近くに長さ0.6mほどの石が落ち込んでいる。

47SK385（Fig.21）　略楕円形を呈する土坑で、東西2.8m、南北1.2mを測る。土坑床面までの深さは約0.15mであるが、西側がピット状に窪んでおりその部分の深さは約0.4mに及ぶ。埋土は暗灰褐色土である。

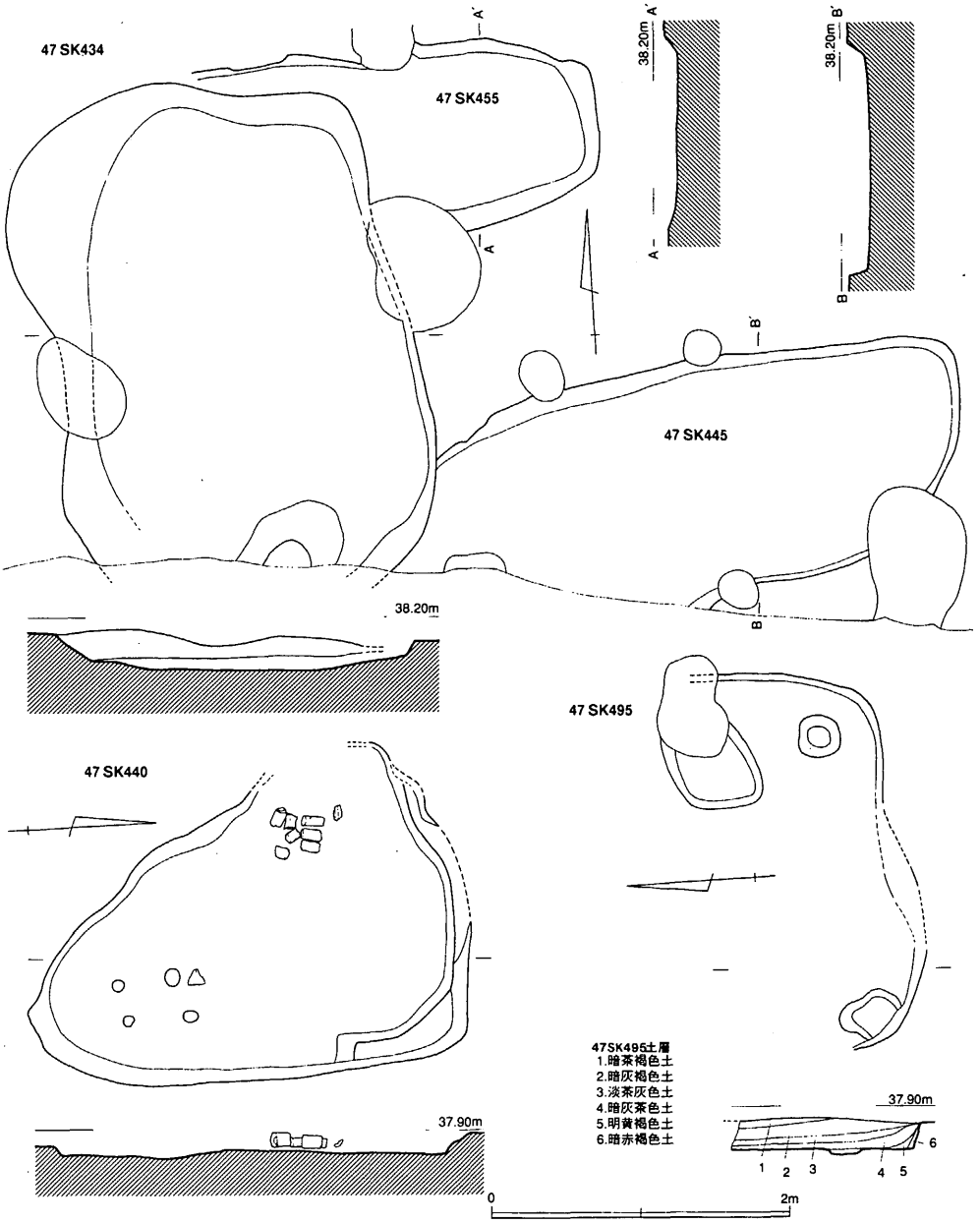


Fig.22　47SK434・440・445・455・495実測図（1/50）

47SK395（Fig.21）　隅丸方形を呈する土坑で、東西、南北ともに1.1mで、土坑内は2段になっており、最深部までは0.3m測る。埋土は茶褐色土である。

47SK400（Fig.21）　北側が円弧状を呈する不定形な土坑で、南北2.6m、東西1.8m、深さ0.1～0.15mを測る。

47SK420　南北1.5m、東西0.8mの楕円形を呈する土坑で、深さは約0.2mを測る。埋土は黒褐色土を主体とするが、床面に0.8×0.6mの楕円形の窪みがありその部分には暗灰色土が堆積しており、別の遺構の可能性もある。47SK450を切る。

47SK434（Fig.22）　南端が調査区外にあり全容を知り得ない。南北3.3m以上、東西2.5m、深さ0.2m前後のややいびつな楕円形を呈している。埋土は暗灰褐色土と茶褐色土が混在するもので、北辺部分には炭層も確認された。47SK455に切られ、47SK445を切っていると判断されるが、埋土が近似しており不明瞭な部分も多い。

47SK440（Fig.22）　南北2.95m、東西2.3m、深さ0.15m内外を測る不定形な土坑である。土坑の床面はほぼ平坦で、床面の西に偏った位置に鞴羽口8点が集中して出土した。また東南部分には径10cmにも満たない小ピット（深さ2～4cm）が4つ見出された。他には見られない規模のピットであり、この土坑に関係する可能性が考えられる。

47SK445（Fig.22）　遺構の南西部分が調査区外にあることと、西端を47SK434に切られていることで全容は知り得ない。東西3.9m以上、南北1.6m、深さ0.1～0.15mを測り、埋土中に焼土が混在している。

47SK450　47SK420に切られる不整形な土坑で、南北2.75m、東西1.45m、深さ約0.15mを測る。床面近くには灰を含む土層が堆積する。

47SK455（Fig.22）　検出段階では47SK434を切る形で見出されたが、西側に向かって急激に細くなり不自然な形状に見える。東西3.3m（検出長）、南北1.3m、深さ0.1mを測り、埋土は暗茶褐色土である。

47SK470　47SK500の南西側にあるややいびつな隅丸方形を呈する土坑で、南北1.2m、東西0.95m、深さ0.35mを測る。

47SK485（Fig.23）　47SK510を切る土坑で、東西2.2m、南北0.8m、深さ6～13cmを測る。遺構の西半分に灰層が確認された。

47SK495（Fig.22）　47SK221等に切られ全容は明らかでないが、残存する規模は東西2.5m、南北1.5m程度の隅丸長方形を呈していたと思われ、深さは0.2m前後である。埋土は壁際に住居跡の第一次堆積に似た土層（土層図5・6層）が確認されることから、若干の期間開いていたのち埋め戻されたものとみられる。床面にピットが複数確認されたが、この遺構に関係するものではなさそうである。

47SK500（Fig.23）　南北2.8m、東西2.3m、深さ0.1～0.3mを測る。南側のテラス状を呈する

部分は別遺構と考えるのが妥当であるが、検出段階では認識できなかった。土坑の床面は緩やかな盆状を呈し、北側の壁面と床面の境付近に10～15cm大の石群が東西方向で帯状に検出された。その中には炉壁の断片も含まれている。また埋土は炭を混入する層が多く見出された。

47SK502（Fig.16）　遺構のほぼ中央を47SE475に切られる土坑で、東西2.8m、南北2.4mを

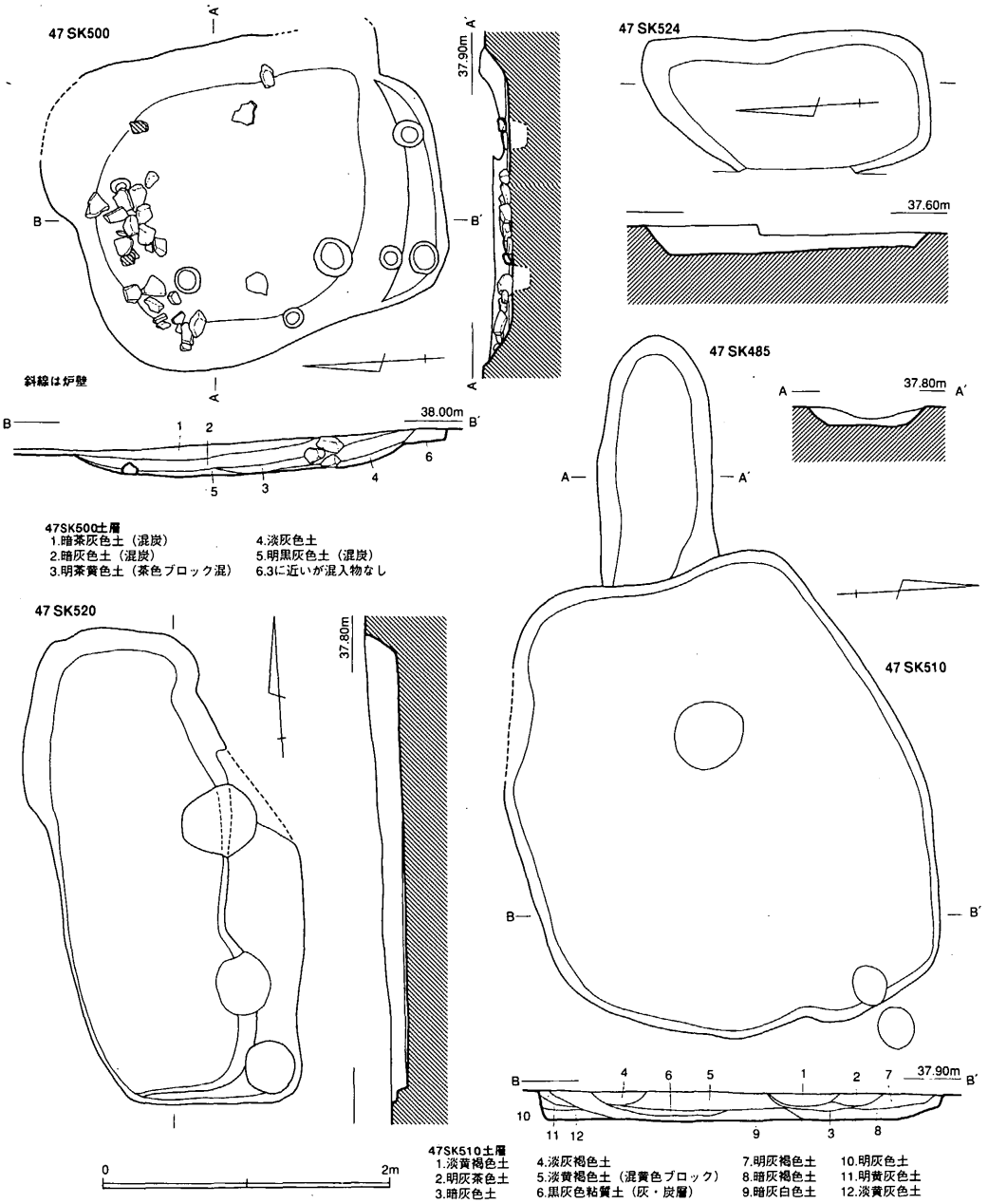


Fig.23　47SK485・500・510・520・524実測図（1/50）

測り、深さは最大で約0.25mである。

47SK510（Fig.23） 47SK485に切られる不定形な土坑で、東西3.4m、南北3.0m、深さ0.1～0.2mを測る。

47SK514 南北1.9m、東西1.1mの不定形な土坑で、深さは0.15～0.2mを測る。

47SK520（Fig.23） 南北3.4m、東西1.7m、深さ0.1～0.35mを測る。東南部分に段（検出面から深さ0.25m付近）がありテラス状を呈している。

47SK524（Fig.23） 遺構の西端の一部分が調査区外にあるが、いびつな隅丸長方形を呈する土坑と考えられる。南北2.0m、東西0.95m以上、深さ約0.2mを測る。

47SK550（Fig.24） 南北4.2m、東西3.3mのいびつな隅丸長方形状を呈するもので、深さは0.15～0.25mを測る。遺構の東南部分で床面に密着して、長さ1.4m、幅0.75m、厚さ0.15～0.2mの粘土塊が検出された。埋土は黒灰色土を主体とする。

47SK555 47SK550の上面で検出したややいびつな隅丸方形の土坑で、東西1.8m、南北1.5m、深さ0.1mを測る。

47SK560 東西1.8m、南北1.0mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.3mだが西側の一部が深くなり0.6mを測る。

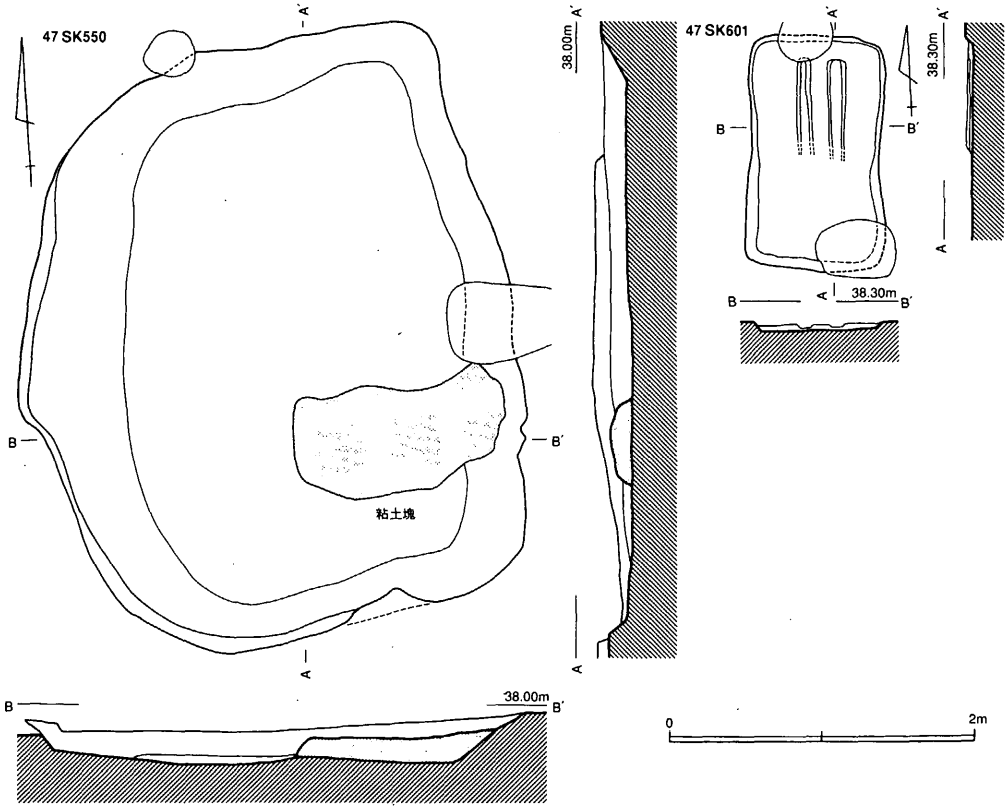


Fig.24 47SK550・601実測図（1/50）

47SK585（Fig.13）　47SK090、47SX100・580に切られる土坑で、全容を把握しにくいが、南北2.9m、東西2.4m程度の略楕円形を呈する。深さは0.1m前後で、埋土中に炭化物や炉壁が混入している。

47SK591（Fig.7）　47SK020の埋土を除去した段階で検出したほぼ円形を呈するものである。土坑内は二段になり、上段の径は1.15～1.25m、下段は0.75mで、深さは0.73mを測る。

47SK601（Fig.24）　47SX100・580の南に接して検出された長方形土坑で、南北1.6m、東西0.85～0.9mを測る。深さは5cmに満たないが、埋土上面に幅0.1m、深さ2～3cmの南北溝2条が穿たれていた。溝の真々距離は約0.2mで、南側を不注意で失ってしまったが、溝の全長は土坑より若干短い1.3m程度であった。

掘立柱建物

調査中に略図や空中写真等で検討し、それを踏まえて整理作業においても再度検討したが、確定する要素を欠くものもありここでは結論をつけることは止め、可能性の範囲で掘立柱建物を提示する。したがって他の遺構と同様の遺構番号は付さず、仮番号を付して報告する。

建物A（Fig.5）　調査区北東隅部で鋳造土坑47SK460の東側に検出されたもので、南北3間（6.7m）、東西2間（4.4m）の建物とみられる。柱穴は略円形で径0.25～0.4m、深さは0.2～0.45mを測り、柱間は西側、南側ともにほぼ2.2m等間で、主軸はおよそN-6°50′-Wである。また柱穴bからは鋳型等の遺物が若干出土したほか、埋土は焼土を混入した赤褐色土である。ただし、後述する建物Kを参考にすると西側柱列（a～d）を柵列と捉え、鋳造土坑47SK020・460の東側遮蔽施設とすることもできる。

建物B（Fig.5）　建物Aの南側に接して存在するもので、南北2間（3.5m）、東西3間（6.6m）の建物とみられる。柱穴は略円形で径0.25～0.8m、深さ0.15～0.3mを測るが、南面の柱穴が一際大きい。柱間は東西方向が概ね2.2m等間であるのに対し、南北方向は不揃いで1.3～2.2mとなり、主軸はおよそE-11°20′-N（N-11°20′-W）である。建物Cとは重複関係にあるが柱穴に切り合いがなく前後関係は不明である。また建物Aともきわめて近接しており同時併存はないものと考えたい。

建物C（Fig.5）　建物Bと重複して検出されたもので、南北3間（5.8m）、東西2間（3.7m）に1間の庇又は縁が東側に取り付く。柱穴は略円形で径0.3～0.7m、深さ0.2～0.55mを測り、主軸はおよそN-9°30′-Wである。柱間は1.8～2.0mで、庇は南北2間分のみ存在するとみられる。

建物D（Fig.5）　建物B・Cの西で検出した南北1間（1.8m）、東西3間（5.5m）の細長い建物とみられる。柱穴は略円形で径0.3～0.7m、深さ0.2～0.45mを測り、柱間は1.8～2.0mで中央間が広めである。主軸はおよそE-11°0′-N（N-11°0′-W）である。

建物E（Fig.5）　南北3間（5.5m）、東西1間（2.3m）以上の建物とみられ、西側は47SK055等の近世の大土坑によって失われている。柱穴は略円形で径0.35～0.7m、深さ0.15～0.2mを測る

が柱間は不揃いである。主軸はおよそN-13° 30′ -Wである。

建物F（Fig.5）　東西3間（5.4m）の柵列とみられる。柱穴は略円形で径0.4～0.7m、深さ0.3～0.43mを測り、主軸はおよそE-15° 50′ -N（N-15° 50′ -W）である。

建物G（Fig.5）　柱筋はややばらつくが南北1間（1.6m）、東西3間（5.4m）の東西に細長い建物とみられ、先の建物Dに規模、形状とも近似する。柱穴は略円形で径0.25～0.55m、深さ0.13～0.5mを測り、主軸はおよそE-13° 30′ -N（N-13° 30′ -W）である。また柱穴eは47SD030を切るピットで、埋土中に焼土を含んでいる。なお柱穴a・bは47SX049ピット群中に含まれる。

建物H（Fig.6）　鋳造土坑群の3面を囲うように検出されたもので、南北方向の柵列2条（西側のものをH-1、東側のものをH-3と仮称）と東西方向のコ字形柵列1条（H-2と仮称）から構成される。

（H-1）　鋳造土坑群の西側にあるもので南北3間分以上を確認したが、北側が47SX561窪み状遺構に切られるものとみられ、さらに北へ延びそうである。検出長約4.0mで、柱穴は略円形で径0.2～0.3m、深さは0.1～0.3mを測り、主軸はN-11° 35′ -Wで、柱間は1.2～1.5mとややばらついている。これらは溝47SD147埋土上面から切り込んでいるが、正しく埋土上に並ぶことから溝も建物に関連する施設の可能性がある。

（H-2）　鋳造土坑群の南側にあるもので、東西推定8間（10.5m）で両端部から1間（約1.4m）分だけ北に折れ曲がると考えられる。柱穴は略円形で径0.2～0.45m、深さ0.1～0.2m前後を測り、主軸はE-8° 55′ -N（N-8° 55′ -W）で、柱間は0.85～1.8mとかなりばらついている。

（H-3）　鋳造土坑群の東側にあるもので南北5間分（5.1m）を確認した。柱穴は略円形で径0.3～0.45m、深さ6～20cmを測り、主軸はN-7° 05′ -Wで、柱間は0.8～1.2mとややばらついている。北側に延びる可能性は残される。

柱穴の規模やお互いの距離関係等からこれに屋根があったとは考え難く、3者はそれぞれ独立する遮蔽施設とみるのが妥当であろう。しかし鋳造土坑群との位置関係からお互いは有機的に関連した施設であるとみられる。

建物I（Fig.6）　南北5間（10.5m）、東西2間（3.9m）の南北棟の西側に、5間（10.5m）×1間（1.8m）の庇を持つ建物である。柱穴は略円形で径0.3～0.85m、深さ0.2～0.6mを測り、主軸はN-4° 40′ -Wで、柱間は1.8～2.3mとやや不揃いである。この建物の身舎部分には鋳造土坑47SK200・221等がきっちりと納まっており、鋳造施設の覆い屋的性格を保有したものと考えられる。さらに西側に溶解炉等の施設があることと庇が西側につくことは無関係ではなかろう。

その他の遺構

ア）鋳型集積地

47SX045　47SD066に被るように検出されたもので、明確な掘り込みはなく東西0.7m、南北

0.7mの不定形な範囲に鋳型片が集中して出土した地点を指している。集積されるものは鋳型片の他、炉壁とみられる破片も混在している。

47SX260（Fig.25）　47SK300付近の上面に被るように検出された鋳型片の集積地点である。鋳型片は南北4.0m以上、幅0.9～1.3mで、南端で東側に長さ1.4m以上、幅0.4mの範囲が確認できた。厚さはいずれも3～4cm程度と薄い。ただし遺構面に削平を受けた部分があり、当初は東側にさらに幅広く広がっていたものと推定される。これらの鋳型片の上面には黄色土が被っており、多くの遺構が切り込む地山面からは若干浮いていることから、基本的には茶色土中に薄く堆積している状況を呈しているが、破片はすべて波状の文様を呈するものでしかもきわめて平面的で大きなものであった（仏像の光背風のものを想定している）と推定でき、この場で鋳造され破壊、廃棄されたことも考えておく必要がある。特別な施設を伴わない鋳造遺構の可能性を指摘しておきたい。

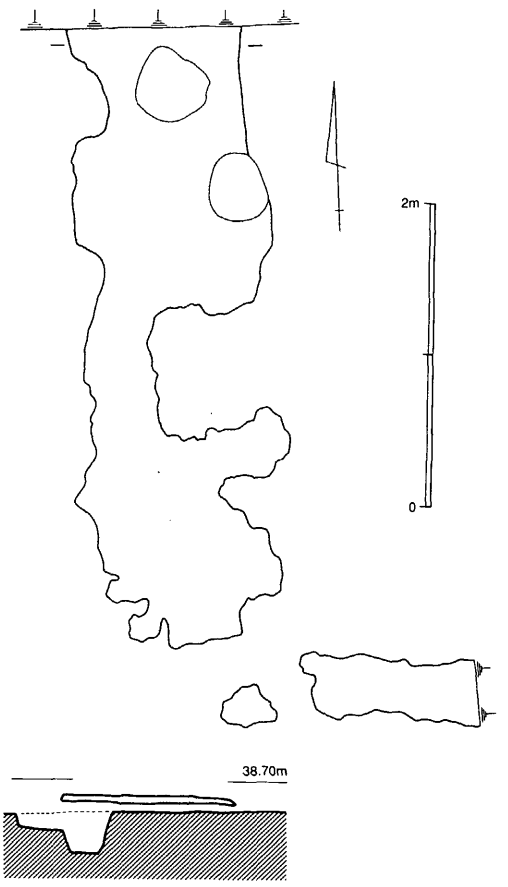


Fig.25　47SX260鋳型集積地実測図（1/50）

47SX345　47SK360の北東隅近くで検出された鋳型集積地点である。平面形状は不定形で、規模は南北1.8m、東西1.4mを測り、多量の鋳型片が薄く堆積するだけで特別な掘り込みは認められない。鋳型片を除去すると下面から多くのピットが検出されたが、集積地とは無関係である。

47SX565　47SX085段落ち状の堆積土を除去した段階で検出された鋳型の集積地である。平面的には略楕円形を呈しており、南北0.5m、東西0.4mで薄く堆積する。明確な掘り込みはない。

イ）土器埋納遺構

47SX160（Fig.26）　47SE165・170、47SX180等の南側に検出された土坑で、平面形は変形した五角形を呈し、南北0.7m、東西0.9mを測る。深さは4～5cm程度で平坦な床面であるが、北端部分が浅いピット状を呈し5cmほど深くなる。土坑内で床面からわずかに浮いた状態で土師器坏や小皿を検出した。土師器は土坑中央に1点（No.3）を配し、それに沿うように小皿2点（No.6・7）を置く。さらに北東（No.5）、北西（No.2）、南東（No.4）、南西（No.1）の各位置に土師器坏を各1点づつ配するものである。このうちNo.1と4については倒置した状態で出土し、

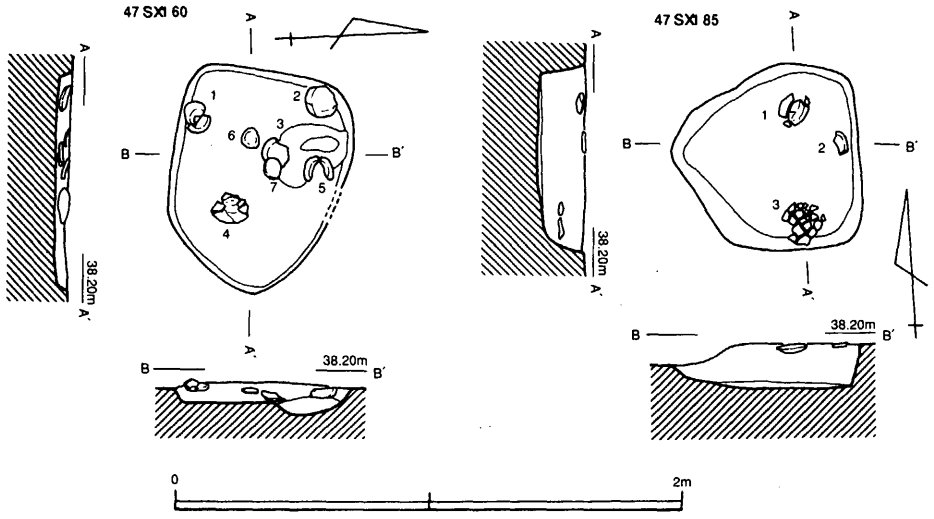


Fig.26　土器埋納遺構実測図（1/30）

No.1ついては土器内部から炭化物を検出している。他は正位置で出土した。これらの土器については概ね原位置を保つものと推定され、意識された配置と考えたい。近世の事例だが和歌山県高野山宝性院跡から屋敷地取作法に則り、折敷内に陶器皿を賽の五の目状に配置した遺構が見出されており※、時期は異なるがこの遺構と性格的に類似するものであることを窺わせる。

※　水野正好　1982　「屋敷地取作法と地鎮の考古学」『高野山発掘調査報告書』　（財）元興寺文化財研究所

47SX185（Fig.26）　47SE570の南西隅近くで検出された土坑で、平面形は変形した五角形を呈し、南北0.75m、東西0.75mを測る。深さは15cm程度でほぼ平坦な床面である。土坑内で床面からかなり浮いた状態ながら土師器坏を3点検出した。坏は土坑内の北（No.1）、東（No.2）、南（No.3）の各位置から出土し、南のものが倒置した状態で出土した。他は正位置であるが、東のものは完存資料ではない。この遺構の西側が段落ちで約10cmほど削られていることを考慮すると、西側にも存在した可能性がある。さらに南のものが倒置状態であることを踏まえると、先述した47SX160と同様のものであったことも考慮しておく必要があろう。

ウ）方形竪穴状遺構

47SK275（Fig.27）　東西3.0m、南北3.0mの隅丸方形を呈するもので、深さは検出面から床面までが0.6m前後を測る。床面には径0.2～0.4m、深さ10～20cmで略円形のピットが複数検出された。これらは埋土除去後に見出されたものであり、おそらくこの遺構に伴うものと考えられ、東西2列（東西間はおよそ1.5m）に配されるように見え、南北に並ぶ各ピット間は概ね0.6～0.7mを測る。ここに柱を建て、簡易な屋根をかけたのであろうか。ピット内からは遺物の出土をみない。埋土は4層に分けられるが概ね水平に近い堆積を示し、炭化物の混在を認めるものの他の廃棄用土坑に比べるときわめて少なく、それらとは明らかに性格の異なるものである

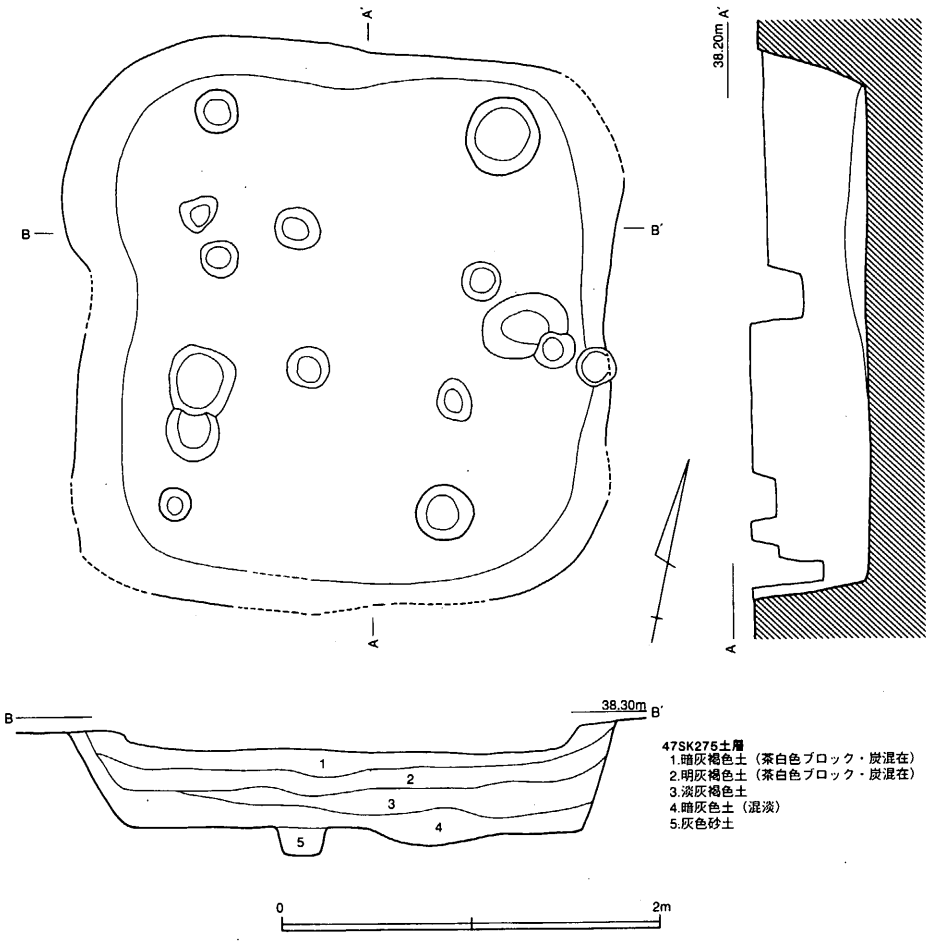


Fig.27　47SK275実測図及び土層観察図（1/40）

ことが理解できる。

エ）礫敷遺構

47SX374（Fig.28）　幅0.45～0.8m（大半が幅0.5m前後）でL字状を呈する礫敷遺構である。遺構の大半が調査区外にあるため、全体の規模や形状は知り得ないが、おそらく方形に巡るものと推定される。礫群の内側と外側では若干の比高差があり、内側が10cmほど高い。検出した規模は東西3.0m、南北1.65mで、一部を断ち割った結果、礫は幅0.6m前後、深さ0.1mの溝を穿ち、黄褐色砂土で埋められるがほとんど礫で埋まっている。

オ）ピット、窪み状遺構など

47SX003　径0.3m前後の略円形を呈するピットで、深さ約0.2m。

47SX014　0.55×0.6m、深さ0.2mの略円形を呈するピットである。

47SX016　複数の小ピットに切られる0.95×0.8mの隅丸略方形を呈するピットで、深さは

5cm。

47SX034　0.65×0.5mを測る略円形のピットで、深さは0.3m。黄色土埋土。

47SX037　東側の一部が調査区外にある不整長円形のピットで、長さ1.2m以上、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

47SX049　47SK040の西側に点在するピット群で、建物Gの柱穴a・bを含んでいる。

47SX062　47SK061の上面に被る窪み状の遺構で、東西1.5m、南北は1.2m以上を測る。

47SX065　47SK605鋳造土坑の埋土上面に位置する窪み状遺構で、1.2×0.95mの不整長円形を呈する。黄色粘土埋土。

47SX067　47SK121に一部がかかる溝状遺構である。検出長5.5m、幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.2m。

47SX069　47SX067の北側にある浅い窪み状遺構で、検出長4.6×2.0m。

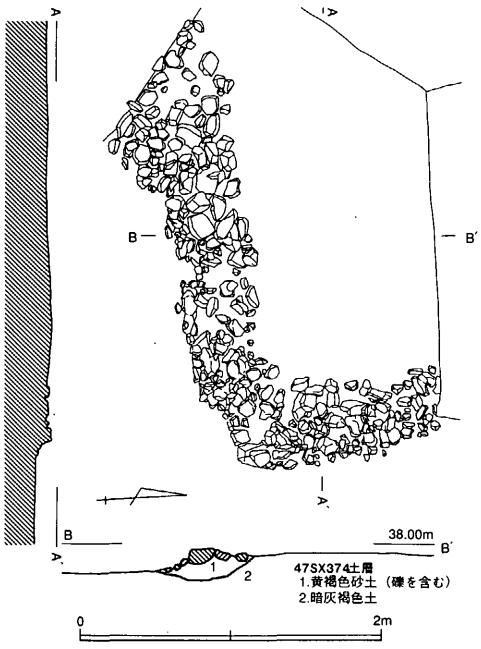


Fig.28　47SX374実測図（1/50）

47SX073　1.3×0.55mの長円形を呈するピットで、深さは0.2m。

47SX074　0.45×0.3mの不整長円形を呈するピットで、深さ0.2m。

47SX075　47SX085を切るピット群。

47SX081　47SK121の北側に点在するピット群。

47SX085　47SK605を切る形で東西に長く延びる落ち込み状の遺構である。検出長16.5m、検出できた最大幅は1.5m、深さはわずかに5cm程度である。

47SX094　0.8×0.9mの略円形を呈する黄色土を埋土とするピットで、47SD175を切っている。

47SX098　47SK605の南側に点在するピット群である。

47SX102　47SD175の西側に点在するピット群で、黄色土を埋土とするもの。

47SX103　径0.7mのほぼ正円形で、深さは0.3m。底部で2段になる。

47SX107　47SK110の北西に点在するピット群。

47SX111　1.2×0.6m以上、深さ0.15mのピットで、47SK110に切られる。

47SX112　47SX111に切られているが、下層ではほぼ残存し、その一部が47SK110に切られている。

47SX118　47SK110の北側に点在するピット群で、茶色土埋土。

47SX119　47SD175の西側に点在するピット群。

47SX122　47SE521に被る不整長円形の浅い窪み状遺構で、長さ2.4m、幅0.7～1.0m。

47SX126　47SD147に切り込むピットを含む一群である。建物H-1柱穴bを含んでいる。

47SX130　47SK620等の鋳造土坑群の上面に被っている堆積層を指す。一部では溝状を呈している部分もあるが、鋳造土坑群の埋土が沈み込むことに伴って堆積したものと理解しておきたい。検出全長はおよそ13m、幅は1.5～4.5mで、最も深い部分では約15cmほどの堆積が確認された。

47SX131　47SK120に一部が切られる窪み状遺構で、南北に長い不整長円形を呈し、長さ3.3m、幅1.8m、深さは約0.1mを測る。

47SX135　47SK210等の鋳造土坑群の上面に被る堆積層で、47SX130の北側部分を指しており、ほぼ同じものとみてよい。

47SX136　47SX131に切られるピットで、東西0.6m以上、南北0.6m、深さ5cmを測る。

47SX143　47SK500に切り込むピット群である。

47SX153　47SK110の東側にあるピットで、0.9×0.8mの不整形で、深さは0.15mである。底部に径0.1mのピットがあるが、埋土が黄色土であり別遺構と考えられる。

47SX162　47SK159に切られる窪み状遺構で、1.7×1.4mできわめて浅い。

47SX167　47SK110の西端を切るピットで、1.0×0.6mを測る。

47SX183　0.8×0.6mの浅いピットで、47SK110の東端部を切っている。

47SX184　47SK110上面に切り込む径0.3mのピットで、埋土は黄色土である。

47SX186　0.62×0.3mの楕円形ピットで、深さは0.25mを測る。

47SX195　1.7×1.4mの楕円形ピットで、深さは5cmと浅い。床面にピットが検出されるが、無関係と考えている。

47SX204　調査区東側の遺構が希薄になる付近に検出されたピット群である。

47SX217　調査区西側の鋳造土坑群検出に伴って北側へ拡張した部分で検出したピット群で、47SK205の埋土上面に位置する。きわめて新しい時期に穿たれたものである。

47SX237　47SK230の南側で検出された径0.6m、深さ0.3mのピットで、半分は調査区外にある。

47SX243　47SE570の上面に薄く被る堆積層で、東西3.5m、南北1.5mの範囲に及ぶ。

47SX248　47SK385の西側にあるピット群である。

47SX249　47SK275の西側にあるピット群である。

47SX251　47SE570の上面に薄く被る堆積層で、東西2.0m、南北1.3mの不整方形の範囲が該当する。47SX243に切られ、埋土中には焼土が含まれている。

47SX254　47SK275の西にあるピット群である。

47SX255　47SK275上面に薄く被る焼土の堆積層。

47SX256　47SK450の北側にあるピット群で、埋土は黄色土である。

47SX259　1.4×1.1m、深さ0.15mの不整方形の溜まり状遺構である。

47SX261　東西1.2m、南北1.7mの不整方形を呈する窪み状遺構で、深さは約5cmと浅い。埋土は焼土を多く含んでいる。

47SX262　47SX259の埋土を除去した段階で検出されたピット群。

47SX265　47SD270の東側で検出されたピットで、径0.65mの略円形を呈し、深さは0.4mを測る。

47SX272　47SD270の東側で検出されたピットで、径0.3mの略円形を呈し、深さは0.35mを測る。

47SX276　47SD270の西側で検出されたピットで、径0.5mの略円形を呈し、深さは0.2mを測る。47SX285を切っている。

47SX279　径0.4m、深さ0.48m内外のピットである。

47SX282　47SK275上面に薄く被る焼土を含む灰色土の堆積層で、47SX255と一連のものと考えられる。

47SX283　東西3.0m、南北2.2mの範囲を確認したが全貌はトレンチによる削平で明らかではない。残存する形状から当初は径6mほどの略円形を呈していたものと思われる。

47SX292　47SK245の西側に検出されたピット群である。

47SX303　47SX285の東側にある窪み状遺構で、47SX304に切られる。

47SX304　47SX285の東側にある窪み状遺構で、0.7×0.7mの略方形を呈し、47SX303を切る。

47SX306　47SX303・304を切るピット群。

47SX308　47SD307の西にある落ち込み状遺構で、0.6×1.2mの不整形。深さは0.1～0.15mを測る。

47SX313　47SK300の東側で検出されたピット群。

47SX316　47SK300の北側で検出された略円形のピットで、径0.6m、深さ0.3mを測る。

47SX321　47SK300の北東側で検出されたピット群。

47SX328　47SK330の北側で検出されたピット群。

47SX335　0.7×0.4mの不整形なピットで、深さは0.6mを測る。

47SX341　径0.4m、深さ0.2mの略円形を呈するピットである。

47SX346　47SX303等に切られる溜まり状遺構である。当初は47SX303等と同一の堆積層の可能性が高い。埋土中に灰が混入している。

47SX351　47SK285の南側にあるピット。47SK285に切られる。

47SX352　47SD270と47SK360の間で検出された、東西3.3m、南北2.5mを測る窪み状遺構であるが、上面に被る茶色土と同一の埋土であり、わずかな窪みに茶色土が堆積したものとみら

れる。

47SX353　47SK360のすぐ東側で検出されたピットで、0.6×0.5mの不整円形で、深さ0.2mである。

47SX356　47SK350上面に溜まる窪み状遺構。

47SX362　47SX345上面から切り込むピット群。

47SX367　径0.5～0.6mの不整円形で、深さは0.1m程度のピットである。

47SX368　47SK378等に切り込む黄色土を埋土とするピット群である。

47SX375　47SK378に切られる不整形な深さ0.1mほどの土坑状を呈するもので、埋土を除去すると小礫がつまったピット状のものが検出された。

47SX376　47SK378の南側に展開するピット群。

47SX390　長さ1.8m以上、幅0.8m、深さ0.2mの溝状を呈する遺構で、北側を47SK385、南側を47SK360に切られている。埋土は灰色粘質土で構成される。

47SX392　47SX390埋土除去後に検出されたピット群である。

47SX402　47SK360埋土除去後に検出されたピット群で、茶褐色焼土を埋土中に含んでいる。

47SX403　47SK360埋土除去後に検出されたピットで、1.1×0.85m、深さ0.4mで灰色粘質土を埋土とする。

47SX404　47SK360埋土除去後に検出されたピットで、0.6×0.85m、深さ0.3mで灰色粘質土を埋土とする。

47SX405　1.2×1.6m、深さ0.1mの浅い窪み状遺構である。

47SX410　南北0.75m、東西0.5m、深さ5cmを測る楕円形のピットである。埋土中には多くの鉱滓が混じっていた。

47SX412　47SK360の西側にある窪み状遺構で、灰色粘質土を埋土とする。

47SX414　47SK360の西側にあるピット。

47SX423　47SK275西側のピット群で、建物H-2柱穴jを含む。

47SX424　47SK275西側のピットで、径約0.35mの略円形を呈し、深さは0.35m。

47SX425　長さ0.9m以上（南側が調査区外）、幅0.6m、深さ0.4mのピットで、底に0.35×0.35mの平石がある。

47SX426　長さ1.0m、幅0.9m、深さ約5cmの浅いピット。

47SX427　径0.8～0.9m、深さ0.55mのピット。

47SX430　長さ0.65m以上、幅0.3m、深さ0.15mのピットで、47SK275に切られる。

47SX432　長さ0.9m、幅0.75m、深さ0.4mのピットで、47SK434を切っている。

47SX436　47SK110の北側にある不定形な窪み状遺構群で、いずれも深さは0.1m程度。

47SX442　47SK275の北西にあるピット群。

47SX444　47SE570の南側にあるピット群。

47SX446　47SK495に切り込むピット群である。

47SX447　47SK450に切られる略方形のピットで、0.75×0.6m以上、深さ0.1mである。

47SX453　西側鋳造土坑群の南端にあるピット群。

47SX454　西側鋳造土坑群の南端にあるピットで、0.5×0.4m、深さ0.25mを測る。

47SX457　西側鋳造土坑群の南端にあるピット群で、建物H-2柱穴c・dを含む。

47SX458　西側鋳造土坑群の南端にあるピットで、0.7×0.5mの楕円形を呈し、底部はふたつのピットに分かれる。いずれも深さ0.2m。

47SX459　47SK450の南西側にあるピットで、0.8×0.6mの略円形を呈し、深さは0.3m。

47SX461　47SK450の南西から南側にあるピット群。

47SX462　47SK434の埋土を除去した段階で検出されたピットで、0.4×0.3m、深さ0.2m。

47SX465　2×2mの窪み状遺構である。

47SX467　径0.75～0.8m、深さ0.25mのピットで、床面に検出された小ピットのひとつに礫が詰まっている。

47SX468　47SK434の西側に展開するピット群。

47SX471　47SK495を切る小ピットで、0.45×0.45m、深さ0.15m。

47SX473　西側の鋳造土坑群の南側にある窪み状遺構で、深さ約0.1m。

47SX474　1.1×1.7cm、深さ数cmの浅いピット。

47SX479　0.45×0.35m、深さ0.3mの略方形のピットである。

47SX480　1.3×0.8mで浅い不整形なピットに見えたが、上面の埋土を除去すると小ピットの集合体であったことが判明した。

47SX484　47SK510の南側にある楕円形のピットで、1.05×0.4m、深さ0.1mを測る。

47SX488　47SK510に切り込むピットで、径約0.7m。

47SX490　47SX474に切られる不整略方形の窪み状遺構で、1.7×1.6mで深さは0.1mを測る。

47SX493　47SK520上面及びその周辺で検出されたピット群である。

47SX496　47SX490の埋土を除去した段階で検出されたピット群である。

47SX503　47SK502に切られるピットで、1.0×0.6m、深さ0.15mを測る。

47SX504　47SK502に切られ、47SK510を切る窪み状遺構で、深さ5～10cm。

47SX505　47SK440を切り、47SK221に切られる窪み状遺構で、深さ0.15m内外を測る。

47SX516　47SK514の南側に展開するピット群。

47SX517　47SK520の南側で、47SK485の西側に展開するピット群。

47SX525　径約0.6m、深さ0.2mのピット。

47SX526　調査区外に一部があって全貌を知り得ないが、検出長2.0m、幅0.8mで床面の一部

が深くなり、0.35mを測る。

47SX528　調査区南西隅部分にあるピット群。

47SX529　調査区南西隅部分にある不定形な窪み状遺構で、南側は調査区の外にある。検出幅1.9m、長さ1.5m以上、深さ5cm前後を測る。

47SX532　47SK550の西側にあるピット群。

47SX535　47SK550埋土上面で検出された窪み状遺構で、2.2×1.2m。

47SX536　調査区南西隅で検出されたピット群。

47SX537　調査区南西隅で検出されたピット群。

47SX538　円形を呈するピットで、径0.7mを測り、深さは0.3mである。

47SX540　47SK550埋土上面に被る窪み状遺構（堆積層）で、東西4.2m。

47SX541　調査区南西隅で検出されたピット群。

47SX542　不定形な窪み状遺構で、南半分は調査区外にある。規模は1.5×0.7m、深さ0.1mを測る。

47SX543　調査区南西隅で検出されたピット群。

47SX544　径0.45m、深さ0.2mのピットである。

47SX545　47SK550埋土上面に被る窪み状遺構（堆積層）。

47SX547　47SK550の西側にあるピット群。

47SX553　推定径約1.0m（南半分は調査区外）の略円形を呈し、深さは0.15～0.3mを測る。

47SX561　47SX374の下層に位置する大きな窪み状遺構で、東西、南北ともにほぼ3.0mの規模を有し、深さは0.25m程度である。

47SX564　47SK555に切られる窪み状遺構で、深さはわずか5cmである。

47SX567　西側の大鋳造土坑群の北側で検出された窪み状遺構。

47SX571　47SK550の西側にある窪み状遺構。

47SX572　47SX571の埋土を除去した段階で検出されたピット群。

47SX573　47SK550の東側にあるピット群。

47SX587　47SK500埋土除去後に検出されたピット群。

47SX595　不定形な窪み状遺構で、東西1.9m、南北1.55m、深さ0.2mを測る。埋土に焼土を含む。

47SX598　南北1.7m、東西1.45m、深さ5cmほどの不定形な窪み状遺構で、埋土を除去すると多数のピットが検出された。このピットの一つが建物Cの柱穴cに該当する。

47SX602　47SX595埋土除去後に検出されたピット群である。

(3) 出土遺物

(A) 土器・陶磁器

鋳造土坑出土土器

47SK155出土土器 (Fig.29)

土師器

坏a (1)　口径11.9cm、器高2.4cm、底径7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

陶器

盤 (2)　口径24.5cmで、内傾する口縁部に目跡が観察される。胎土は黒色小粒を混入し、小さな気泡があるがきめ細かく硬質で、淡灰色を呈している。釉は内外面ともに薄くかかり、暗緑灰色に発色し半透明で光沢がある。I-2類。

47SK156出土土器 (Fig.29)

土師器

小皿a (3)　口径7.6cm、器高1.05cm、底径5.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

47SK190上層出土土器 (Fig.29)

土師器

小皿a (4～14)　口径8.0～8.6cm、器高0.8～1.4cm、底径5.9～7.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (15～19)　口径12.2～13.8cm、器高2.3～2.9cm、底径8.2～9.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

龍泉窯系青磁

椀 (20)　口径12.0cmで外面には細めの蓮弁文をあしらう。緑灰色のやや透明度の低い釉が厚くかかる。III-2-a類。

坏 (21)　口径10.6cmで、淡緑色の半透明な釉が厚くかかる。貫入が多く入るが光沢は強い。

47SK190下層出土土器 (Fig.29)

土師器

小皿a (22・23)　口径8.0・8.6cm、器高1.3・1.2cm、底径6.3・6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (24・25)　口径12.6・13.0cm、器高2.7・2.6cm、底径8.3・8.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

須恵質土器

鉢 (26)　片口の鉢で、焼成はやや甘い。

龍泉窯系青磁

椀 (27)　外面に細い蓮弁文を配する。釉は淡緑色に発色するものが厚くかかり、光沢があ

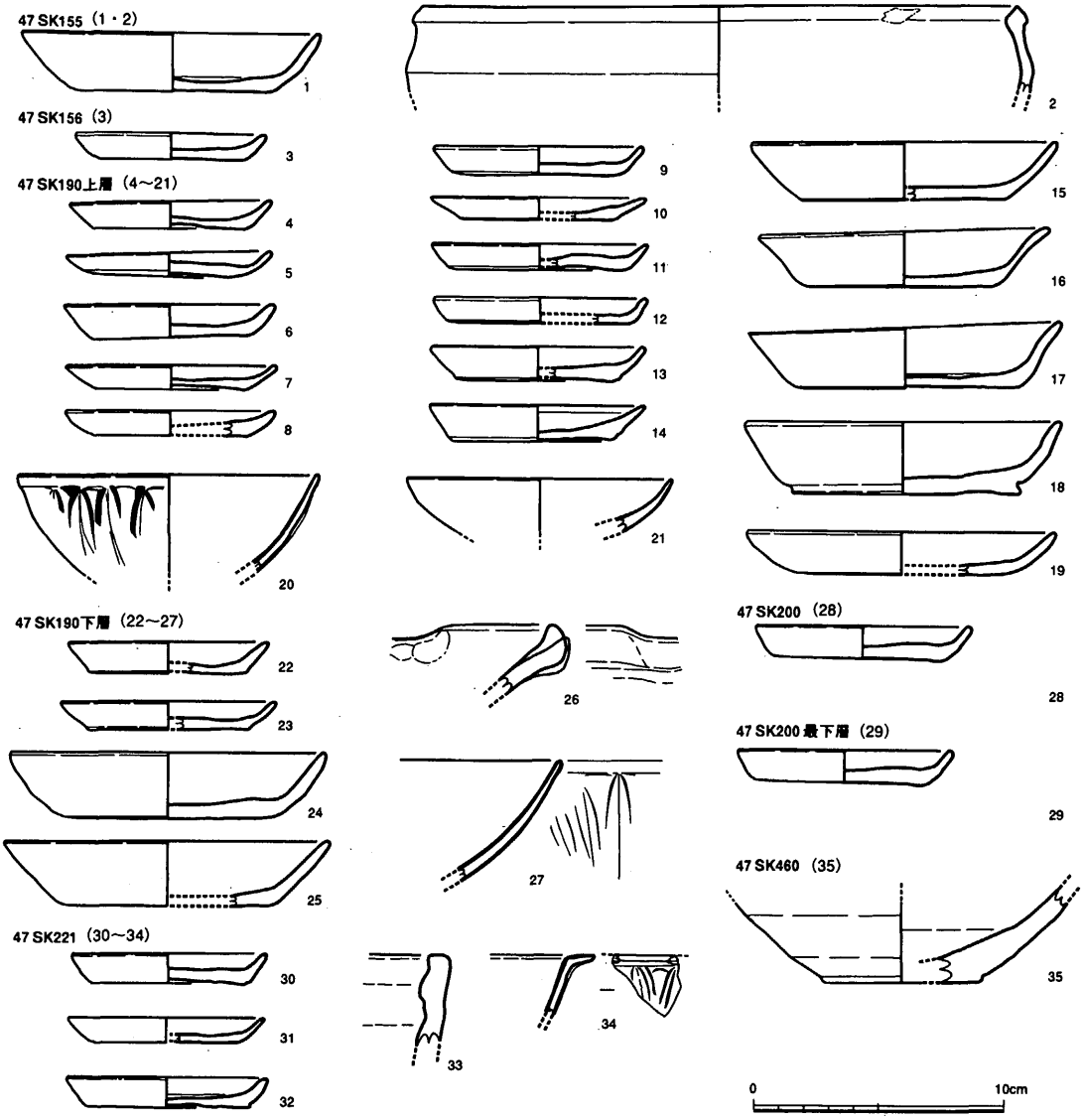


Fig.29　鋳造土坑出土土器実測図（1/3）

って貫入も認められる。III-2類。

47SK200出土土器（Fig.29）

白磁

皿（28）　口径11.4cmで口縁端部の釉をかき取り、その端部で外面に向く部分は研磨されたようにきわめて平滑になっている。釉は体部外面下半にはかからない。IX-2類。

47SK200最下層出土土器（Fig.29）

土師器

坏a（29）　口径13.0cm、器高2.8cm、底径9.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

47SK221出土土器（Fig.29）

土師器

小皿a（30～32）　口径7.7～8.0cm、器高1.0～1.2cm、底径5.6～6.5cm。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

坏（34）　口縁部を外方に大きく屈曲させるもので、体部外面には細い蓮弁文がみられる。釉は暗緑灰色に発色し、鈍い光沢を放つ。III-4類。

陶器

鉢（33）　胎土は暗茶灰色で、3mm以下の白色粒子を多く含んでいる。I-1-b類。

47SK460出土土器（Fig.29）

陶器

鉢（35）　底径6.0cm。内面は使用により摩耗し平滑化している。胎土はきめが粗く、4mm以下の白色小粒を多く含んでいる。国産。

溶解炉出土土器

47SX150出土土器（Fig.30）

瓦質土器

火舎（1）　底径38.8cmに復元できるもので、幅約6cm、高さ約2.5cmの脚が付く。表面にはミガキcが施される。

47SX180出土土器（Fig.30）

須恵質土器

鉢（2～4）　2は口径23.7cmで、体部内面は使用による摩耗が観察される。またいずれも口縁部外面のみ灰黒色の自然釉がみられる。

白磁

椀（5）　高台径5.6cmで、灰緑色の透明な釉がかかるが、高台の端部付近には施釉されない。VIまたはVII類。

陶器

壺（6）　底径7.8cm。釉は底部外面以外の全面にかけられ、やや黄色味を帯びた灰緑色のもので、発色は悪く剥落が目立つ。底部には白色の付着物があり、目跡とみられる。B群。

甕（7・8）　7は底径19.9cmの常滑焼とみられ、体部内面に工具痕跡を残す強いナデが施される。胎土は白色砂粒、赤褐色粒を多く含む粗いものである。8は底径22.4cmを測る備前焼とみられるもので、内外面ともに工具を用いたナデが施される。胎土は白色砂粒、黒色粒を多く含む粗いものである。

47SX250出土土器（Fig.30）

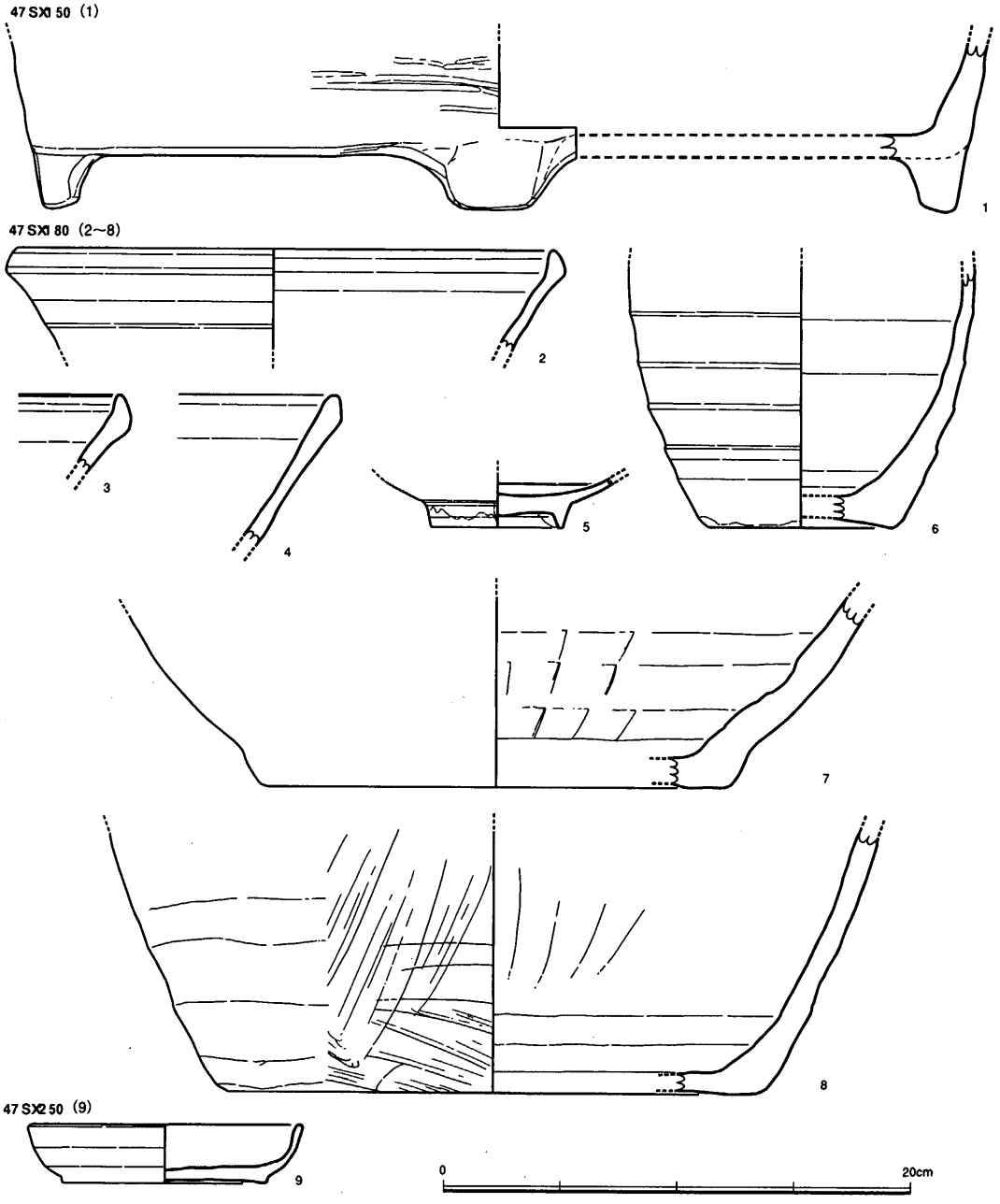


Fig.30　溶解炉等出土土器実測図（1/3）

土師器

坏a（9）　口径11.6cm、器高2.5cm、底径8.65cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

溝出土土器

47SD061出土土器（Fig.31）

龍泉窯系青磁

椀（1）　高台径5.2cmで、体部外面に蓮弁文を配する。高台内側に砂粒の塊が付着しており、焼台の一部とみられる。I-5-b類。

47SD077出土土器（Fig.31）

龍泉窯系青磁

椀（3）　釉は内外面とも厚めにかかり、暗緑色に発色する。光沢があるが、貫入も多くみられる。IV類。

陶器

皿（2）　口径11.6cm。やや緑味を帯びた透明な釉は内外面ともにうすくかかる。瀬戸の折縁小皿とみられる。

47SD175出土土器（Fig.31）

土師器

小皿a（4）　口径8.0cm、器高1.5cm、底径5.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（5・6）　口径12.9・13.2cm、器高2.2・2.6cm、底径8.7・9.2cm。底部は糸切りされ、5には板状圧痕が残る。

須恵質土器

鉢（7・8）　いずれも東播系とみられる。

陶器

水注（9）　底径8.0cm。外面下半部を除き、鈍い光沢を放つ暗茶褐色の釉がかかる。

47SD270出土土器（Fig.31）

土師器

小皿a（10～12）　口径7.8～8.2cm、器高0.9～1.05cm、底径5.8～6.6cm。底部は糸切りされ、12には板状圧痕が残る。

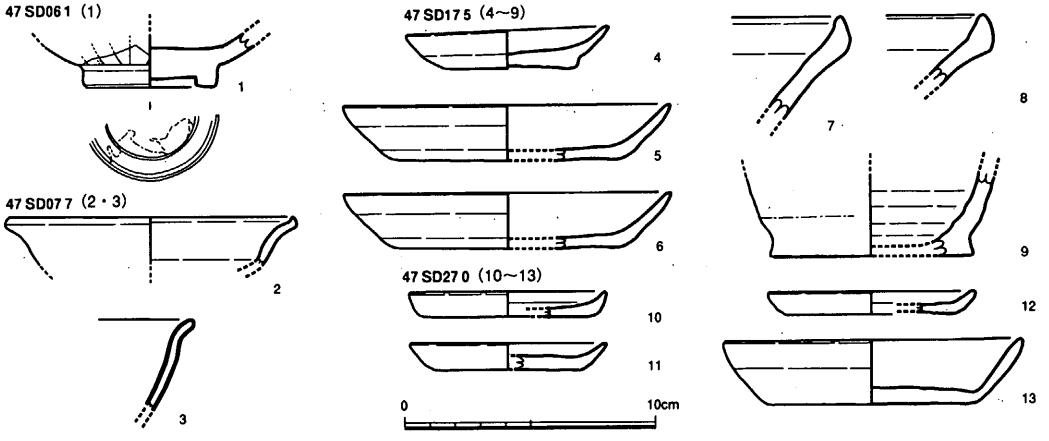


Fig.31　溝出土土器実測図（1/3）

坏a（13）　口径11.8cm、器高2.5cm、底径8.2cmで、底部は糸切りされる。

井戸出土土器

47SE145第I層出土土器（Fig.32）

土師器

小皿a（1～5）　口径7.6～8.6cm、器高1.3～1.5cm、底径5.2～6.0cmを測る。底部は糸切りされ、2・3・5の底部には板状圧痕がみられる。

坏a（6～12）　口径12.4～14.0cm、器高2.7～3.2cm、底径8.2～9.6cm。底部は糸切りされる。

坏（13）　底径5.5cmで、体部外面に条痕の残るヨコナデを施す。

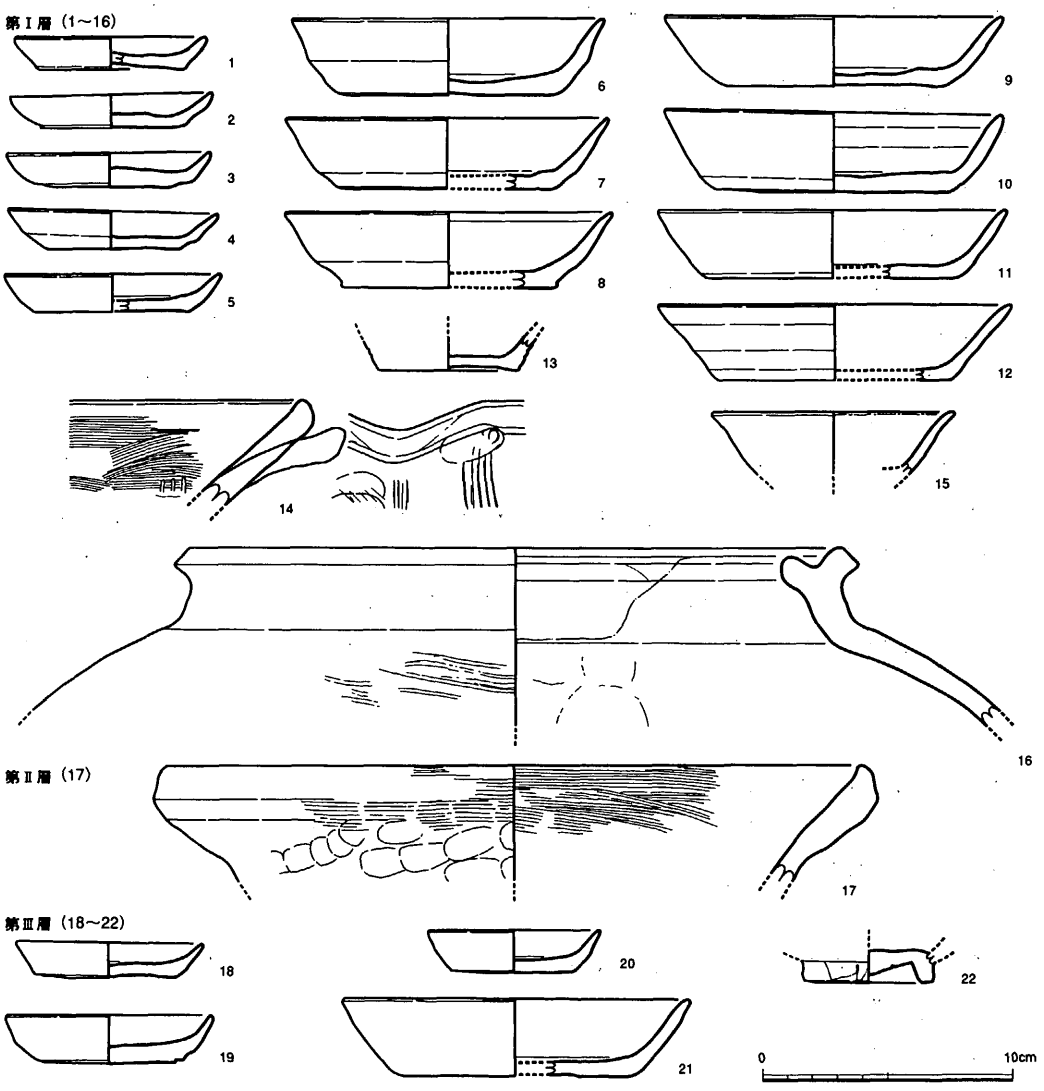


Fig.32　47SE145出土土器実測図（1/3）

瓦質土器

擂鉢（14）　片口鉢で、外面は粗めのクシ目、内面は横方向のハケ目ののちクシにより擂り目を入れる。

白磁

皿（15）　口径9.6cm。口縁端部の釉をかき取る。IX類。

陶器

甕（16）　口径27.0cm。体部外面は平行目の叩きを施し、内側には不明瞭ながら円形の当て具痕がみえる。釉は口縁部内側の一部分を除いて施され、外面では暗灰緑色、内面では淡黄灰茶色に発色するが、光沢はなく、部分的に剥落している。胎土は赤褐色、灰褐色を呈し、5mm程度の砂粒を含むやや粗めのものである。

47SE145第II層出土土器（Fig.32）

瓦質土器

鉢（17）　口径27.6cmで、口縁部外面から内面上位にかけて横方向のハケ目を施し、外面下半には指圧痕が明瞭が残る。

47SE145第III層出土土器（Fig.32）

土師器

小皿a（18・19）　口径7.4・8.2cm、器高1.4・1.9cm、底径5.5・5.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b（20）　口径6.8cm、器高1.7cm、底径4.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（21）　口径13.8cm、器高3.05cm、底径9.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

同安窯系青磁

椀（22）　高台径5.2cm。釉は暗緑灰色に発色し、透明度が高く光沢がある。I類。

47SE165出土土器（Fig.33）

土師器

小皿a（1～10）　口径7.2～8.1cm、器高0.75～1.4cm、底径5.0～6.9cm。底部は糸切りされ、2以外の資料には板状圧痕が残る。

坏a（11～17）　口径11.7～12.6cm、器高2.2～2.85cm、底径8.0～8.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕の残るものもある。

製塩土器

壺（18）　口縁部の資料で、内面には布目痕、外面には指圧痕が観察される。

須恵質土器

鉢（19～21）　内面は使用による摩滅で平滑化され、21では砂粒の剥落でクレーター状を呈している。また20は片口部分が残存している。

白磁

皿（22）　口径11.0cmで、口縁端部の釉はかき取られる。

龍泉窯系青磁

坏（23）　口径8.6cm、器高3.5cm、高台径4.2cmで、高台畳付部分は露胎である。釉は厚めにかけられ、灰緑色に発色するが透明度は低い。全面に貫入がみられる。

青磁

椀（24）　体部に蓮弁文を配するが、押圧により内面にも凹凸がある。釉は淡緑灰白色に発色するが、釉のたまる部分では白濁化している。釉には光沢があり、一部に貫入が観察される。

47SE170出土土器（Fig.33）

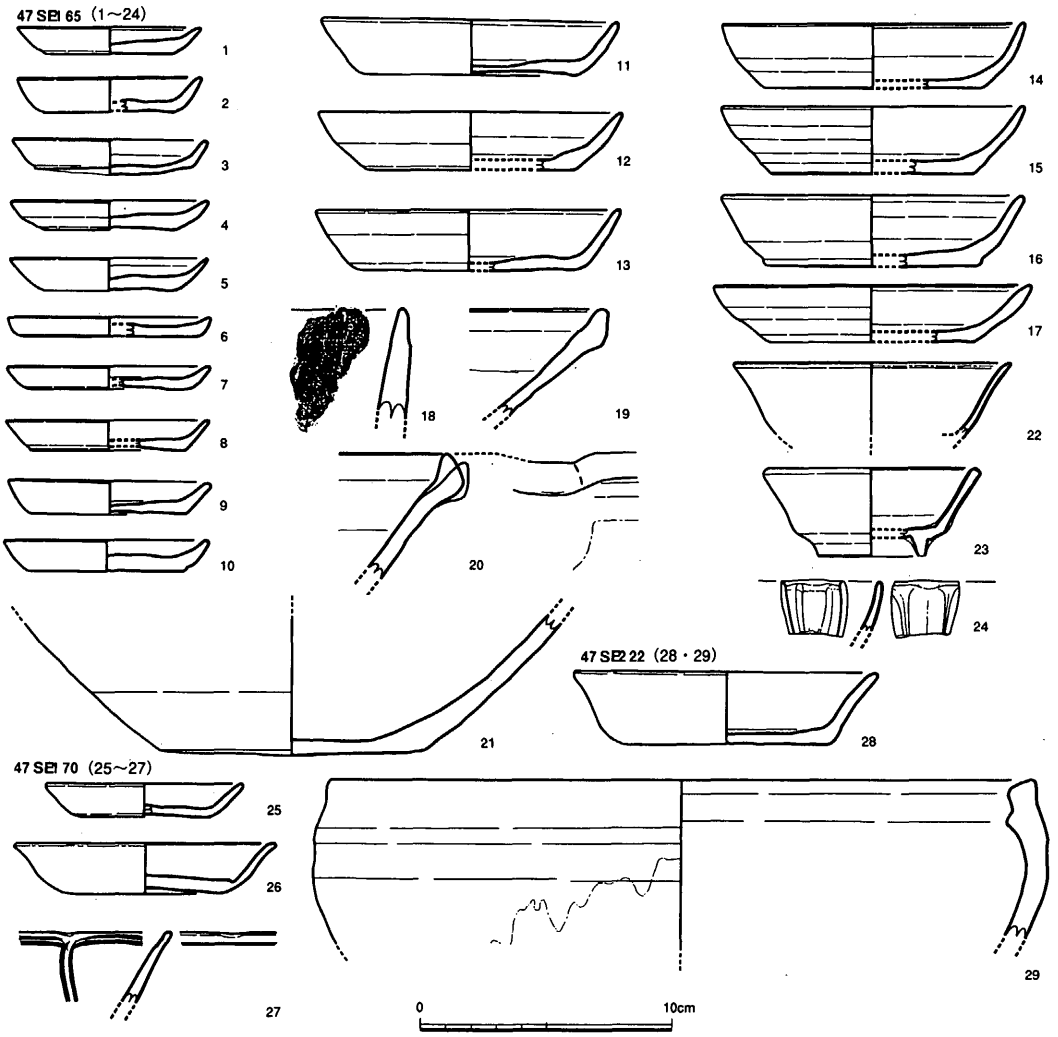


Fig.33　47SE165・170・222出土土器実測図（1/3）

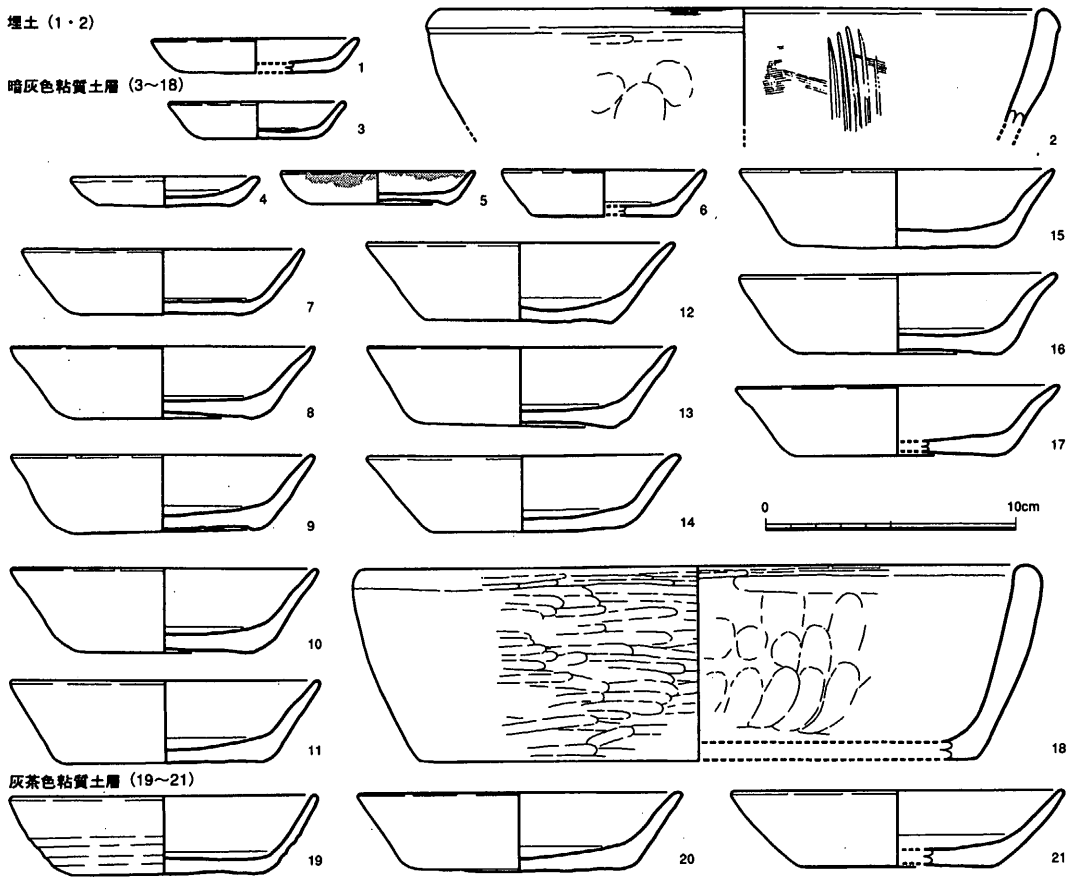


Fig.34　47SE227各層出土土器実測図（1/3）

土師器

小皿a（25）　口径7.8cm、器高1.3cm、底径5.1cm。底部は糸切りされる。

白磁

皿（26）　口径10.4cm、器高2.0cm、底径5.8cmで、口縁端部の釉はかき取られる。IX-1-a類。

龍泉窯系青磁

椀（27）　口縁端部に輪花が入れられる。I-4-b類。

47SE222出土土器（Fig.33）

土師器

坏a（28）　口径12.2cm、器高2.85cm、底径8.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

陶器

鉢（29）　口径28.0cm。口縁部から体部上半部にかけて施される釉は黄白色に発色するが、不透明で光沢はない。露胎となる体部外面では回転ヘラケズリが観察される。I-2-a類。

47SE227埋土出土土器（Fig.34）

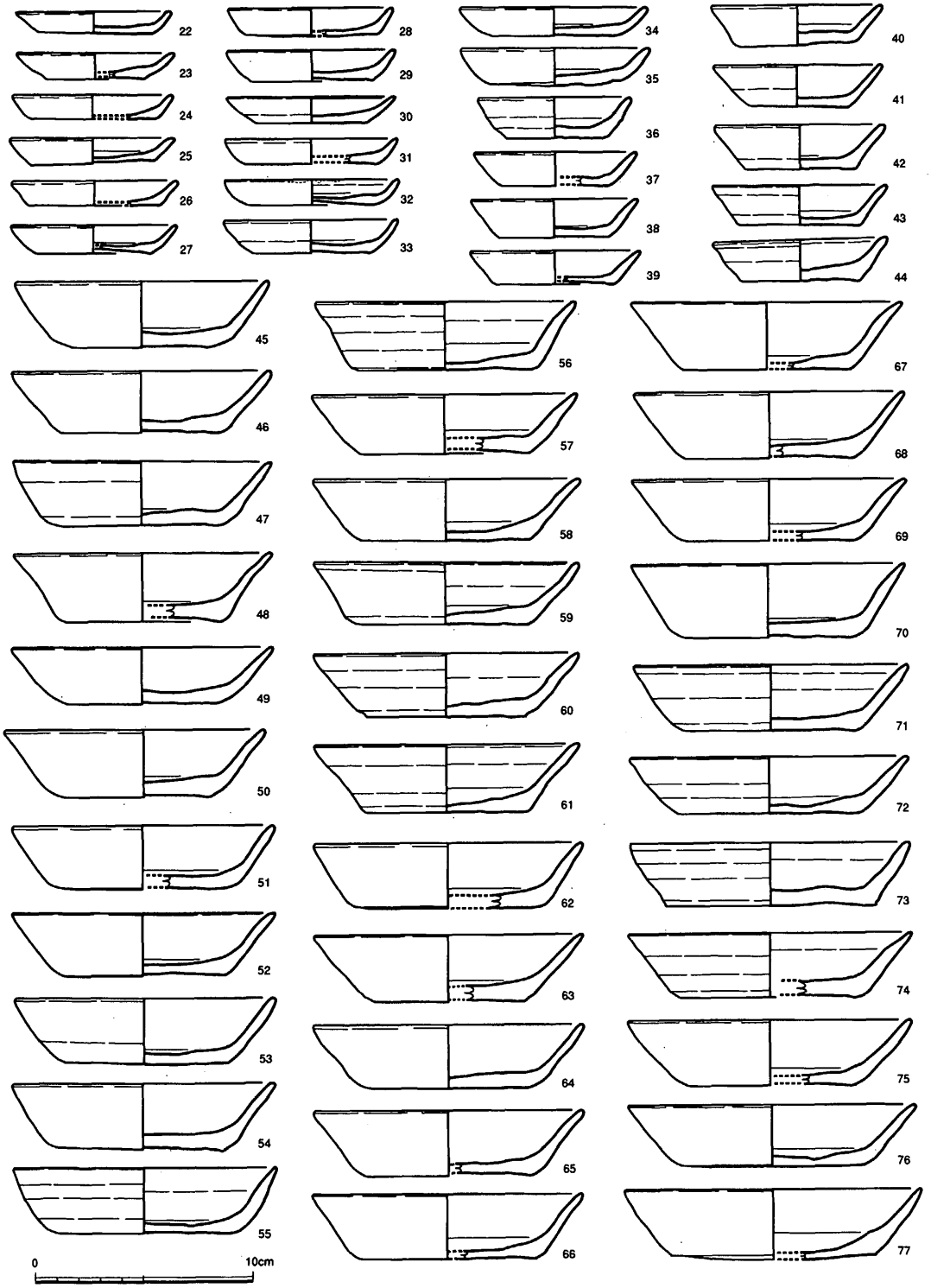


Fig.35　47SE227灰茶色粘質土下層出土土器実測図（1/3）

土師器

小皿a（1）　口径8.2cm、器高1.3cm、底径5.6cm。底部は糸切りされる。

瓦質土器

擂鉢（2）　口径25.0cm。外面は指圧痕が見える程度だが、内面は略横方向のハケ目ののちクシにより縦方向の擂り目を入れる。

47SE227暗灰色粘質土層出土土器（Fig.34）

土師器

小皿a（3～6）　口径7.0～8.0cm、器高1.2～1.8cm、底径4.3～5.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。5の口縁部に油煙が付着している。

坏a（7～17）　口径11.1～12.8cm、器高2.6～3.3cm、底径6.3～7.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

瓦質土器

鉢（18）　口径27.2cm、器高7.7cm、底径22.0cmを測る。内面上位は横方向のナデ、下位は上から下に強くナデ下ろした調整、外面は横方向に緻密に施されるミガキcである。

47SE227灰茶色粘質土層出土土器（Fig.34）

土師器

坏a（19～21）　口径12.2～13.1cm、器高3.1～3.2cm、底径7.5～7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

47SE227灰茶色粘質土下層出土土器（Fig.35）

土師器

小皿a（22～35）　口径7.1～8.6cm、器高1.0～1.7cm、底径4.5～6.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。32の口縁部に油煙が付着している。

小皿b（36～44）　口径7.0～8.0cm、器高1.6～2.0cm、底径4.5～5.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（45～77）　口径11.6～13.6cm、器高2.5～3.4cm、底径6.5～9.6cm。底部は糸切りされ、ほとんどの資料に板状圧痕が残る。

47SE227粘土層（底）出土土器（Fig.36）

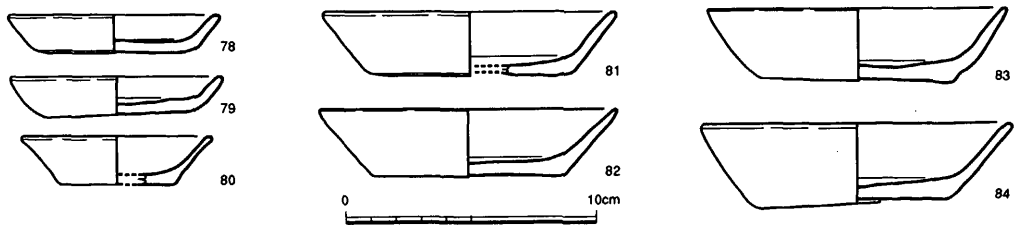


Fig.36　47SE227粘土層（底）出土土器実測図（1/3）

土師器

小皿a（78・79）　口径8.4cm、器高1.5cm、底径6.1・5.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b（80）　口径7.5cm、器高1.9cm、底径4.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（81～84）　口径11.6～12.2cm、器高2.6～3.1cm、底径7.2～7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

47SE228出土土器（Fig.37）

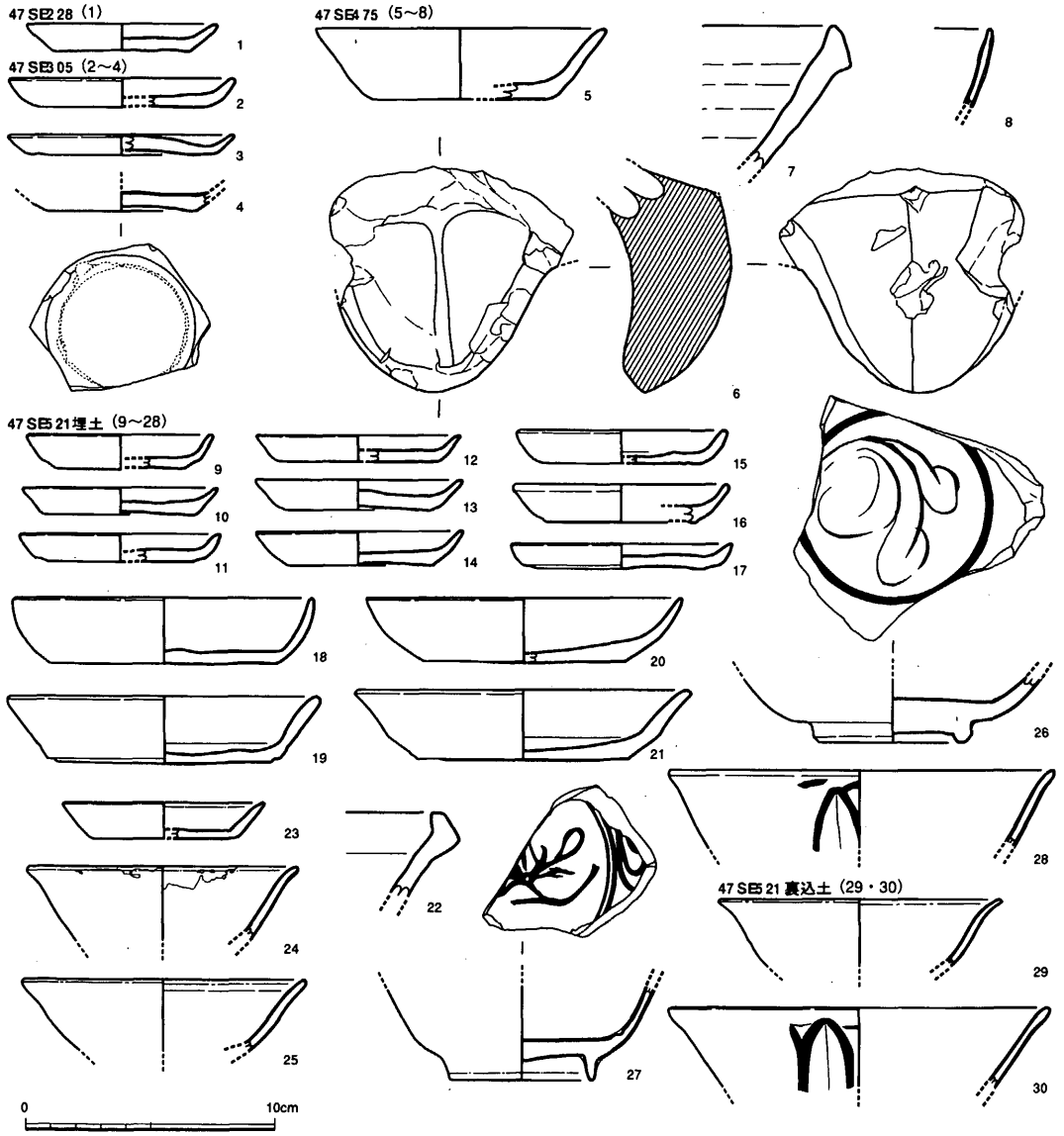


Fig.37　47SE228・305・475・521出土土器実測図（1/3）

土師器

小皿a（1）　口径7.6cm、器高1.15cm、底径5.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

47SE305出土土器（Fig.37）

土師器

小皿a（2・3）　口径9.0cm、器高1.2・0.8cm、底径6.8・5.9cm。底部は糸切りされ、3は板状圧痕が残る。

白磁

皿（4）　IX-2類で、底径5.9cm。底部外面に径5.0cmの焼台もしくは他の陶磁器の付着した痕跡があり、一部は釉が剥落する部分もある。

47SE475出土土器（Fig.37）

土師器

坏a（5）　口径11.6cm、器高2.8cm、底径7.0cm。底部は糸切りされる。

脚（6）　火舎の脚部とみられ、外面には縦方向の稜線があり、内面もやや甘めだが稜線が認められる。

須恵質土器

鉢（7）　東播系とみられ、内外面ともにヨコナデ調整される。

龍泉窯系青磁

椀（8）　緑灰色に発色する透明度の高い釉で、厚めにかけられ、光沢があり、貫入もみられる。III-1類。

47SE521埋土出土土器（Fig.37）

土師器

小皿a（9～17）　口径7.4～8.8cm、器高1.1～1.6cm、底径5.0～7.8cm。底部は糸切りされ、ほとんどの資料に板状圧痕が残る。

坏a（18～21）　口径12.0～13.4cm、器高2.6～2.8cm、底径8.0～9.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

須恵質土器

鉢（22）　口縁部外面のみ暗黒灰色に変色する。

白磁

皿（23～25）　23は口径8.0cm、器高1.5cm、底径5.7cm。口縁部の釉をかき取るもので、IX-1-a類。24・25は口径10.8・11.3cmで、両者とも口縁部の釉をかき取るが、24の当該部分には黒茶色の付着物（おそらく漆とみられる）が観察される。IX類。

龍泉窯系青磁

椀（26～28）　26は高台径5.8cmで、見込みにヘラによる文様がある。I-4類。27は高台径

5.7cmで、畳付の釉はかき取られ、露胎となる。見込み及び体部内面にヘラによる文様がある。釉は厚めにかけられ、薄い緑白色に発色し、光沢はあるが透明度はやや低い。III-1-c類。28は外面に蓮弁文を配するもので、I-5-b類。

47SE521裏込土出土土器（Fig.37）

白磁

皿（29）　口径11.3cmで、口縁端部の釉をかき取る。IX類。

龍泉窯系青磁

椀（30）　外面に蓮弁文を配するもので、I-5-b類。

47SE530出土土器（Fig.38）

土師器

小皿a（1～5）　口径7.4～8.2cm、器高1.0～1.3cm、底径5.55～6.4cm。底部は糸切りされ、1以外の資料には板状圧痕がみられる。

坏a（6～9）　6は口径11.4cm、器高3.2cm、底径7.3cmとやや小型のもので、底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。7～9は口径15.6～16.4cm、器高3.35～3.65cm、底径10.3～11.0cmを測る。底部は糸切りされ、8・9には板状圧痕がみられ、8の体部外面には油煙状のものが付着している。

47SE570出土土器（Fig.38）

土師器

小皿a（10）　口径7.6cm、器高0.8cm、底径6.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

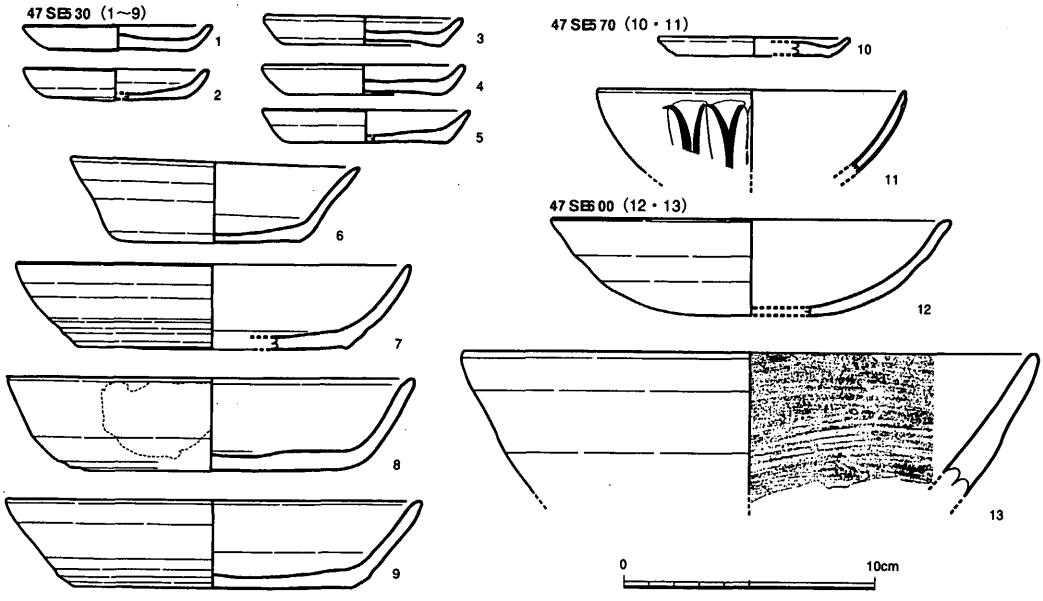


Fig.38　47SE530・570・600出土土器実測図（1/3）

龍泉窯系青磁

椀（11）　口径12.2cmで、体部外面に蓮弁文を配する。文様はヘラ先で弁の輪郭を彫り込み、弁央にはわずかに鎬を入れる。体部全面に緑茶色に発色する釉が厚くかかり、透明度は高く光沢がある。III-2類。

47SE600出土土器（Fig.38）

土師器

丸底坏a（12）　口径15.8cm、器高3.8cm。底部は押し出しにより成形され、体部内面は摩耗するが平滑であり、ミガキbによる調整と思われる。外面底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

須恵質土器

鉢（13）　口径22.8cm。口縁部から体部上位の外面はヨコナデ、下半は平行叩きののち強いヨコナデ、内面は条痕を強く残す横方向のナデである。焼成は還元良好で、硬質である。

土坑出土土器

47SK001出土土器（Fig.39）

土師器

坏a（1）　口径12.8cm、器高2.5cm、底径9.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（2）　口径26.1cm、器高10.2cm、底径8.2cm。片口部は指圧により外方向へ押し出すことによる成形される。底部は糸切りで、体部は全体がヨコナデ調整で仕上げられるが、内面下半は使用による摩耗が著しく平滑になっている。

龍泉窯系青磁

椀（3）　外面に蓮弁文がある。I-5-b類。

47SK010出土土器（Fig.39）

土師器

小皿a（4～13）　口径7.4～8.6cm、器高0.8～1.4cm、底径4.8～6.7cm。底部は糸切りされ、5・8以外に板状圧痕が残る。

坏a（14～24）　口径11.8～15.4cm、器高2.0～2.7cm、底径6.9～9.9cm。底部は糸切りされ、小片資料以外には板状圧痕が観察できる。

大坏a（25）　口径18.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

大坏c（26）　口径17.6cm、器高4.2cm、高台径13.2cm。底部の切り離し法はヨコナデによって消され不明だが、板状圧痕は観察できる。

須恵質土器

鉢（27）　体部外面から口縁部付近はヨコナデ、内面体部はナデ調整される。

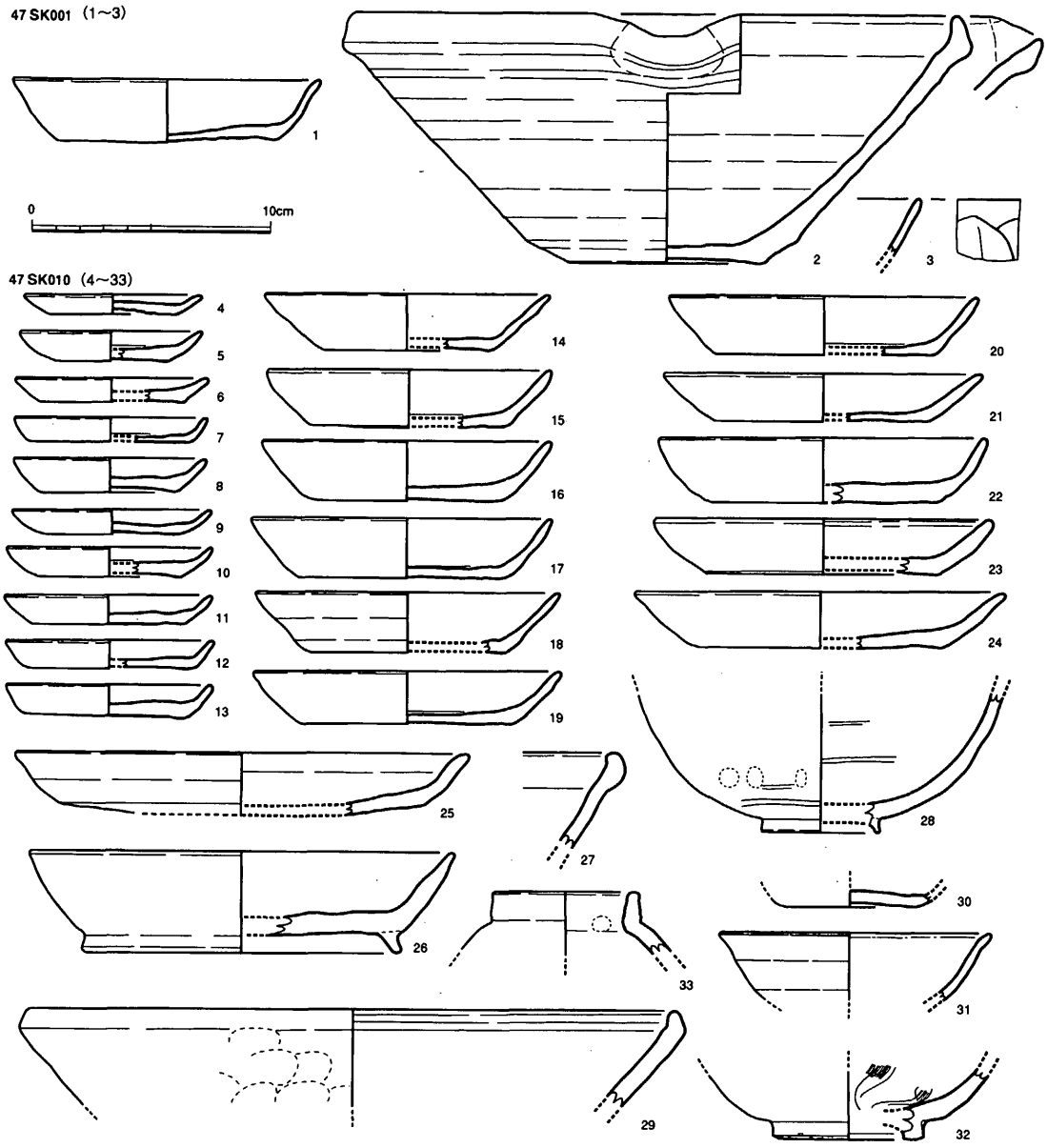


Fig.39　47SK001・010出土土器実測図（1/3）

瓦器

椀c（28）　高台径4.8cm。底部は押し出しによる成形で、外面には指圧痕がみられる。内外面ともに最終調整はミガキcである。

瓦質土器

鉢（29）　口径27.6cm。外面は指圧ののちナデ、内面は使用によるものか、きわめて平滑で

ある。軟質に焼成され、灰黒色を呈する。

白磁

皿（30・31）　30は底径5.4cmで、底部まで施釉される。IX-1類。31は口径10.8cm。口縁端部の釉はかき取られる。IX類。

龍泉窯系青磁

椀（32）　高台径6.2cm。内面にヘラとクシによる文様がある。I-3類。

陶器

壺（33）　口径6.0cm。暗褐色に発色する釉は残存部の全面にみられ、不透明で光沢はない。

47SK040出土土器（Fig.40）

土師器

小皿a（1）　口径7.5cm、器高1.05cm、底径5.7cm。摩滅により調整は不明である。

坏a（2・3）　口径12.4・14.0cm、器高2.7・2.55cm、器高8.8・9.8cm。3の底部は糸切りされ、板状圧痕がみられるが、2は摩滅により明らかでない。

須恵質土器

鉢（10～13）　10は底径8.9cmで、内面は胎土中に含まれる大粒の砂粒が使用により剥落し、クレーター状を呈している。11～13は口径30.9～31.2cm。口縁部付近を除く内面はナデである。なお3者は接合しないものの胎土、焼成、色調等がかなり似通っており、同一個体の可能性も残される。

白磁

皿（4～8）　4～6は口径10.4～12.4cmで、口縁端部の釉をかき取っている。4・6はIX類、5は底部外面まで釉が及んでおり、IX-1-d類とみられる。7は底部にまで釉がまわっておりIX-1類。8は外面の体部下位から底部には釉がかからないことからIX-2類とみられる。

龍泉窯系青磁

小椀（9）　外面にはヘラによる蓮弁文を配する。釉は青色味を帯びた緑色に発色するもので、やや厚めにかけられる。III-3類。

陶器

鉢（14・15）　14は口径24.0cm。不透明で白濁化した灰緑色に発色する釉は口縁部付近にのみみられ、他は露胎のままである。胎土は暗赤紫色で、白色砂粒を多めに含むやや粗めのものである。I-2類。15は底部径12.0cmで、底部外面は未調整、体部外面は押圧気味のナデが施され、内面は使用によりかなり平滑になっている。I類。

47SK050出土土器（Fig.40）

土師器

小皿a（16）　口径8.7cm、器高1.35cm、底径6.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられ

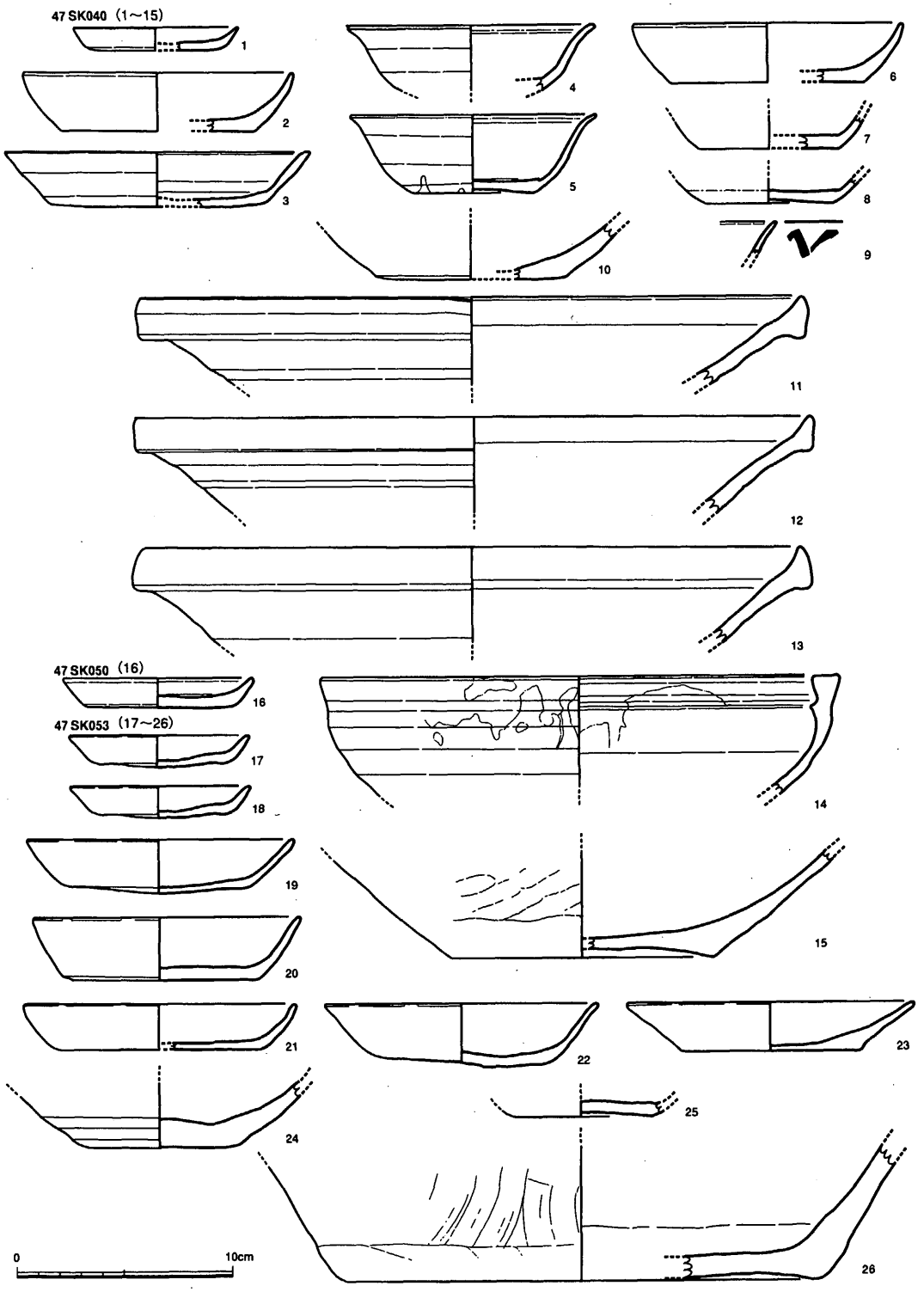


Fig.40　47SK040・050・053出土土器実測図（1/3）

る。

47SK053出土土器（Fig.40）

土師器

小皿a（17・18）　口径8.2・9.0cm、器高1.5・1.2cm、底径5.5・6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（19～23）　口径12.2～13.2cm、器高2.1～2.9cm、底径7.3～9.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

瓦質土器

鉢（24）　底径6.2cm。底部は糸切りされ、内面は使用による摩耗が著しい。

白磁

皿（25）　底径6.2cmで全面施釉される。IX-1類。

陶器

甕（26）　底径21.6cmで、底部は円周に沿うようなナデ、体部外面は縦方向の工具を用いたような強いナデが観察される。備前焼の可能性がある。

47SK055出土土器（Fig.43）

瓦質土器

鉢（1）　暗灰色を呈し、外面に斜め方向のクシ目がある。

白磁

鉢（2）　焼成はあまく軟質。白濁化し鈍い光沢がある釉は厚めにかけられ、表面には小さな凹凸が目立つ。

陶器

椀（3）　高台径4.0cm。灰色で不透明な釉は全面にみられ、畳付から内側と見込み部分に目跡が残る。李朝か。

皿（4）　高台径4.4cm。見込みにかかる釉は灰緑色で透明度は高く、表面には貫入やピンホール状のものがみられる。外面は露胎で淡赤褐色を呈している。唐津焼か。

47SK058出土土器（Fig.43）

土師器

小皿a（5・6）　口径6.9・7.6cm、器高0.95・1.15cm、底径6.0・5.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

小皿c（7）　きわめて低い高台の径は4.4cm。摩滅がひどく調整不明。

坏a（8）　口径12.6cm、器高3.1cm、底径8.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

椀（9）　高台径7.6cm。IV類。

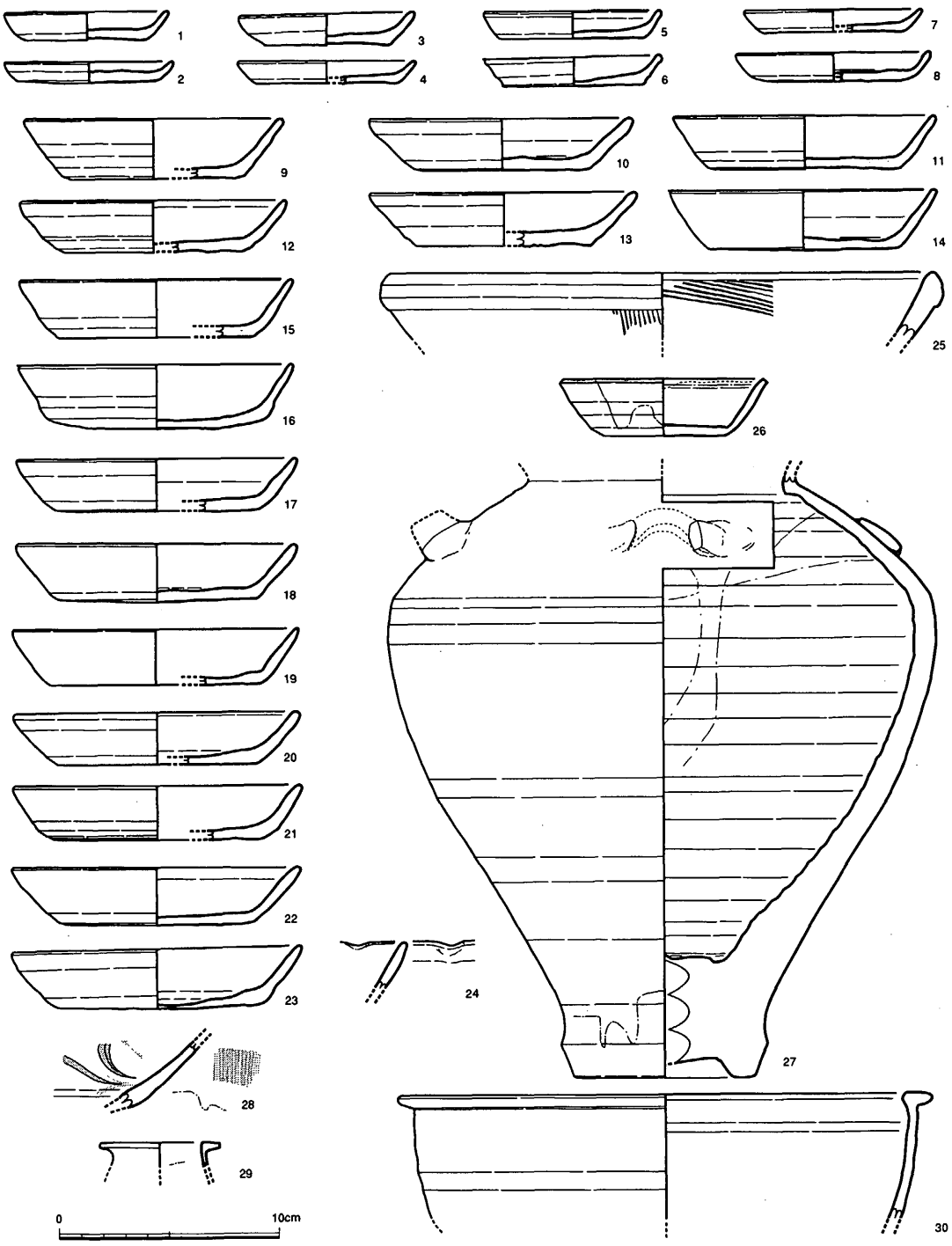


Fig.41　47SK110上層出土土器実測図（1/3）

47SK110上層出土土器（Fig.41）

土師器

小皿a（1～8）　口径7.4～8.8cm、器高0.95～1.4cm、底径5.4～7.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（9～23）　口径11.7～13.0cm、器高2.3～2.85cm、底径7.6～10.0cm。底部は糸切りされ、一部の資料を除いて板状圧痕がみられる。

坏（24）　小片のため詳細は明らかでないが、口縁端部を内側から指圧して片口状に作るも

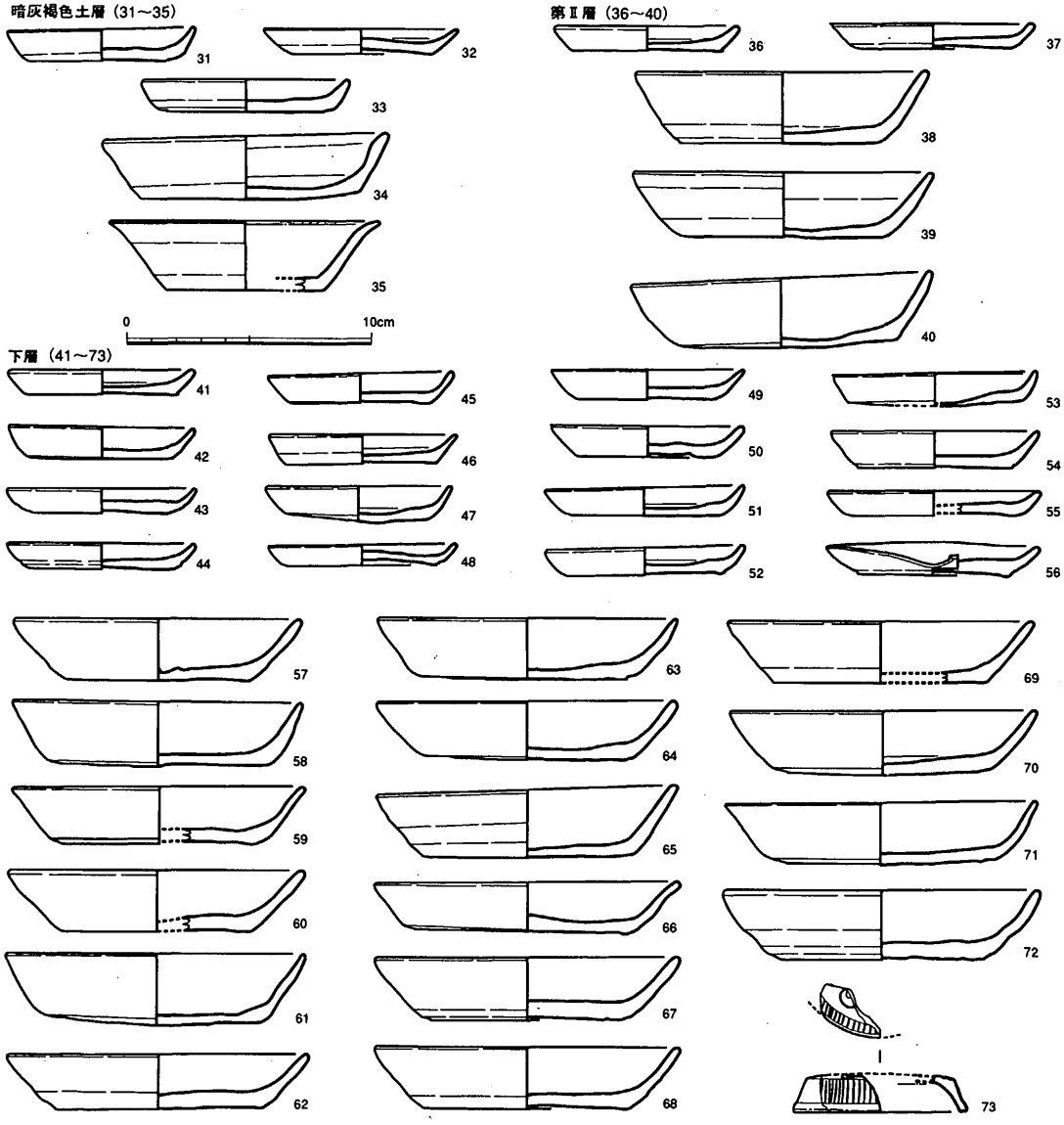


Fig.42　47SK110各層出土土器実測図（1/3）

のである。

瓦質土器

鉢（25）　口径25.3cm。口縁部はヨコナデされるが、体部外面は縦方向のハケ目、内面は略横方向で粗めのハケ目を施す。焼成は不良で軟質、表面は灰白色を呈している。

白磁

皿（26）　口径9.4cm、器高2.55cm、底径5.4cm。口縁端部の釉をかき取るが、漆とみられる暗茶褐色の皮膜が同部位に観察される。釉は底部外面にも及んでおり、IX-1-a類。

四耳壺（27）　口縁部及び頸部を失うが、残存高27.1cmを測る。内面は強い条痕の残るヨコナデ、外面は回転ヘラケズリされる。内面の肩部以下と高台部分は露胎で、他は淡黄緑色、淡灰黄色に発色する透明な釉がかかる。畳付は使用によると思われる摩耗が著しい。

同安窯系青磁

椀（28）　外面は縦方向のクシ目、内面はヘラとクシによる文様がある。I-1-b類。

青白磁

瓶（29）　口径5.4cm。口縁部内側のごくわずかな範囲と頸部は露胎、他は空色味を帯びた光沢のある透明な釉がかかる。

陶器

盤（30）　口径24.0cm。口縁部から内面にかけて黄茶色に発色する透明度の低い釉がかかるが、外面にはなく露胎で淡赤褐色を呈している。

47SK110暗灰褐色土層出土土器（Fig.42）

土師器

小皿a（31～33）　口径7.5～8.4cm、器高1.3cm、底径5.7～7.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（34）　口径11.6cm、器高2.55cm、底径8.9cm。底部は糸切りされる。

白磁

皿（35）　口径11.0cm、器高2.8cm、底径6.4cm。口縁端部の釉はかき取られ、そこに漆とみられる黒色および茶褐色の付着物が観察される。外面底部の釉はハケで粗く塗られたような痕跡がある。IX-1-d類。

47SK110第II層出土土器（Fig.42）

土師器

小皿a（36・37）　口径7.8・8.2cm、器高0.95・1.0cm、底径6.8・6.25cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（38～40）　口径11.9～12.25cm、器高2.65～2.9cm、底径8.0～8.7cm。底部は糸切りされ、39以外には板状圧痕がみられる。

47SK110下層出土土器（Fig.42）

土師器

小皿a（41～56）　口径7.5～8.7cm、器高0.8～1.4cm、底径5.4～6.3cm。底部は糸切りされ、55を除いて板状圧痕がみられる。また56は口縁部が片口状に内側から押し出され大きくゆがんでいるが、意識した行為かどうか判断に苦しむ。

坏a（57～72）　口径11.6～12.8cm、器高2.2～2.9cm、底径7.4～9.0cm。底部は糸切りされ、ほとんどの資料で板状圧痕が確認される。

白磁

合子蓋（73）　口径5.9cm。天井部には草花文、体部外面には縦方向の突線が並ぶ。いずれも型による施文である。淡黄緑色味を帯びた透明な釉は口縁端部にはかからない。大きな貫入がある。

47SK121出土土器（Fig.43）

土師器

小皿a（10）　口径7.6cm、器高1.2cm、底径5.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

瓦質土器

擂鉢（11）　内外面ともに指圧痕がよく残り、内面に縦方向のクシ目がみえる。

鉢（12）　片口部分の下位には指圧痕がみえるが、他は細かなハケ目である。

火舎（13・14）　13は外面に8葉の菊花文のスタンプを押捺し、14は推定16葉の菊花文スタンプを押捺する。いずれも口縁端部を平坦に仕上げる点で共通するが、13は焼成があまく土師質を呈している。

龍泉窯系青磁

盤（15）　やや厚めにかかる釉は灰緑色に発色し、細かな気泡を多く含む。光沢があり、貫入もみられる。III類。

染付

椀（16）　高台付近の外面に3条の横線、見込みには圏線と草花文を配する。明か。

縄文土器

深鉢（17）　外面には2条の沈線があり、胎土中に滑石の砕片を多量に含んでいる。中期中葉で豊前方面の産とみられる。

47SK201出土土器（Fig.43）

土師器

小皿a（18～21）　口径7.8～8.7cm、器高0.9～1.3cm、底径5.65～7.2cm。底部は糸切りされ、21以外には板状圧痕がみられる。

須恵質土器

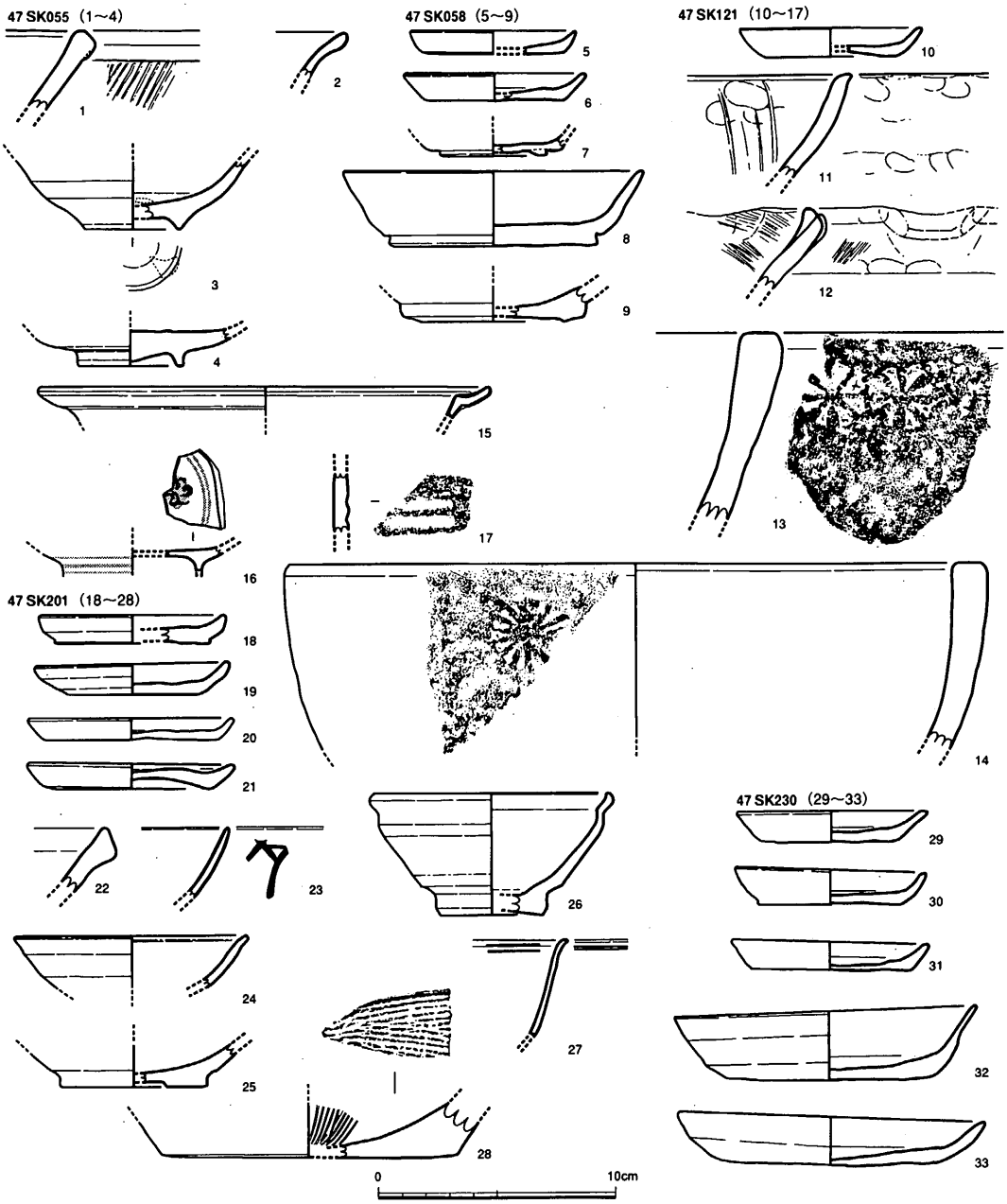


Fig.43　47SK055・058・121・201・230出土土器実測図（1/3）

鉢（22）　口縁端部のみ黒色、他は明灰白色で還元良好。

白磁

椀（25）　径6.2cmの蛇の目高台で、畳付けから内側は露胎で、使用によりかなり摩耗する。**I類**。

皿（24）　口径9.8cm。口縁端部の釉をかき取る。IX類。

龍泉窯系青磁

椀（23）　体部外面にヘラによる蓮弁文を配し、釉は黄色味を帯びた緑色の光沢がある透明なもので、厚めにかかる。III-2類。

染付

椀（27）　口縁部の内外面に細い2条の線を入れる。肥前系か。

陶器

椀（26）　いわゆる天目茶碗で、口径10.2cm、器高5.1cm、底径4.3cm。底部は円盤状に削り出され、体部外面下半以下は露胎である。他の部位にかかる釉は茶黒色に発色する光沢あるもので、口縁部は薄くかかるためか透明度があり素地が透ける。

擂鉢（28）　底径12.4cm。底部は糸切りされ、内面は縦方向に密で深いクシ目を入れ、擂り目としている。内外面とも明茶色を呈する。国産品。

47SK230出土土器（Fig.43）

土師器

小皿a（29～31）　口径8.0～8.2cm、器高1.2～1.45cm、底径5.75～6.65cm。底部は糸切りされ、29には板状圧痕が残る。

坏a（32・33）　口径12.6・12.8cm、器高2.05・2.9cm、底径8.6・8.8cm。底部は糸切りされ、33には板状圧痕が残る。

47SK240埋土出土土器（Fig.44）

土師器

小皿a（1～8）　口径7.2～8.8cm、器高1.0～1.4cm、底径5.4～6.6cm。底部は糸切りされ、4以外には板状圧痕が残る。

坏a（9～16）　口径10.8～13.0cm、器高2.2～3.2cm、底径6.5～9.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

羽釜（17）　小片のため情報は少ないが、推定口径はおよそ28cm、口縁部から外面はヨコナデ、内面中程以下はナデである。

須恵質土器

鉢（18）　体部内面はナデである。

白磁

皿（19）　底径5.4cm。体部下半から底部には施釉されない。IX-2類。

47SK240底出土土器（Fig.44）

土師器

小皿a（20）　口径8.0cm、器高1.1cm、底径5.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

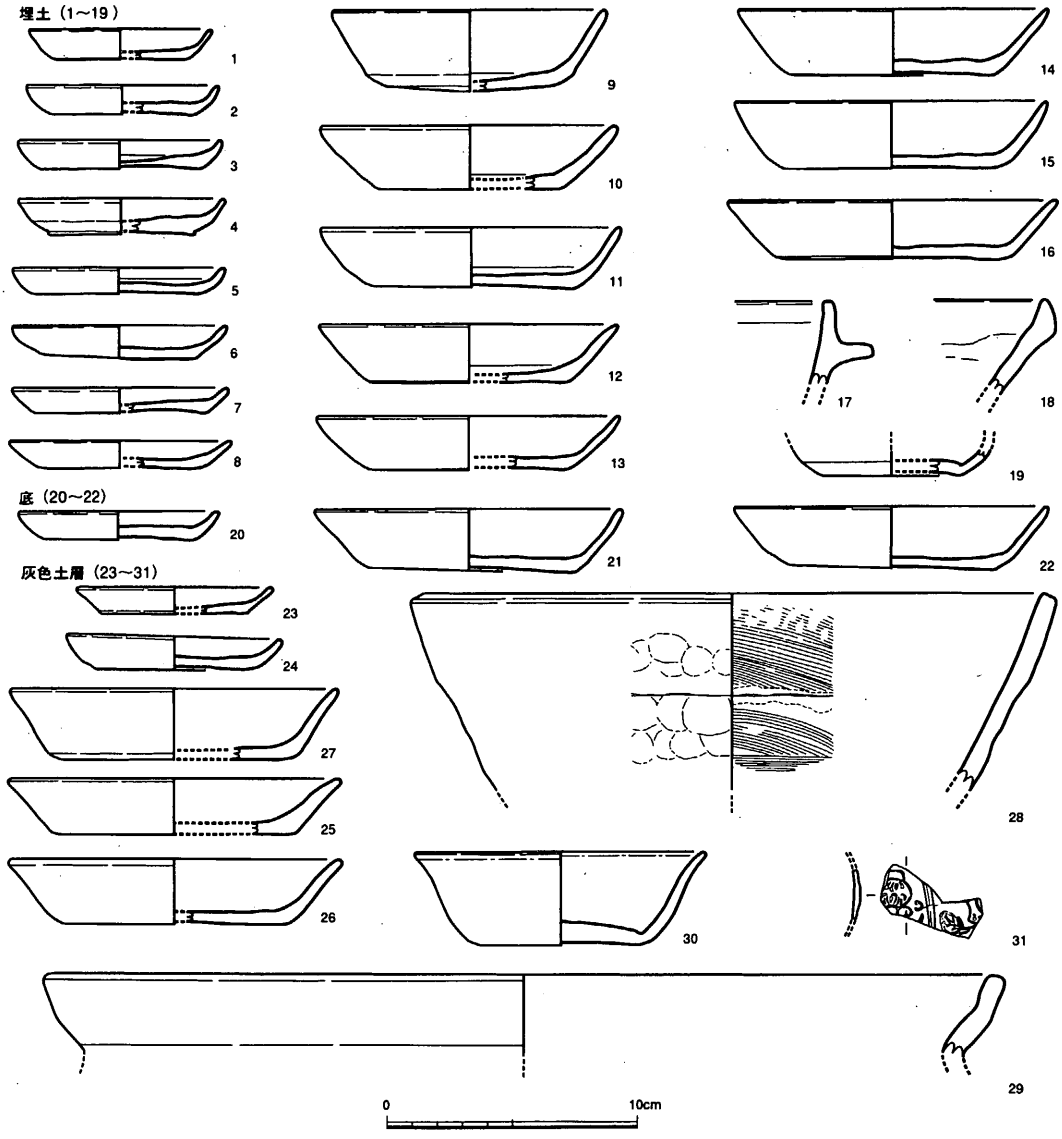


Fig.44　47SK240出土土器実測図（1/3）

坏a（21・22）　口径12.2・12.4cm、器高2.5cm、底径8.0・7.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SK240灰色土層出土土器（Fig.44）

土師器

小皿a（23・24）　口径7.8・8.6cm、器高1.1・1.3cm、底径5.8・6.1cm。底部は糸切りされ、24には板状圧痕がみられる。

坏a（25～27）　口径13.0～13.2cm、器高2.2～2.8cm、底径8.8～9.0cm。底部は糸切りされ、

25には板状圧痕がみられる。

鉢（28）　口径25.5cm。口縁部付近はヨコナデ、外面は指圧痕が明瞭に見え、内面は略横方向のハケ目である。

鍋（29）　口径38.0cm（小片のため数値やや難あり）。外面全体に煤が付着している。

白磁

皿（30）　口径11.6cm、器高3.7cm、底径6.4cm。口縁端部の釉をかき取るほかは全体に施釉される。IX-1-c類。

小壺（31）　胴部外面に陽刻（スタンプ）による花文がみられる。破片中程に縦方向の突線があり、6～8つほどの区画を設けた中に花文を置く文様構成であったと推定できる。内面も施釉されている。

47SK245出土土器（Fig.45）

土師器

小皿a（1～7）　口径7.8～9.2cm、器高1.1～1.6cm、底径5.7～7.5cm。底部は糸切りされ、2・4以外に板状圧痕がみられる。

坏a（8～12）　口径12.4～12.8cm、器高2.2～2.8cm、底径7.4～9.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。12の体部には両側から穿たれたと思われる径3mmほどの穴がある。

大坏a（13）　口径18.8cm、器高4.7cm、底径12.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（14・15）　14は口径24.4cm。15は口径27.1cm、器高9.6cm、底径9.6cm。体部外面はヨコナデ、内面はナデだが、内面下半は使用による摩滅で平滑化するとともに砂粒の剥落でクレーター状を呈している。焼成は甘く軟質。

瓦質土器

鉢（16）　口径30.8cm。体部はヨコナデされる。

白磁

皿（17）　底径7.2cmで、底部外面にも施釉される。IX-1類。

47SK253出土土器（Fig.45）

須恵質土器

鉢（18）　かなり風化しているが、内面は強いナデで仕上げる。

47SK280出土土器（Fig.45）

土師器

小皿a（19～23）　口径8.1～9.0cm、器高1.0～1.3cm、底径5.7～7.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

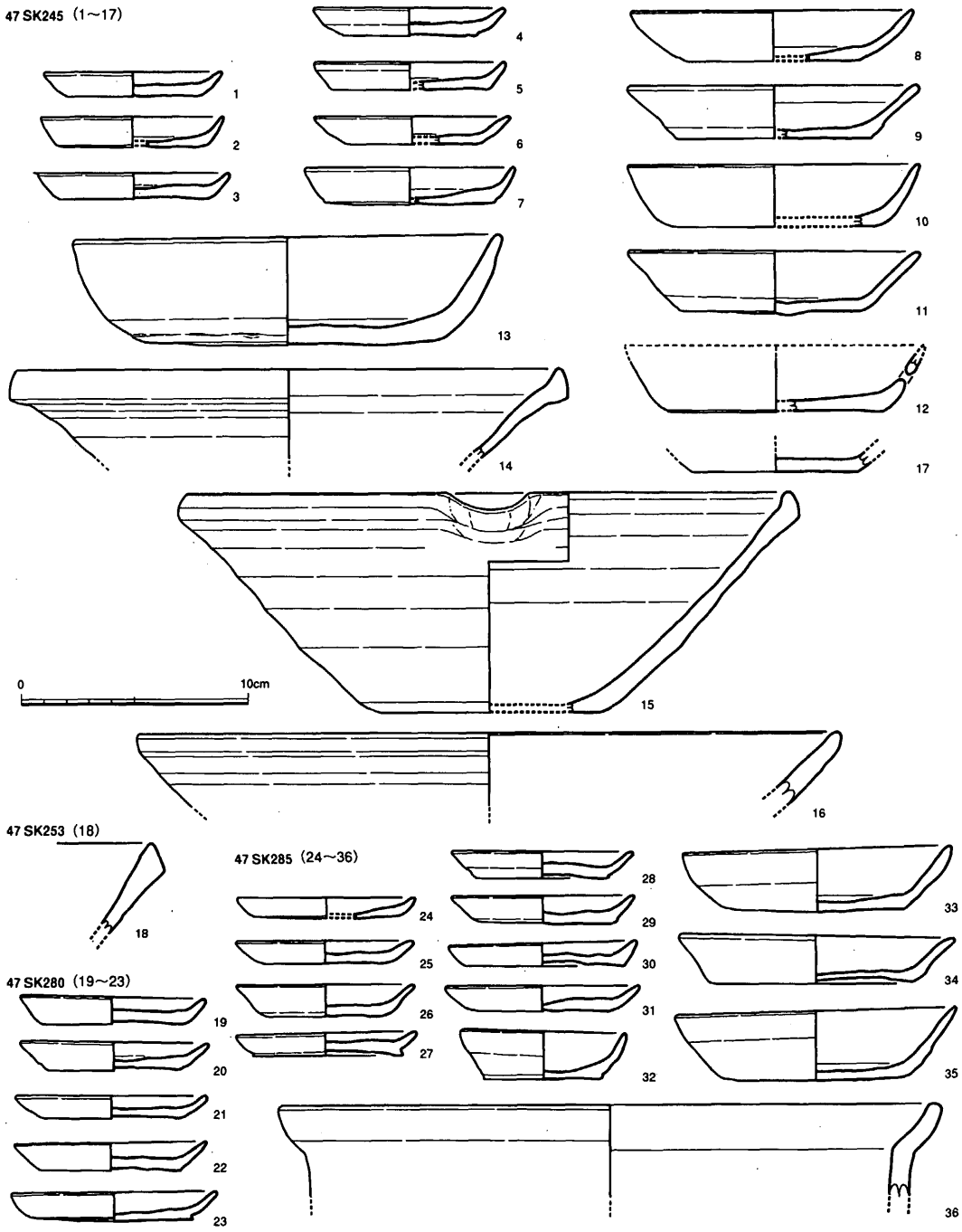


Fig.45　47SK245・253・280・285出土土器実測図（1/3）

47SK285出土土器（Fig.45）

土師器

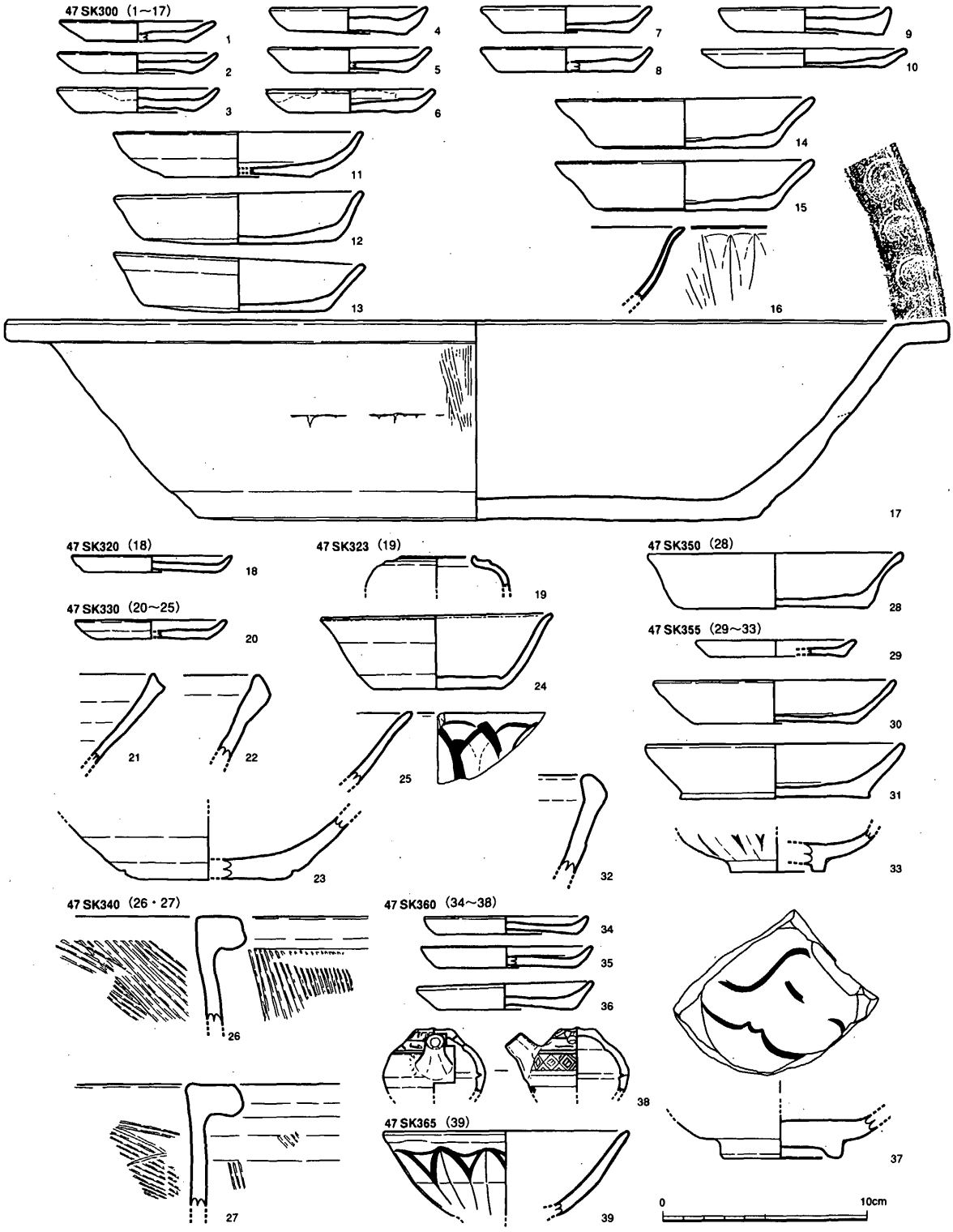


Fig.46　47SK300・320・323・330・340・350・355・360・365出土土器実測図（1/3）

小皿a（24～31）　口径7.8～8.5cm、器高0.9～1.4cm、底径4.8～6.8cm。底部は糸切りされ、25を除いて板状圧痕がみられる。

小皿b（32）　口径7.2cm、器高2.1cm、底径5.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（33～35）　口径11.8～12.3cm、器高2.1～3.0cm、底径8.0～8.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

鍋（36）　口径29.0cm。外面には煤が付着している。

47SK300出土土器（Fig.46）

土師器

小皿a（1～10）　口径7.6～10.0cm、器高0.9～1.3cm、底径5.2～7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（11～15）　口径12.2～14.0cm、器高2.2～3.1cm、底径7.1～9.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

瓦質土器

火舎（17）　口径46.0cm、器高9.7cm、底径27.2cm。折り曲げられた口縁部の平坦部分に三つ巴のスタンプ文を連続して押捺する。口縁部付近は内外面ともにヨコナデだが、外面ではわずかながら縦方向のハケ目が観察され、内面は横方向の強いナデで調整される。外面底部には板状圧痕がみられる。体部中程に粘土の継ぎ目とみられる亀裂が確認される。

龍泉窯系青磁

椀（16）　外面に細身の蓮弁文を配するもので、空色味を帯びた淡青色に発色する釉が厚めにかかる。

47SK320出土土器（Fig.46）

土師器

小皿a（18）　口径7.8cm、器高0.8cm、底径6.4cm。底部は糸切りされる。

47SK323出土土器（Fig.46）

白磁

小壺（19）　口径3.6cm。肩部に低い突帯が巡る。釉は緑色味を帯びた白灰色に発色し、透明度は高く光沢がある。肩部内側は露胎となりその部分の観察では型による成形を窺わせる。

47SK330出土土器（Fig.46）

土師器

小皿a（20）　口径7.4cm、器高0.9cm、底径5.4cm。底部は糸切りされる。

須恵質土器

鉢（21～23）　21・22は両者とも、口縁端部外面が暗灰色もしくは黒褐色に変色する。23は底径6.9cmで底部は糸切りされる。底部の周囲は一段高くその部分は使用による摩耗が著しい。

白磁

皿（24）　口径11.35cm、器高3.6cm、底径6.2cm。口縁端部の釉をかき取るほかは全面に施釉される。IX-1-b類。

龍泉窯系青磁

椀（25）　外面に鎬蓮弁文を配する。I-5-b類。

47SK340出土土器（Fig.46）

土師器

鍋（26・27）　両者とも体部は内外面ともに粗めのハケ目で調整される。26の外面には煤が付着し、27の口縁上端部にはハケ目状の浅い刻み目がある。

47SK350出土土器（Fig.46）

土師器

坏a（28）　口径12.4cm、器高2.7cm、底径9.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SK355出土土器（Fig.46）

土師器

小皿a（29）　口径7.8cm、器高0.8cm、底径6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（30・31）　口径11.8cm・12.6cm、器高2.1・2.65cm、底径7.8・9.2cm。両者とも底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（32）　片口鉢の一部で、口縁端部外面は黒灰色に変色している。

龍泉窯系青磁

小椀（33）　高台径4.6cmで外面に蓮弁文を配する。釉は明灰緑色に発色し、光沢はあるが透明感に乏しい。高台畳付けより内側には釉はない。I-5類。

47SK360出土土器（Fig.46）

土師器

小皿a（34～36）　口径8.0～8.6cm、器高0.85～1.25cm、底径6.6～6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

龍泉窯系青磁

椀（37）　高台径5.9cm。見込みにヘラによる文様がある。I-2～4類。

陶器

水滴（38）　型による成形で上下2つの型を中程で接合し、それに注ぎ口を貼り付けたものである。外面上半部には菱形文等の文様があるがこれらも型による。肩部上位に径5mmほどの穿孔があり空気抜きとする。釉は外面に薄くかかり、緑茶色に発色する透明度の低いもので光沢はない。

47SK365出土土器（Fig.46）

龍泉窯系青磁

小椀（39）　口径12.0cmで、灰緑色に発色する透明度の低い釉がやや厚めにかけられる。

47SK378出土土器（Fig.47）

土師器

小皿a（1）　口径8.6cm、器高1.2cm、底径7.0cm。風化が進み、調整は不明。

坏a（2）　口径12.5cm、器高2.8cm、底径8.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（3）　片口鉢で、体部内面の中程以下の部分は使用による摩耗で平滑化されるとともに、砂粒が剥落してクレーター状を呈している。

47SK385出土土器（Fig.47）

土師器

小皿a（4・5）　口径8.6cm、器高1.35・1.3cm、底径6.4・6.8cm。底部は糸切りされ、5に板状圧痕がみられる。

坏a（6～12）　口径12.2～13.0cm、器高2.15～2.8cm、底径7.8～9.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられるものもある。

須恵質土器

鉢（13）　還元は良好で硬質。

47SK395出土土器（Fig.47）

土師器

坏a（14・15）　口径11.7・12.2cm、器高2.6・2.9cm、底径7.0・8.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SK400出土土器（Fig.47）

瓦質土器

鉢（17）　口径25.3cm。口縁部付近はヨコナデ、体部は外面が縦方向のハケ目、内面は横方向を基調とするハケ目で口縁端部付近まで施される。

白磁

皿（16）　口径12.0cm。口縁端部の釉をかき取る。IX類。

47SK420出土土器（Fig.47）

土師器

小皿a（18・19）　口径8.0・8.1cm、器高1.3・1.1cm、底径5.6・6.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（20）　口径12.0cm、器高2.3cm、底径8.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

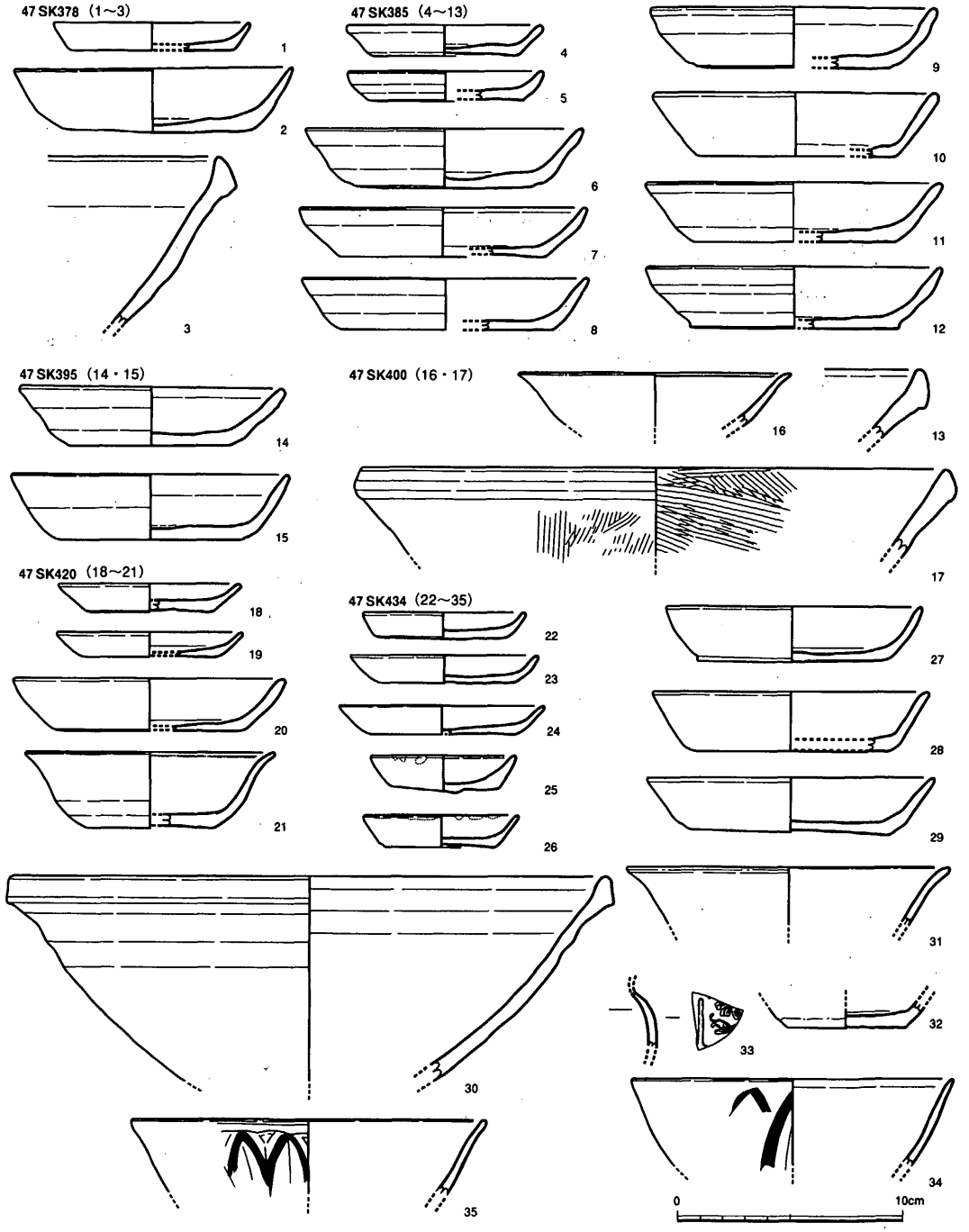


Fig.47　47SK378・385・395・400・420・434出土土器実測図（1/3）

白磁

皿（21）　口径11.0cm、器高3.3cm、底径5.5cm。口縁端部の釉をかき取る。IX-1類。

47SK434出土土器（Fig.47）

土師器

小皿a（22～24）　口径7.1～9.0cm、器高1.2～1.3cm、底径5.6～6.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

小皿b（25・26）　口径6.3・6.8cm、器高1.1・1.4cm、底径4.6・4.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。両者とも口縁端部に油煙が付着している。

坏a（27～29）　口径11.2～12.6cm、器高2.4～2.6cm、底径8.1～8.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（30）　口径26.5cm。体部はヨコナデで仕上げられるが、内面中程から下位は使用による摩耗で平滑化が進むが、砂粒が剥落してクレーター状を呈している。

白磁

皿（31・32）　31は口径14.2cmで、口縁端部の釉はかき取られる。IX類。32は底径5.2cmで、体部下半から底部外面には施釉されない。IX-2類。

小壺（33）　型による成形で、外面に陽刻スタンプによる草花文がある。釉は淡い緑色味を帯びた灰白色に発色する。小片で不正確ながら胴部の最大径は11cm前後に推定できる。

龍泉窯系青磁

椀（34・35）　口径14.1・15.6cmで、外面に鏑蓮弁文を配する。いずれもI-5-b類。

47SK440出土土器（Fig.48）

土師器

小皿a（1～13）　口径7.6～8.5cm、器高0.9～1.5cm、底径5.5～6.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

小皿b（14）　口径7.6cm、器高2.0cm、底径5.6cm。底部は糸切りされる。

坏a（15～21）　口径11.4～12.6cm、器高2.3～3.0cm、底径7.9～9.2cm。底部は糸切りされ、ほとんどの資料に板状圧痕がみられる。

大坏a（22）　口径17.0cm、器高3.4cm、底径12.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（23～26）　23～25は口縁端部外面が暗青灰色に変色する。口縁部内面の屈曲部以下はナデで仕上げる。26は片口鉢で口縁部のゆがみが著しいが、口径26.0cm、器高8.9cm、底径9.2cm。底部は糸切りで、周囲をナデで仕上げ、内面の大半がナデである。口縁端部外面は灰黒色に変色する。

青白磁

椀（27）　高台径4.6cm。見込みに陽刻スタンプによる文様があるが、その内容は不明。釉は残存部の全面にかかり、薄い青色味をおびた透明度の高いものであるが、細かな気泡が全体に観察される。

陶器

盤（28・29）　28は口縁部の内外面に目跡はあり、釉は体部内面下半にわずかに観察され、口縁部周辺にはみられない。外面は茶褐色を呈している。I-2類。29は底部片で、内面にかかる釉は緑色味を帯びたもので、薄くかけられるが光沢はほとんどない。IまたはII類。

47SK450出土土器（Fig.48）

土師器

小皿a（30～35）　口径6.7～8.2cm、器高1.2～1.6cm、底径5.3～6.8cm。底部は糸切りされ、32以外に板状圧痕がみられる。

小皿b（36）　口径6.8cm、器高1.7cm、底径5.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（37～47）　36～46は口径12.0～12.6cm、器高2.5～3.0cm、底径7.8～9.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。47は口径12.2cm、器高2.9cm、底径8.3cm。口縁部の1カ所を指で摘み外側へ折り曲げ片口とする。その際についた指先の当たりが片口部外面下位に観察される。

龍泉窯系青磁

坏（48）　高台径6.7cm。畳付けを含む高台端部の釉はかき取られる。外面には蓮弁文が施され、暗灰色でやや透明感の鈍い釉が内外面ともに厚めにかけられる。III-4または5類。

47SK455出土土器（Fig.49）

土師器

小皿a（1・2）　口径7.4・8.6cm、器高1.0・0.85cm、底径6.2・7.9cm。底部に板状圧痕は観察できるが、風化のため切り離しの痕跡は不明である。

小皿b（3）　口径6.8cm、器高1.55cm、底径5.05cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（4・5）　口径12.2・13.2cm、器高3.0・2.85cm、底径8.3・8.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

皿（6）　底径5.3cm。外面の体部下半から底部には施釉されない。IX-2類。

47SK470出土土器（Fig.49）

土師器

小皿a（7）　口径7.4cm、器高1.1cm、底径6.0cm。底部は糸切りされる、

龍泉窯系青磁

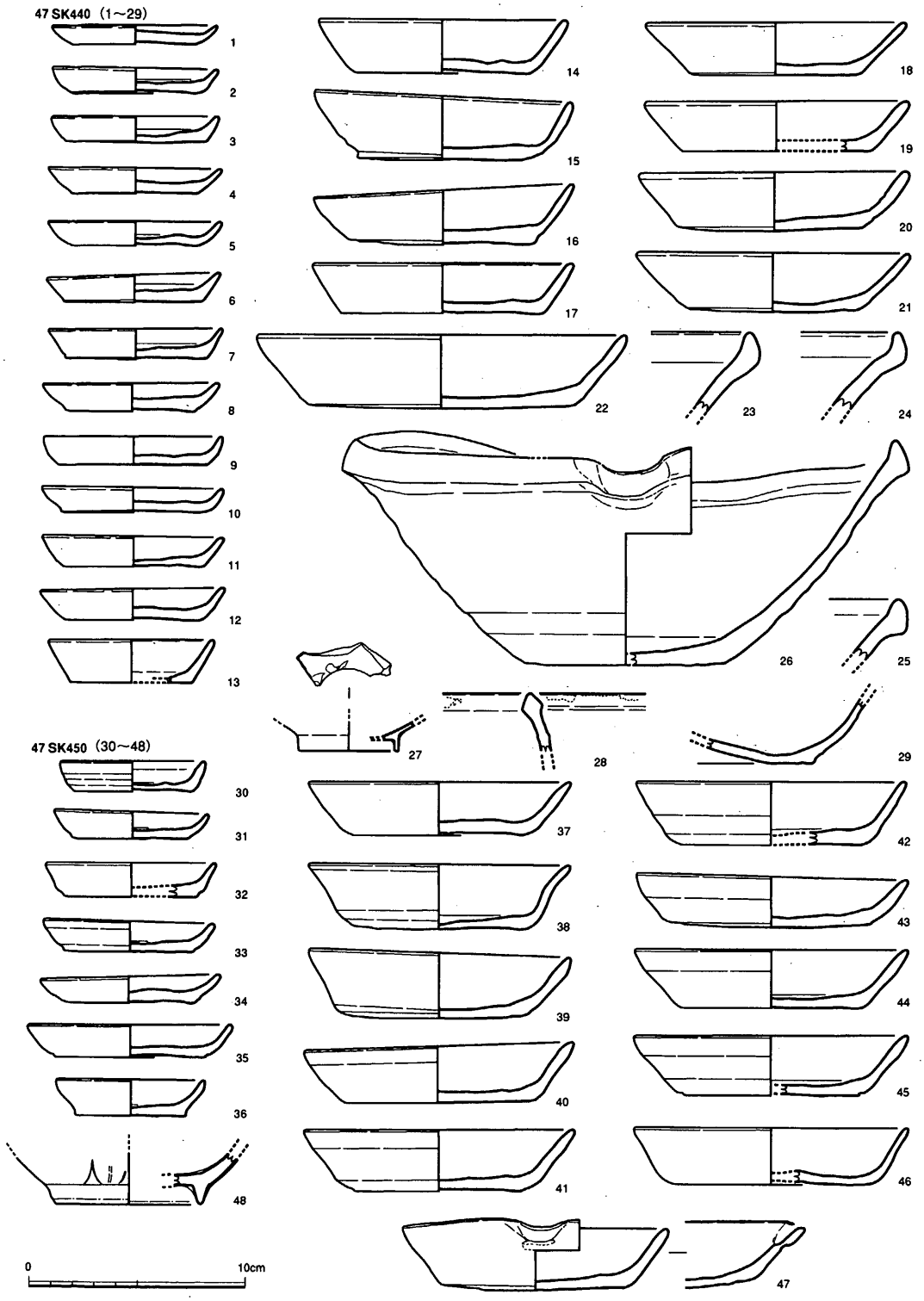


Fig.48　47SK440・450出土土器実測図（1/3）

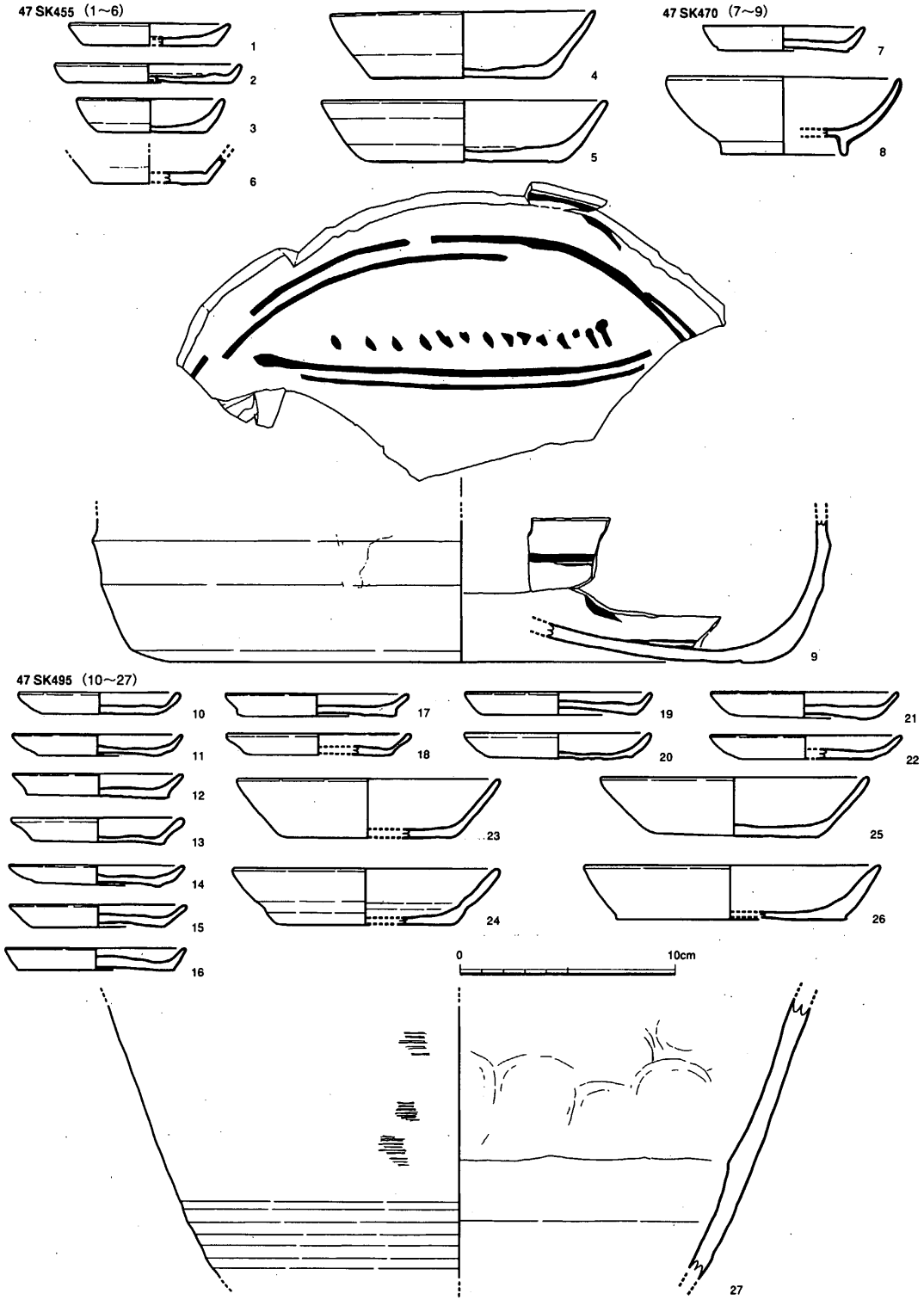


Fig.49　47SK445・470・495出土土器実測図（1/3）

坏（8）　口径10.8cm、器高3.6cm、高台径5.8cm。薄青色味を帯びたやや透明度の低い釉は厚めにかけられるが、畳付部分はかき取られている。III-5-a類。

陶器

盤（9）　底径27.0cm。内面には文様が描かれ、茶灰色の透明な釉がかけられるが、外面は上半部に一部釉を認めるが基本的には露胎である。I-b類。

47SK495出土土器（Fig.49）

土師器

小皿a（10～22）　口径7.4～8.7cm、器高1.0～1.3cm、底径5.2～7.3cm。底部は糸切りされ、14以外には板状圧痕がみられる。

坏a（23～26）　口径12.1～13.6cm、器高2.5～2.8cm、底径7.3～10.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

陶器

甕（27）　外面の釉は淡緑茶色に発色し、透明度は低く鈍い光沢を放つ。内面は濁緑茶白色の不透明なものでハケ状の道具を用いて塗布される。器面の調整は外面の上半部に平行叩き目の痕跡が見え、下半はヨコナデ、内面は外面に対応して上半部が同心円当て具痕、下半はヨコナデである。IV類。

47SK500出土土器（Fig.50）

土師器

小皿a（1～13）　口径7.2～8.8cm、器高0.9～1.4cm、底径5.2～6.6cm。底部は糸切りされ、10以外には板状圧痕がみられる。また9の底部で体部との境目近くに、径約4mmの穿孔がある。

坏a（14～16）　口径11.2～12.0cm、器高2.1～2.4cm、底径7.6～8.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（17）　灰白色を呈する。

瓦質土器

鉢（18・19）　18は風化が進行し情報に乏しい。19は口径29.5cm。これも風化が進行し、調整は不明である。

白磁

皿（20）　底径6.5cm。底部外面にも施釉される。IX-1類。

龍泉窯系青磁

椀（21）　口径14.3cm。外面に蓮弁文を配するもので、釉は淡灰緑色に発色する。I-5-b類。

陶器

甕（22）　口径22.8cm、胴部最大径31.6cm。調整は口縁部内面から外面、胴部最大径付近ま

でがヨコナデ、外面の下半はヘラ状の工具による強いナデ、内外面とも肩部付近には指圧痕があり、内面のほぼ全体がヨコナデである。外面肩部付近にヘラ記号（窯印）がある。常滑産。

47SK502出土土器（Fig.50）

土師器

小皿a（23・24）　口径7.7・7.8cm、器高1.3・0.9cm、底径5.3・6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SK510出土土器（Fig.50）

土師器

小皿a（25～33）　口径7.4～8.6cm、器高1.1～1.5cm、底径5.2～6.6cm。底部は糸切りされ、約半分に板状圧痕がみられる。

小皿b（34）　口径7.0cm、器高1.6cm、底径4.0cm。底部は糸切りされる。

坏a（35～38）　口径11.6～13.6cm、器高2.3～2.5cm、底径7.5～9.0cm。底部は糸切りされ、36・37に板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（39～41）　39は灰白色、40は底径8.8cmで、底部は糸切り、内面は使用による摩耗で平滑になるとともに砂粒が剥落しクレーター状を呈している。41は口径28.2cm。

白磁

皿（42）　底径4.8cm。外面底部は一部に釉がかかるが基本的には露胎で、IX-2類。

47SK520出土土器（Fig.51）

須恵質土器

鉢（1）　口縁端部外面が暗青灰色に変色する。

白磁

皿（2）　口径9.8cm、器高2.0cm、底径5.8cm。口縁端部の釉をかき取るが底部は施釉される。IX-1-a類。

龍泉窯系青磁

椀（3）　高台径5.2cm。I類。

47SK524出土土器（Fig.51）

土師器

小皿a（4）　口径8.0cm、器高0.9cm、底径5.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵器

坏c（5）　口径12.6cm、器高3.6cm、高台径8.8cm。底部はヘラ切り後ナデ。下層から出土。

47SK550出土土器（Fig.51）

土師器

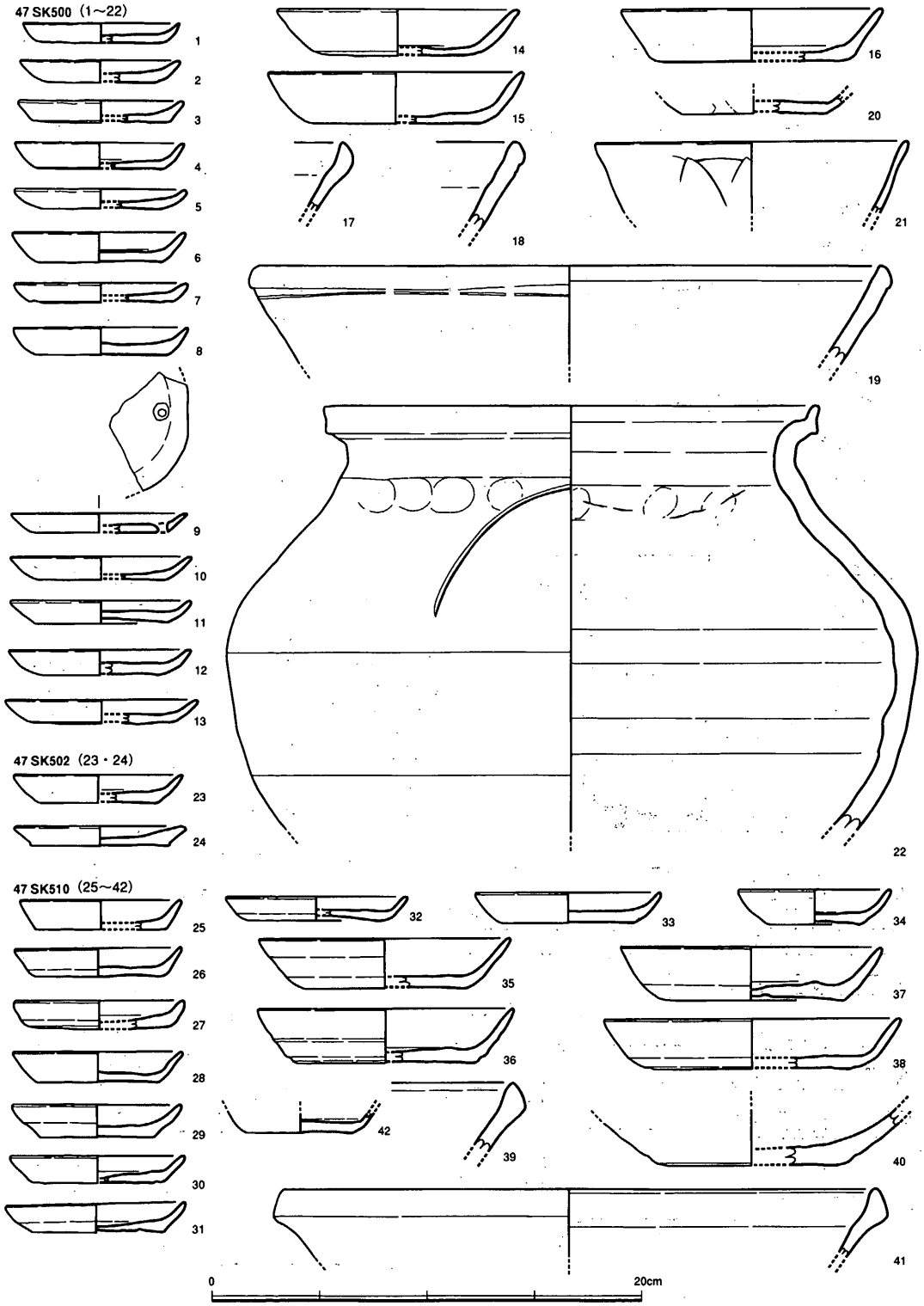


Fig.50　47SK500・502・510出土土器実測図（1/3）

小皿a（6～14）　口径7.6～8.7cm、器高1.0～1.3cm、底径5.3～7.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

小皿c（15）　底径6.5cmの小皿の底部に高台を貼り付ける。

坏a（17・18）　口径12.3・12.8cm、器高2.6cm、底径7.4・8.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

青白磁

合子（16）　口径5.4cm、受け部径6.0cm、器高2.2cm、底径4.1cm。外面は型によって成形されており、体部には縦方向の沈線による施文がある。釉は外面が受け部以下、内面が体部下半に施される。

47SK555出土土器（Fig.51）

土師器

小皿a（19～24）　口径7.2～8.0cm、器高0.9～1.4cm、底径4.8～6.3cm。底部は糸切りされ、19・21を除いて板状圧痕がみられる。

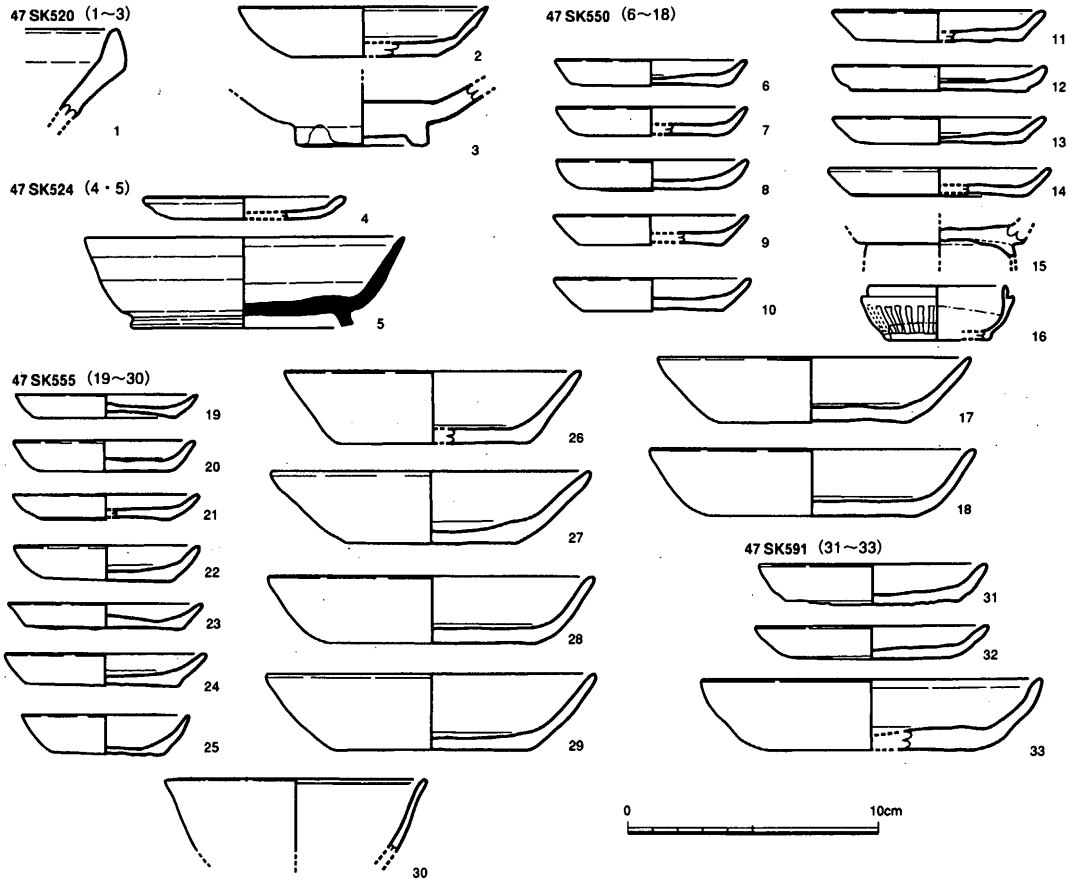


Fig.51　47SK520・524・550・555・591出土土器実測図（1/3）

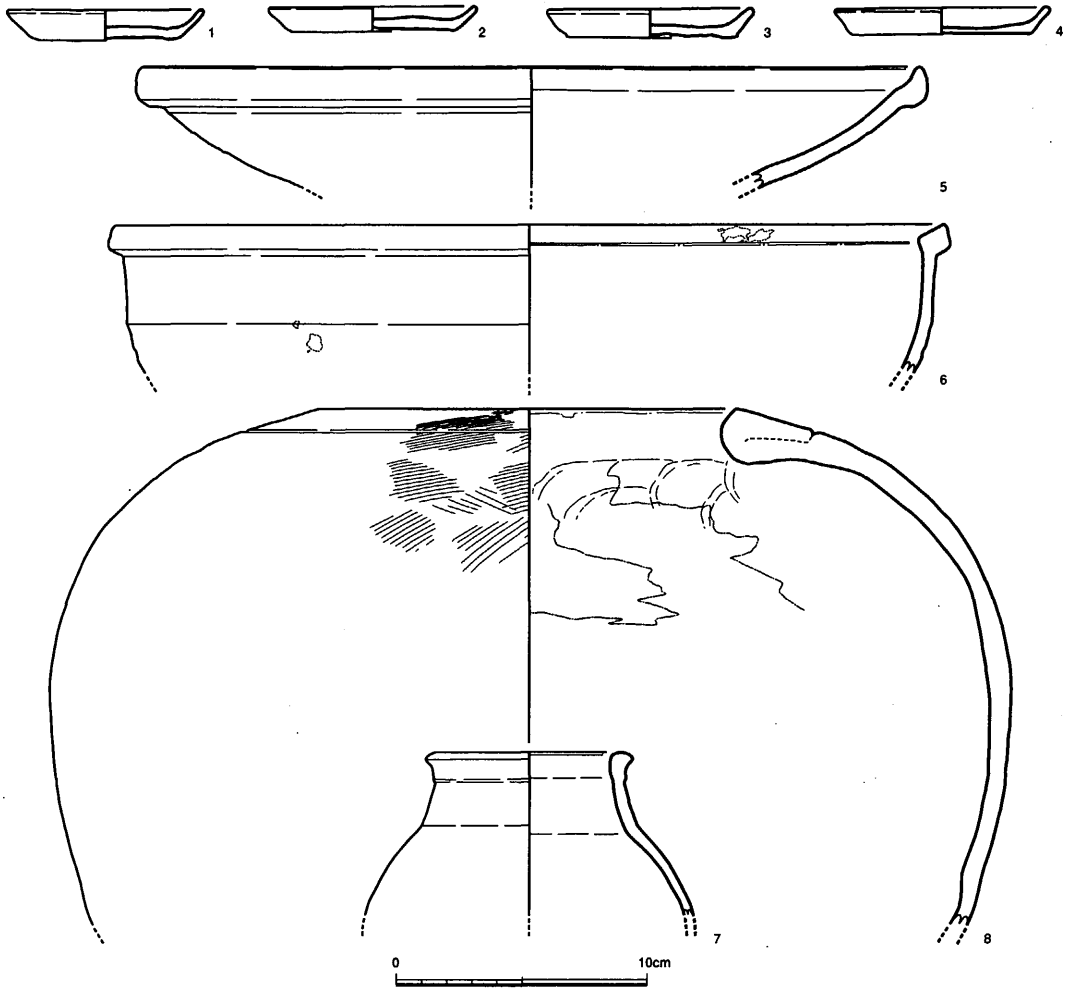


Fig.52　47SK560出土土器実測図（1/3）

小皿b（25）　口径6.6cm、器高1.6cm、底径4.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（26～29）　口径11.7～13.0cm、器高2.9～3.0cm、底径6.6～7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

皿（30）　口径10.3cm。口縁端部の釉はかき取られる。IX類。

47SK560出土土器（Fig.52）

土師器

小皿a（1～4）　口径7.8～8.5cm、器高1.0～1.2cm、底径5.2～7.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（5）　口径31.4cm。口縁端部外面に黄茶色に発色する自然釉がかかる。還元良好。

陶器

盤（6）　口径33.4cm。口縁部内側の内傾する部分と体部外面中程に目跡が付着する。釉は黄釉で光沢があり、口縁部の内傾部分を除いてかかる。胎土はやや粗めながら硬質である。I-2類。

壺（7）　口径8.2cm。釉は暗赤褐色、褐灰色、暗赤紫色等に発色し斑がある。また鈍い光沢はあるが、透明度は低い。

甕（8）　無頸の甕で、口径16.4cm。口縁部は薄く延ばして折り曲げて成形したようでその重ね目が沈線になっている。外面は平行叩き目が残り、先述の沈線を跨いでいる。内面にはわずかながら当て具の痕跡が見える。釉は口縁端部をのぞいて体部外面の全面にかかり、内面には部分的に薄く付着する程度である。釉は暗緑褐色、灰緑色に発色し、わずかに光沢がある。

47SK591出土土器（Fig.51）

土師器

小皿a（31・32）　口径9.0・9.2cm、器高1.6・1.3cm、底径7.0・6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（33）　口径13.4cm、器高2.8cm、底径8.0cm。底部の切り離し、板状圧痕の有無は風化により不明。

掘立柱建物出土土器

建物C出土土器（Fig.53）

須恵質土器

鉢（1）　口縁端部外面は黒灰色に変色している。柱穴g出土。

白磁

皿（2）　口径9.4cm、器高2.3cm、底径6.0cm。口縁端部の釉はかき取られるが、底部外面には釉が施される。IX-1-d類。柱穴l出土。

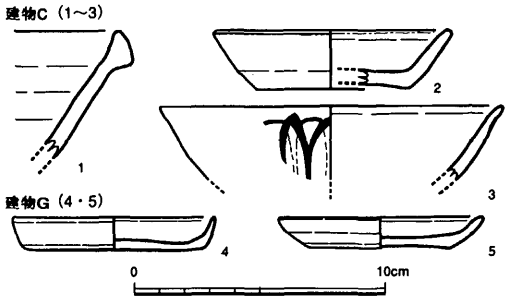


Fig.53　建物出土土器実測図（1/3）

龍泉窯系青磁

椀（3）　口径13.6cmで、外面には蓮弁文を配する。I-5-b類。柱穴g出土。

建物G出土土器（Fig.53）

土師器

小皿a（4・5）　口径8.0・8.05cm、器高1.3・1.25cm、底径6.8・5.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。柱穴e出土。

その他の遺構出土土器

土器埋納遺構出土土器

47SX160出土土器（Fig.54）

土師器

小皿a（1・2）　口径8.15・8.3cm、器高1.05・0.95cm、底径7.3・6.7cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。出土番号は1がNo.6、2がNo.7である。

坏a（3～7）　口径11.9～12.4cm、器高2.1～2.55cm、底径7.8～8.65cmを測る。底部は糸切りされる。出土番号は3がNo.2、4がNo.5、5がNo.1、6がNo.4、7がNo.3である。

47SX185上面出土土器（Fig.54）

土師器

小皿a（8）　口径7.8cm、器高1.15cm、底径6.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（9・10）　口径12.0・13.5cm、器高2.7cm、底径6.95・8.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

47SX185出土土器（Fig.54）

土師器

小皿a（11・12）　口径8.0・8.3cm、器高0.8・0.75cm、底径6.6・6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。出土番号は12がNo.2である。

坏a（13・14）　口径11.95・13.1cm、器高2.75・2.5cm、底径7.8・8.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。出土番号は13がNo.1、14がNo.3である。

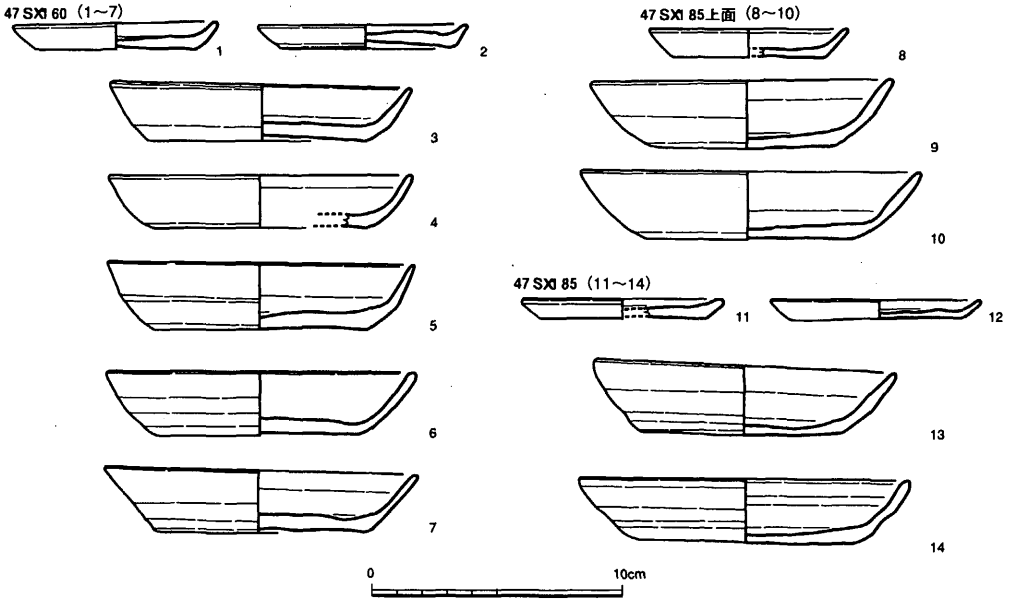


Fig.54　土器埋納遺構出土土器実測図（1/3）

方形竪穴状遺構出土土器

47SK275出土土器（Fig.55）

土師器

小皿a（1～8）　口径7.6～8.4cm、器高0.9～1.4cm、底径5.2～7.8cm。底部は糸切りされ、ほとんどの資料に板状圧痕が残る。

坏a（9・10）　口径11.8・13.5cm、器高2.3・2.2cm、底径7.8・8.4cm。底部は糸切りされ、10には板状圧痕がみられた。

鍋（11・12）　両者とも口縁部の資料で、外面の屈曲部以下には煤が付着している。

白磁

皿（13・14）　両者とも口径11.4cmで、口縁端部の釉はかき取られる。14の口縁部には漆が塗布されていたようであるが、器面の欠損部にまで漆が及んでいる箇所があり、漆を塗布する段階ですでに口縁端部の一部に欠損があったことが窺える。13はIX類。14はIX-1-c類。

高麗青磁

椀（15）　蛇の目高台でその径は5.8cm。畳付けに白色耐火土の目跡があり、当初は4カ所あったと推定できる。内面の見込みは径約4.6cmの範囲に一段窪む。釉は濃黄緑色に発色するやや透明度の低いもので、光沢があり、高台畳付まで含めた全体にやや厚めに施されている。初期高麗青磁I類。

青磁

盤（16）　口径18.2cm、器高4.2cm、削り出しによる高台の径は7.4cm。釉は高台付近を除いて施され、黄灰色に発色しやや不透明で、光沢は弱い。焼成はややあまく、胎土は橙色味を帯びた明灰色で、細かな気泡がみられるものの精良な土である。見込みには目跡が観察される。

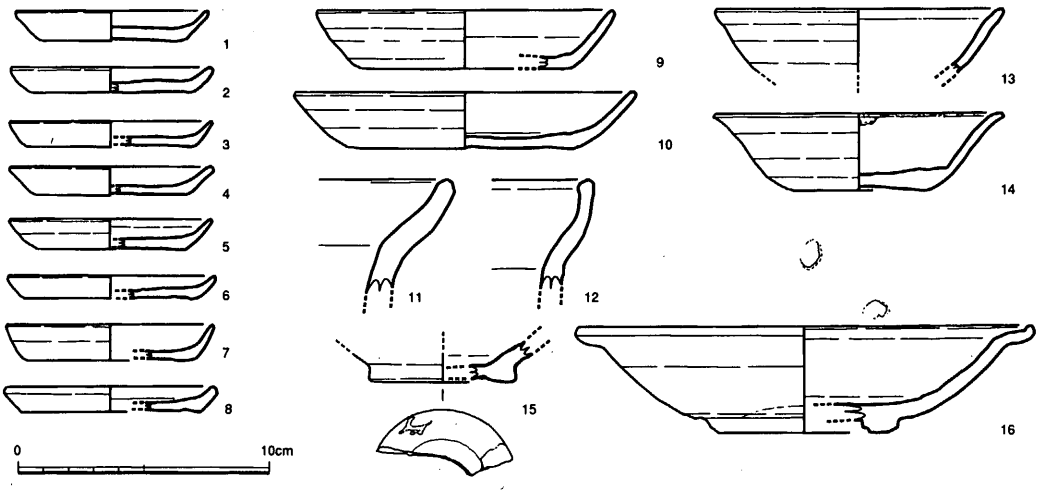


Fig.55　方形竪穴状遺構出土土器実測図（1/3）

龍泉窯系もしくは同安窯系青磁とみられる。

ピット、窪み状遺構など出土土器

47S X 016出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（1）　口径8.1cm、器高1.15cm、底径5.75cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 034出土土器（Fig.56）

白磁

皿（2）　口径11.2cm。口縁端部の釉はかき取られる。底部は完全には残らないが、釉が底部までかけられていたと思われ、IX-1類に分類できよう。

47S X 037出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（3～5）　口径6.8～8.9cm、器高0.95～1.45cm、底径6.2～7.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（6・7）　口径10.8・13.0cm、器高2.6・2.8cm、底径7.4・9.6cm。底部は糸切りされ、7には板状圧痕がみられる。

47S X 049出土土器（Fig.56）

製塩土器

甕（8）　外面には粗めの平行叩き（擬格子状）、内面にはやや細めで弧状を呈する当て具痕がみられる。玄界灘式。

47S X 062出土土器（Fig.56）

土師器

坏a（9）　口径12.6cm、器高2.2cm、底径8.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

椀（10）　口縁端部を玉縁状に作る。IV類。

47S X 065出土土器（Fig.56）

土師器

坏a（11）　口径12.0cm、器高2.5cm、底径8.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 067出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（12・13）　口径8.1・9.0cm、器高1.2・1.3cm、底径5.4・6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（14・15）　口径11.8・16.0cm、器高2.6・2.9cm、底径7.8・10.7cm。底部は糸切りされ、

板状圧痕がみられる。

47S X 069出土土器（Fig.56）

龍泉窯系青磁

椀（16）　口径16.6cmで、外面に細身の蓮弁文が配される。釉は緑色味を帯びた褐色に発色し、光沢があり、体部全面に厚めにかけられる。高台部分を欠損するが、III-2類とみられる。

47S X 073出土土器（Fig.56）

白磁

皿（17）　口径11.0cm。口縁端部の釉はかき取られる。また口縁の先端部は打ち欠いたような小さな凹凸があり、重ね焼きを行ったことを窺わせる。IX類。

47S X 074出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（18）　口径10.5cm、器高1.4cm。底部はヘラ切りされる。

白磁

椀（19）　口縁端部を玉縁状につくる。II類。

47S X 075出土土器（Fig.56）

龍泉窯系青磁

坏（20）　口径13.0cm。体部内面を縦方向に窪ませ、花弁（蓮弁）風に見せる。釉は残存部の全体に厚くかけられ、緑青色に発色する透明度の高いものである。

47S X 081出土土器（Fig.56）

白磁

椀（21）　口縁端部の釉をかき取る。IX類。

龍泉窯系青磁

椀（22）　口径18.0cm。口縁部外面に3条の沈線が巡る。釉は緑青色に発色するが白濁化し透明度は低い。なお釉の表面にあった気泡が破裂し、凹凸の著しい部分もある。IV類。

47S X 085出土土器（Fig.56）

須恵質土器

鉢（23）　口縁端部外面は重ね焼きにより変色している。

陶器

盤（24）　口縁部の内傾する部分は釉がふき取られ、目跡が残る。他の部位には光沢のある黄釉が残るが、剥落が著しい。

染付

椀（25）　口径14.0cm。やや青色味を帯びた透明度の高い釉が、厚めに施される。

47S X 094出土土器（Fig.56）

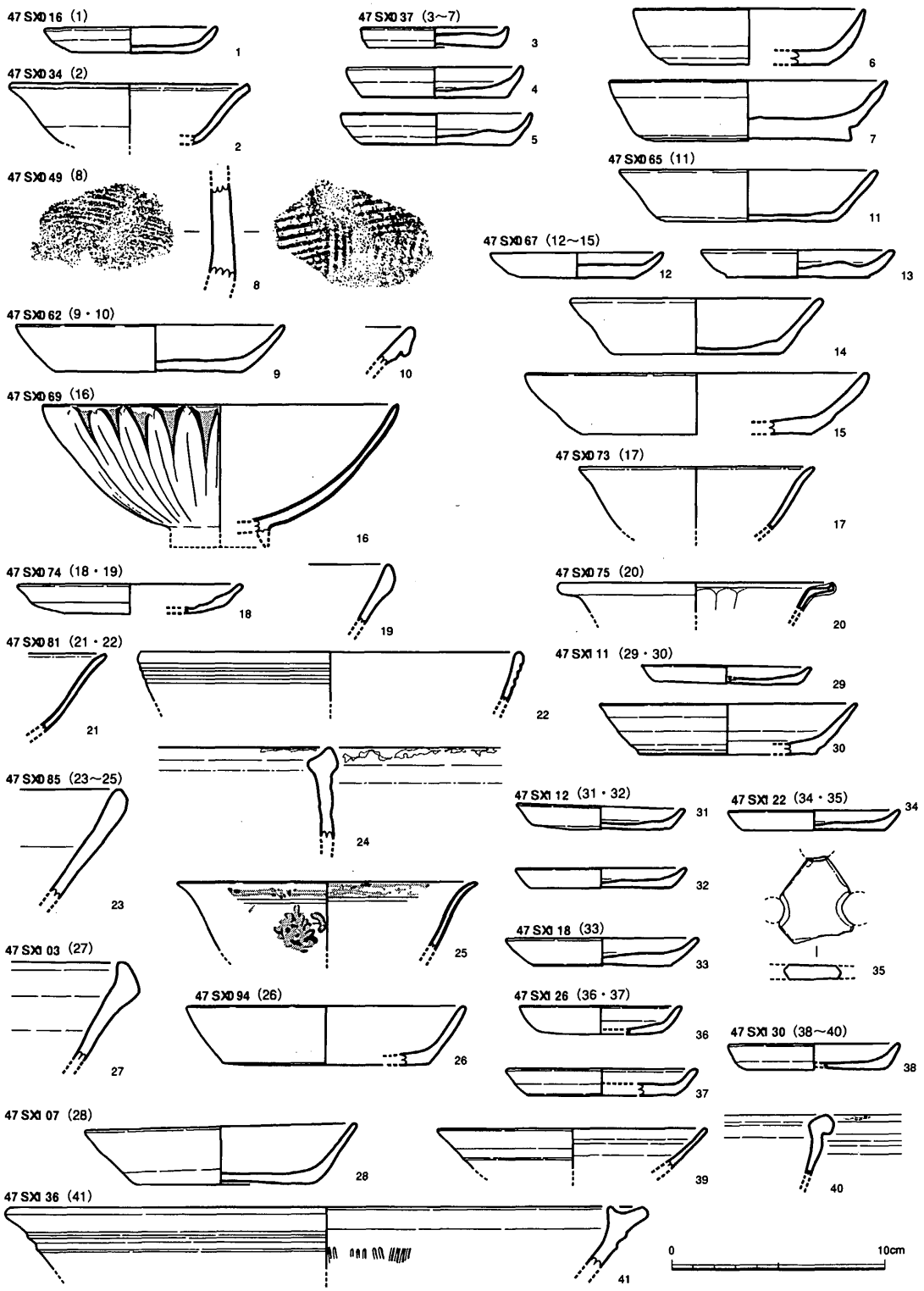


Fig.56　その他の遺構出土土器実測図1（1/3）

土師器

坏a（24）　口径13.0cm、器高2.8cm、底径9.6cm。底部は糸切りされるが、かなり風化している。

47S X 103出土土器（Fig.56）

須恵質土器

鉢（27）　口縁端部外面は黒灰色に変色している。

47S X 107出土土器（Fig.56）

土師器

坏a（28）　口径12.7cm、器高2.7cm、底径8.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 111出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（29）　口径7.9cm、器高0.9cm、底径6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（30）　口径12.0cm、器高2.4cm、底径8.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 112出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（31・32）　口径7.9・8.0cm、器高1.1・0.95cm、底径6.4・6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 118出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（33）　口径9.0cm、器高1.3cm、底径6.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 122出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（34）　口径8.0cm、器高0.95cm、底径6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏（35）　糸切り痕と板状圧痕があり、坏の底部片と考えられる。少なくとも3カ所に推定径1.5cm内外の穿孔を施す。穿孔行為は焼成前である。

47S X 126出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（36・37）　口径7.6・9.0cm、器高1.3・1.25cm、底径5.6・7.0cm。底部は糸切りされ、36には板状圧痕がみられる。

47S X 130出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（38）　口径8.0cm、器高1.2cm、底径6.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

灰釉陶器

皿（39）　口径12.6cm。残存部全体に灰白色気味の釉が薄くかかる。

陶器

盤（40）　灰緑色に発色する釉は薄くかけられ、口縁端部の外面に目跡が観察される。

47S X 136出土土器（Fig.56）

陶器

擂鉢（41）　口径30.0cm。口縁部内側に返り状のものがあり、受け部を思わせる形状をしている。体部内面にやや粗めのクシ目があり擂目とする。残存部の全面に施釉され、赤褐色に発色し、不透明で光沢もない。瀬戸産か。

47S X 143出土土器（Fig.57）

青白磁

合子（1）　口径7.8cm、器高1.8cm、底径8.0cm、受け部径9.0cm。青白色に発色する透明度の高い釉は、体部内面と外面の最大径付近にかかり、受け部と底部は露胎である。型を使用して成形したものとみられる。

47S X 167出土土器（Fig.57）

土師器

坏a（2）　口径12.4cm、器高2.55cm、底径8.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

椀（3）　高台径7.0cm。灰白色に発色する透明な釉は、高台畳付け部分のみかき取られる。

龍泉窯系青磁

椀（4）　高台径3.9cm。体部外面には蓮弁文が配され、灰緑色に発色する透明な釉は畳付けを除いて厚めにかけられる。III-2又は3類。

陶器

盤（5）　体部外面下半のみ露胎で、釉は他の部位に薄くかかり、淡黄茶色に発色し、光沢なく白濁化している。I-2類。

47S X 183出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（6）　口径8.4cm、器高1.2cm、底径6.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 184出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（7）　口径7.4cm、器高0.9cm、底径5.1cm。調整は風化により不明。

坏a（8）　口径12.2cm、器高2.4cm、底径8.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 195出土土器（Fig.57）

龍泉窯系青磁

椀（9）　体部内面に施文される。I-4類。

47SX217出土土器（Fig.57）

土師器

七輪（10）　七輪の中敷きとみられ、当初は径12cmほどの円盤状で、残存範囲で3カ所、推定すると9カ所の穿孔（径1.4cm前後）がある。厚さは1.0cm。

白磁

紅皿（11）　口径4.6cm、器高1.3cm、高台径2.3cm。型による成形で、釉は外面下半にはかからない。

龍泉窯系青磁

椀（12）　幅広い高台でやや大型になるものとみられる。灰緑色で光沢のある釉は高台周辺にはかからない。

青磁

椀（14）　口径17.0cm。口縁の先端部分が露胎になるが全周するかどうか不明。

陶器

小壺（13）　口径4.0cm。暗青灰色、黒灰色に発色する釉で、透明度はない。

鉢（15）　底径7.8cm。外面は露胎でケズリ調整が観察され、内面は透明で光沢のある釉が施される。

猪口（16）　高台径2.45cm。青色味を帯びた光沢のある透明な釉は、高台畳付を除いて施される。

擂鉢（17）　片口を有するもので、内面に粗い擂り目がある。

47SX243出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（18）　口径7.6cm、器高0.9cm、底径6.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX249出土土器（Fig.57）

青白磁

蓋（19）　口径5.4cm、器高1.3cm、返り端部径3.8cm。型による成形で天井部も文様も型に刻まれたものである。釉は淡緑青色に発色し、透明度が高く光沢があり、天井部全面に施されるが、内面は露胎である。

47SX251出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（20～22）　口径7.8～8.8cm、器高1.1～1.3cm、6.3～7.0cm。底部は糸切りされ、20・22には板状圧痕がみられる。

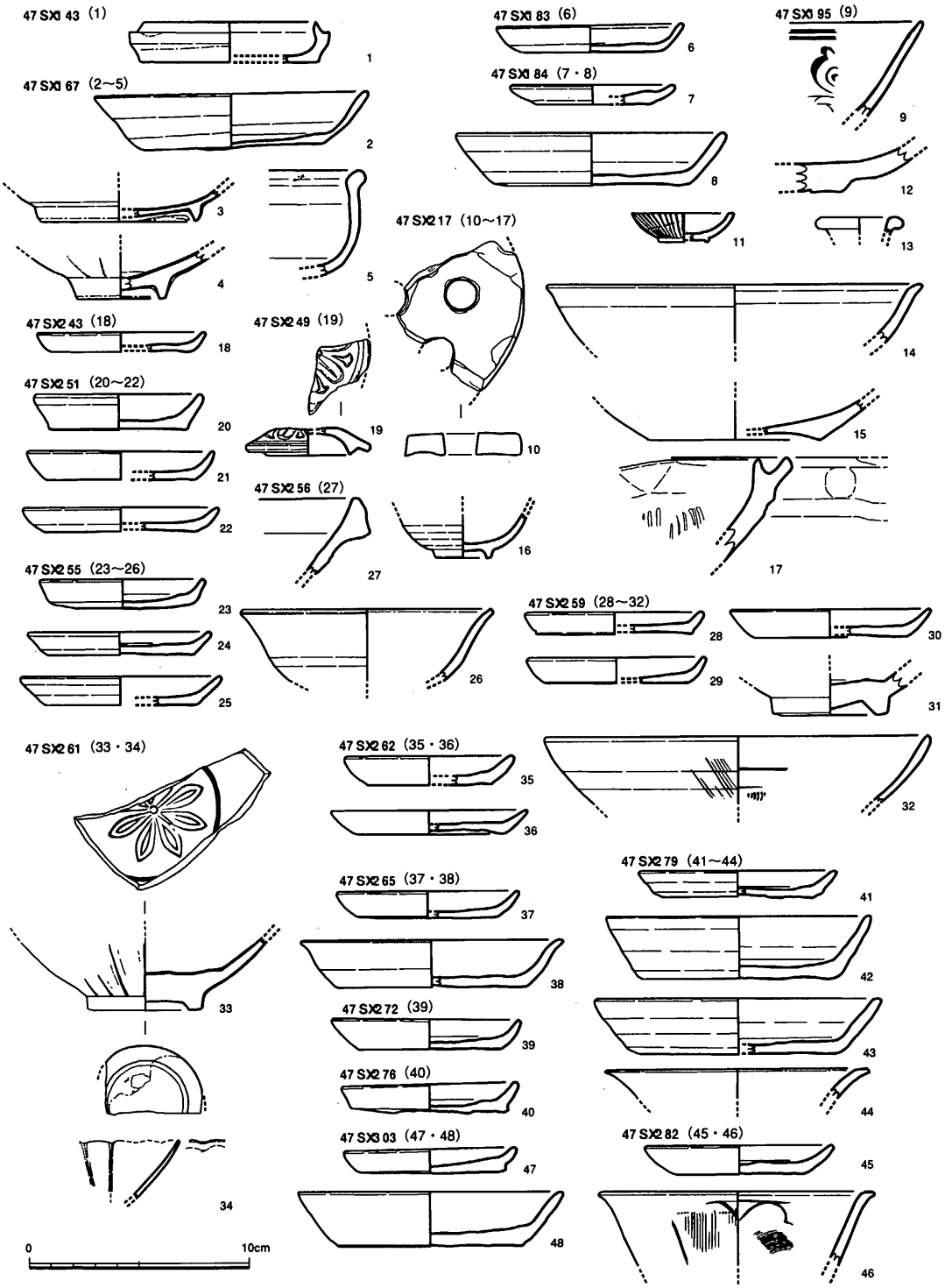


Fig.57　その他の遺構出土土器実測図2（1/3）

47S X 255出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（23～25）　口径7.4～9.0cm、器高1.05～1.3cm、底径6.5～6.9cm。底部は糸切りされ、23・24に板状圧痕がみられる。

白磁

皿（26）　口径11.4cm。口縁端部の釉をかき取る。IX類。

47S X 256出土土器（Fig.57）

須恵質土器

鉢（27）　体部内面はナデで、還元は良好である。

47S X 259出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（28～30）　口径8.0～9.0cm、器高1.0～1.25cm、底径6.6～7.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

同安窯系青磁

椀（31・32）　31は高台径5.2cm。残存範囲では釉は内面にのみみられ、淡黄茶色に発色し、光沢がある。32は口径17.4cm。外面にクシ目、内面にはヘラとクシによる施文がある。I-1-b類。

47S X 261出土土器（Fig.57）

龍泉窯系青磁

椀（33）　高台径5.2cm。見込みに細単弁八葉の花弁（蓮弁）文が押捺され、外面は幅のやや広い蓮弁文とみられる。釉は高台畳付以内にはかからない。

白磁

椀（34）　口縁部をおよそ1.3cm間隔で刻み込み花弁風とし、さらにその窪みに合わせて内面に白堆線による縦方向の隆起をつくり、花弁を強調する。器壁はきわめて薄く、残存部の全面に施される釉は空色味を帯びた透明なものである。X類か。

47S X 262出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（35・36）　口径7.6・8.8cm、器高1.3・1.1cm、底径5.6・6.6cm。底部は糸切りされる。

47S X 265出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（37）　口径8.2cm、器高1.2cm、底径6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（38）　口径11.8cm、器高2.15cm、底径8.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 272出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（39）　口径8.5cm、器高1.3cm、底径6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 276出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（40）　口径8.0cm、器高1.3cm、底径7.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 279出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（41）　口径9.0cm、器高1.2cm、底径6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（42・43）　口径12.0cm・13.0cm、器高2.85・2.5cm、底径8.6・8.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

皿（44）　口径12.0cm。口縁端部の釉はかき取られる。

47S X 282出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（45）　口径8.6cm、器高1.3cm、底径5.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

龍泉窯系青磁

椀（46）　口径12.5cm。外面にヘラによる蓮弁文を配し、それに縦方向のクシ目を重ねる。内面はヘラで波状文を描き、細かなクシ目で施文する。I-6-b類。

47S X 303出土土器（Fig.57）

土師器

小皿a（47）　口径7.8cm、器高1.1cm、底径6.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（48）　口径12.0cm、器高2.5cm、底径8.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 304出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（1）　口径8.8cm、器高1.4cm、底径6.8cm。底部は糸切りされる。

坏a（2）　口径12.0cm、器高1.9cm、底径9.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 306出土土器（Fig.58）

白磁

皿（3）　口径10.1cm、器高1.8cm、底径6.3cm。口縁端部の釉をかき取り、底部は斑があるが施釉される。IX-1-b類。

47S X 308出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（4）　口径7.4cm、器高1.1cm、底径6.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（5）　口径12.0cm、器高2.5cm、底径8.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX313出土土器（Fig.58）

龍泉窯系青磁

椀（6）　高台径6.0cm。畳付けはきわめて細く、釉はかき取られる。他の部位には暗緑色のやや透明度の低い釉が厚めにかけられる。III類。

47SX316出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（7）　口径8.4cm、器高1.3cm、底径5.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（8）　口径13.0cm、器高2.9cm、底径8.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

大坏a（9）　口径18.0cm、器高3.8cm、底径10.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX328出土土器（Fig.58）

青白磁

合子（10）　底径6.0cm。型による成形で、円盤状を呈する底部には施釉されない。

47SX346出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（11～21）　口径7.6～8.6cm、器高0.9～1.25cm、底径5.8～7.0cm。底部は糸切りされ、一部を除いて板状圧痕がみられる。

坏a（22～27）　口径11.1～12.6cm、器高2.15～2.6cm、底径7.6～9.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

瓦質土器

鉢（28）　内面は口縁端部近くまで略横方向のハケ目が施される。

47SX351出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（29～31）　口径8.0～8.6cm、器高0.85～1.2cm、底径6.4～7.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX352出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（32）　口径8.8cm、器高0.8cm、底径7.8cm。底部は糸切りされる。

47SX353出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（33）　口径8.2cm、器高1.0cm、底径6.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX362出土土器（Fig.58）

白磁

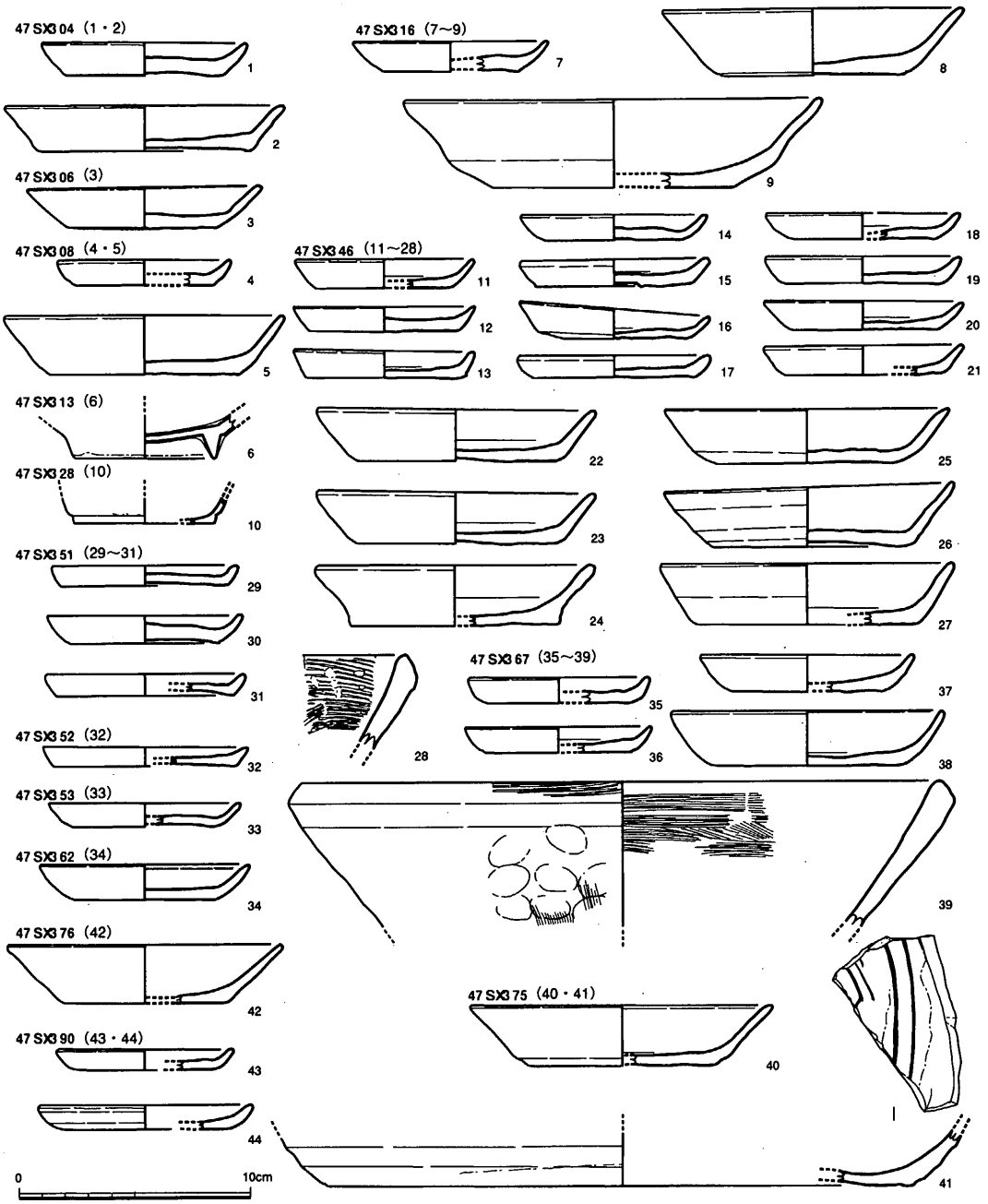


Fig.58　その他の遺構出土土器実測図3（1/3）

皿（34）　口径9.0cm、器高1.5cm、底径6.0cm。口縁端部の釉はかき取られ、底部には施釉される。IX-1-a類。

47SX367出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（35～37）　口径7.8～9.2cm、器高1.1～1.6cm、底径6.1～6.6cm。底部は糸切りされ、35・37は板状圧痕がみられる。

坏a（38）　口径11.8cm、器高2.35cm、底径8.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

瓦質土器

鉢（39）　口径28.6cm。体部外面には指圧痕が見え、それに重なってハケ目がわずかに観察される。内面は横方向の細いハケ目である。内面中程から下位は使用による摩耗が著しい。

47SX375出土土器（Fig.58）

土師器

坏a（40）　口径13.0cm、器高2.6cm、底径7.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

陶器

盤（41）　底径25.0cm。外面の体部下位から底部全体は露胎で、他は暗緑色で半透明な釉が薄く施される。見込みに文様を描く。

47SX376出土土器（Fig.58）

土師器

坏a（42）　口径11.8cm、器高2.5cm、底径6.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX390出土土器（Fig.58）

土師器

小皿a（43・44）　口径7.6・9.2cm（小片のためやや不安がある）、器高0.9・1.05cm、底径6.4・7.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX403出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（1～3）　口径7.6～8.8cm、器高0.9～1.0cm、底径5.5～7.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（4）　口径28.2cm。口縁端部のみ灰黒色に変色する。また体部内面の中程以下は使用による摩耗が著しい。

47SX404出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（5～7）　口径8.6～9.3cm、器高0.9～1.1cm、底径7.1～7.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX405出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（8）　口径8.9cm、器高0.9cm、底径6.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（9）　口径29.4cm。体部内面中程以下は使用による摩耗が著しく、また砂粒の剥落によりクレーター状を呈している。

47SX412出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（10）　口径9.6cm、器高1.2cm、底径7.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（11）　口径15.7cm、器高2.8cm、底径10.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX414出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（12～15）　口径8.5～10.4cm、器高0.7～1.5cm、底径5.9～8.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（16）　口径16.0cm、器高3.2cm、底径11.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX423出土土器（Fig.59）

青白磁

皿（17）　底径4.0cm。底部は回転ヘラケズリによって成形され、露胎のままである。釉は淡緑色味を帯びた透明なもので、薄く施され、光沢がある。

47SX426出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（18）　口径9.2cm、器高1.0cm、底径6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（19）　口径15.2cm、器高2.6cm、底径11.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX427出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（20・21）　口径8.1cm、器高1.1・0.9cm、底径6.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（22～24）　口径13.4～16.2cm、器高2.8～3.0cm、底径8.0～11.0cm。底部は糸切りされ、23・24には板状圧痕がみられる。

白磁

椀（25）　高台径6.4cm。高台付近には施釉されない。VI又はVII類。

47SX430出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（26）　口径7.8cm、器高0.8cm、底径6.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

瓦質土器

鉢（27）　体部内面はナデである。

白磁

皿（28）　口径11.8cm。口縁端部の釉はかき取られる。IX類。

47SX432出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（29）　口径8.5cm、器高0.8cm、底径6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

皿（30）　口径13.4cm。口縁端部の釉はかき取られる。

47SX442出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（31）　口径8.0cm、器高1.1cm、底径6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（32）　口縁端部は暗青灰色に変色する。

白磁

皿（33）　口径8.8cm。口縁端部の釉はかき取られ、外面体部下半も施釉されない。IX-2類。

47SX444出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（34～36）　口径8.0～8.8cm、器高1.2～1.5cm、底径5.6～6.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX446出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（37）　口径8.5cm、器高1.1cm、底径6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX453出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（38）　口径7.8cm、器高1.2cm、底径5.75cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX454出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（39）　口径11.8cm、器高2.4cm、底径8.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX457出土土器（Fig.59）

土師器

小皿a（40～44）　口径8.0～9.2cm、器高1.1～1.3cm、底径6.6～7.5cm。底部は糸切りされ、

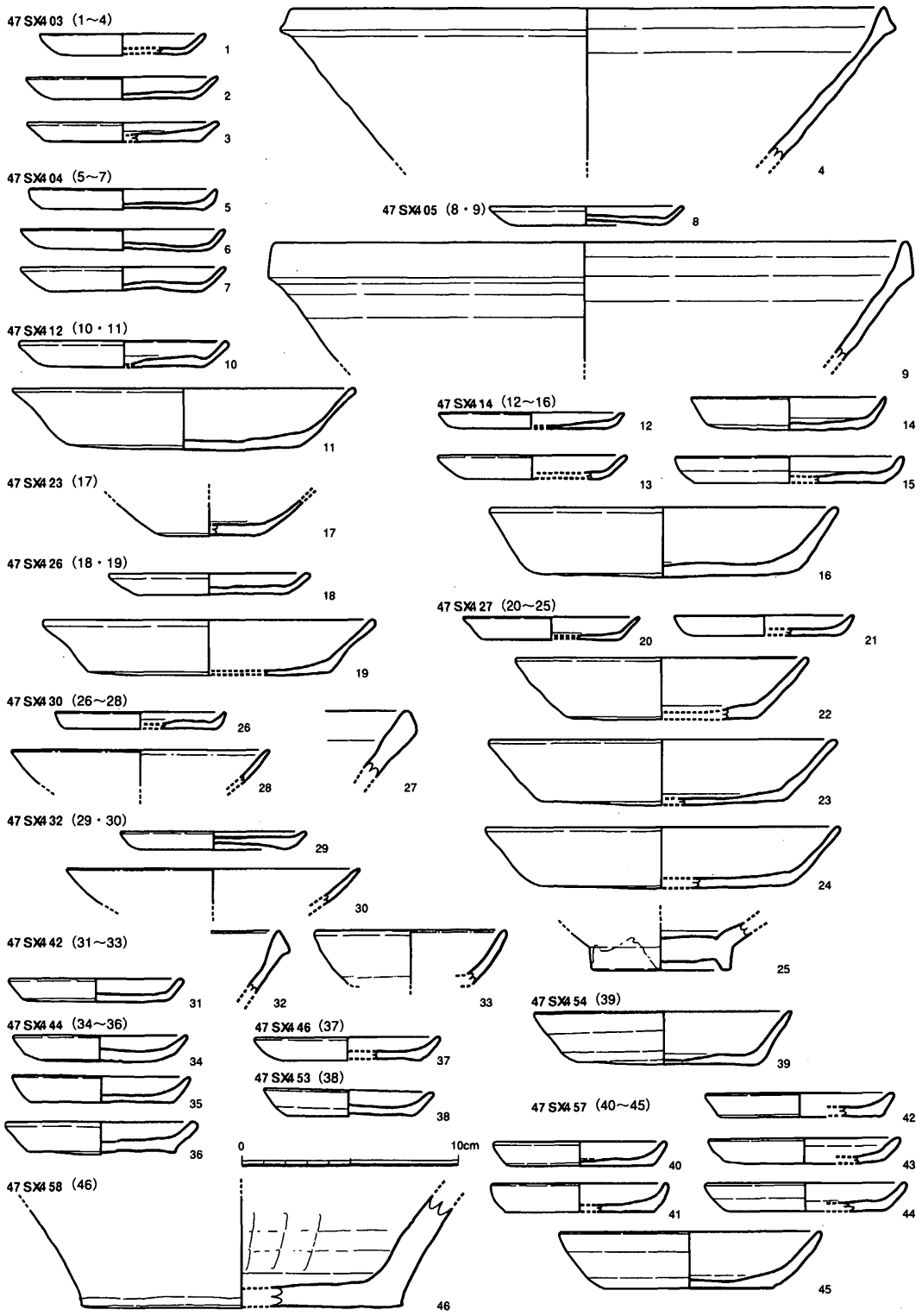


Fig.59　その他の遺構出土土器実測図4（1/3）

40～42には板状圧痕がみられる。

坏a（45）　口径12.0cm、器高2.6cm、底径7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX458出土土器（Fig.59）

陶器

甕（46）　底径14.7cm。体部内面はケズリ様の強いナデ、外面は縦方向の粗いナデ、外面底部は未調整だが、未乾燥段階に砂を敷いた場所に置かれたらしく砂粒の小さな凹凸が目立ち、さらに使用による摩耗も観察される。常滑産とみられる。

47SX461出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（1・2）　口径8.1・8.4cm、器高0.9・1.0cm、底径6.1・6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

小皿b（3）　口径7.1cm、器高1.4cm、底径4.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（4）　口径12.6cm、器高2.6cm、底径9.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX462出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（5）　口径9.5cm、器高1.6cm、底径7.5cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がみられる。

丸底坏a（6）　口径15.0cm、器高3.7cm。内面はミガキbで調整され、底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。

47SX465出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（7）　口径7.6cm、器高1.2cm、底径5.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX467出土土器（Fig.60）

陶器

盤（8）　底径24.2cm。内面には鉄絵による施文があり、施釉される。釉は淡緑灰色に発色するもので、鈍い光沢がある。外面は基本的には露胎で、底部は未調整である。I-b類。

47SX471出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（9）　口径8.0cm、器高1.3cm、底径6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX474出土土器（Fig.60）

陶器

壺（10）　口径10.0cm。口縁上面の平坦部の両側縁部に目跡が観察される。内外面ともに不透明な釉がかけられ、内面では灰黒色、外面では黒褐色に発色する。

47SX479出土土器（Fig.60）

同安窯系青磁

皿（11）　口径10.8cm、器高2.1cm、底径6.0cm。見込みにクシによる施文がある。釉は外面底部にはかからない。

47S X 480出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（12～14）　口径7.5～8.1cm、器高1.1～1.3cm、底径5.8～6.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

小皿c（15）　口径8.2cm、器高2.0cm、高台径6.6cm。底部は糸切りされる。

坏a（16～21）　口径10.4～12.9cm、器高2.5～3.0cm、底径6.5～8.3cm。底部は糸切りされ、一部を除いて板状圧痕がみられる。

47S X 484出土土器（Fig.60）

土師器

坏a（22）　口径16.0cm、器高3.1cm、底径11.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

陶器

鉢（23）　底径10.0cm。底部は高台状にケズリ出し、その畳付け部分の釉をかき取っている。他の部位には明灰茶色に発色する不透明な釉が施される。VI類。

47S X 488出土土器（Fig.60）

土師器

坏a（24）　口径12.8cm、器高2.8cm、底径7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

瓦質土器

鉢（25）　口径27.2cm。淡灰白色で、内面は使用による摩耗が著しい。

47S X 490出土土器（Fig.60）

土師器

羽釜（26）　口径18.6cm。鍔は完存しないが、体部の上位に取り付く。外面はヨコナデ調整で部分的に煤が付着している。内面は横方向のハケ目である。

白磁

皿（27・28）　口径10.4・10.8cm。両者とも口縁端部の釉をかき取る。27の体部下半には施釉されず、IX-2類。28は口縁部を大きく外反させる。IX-d類。

47S X 493出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（29～31）　口径7.1～8.6cm、器高1.0～1.2cm、底径4.9～7.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 503出土土器（Fig.60）

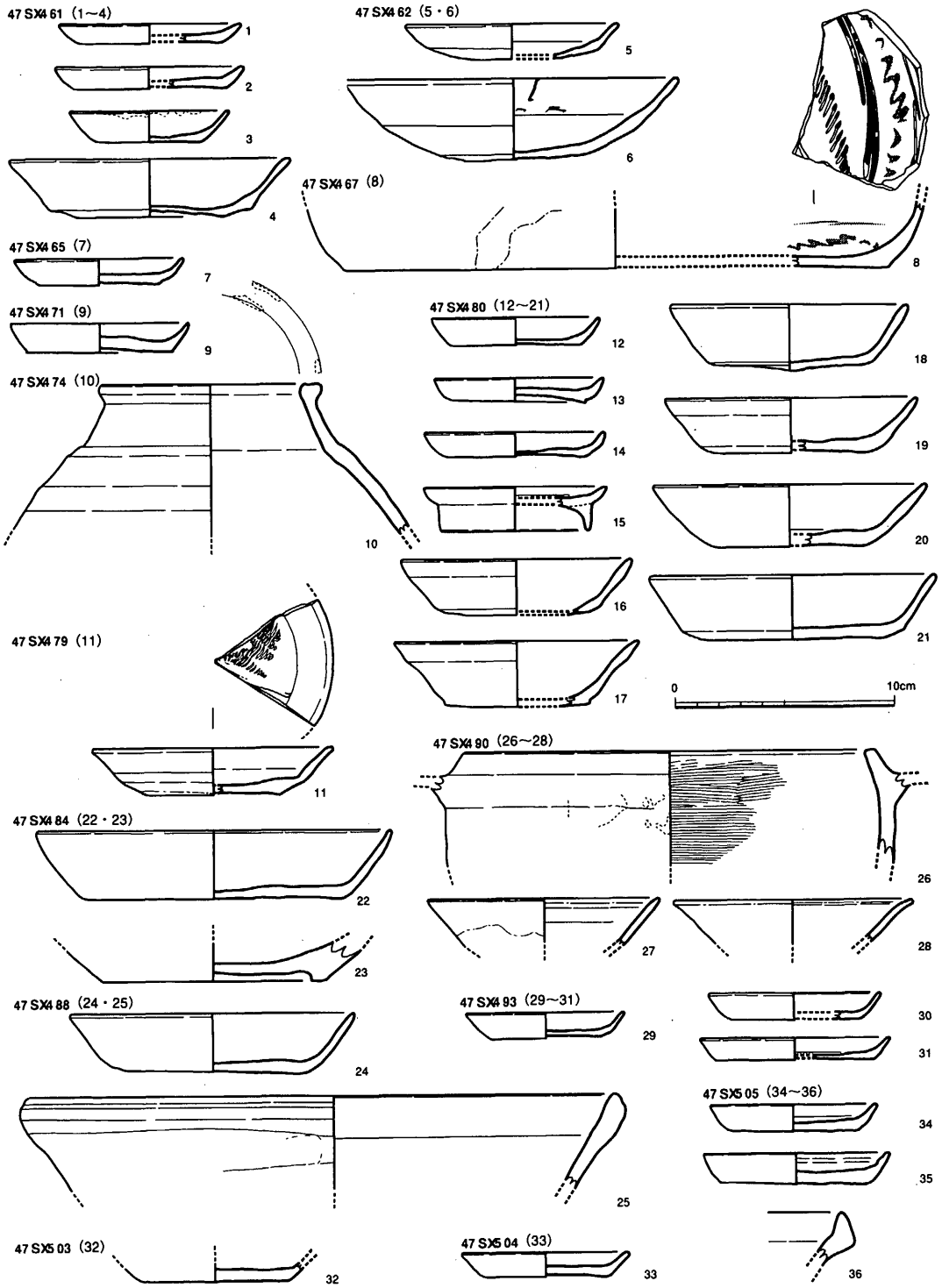


Fig.60　その他の遺構出土土器実測図5（1/3）

白磁

皿（32）　底径6.4cm。釉は外面底部まで施される。IX-1類。

47SX504出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（33）　口径7.5cm、器高1.1cm、底径5.3cm。底部は糸切りされる。

47SX505出土土器（Fig.60）

土師器

小皿a（34・35）　口径7.5・8.4cm、器高1.2・1.4cm、底径5.6・6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（36）　内面はナデである。

47SX516出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（1・2）　口径7.6・8.0cm、器高1.1・1.2cm、底径5.2・6.0cm。底部は糸切りされ、1には板状圧痕がみられる。

瓦質土器

鉢（3）　底径27.8cm。外面はナデ、内面には丁寧なミガキcが施される。

47SX517出土土器（Fig.61）

土師器

坏a（4）　口径12.0cm、器高2.5cm、底径8.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX525出土土器（Fig.61）

土師器

脚付坏（5）　口径13.95cm、器高4.8cm（坏部高3.0cm）、底径8.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられるほか、3方向に脚が貼り付けられる。脚部は指圧で成形される。なお底部外面に墨書らしきものが観察されるが、判読できない。

47SX528出土土器（Fig.61）

白磁

皿（6）　口径10.6cm。口縁端部の釉はかき取られる。IX類。

47SX529出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（7）　口径7.25cm、器高1.3cm、底径5.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（8・9）　口径11.8・11.9cm、器高2.65・2.3cm、底径8.1・8.0cm。底部は糸切りされ、9には板状圧痕がみられる。

白磁

皿（10）　口径10.4cm、器高2.25cm、底径5.8cm。口縁端部の釉はかき取られ、底部外面には釉が及んでいる。IX-1-b類。

47SX532出土土器（Fig.61）

瓦質土器

擂鉢（11）　外面には粘土紐の重ね目とみられる痕跡が観察され、内面には縦方向で太いクシ目があり擂り目とする。口縁部内面上位はかなり摩耗しており、使用の跡が窺える。

47SX535出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（12・13）　口径7.2・8.4cm、器高1.2cm、底径6.2・7.0cm。底部は糸切りされ、13には板状圧痕がみられる。

坏a（14・15）　口径12.0・12.5cm、器高2.5・2.3cm、底径7.6・8.2cm。底部は糸切りされ、14には板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（16）　口縁部外面は暗灰色に変色し、内面下半は使用により平滑になる。

白磁

椀（17）　高台径6.2cm。見込みは幅約1cmの輪状に釉を削り取り、白土がそれに合わせた形で帯状に付着し目跡とする。外面は高台畳付及び高台下位には釉を施さず、白土が付着している。VIII類。

47SX536出土土器（Fig.61）

須恵質土器

鉢（18）　口縁端部外面は暗青灰色に変色し、内面下半はナデである。

47SX537出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（19）　口径8.7cm、器高1.2cm、底径6.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX538出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（20・21）　口径8.2cm、器高1.3cm、底径5.8・6.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX540出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（22・23）　口径7.1・8.3cm、器高1.2・1.3cm、底径5.3・6.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

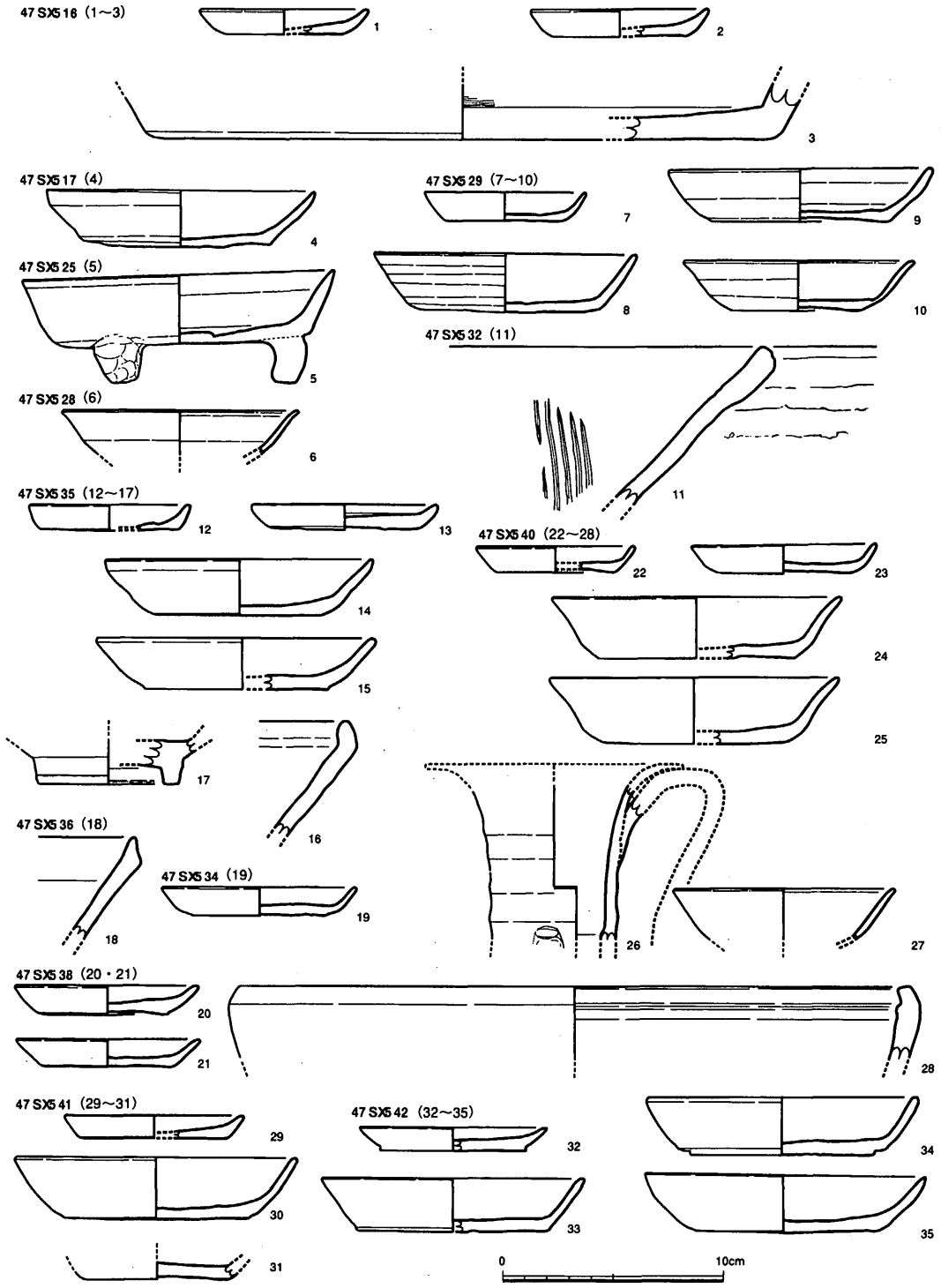


Fig.61　その他の遺構出土土器実測図6（1/3）

坏a（24・25）　口径13.0cm、器高2.8・3.0cm、底径8.8・8.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

瓦質土器

鉢（28）　口径31.0cm。口縁部、体部ともにヨコナデで調整され、口縁部内面を段状に作る。

白磁

水注（26）　頸部の資料で、強いヨコナデが施され、上位に把手が貼り付けられる。下位には耳の一部が残存する。釉は残存部の全面にみられ、薄い青灰色味を帯びた透明なもので光沢がある。III類。

皿（27）　口径10.0cm。口縁端部の釉をかき取る。IX類。

47SX541出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（29）　口径8.0cm、器高1.0cm、底径6.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（30）　口径12.6cm、器高2.8cm、底径8.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

白磁

皿（31）　底径6.4cm。底部外面にも釉が施される。IX-1類。

47SX542出土土器（Fig.61）

土師器

小皿a（32）　口径8.4cm、器高1.0cm、底径6.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（33～35）　口径11.8～12.6cm、器高2.4～2.6cm、底径8.2～9.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX543出土土器（Fig.62）

土師器

小皿a（1）　口径7.8cm、器高1.3cm、底径5.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

須恵質土器

鉢（2）　口径26.9cm。口縁端部は黒灰色に変色し、内面下半は使用により平滑となるとともに砂粒が剥落し、クレーター状を呈している。

47SX544出土土器（Fig.62）

土師器

小皿a（3）　口径7.2cm、器高1.0cm、底径5.4cm。底部は糸切りされる。

坏a（4）　口径11.6cm、器高3.2cm、底径6.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47SX545出土土器（Fig.62）

土師器

小皿a（5～7）　口径7.2～8.2cm、器高0.8～1.3cm、底径5.3～6.4cm。底部は糸切りされ、板

状圧痕がみられる。

47S X 553出土土器（Fig.62）

土師器

小皿a（8）　口径7.5cm、器高1.3cm、底径5.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

坏a（9）　口径12.5cm、器高2.6cm、底径8.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 561出土土器（Fig.62）

龍泉窯系青磁

小椀（10）　口径8.6cmで、外面には蓮弁文を配する。釉は緑青色に発色し、やや透明度は低いが光沢があってかなり厚めに施される。III-5-b類。

坏（11）　釉は高台畳付け部分をかき取るほかは全面に厚く施され、薄い緑青色に発色し、やや透明度は低いが光沢がある。III-3類。

47S X 564出土土器（Fig.62）

土師器

小皿a（12）　口径8.0cm、器高1.1cm、底径6.6cm。底部は糸切りされる。

坏a（13・14）　口径10.6・12.0cm、器高2.9・3.2cm、底径7.6・7.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

陶器

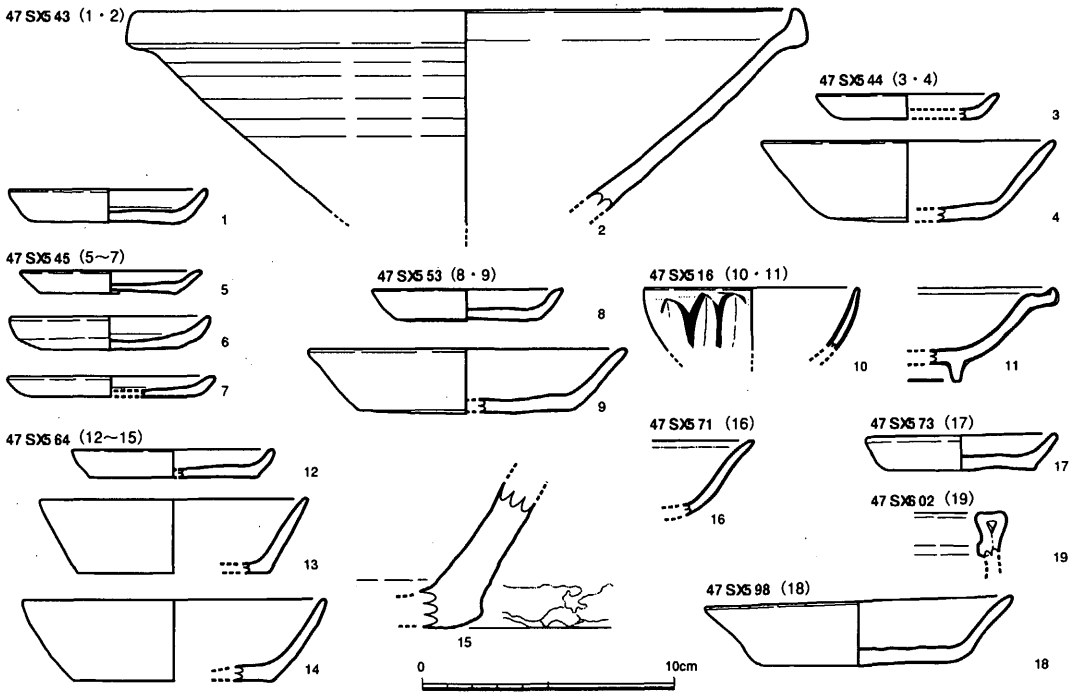


Fig.62　その他の遺構出土土器実測図7（1/3）

甕（15）　外面には緑灰色に発色する釉がみられるが、下位及び底部にはかからない。底部外面は未調整だが使用による摩耗が観察される。また底端部は凹凸が著しい。

47S X 571出土土器（Fig.62）

白磁

皿（16）　口縁端部の釉はかき取られ、体部下半には施釉されない。IX-2類。

47S X 573出土土器（Fig.62）

土師器

小皿a（17）　口径7.6cm、器高1.4cm、底径5.8cm。底部は糸切りされる。

47S X 598出土土器（Fig.62）

土師器

坏a（18）　口径12.2cm、器高2.5cm、底径7.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。

47S X 602出土土器（Fig.62）

陶器

19は、粘土を薄く引き上げて3段に折り曲げて成形した口縁部の資料だが器種を特定できない。口縁部の断面観察では折り曲げに伴って三角形の空洞ができている。また口縁部上面の平坦部には部分的に目跡が観察される。釉は残存部の全面にかかり、暗茶褐色の不透明なもので、光沢もない。C'ab類。

各層出土土器

暗灰色土層出土土器（Fig.63）

土師器

小皿a（1～14）　口径7.4～10.0cm、器高0.8～1.5cm、底径5.4～8.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（15～22）　口径11.6～15.6cm、器高2.1～2.8cm、底径7.2～10.6cm。すべて底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

須恵質土器

鉢（23）　口径24.7cm。口縁端部外面は暗灰色に変色している。焼成はやや軟質。

龍泉窯系青磁

椀（24・25）　24は口径17.0cm。外面に蓮弁文を配する。I-5-b類。25は外面に細身の蓮弁文を配し、釉は緑灰色に発色する透明度の高いもので、光沢がある。III-2類。

小椀（26・27）　26は口径10.8cm、器高3.6cm、高台径6.0cm。見込みにはヘラによる文様があり、高台畳付部分は釉をかき取っている。釉は深緑灰色に発色する透明度の高いもので、厚めにかけられる。III-5-a類。27は類例の少ない形状だがI類の範囲で捉えたい。口径13.9cm、器高4.5cm、高台径6.2cm。淡緑色に発色する釉は透明度が高く。光沢があるが貫入も目立ち、高

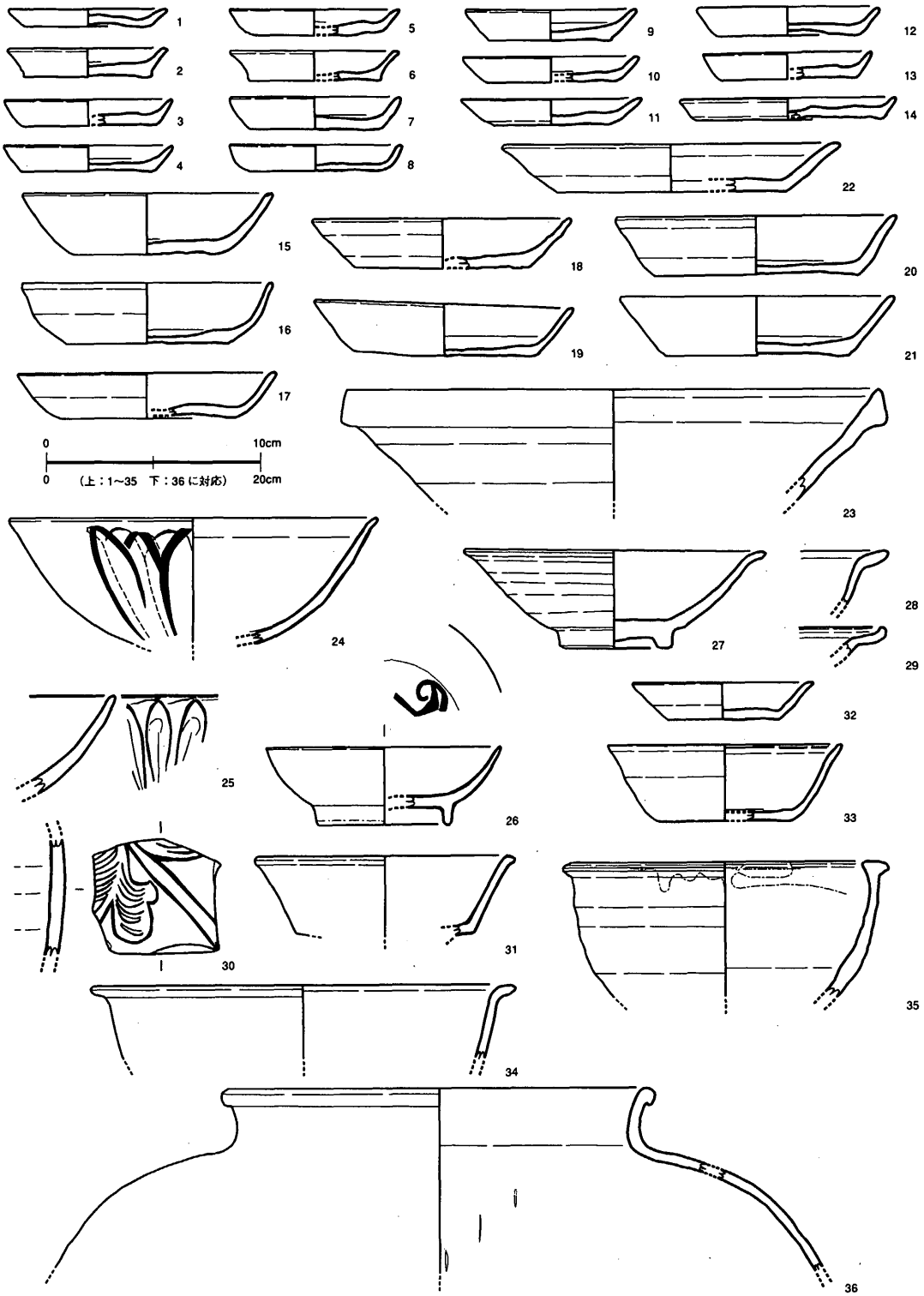


Fig.63　暗灰色土層出土土器実測図（1/3）

台畳付から内側にはかからない。焼成は良好だがやや軟質気味。

坏（28）　釉は暗灰緑色に発色し、光沢がある。III-2類。

盤（29）　口縁端部をわずかに摘み上げるもので、釉は淡緑色に発色し、鈍い光沢があるが貫入も目立つ。

壺（30）　胴部の破片で、外面にヘラによる浅い陰刻の文様がある。内外面ともに施釉され、釉は深緑灰色に発色し、透明度はやや低い。

白磁

坏（31）　口径12.0cm。口縁端部を外側に小さく折り曲げる。釉は灰白色に発色し、光沢はあるが貫入が目立つ。

皿（32・33）　32は口径8.4cm、器高1.7cm、底径5.2cm。口縁端部の釉をかき取るほかは全面に施釉される。IX-1-a類。33は口径10.8cm、器高3.6cm、底径6.0cm。口縁端部の釉をかき取るほかは全面に施釉される。IX-1-c類。

陶器

鉢（34）　口径19.6cm。残存部全体に施釉され、釉は暗茶灰色に発色する不透明なもので、表面には白色の斑点が目立ち光沢もない。A群。

小盤（35）　口径15.0cm。内面全体と外面は口縁部直下まで釉がかかるが、口縁端部（上面）にはかからず、外面に近い位置に白色砂粒が付着しており目跡と考えられる。釉は淡緑灰色に発色し、透明度は低く鈍い光沢がある。胎土は明灰色、暗灰色で肌理は細かく、黒灰色斑が若干混在する程度の精良なものである。硬質に焼成される。II-1-a類。

甕（36）　口径40.0cm。全体に灰色を呈し、口縁部から頸部にかけては内外面ともに黒褐色に変色し、肩部以下の外面には焼成時の降灰により白濁化した部分がある。内面には調整に用いた工具痕跡がみられる。備前産か。

茶色土層出土土器（Fig.64～66）

土師器

小皿a（1～41）　口径6.6～9.6cm、器高0.85～1.45cm、底径4.8～7.9cm。底部は糸切りされ、多くの資料で板状圧痕が観察される。個体で特色あるものを示すと、3では体部外面に黒褐色を呈するタール状の小さな付着物がある。また3と9には茶褐色の付着物も多数みられ、それらは鉄分の酸化したものと思われる。いずれもP19区の出土である。また19の外面の一部には煤が付着している。特殊な資料として39がある。一見して体部の立ち上がりが他より短いことに気づくが、口縁部付近は研磨されたように摩耗しており、おそらく坏aの口縁部破損品を研磨して小皿aとしたのではないかとみている。ただ如何なる理由でこうした手の込んだ作業を必要としたのかという答えは用意できない。

小皿b（42～47）　口径5.4～7.0cm、器高1.4～1.7cm、底径4.0～4.8cm。底部は糸切りされ、

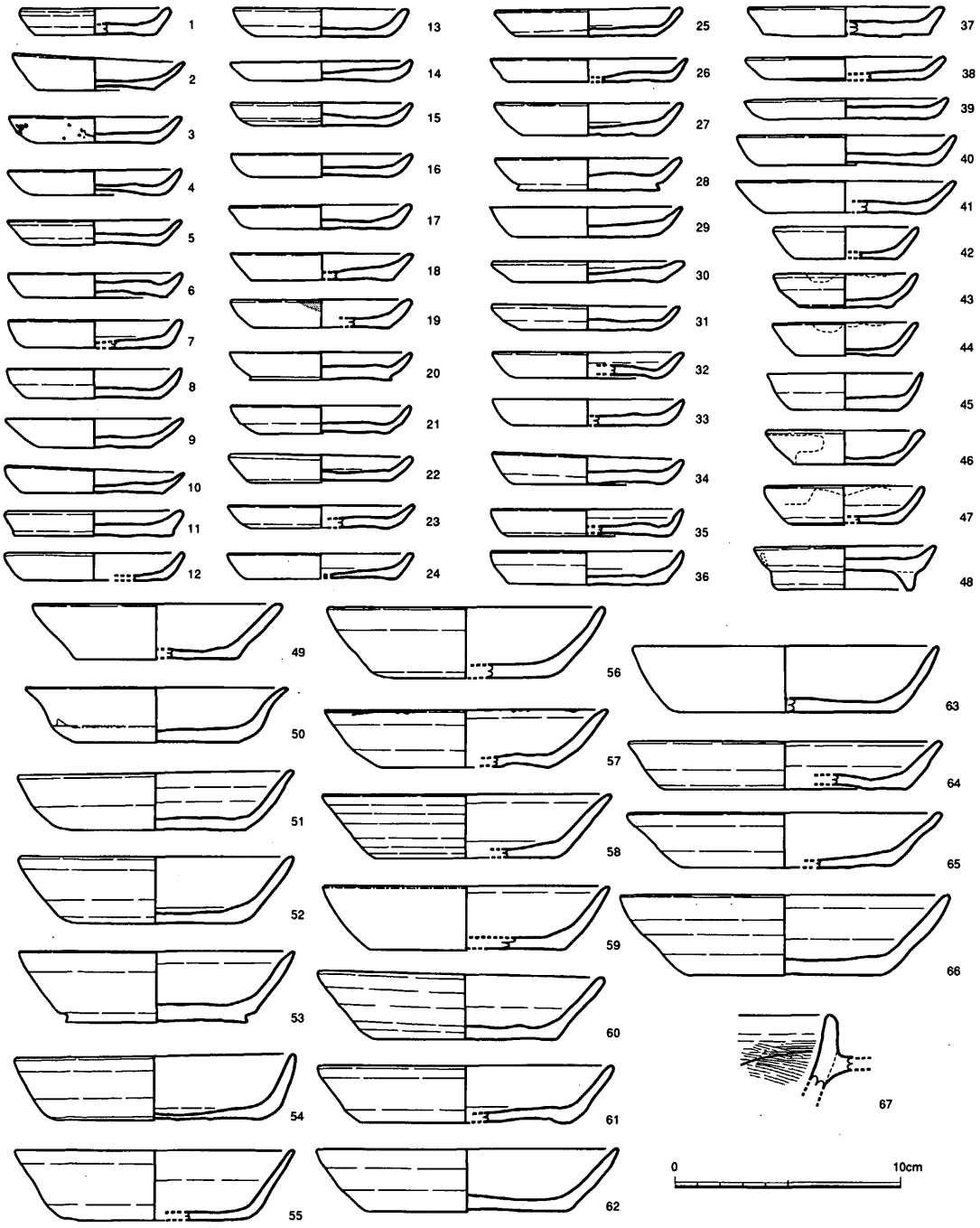


Fig.64　茶色土層出土土器実測図1（1/3）

約半分の資料に板状圧痕がみられる。43・44・46・47の各資料の口縁部周辺には煤が付着している。

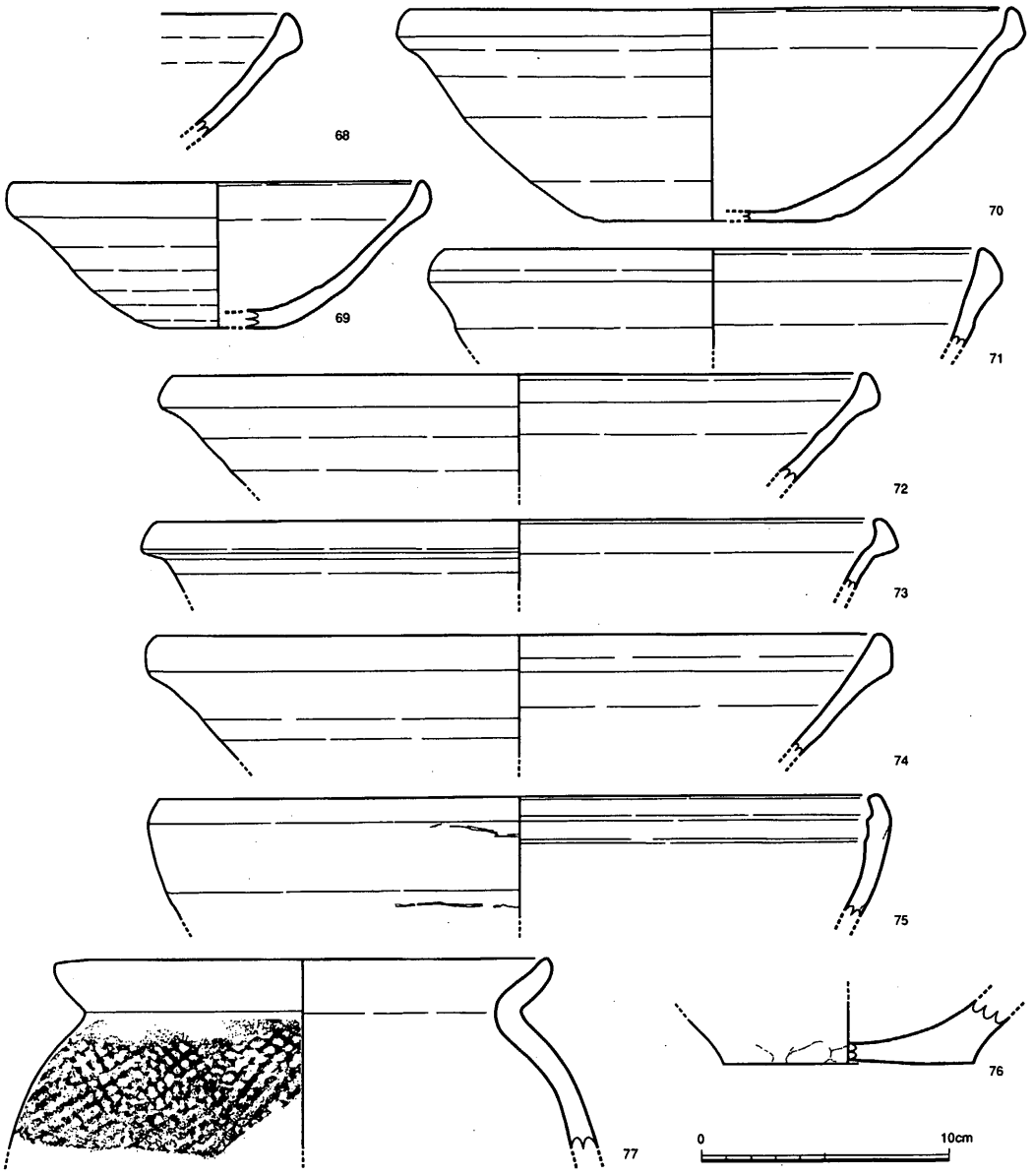


Fig.65　茶色土層出土土器実測図2（1/3）

小皿c（48）　口径8.0cm、器高1.9cm、高台径6.0cm。高台貼り付けに伴うヨコナデで底部の切り離し方法は不明。

坏a（49～66）　口径10.8～14.4cm、器高2.4～3.5cm、底径6.8～10.6cm。底部は糸切りされ、ほとんどの資料に板状圧痕がみられる。57の口縁部には断続的に煤が付着している。また52の底部は使用による摩耗のためか調整痕がかなり擦り消えている。

羽釜（67）　鍔が完存しないためその形状は不明だが、やや開き気味に立ち上がる体部を有

する。内面の口縁部下位に浅い沈線が巡り、それ以下に略横方向のハケ目がみられる。外面の鍔下面以下には煤の付着が認められる。

須恵質土器

鉢（68～74）　68は口縁端部外面が暗灰色に変色する。69は小型の資料で、口径17.0cm、器高5.8cm、底径4.7cm。70は口径25.4cmで、底部は糸切りされ、口縁端部外面は黒色に変色する。内面底部近くは使用による摩耗で平滑になる。71～74は口径21.6～29.2cm。口縁端部外面は黒灰色に変色する。

瓦質土器

鉢（75・76）　75は口径29.9cm。色調は灰黒色で、体部外面には粘土の貼り合わせ痕がみえる。口縁端部をやや内傾させ、内側に2条の軽い段を作る。輸入陶器の鉢を模倣したものか。76は底径10.0cmで、底部は糸切りされ、内面は使用による摩耗が著しい。

甕（77）　口径20.0cm。口縁部周辺はヨコナデ、体部外面は格子目の叩き痕であるが、内面の調整は風化して判然としない。

白磁

椀（78）　高台径6.2cm。残存部の範囲では外面は露胎で回転ヘラケズリ調整され、畳付けは使用によってかなり摩耗している。内面は緑味を帯びた灰白色に発色する釉が施され、見込みの外周に沈線が巡り釉が溜まる。森田分類C類。

皿（80～93）　80は口径9.3cm、器高2.2cm、底径4.1cmで、淡灰緑色に発色する釉は厚めにかけられるが、外面底部では円形にかき取る。またその部分に径3.2cm余りの円周を描く剥離痕がみられる。VIII-1-a類。81は底径3.9cmで80と同様に底部に円形の剥離痕がある。VIII-1-a類。82は口径12.6cm。見込みにスタンプによる細線の施文がある。83は口径8.2cm、器高1.95cm、底径5.0cm。口縁端部の釉はかき取られ、その部分に漆を巻いている。底部は施釉される。IX-1-a類。84・85は口径10.6cm、器高2.8・2.9cm、底径6.4・6.0cm。口縁端部の釉をかき取り、底部に施釉される。IX-1類で、85は口縁端部をやや外反させる。86～89は口径11.4～12.4cmで、口縁端部の釉はかき取る。89は口縁部を外反させる。IX類。90～93は体部下半に施釉されないIX-2類で、93の口縁部は釉をかき取ったのち漆を巻いている。92の体部は他にくらべ丸味を帯びている。

紅皿（79）　高台径1.4cm。型による成形で体部外面下半は露胎、内面は空色味を帯びた透明釉がかかる。

龍泉窯系青磁

椀（94～96）　94は高台径5.3cm。外面には蓮弁文を配し、見込みには花弁のスタンプ文を押捺する。I-5-c類。95は口径15.2cm。外面に蓮弁文を配するI-5-b類である。96は口径17.0cmで、口縁端部がわずかに外反する。外面にはやや細身の蓮弁文を配し、釉は厚めにかけられる。

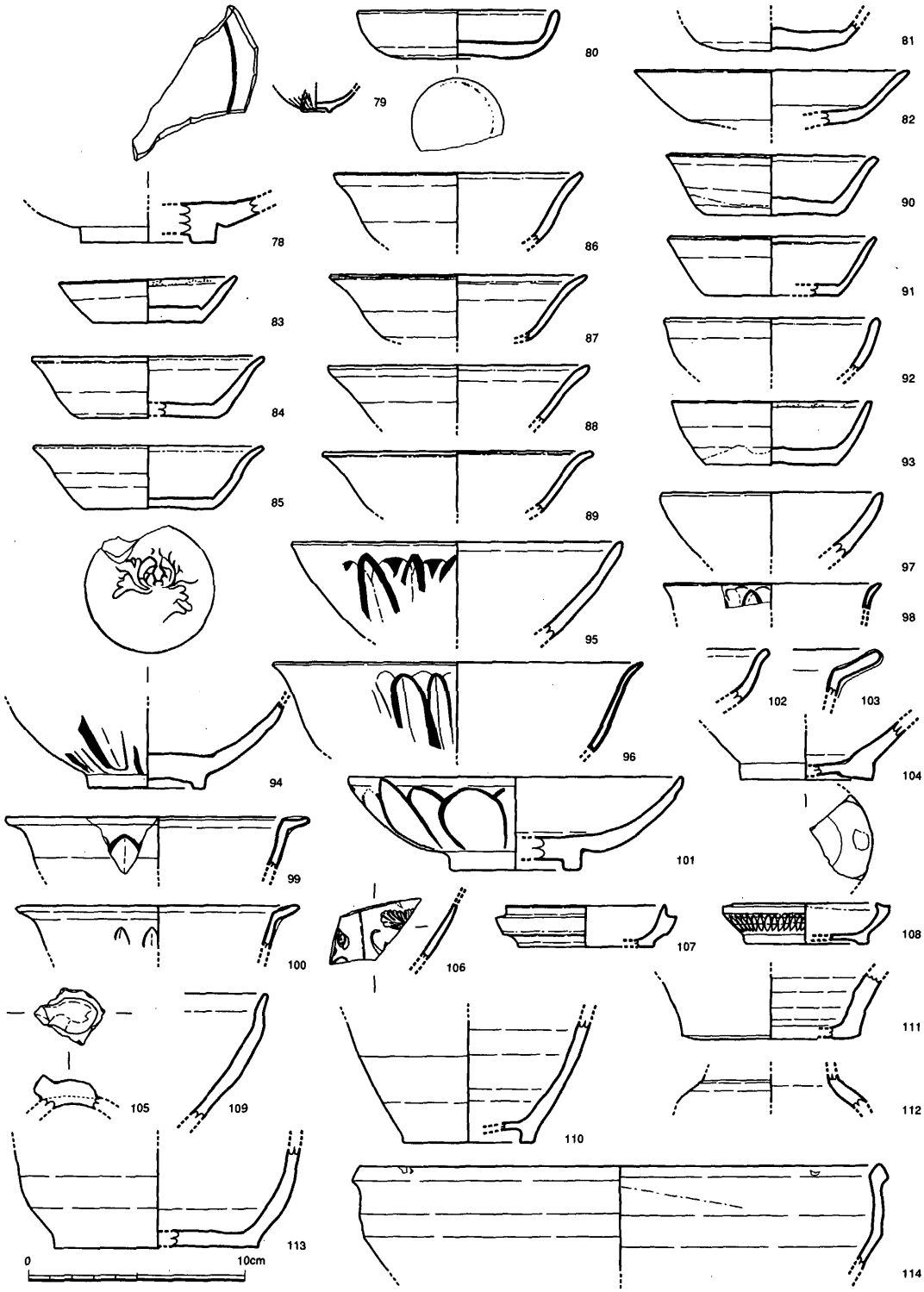


Fig.66　茶色土層出土土器実測図3（1/3）

III-3類。

小椀（97・98）　97は口径10.2cmで、無文である。I-1類。98は口径10.0cmで、外面に蓮弁文を配する。釉は厚めにかけられる。III-3類。

坏（99・100）　両者とも口縁端部を外側に大きく屈曲させるもので、外面に蓮弁文を配している。口径14.0・13.0cmで、釉は厚めにかけられる。III-4類。

皿（101・102）　101は口径15.4cm、器高4.25cm、高台径6.0cm。外面にはヘラで線描きされた蓮弁文があり、釉は水色味を帯びた灰色で透明度は低い。高台畳付以内には施釉されない。102はIV類以降のものと考えられる。

盤（103）　釉はかなり厚めに施される。III類。

蓋（105）　摘み部分とみられ、灰緑色のやや不透明な釉が施される。

高麗青磁

椀（104）　高台径6.0cm。見込みは段状に大きく窪み、底部は蛇の目高台が削り出される。畳付には目跡がみえ、釉は残存部の全体にかかり、黄緑色に発色し光沢がある。I-1類。

青白磁

椀（106）　きわめて薄く作られ、内面にはスタンプによる花弁状の施文がある。内型によるものか。

合子（107・108）　107は口径7.2cm、器高0.9cm、底径6.2cmで、内面と外面の最大径付近にのみ施釉される。外型による成形である。108は口径7.6cm、器高1.8cm、高台径5.4cm。外型による成形とみられ、外面には型による小蓮弁状の文様がある。釉は内面から体部外面中程にかけられるが、口縁部はかき取られる。

陶器

天目椀（109）　釉は黒褐色の不透明な釉で光沢がある。釉の表面には小さなピンホール状の窪みが多数みられる。

壺（110～112）　110は底径6.0cmで、茶褐色の不透明な釉が施される。111は底径8.2cmで、外面は黄茶白色、内面は灰紫色で、底部は使用による摩耗が著しい。112は中国産の緑釉陶器で外面に施釉され、淡緑白色に発色する。内面は露胎である。

小盤（113）　底径9.2cm。黄灰色の不透明な釉が内面に施される。

盤（114）　口径24.6cm。口縁端部及び内傾した面に目跡が付着する。体部内面中程以下に黄灰色で光沢の鈍い釉がかけられる。I-2-b類。

この他に唐津焼皿、蛸唐草文を外面に配する壺等、近世に属する資料が若干量見受けられるが、調査時に上面の遺構または層位から混入した可能性が高い。

黄色土層出土土器（Fig.67）

土師器

茶釜（1）　口径11.2cm。残存部分の調整はヨコナデである。

龍泉窯系青磁

盤（2・3）　2は口径23.0cmで、外面に蓮弁文を配している。釉は残存部の全面にかかり、緑色味を帯びた灰白色に発色し、光沢がある。II-4類。3は体部内面に縦方向のクシ目を入れる。IV類以降。

染付

小椀（4）　高台径3.2cm。高台畳付の釉はかき取られる。

皿（5）　口径12.2cm。内面に文様を描き、見込みは段状を呈している。

表土出土土器（Fig.67）

白磁

皿（6）　口径9.6cm、器高2.6cm、底径6.0cm。口縁端部の釉はかき取られ、その部分に黒漆が付着している。また釉は、体部下半及び底部にはかからない。IX-2類。

龍泉窯系青磁

椀（7・10・11）　7は口縁端部を内湾させるタイプで、口径10.4cm、器高5.3cm、高台径4.1cm。外面に蓮弁文を配し、釉は青色味を帯びた白灰色で厚めにかけられるが、高台畳付以下は露胎である。I-6-a類。10は口径14.4cmで、薄い緑灰色に発色する釉を施す。IV類。11は口

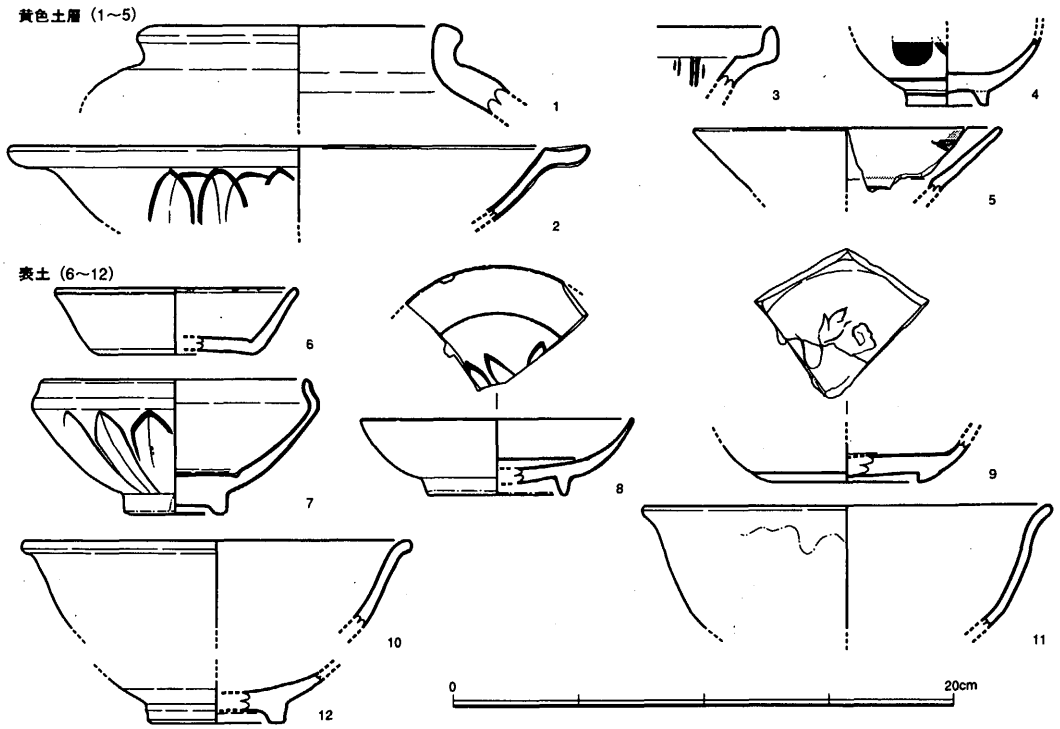


Fig.67　黄色土層・表土出土土器実測図（1/3）

径16.2cmで、黄色味を帯びた緑灰色に発色する釉を施す。IV類。

坏（8・9）　8は口径10.8cm、器高3.0cm、高台径5.5cm。見込みに花弁状の文様がヘラによって描かれる。薄い緑灰色に発色し光沢のある釉は、口縁端部できわめて薄いが他は厚めにかかり、高台畳付のみかき取っている。III-5類。9は底径6.2cm。底部中央を削り込んで周囲を残し高台状に仕上げる。見込みには細いヘラによる花弁状の文様が施される。薄緑色に発色し光沢のある釉は外面でやや薄く、内面では厚めに施される。VI類。

高麗青磁

椀（12）　高台径5.4cm。薄い黄色味を帯びた灰緑色に発色する釉は、高台畳付にはかからない。III類。

（B）土製品

（ア）鋳型

47SK090出土鋳型（Fig.68・69）

1～23は梵鐘の鋳型と考えられる。

龍頭（1）　1は残存長8.1cm、最大幅7.3cmで、龍の目、鼻及び牙の一部が残存する。対になる鋳型との接合面（巾木）は平坦で、鋳型外面はナデで仕上げると思われる（不明瞭）。鋳型面はクロミの付着で暗灰色を呈し、他は赤褐色である。胎土は緻密精良で均質なものだが外型になるような粗い部分はみられない。正面図の下面は笠形の鋳型の上面に置かれる部分がのこり、平坦である。

突帯（2・3）　2は5.5×2.0cm、厚さ2.7cmの破片で、蒲鉾状突帯が3条並ぶ鋳型。中央の突帯がやや大きく背も高い。挽き型で作られており、中央突帯の下端部での半径は21.8cm前後に復元できる。断面図下面の平坦部は表面が明灰色を呈していて、突帯部分と変わらないが、巾木に相当する部分とみられる。梵鐘笠形と上帯の境目にある突帯と考えている。3も破片は小さいが2と同じ部分の資料と考えられる。

縦帯・横帯（4～9）　4は長さ9.3cm、幅10.5cm、厚さ5.6cmの破片で、鋳型面には縦方向に走る2条の突帯があり、両者の間隔は4.3cmである。また表面には挽き型の痕跡があり、わずかに湾曲し、その径は42.4～52.8cm（残存する部位が小さすぎるため誤差が大きい）になる。縦方向の断面でも上方でわずかに内湾しており、梵鐘上位に近い部分かと思われる。胎土は表面の上げ真土が厚さ2mmほどで明灰色を呈し、白色粒子を含むが精良で硬質のものである。外側は暗茶色、暗褐色を呈し、大粒の砂粒を多量に含むほかわずかながら炭化物が混入し、鉄分による酸化部分も見受けられる。5は長さ7.6cm、幅5.0cm、厚さ1.5cmの破片で、突帯間の距離が3.5cm、突帯は図の左側のものが2条分確認できる。破片上辺は巾木とみられるやや傾斜した平坦部があり、そこにクロミは観察されないが、真土は鋳型面からこの面までほぼ同じ厚さ（3～4mm）で観察される。6は長さ5.9cm、幅3.9cm、厚さ2.8cmの破片で、図の上部に2条の横帯、

Fig.68　47SK090出土鋳型実測図1（1/3）

左に縦帯の一部が見える。7は長さ6.9cm、幅4.5cm、厚さ2.4cmの破片で、2条の横帯が上下に平行して存在しており、草の間もしくは中帯の部分とみられる。図の上面にはわずかに平坦部分が観察され、巾木とみられる。8は長さ4.9cm、幅5.9cm、厚さ2.1cmの破片で、5とほぼ同じ部位とみられ同様な状況を示している。ただ突帯間が3.0cmとやや狭くなっている。9は長さ8.0cm、幅10.6cm、厚さ5.8cmの破片で、図の右側に縦方向に走る2条の突帯が確認できる。挽き型の痕跡が観察され、復元径は約45.2cmである。真土は厚めで0.6～1.1cmほどあり、表面部分は明青灰色、内側で暗茶褐色を呈する。外型の胎土は粗く、砂粒を多量に含んでいる。

草の間（10）　長さ7.1cm、幅10.2cm、厚さ3.7cmの破片で、上下に2条の横帯があり、図の右側に縦帯がみられることから草の間の部分と考えた。横帯同士の間隔はほぼ4.5cmで、表面には挽き型の痕跡がみられ、直径は52.4cm前後に復元できる。真土は5～6mmほどあり、茶白色で肌理細かな胎土であるが表面部分は淡灰色を呈している。

笠形（11）　長さ2.6cm、幅5.7cm、厚さ0.7cmの破片で、大きく傾斜するとともに図の下端部に突帯が存在したとみられる。小片のため径は復元できない。

乳（12～21）　埋め込み式の鋳型で、乳の先端部分にあたる。製品の形状は平たい円錐形で径2.3～2.7cm、深さ（高さ）0.7cm前後、鋳型自体は幅3.2～3.6cm、厚さは0.4～1.5cmと様々で、完存資料がないことから長さは明らかでないが、少なくとも2個以上連続させて一つの鋳型としたものである。鋳型面（その背面も同様だが）に反り（湾曲面）がないことから、縦方向に並べて埋め込まれたものと考えられる。胎土はきめ細かく白色粒子を含むもので真土と考えられる。外面にやや粗めの胎土が付着する例（12・17～19）があり、外型の一部かと思われる。

下帯・駒ノ爪（22・23）　両者は本来一具のものと考えられ、駒ノ爪部分は2段の弧状をなし、最下端（口縁端部）での直径は54.8cmに復元できる。下帯部分は2条の突帯に挟まれた幅3.8cmの範囲に、（均整）唐草文が配される。22の資料はその中心飾り部分で、半円形の中房から3葉の花弁が開き、その弁間から茎が派生し、随時反転しながら伸びている（図下に復元図提示）。駒ノ爪端から先には平坦面がつづくがここにはクロミはなく、淡茶灰色を呈していることから、鋳型の接合面（巾木／定盤との接合面）とみられる。鋳型自体は精良な土でつくられる真土が表面から5mmほどの厚さで存在し、外型部分は大粒の砂粒を多量に含むスサ入りの粗いものである。鋳型外面は残存していない。

24は直径9.5cmの円筒状を呈する製品の鋳型で、外型部分を含めると厚さ6.5cm以上になり、当初はかなり大型の製品であったと推定される。外型部分は暗茶灰色で砂粒を多く含み、スサも混じっている。25は、上下は定かでないが図のとおりとすると、円錐台状を呈する製品の一部と考えられる。製品時での下端部の直径は6.6cm、上端部では4.0cmを測る。表面はクロミが付着し暗灰色だが、胎土は赤褐色で肌理細かく白色の粒子を多く含んだものである。上真土と粗真土の区別はしにくい。資料の下端面は巾木部分にあたる可能性がある。26は側面にやや稜

Fig.69　47SK090出土鋳型実測図2（1/3）

のある略円錐台形になる製品のようで、図の下端面まで上真土が廻っているが、そこは巾木部分とみられ暗赤灰色を呈している。また図の右上部付近も鋳型面となっている。龍頭の茎部かも知れない。28は屈曲する体部に復元できるが、残存部分はクロミが付着せず、巾木部分の可能性が高い。資料は挽型で作られ、屈折箇所での復元直径は56.4cmとなる。後述する事例から鍋の鋳型とみられる。29は資料の下半部が巾木となるものだが、製品時の形状は明らかにできない。30は表面に波状文風の文様をあしらうもので、表面には挽型痕跡とみられるものが観察できるが、表面はきわめて平面的である。なお図の上面の一部まで鋳型面である。この資料のみ床面ピット中から出土した。

47SK120出土鋳型（Fig.70・71）

1～15は梵鐘の鋳型である。

縦帯・横帯（1～9）　1は資料の中央に1条、左側に2条、その反対位置に1条の縦線がある。縦線に挟まれた空間は図の左側が4.8cm、右側が3.8cmを測る。表面には挽型の痕跡が観察され、資料中央付近での直径は55.2cmを測る。上真土は明茶褐色で白色粒子が混じる程度の精良なもので、表面の2mmほどにクロミが吸着している。続く真土はわずかに砂粒を含み、スサも混じるやや粗めのもので、外型はやはり砂粒やスサが多く含まれるきわめて粗いものである。2は縦帯部分で縦線間は4.3cm。わずかに湾曲し、推定直径は63.0cm程度になるが小片のため不安定な数値である。胎土の状況は1とほぼ同様である。3は縦帯の一部を残すもので、図の左側がそれに該当する。挽型で作られ、推定直径は48.9cmになる。4は縦帯と横帯が交差する部分の破片で、図の上辺部分に2条の横帯が確認できる。挽型で作られるが、資料が小さく径は計測できない。5は資料の上下辺に各々2条の横帯があるもので、両横帯間は4.8cmを測る。挽型で作られ、推定直径は41.0cmである。草の間部分に該当するものと考えられる。6～8はやや外反する資料の上辺にやや幅の広い横帯が2条みられるもので、上下逆さに捉えるべきものかもしれない。横帯の幅は8の上のもので1.0cm、下のもので0.6cmである。9は横帯に挟まれた部分の幅が2.5cmと狭い資料で、挽型で作られており、推定直径は40.0cmである。上帯部分の破片とみられる。

撞座（10）　3.2×4.2cmの破片で、複弁蓮華文がみえる。弁の下端には稜のある圏線が二重に巡っている。圏線付近での厚さは1.0cmで、裏面及び上辺は調整不明ながら当初面であり、梵鐘本体の鋳型に埋め込まれたものとみられる。

乳（11～15）　先端があまり尖らない資料で、円錐の最大径は2～2.3cmである。胎土は一様に精良で細かな砂粒が観察される程度であり、外面は当初面に近い資料が多く、また13でわずかにやや粗めの土が外面に見られることや、15の残存状況から梵鐘本体の鋳型に埋め込まれたものと考えられる。

鍋（16～20）　16は幅20.5cm、高さ26.2cm、最大厚7.2cmで、口縁部の形状は鋳型では二段

に見えるが、上段及び上面の平坦面は巾木部分とみられ、クロミが付着するものの剥落が著しく（推定本体部分はほとんど剥落していない）、明茶色の素地が見えている。ただし上真土は巾木部分にもみられる。したがって製品としては口縁部分に一つの段がある形状と捉えられ、挽型の痕跡も観察できることからその口縁端部付近での直径は51.5～54.2cm程度に復原できる。鋳型の外面は風化しているが当初の面と思われ、外型部分の胎土はかなり粗いもので、大粒の砂粒やスサが多く含まれている。17は平坦部分にクロミがなく巾木とみられ、傾斜面はクロミが観察できる。16の資料および当該資料の推定直径が61cm余りになることから、この部分も巾

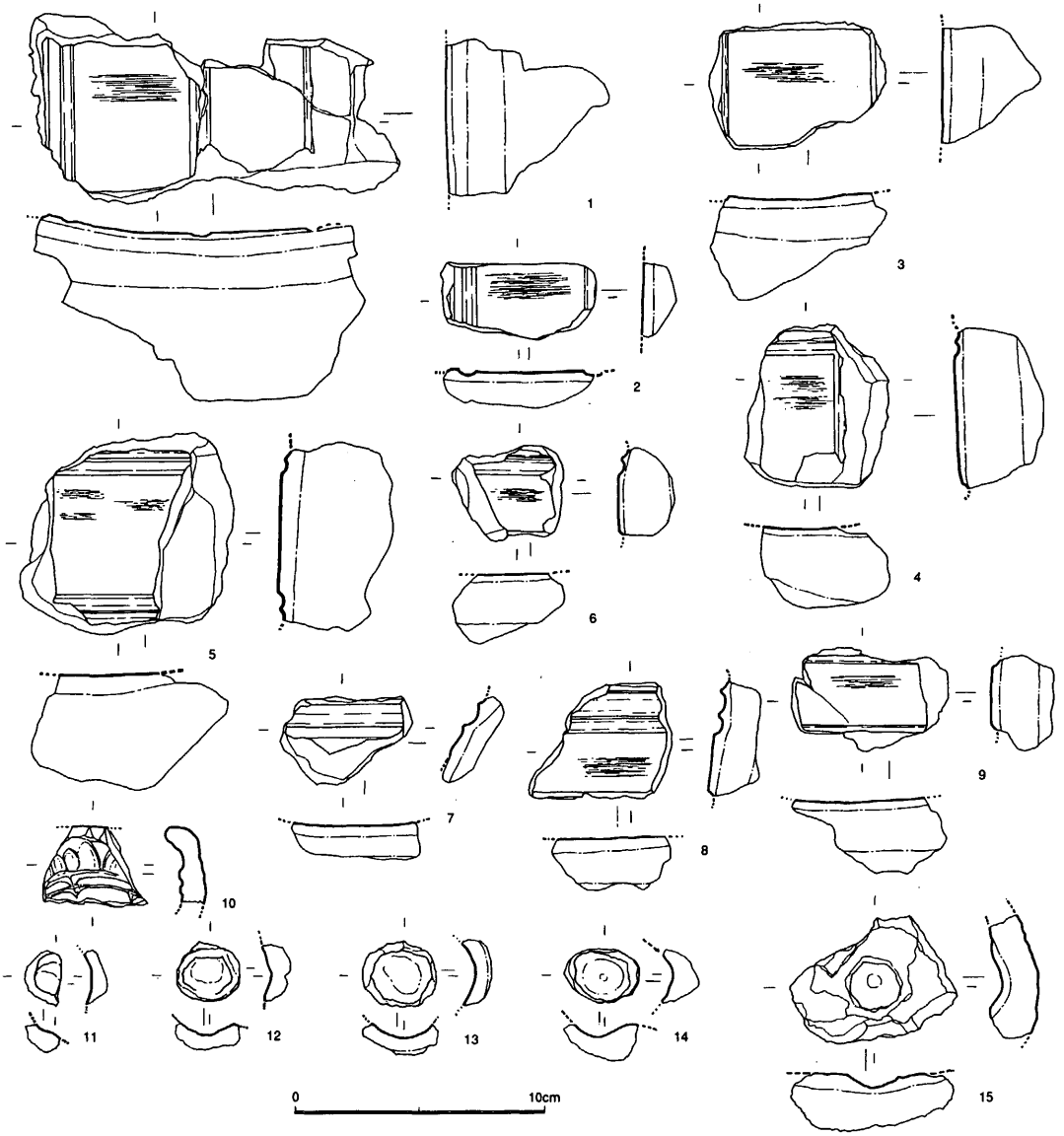


Fig.70　47SK120出土鋳型実測図1（1/3）

木とみられ、16と同一のものである可能性が考えられる。18・19ともに上の段が巾木、下の段が鍋の口縁部分とみられる。20は巾木の平坦面部分の観察ができる資料で、表面にはクロミは付着せず挽型の痕跡が見え、それが円弧を呈しているのがわかる。

47SK190出土鋳型（Fig.72）

釣燈籠（1～3）　1は図の右辺と下辺にのみクロミが観察され、中央の曲面部分にはクロミがなく巾木と捉えられる資料である。クロミの付着する部分の形状は二段の階段状を呈しておりフレームになるとみられ、交点は失われているが縦横のラインは直交するものとみられる。図下端（横方向フレーム）の最大直径は28.2cmで、上真土は厚さ1cmほどで細かな砂粒を混入するが精良な土である。2は上辺に階段状部分が観察されるもので、1と同一個体であろう。3は下辺にフレーム部分が残る資料である。

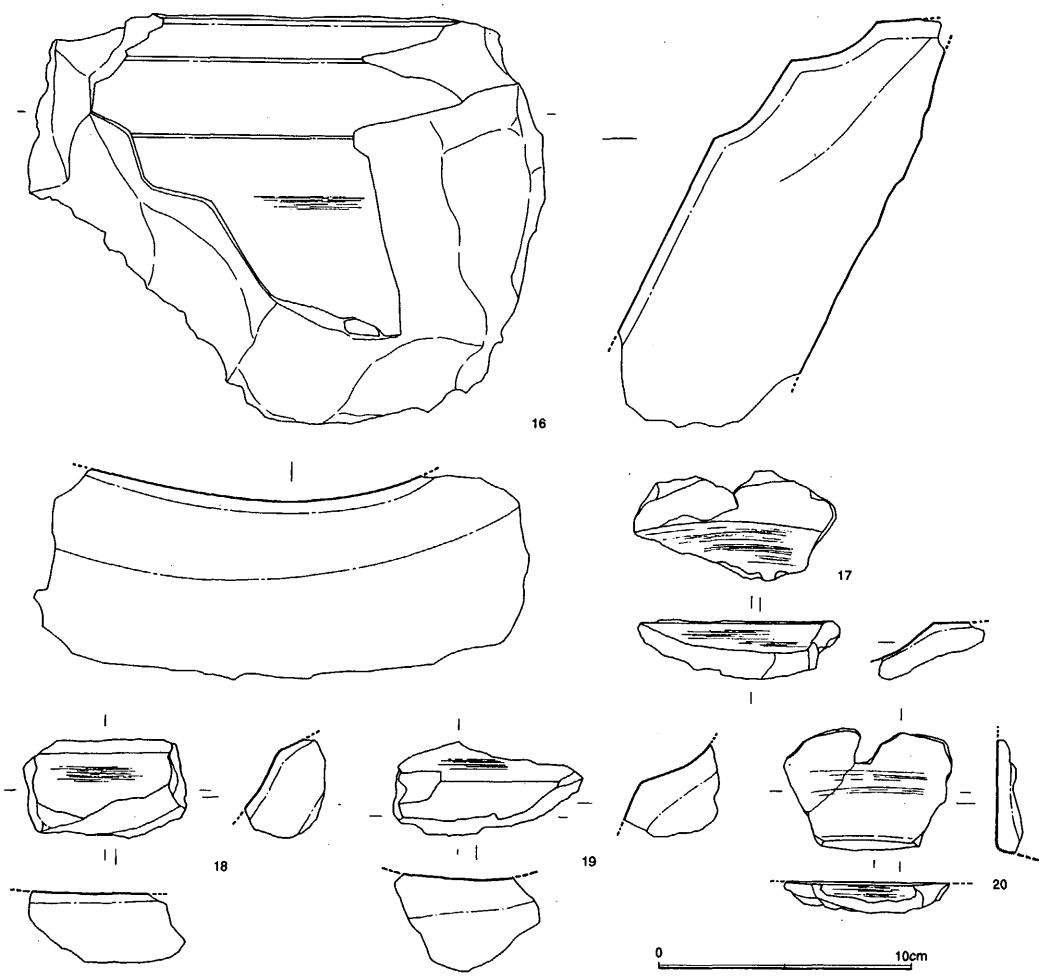


Fig.71　47SK120出土鋳型実測図2（1/3）

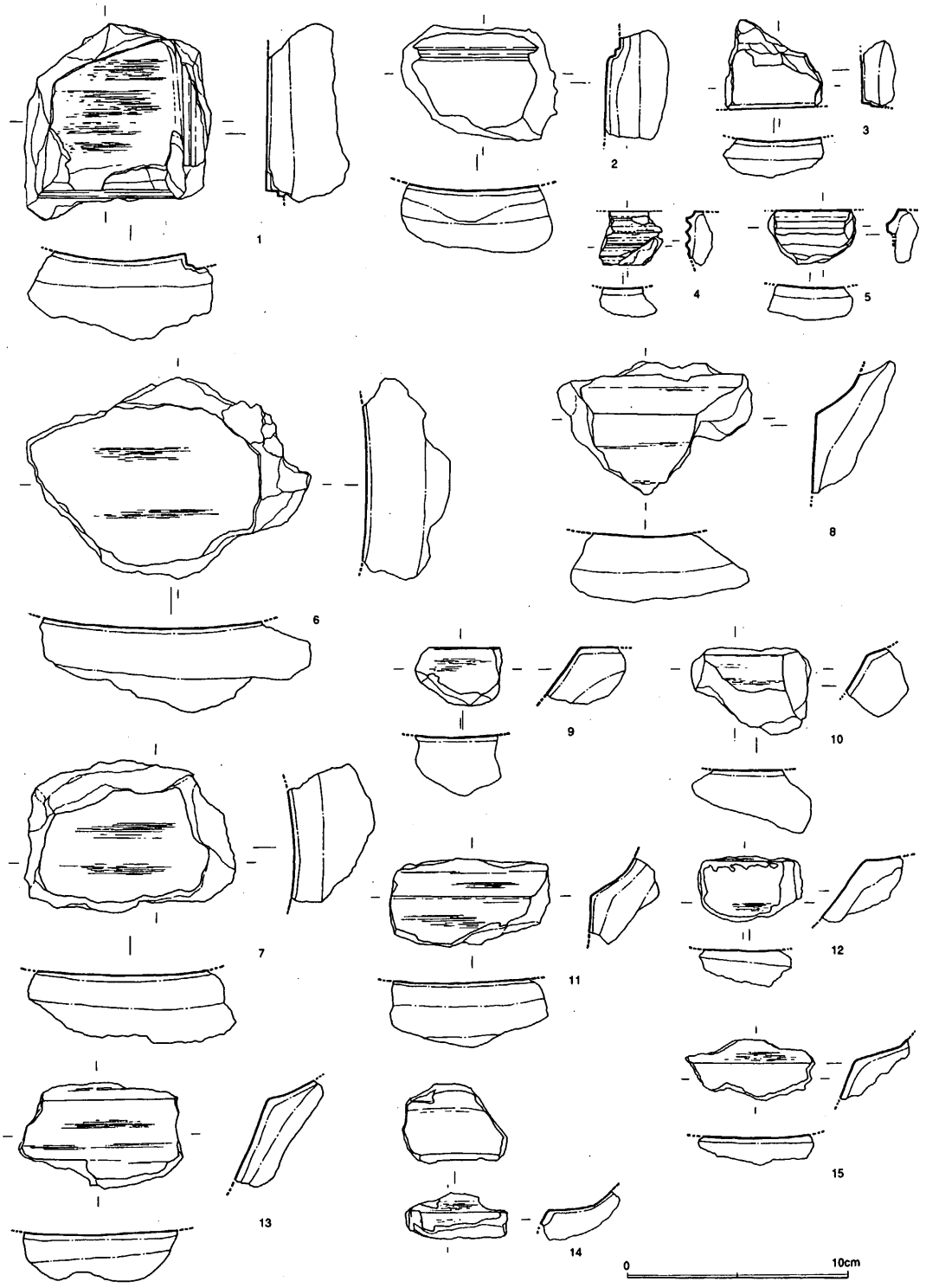


Fig.72　47SK190出土鋳型実測図（1/3）

4は表面に4条以上の突帯が巡るもので、図の上辺はクロミが付着しているが巾木の可能性が強い。表面の5mmほどが上真土とみられ、細かな砂粒を含むものの精良で硬質である。5も当初は数条の突帯が巡る製品であったものとみられる。

大鉢状製品（6・7）　6は高さ9.2cm、巾13.0cm、厚さ3.8cmの破片で鋳型面は縦横断面ともに湾曲し、資料の中程での復原直径は80.7cmを測る。真土とみられる部分は厚さ2.4cmほどあり、赤褐色で2mm以下の砂粒を含んでおり、表面の2mmほどはクロミの付着で暗灰色を呈し硬質で精良な土である。この部分で鋳型製作作業上の区切りがあったらしく、外側に簡易な調整面がみられ、その外側に外型となる粗い土が付着している。7は6と同様に縦横断面ともに湾曲する資料で、小片で不安定な数値ながら資料下位部分の復原直径が84.8cmを測る。胎土の状況も6に等しく直径も近似値であり、両者は同一個体の可能性がある。

鍋（8～15）　8は口縁と体部の境目付近の資料とみられ、ほぼ直線的に立ち上がる体部に、端部の形状は不明だが大きく湾曲する口縁部を有する製品に復原できる。体部上端部分の復原直径は42.6cmである。9は残存部の全面にクロミが付着し、暗黒灰色を呈するが、少なくとも上面の平坦部分は巾木の可能性が強い。小片のため径の計測はできなかった。10は他の資料を参考にすると、資料表面及び断面観察に差はないが屈曲部分以下が口縁部、以上が巾木部分と考えられる。小片のため径の計測はできなかった。11は口縁と体部の境目付近の資料とみられ、体部は直線的で口縁部は大きく湾曲するタイプである。12は小片のため図の傾きに問題があるかも知れず、11とほぼ同じように捉えるべきかも知れない。そうすると当該資料は体部と口縁部の境目付近の資料ということになる。13はやや傾斜する体部を有する資料で、口縁部は大きく湾曲するものである。体部と口縁部との境目（屈曲部）の復原直径は73.2cmを測る（小片のため数値は不安定）。14は体部と口縁部の境目付近の資料と判断しているが、口縁部側の形状が他の資料と異なりかなり大きく張り出している。この部分にはクロミも観察されるが、巾木の可能性も残しておきたい。15は屈曲以上のクロミの剥落が著しく、そこが巾木とみられる。したがって屈曲以下は口縁部の可能性が高い。小片のため径は復原できないが、緩やかな曲面を呈しており、かなり大きな資料に復原できよう。

47SK155出土鋳型（Fig.73）

中子（1～3）　1は長さ16.5cm、幅11.0cm、厚さ4.1cmの破片で、縦横断面ともに外湾している。図の横断面での復原直径は60.6cmを測る。鋳型面（表面）は風化してかなりザラついているがクロミは観察でき、真土は厚さ1cm程度で明灰色、明灰茶白色を呈し、精良な胎土である。外側の胎土もかなり細かめで精良だが、砂質気味で少々ザラついた感じがする。2・3ともに1と同様の状況を示す資料で、それぞれ横断面方向で得られた直径は2が52.1cm、3が54.6cmである。縦断面方向では1・2が大きく緩やかに湾曲するするのに対して、3はやや直線的である。3点ともおそらく同一個体の一部分と考えて差し支えなかろう。

47SK200出土鋳型（Fig.73）

鍋（4～6）　4～6は同一の個体と推定され、他の資料から鍋の可能性が考えられるものである。いずれも上面の平坦部分にはクロミがなく暗茶色を呈しており、その部分が巾木であることが理解できる。胎土は表面から1cm前後が上真土でかなり精良な土、外型は5mmまでの砂粒を多く含みきわめて粗いものである。5・6では傾斜する部分の上から約2cmのところで一様に

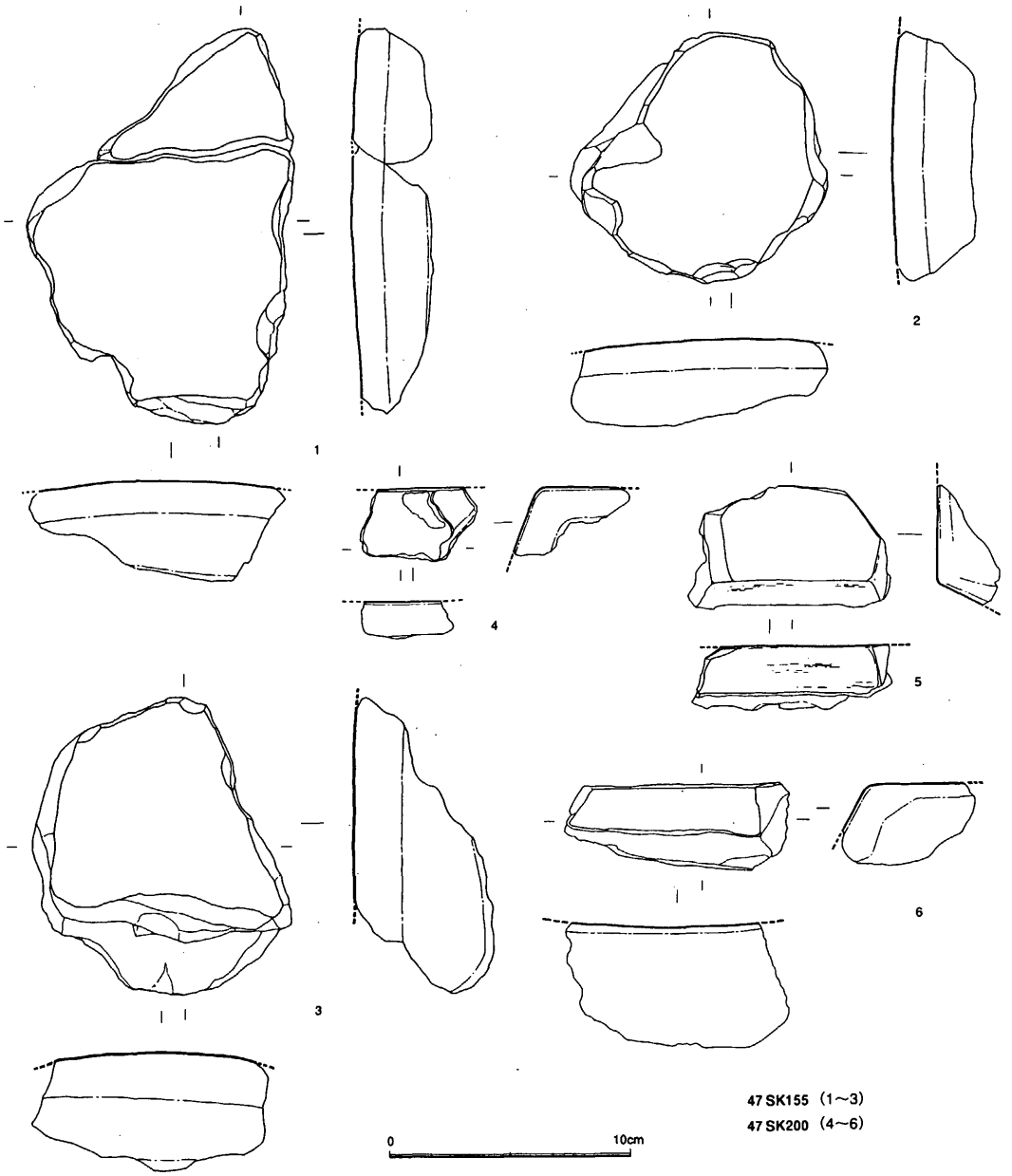


Fig.73　47SK155・200出土鋳型実測図（1/3）

直線的に破損しており、ここでさらに折れ曲がっていたことを示唆している。平面的には大きく湾曲する体部あるいは口縁部を保有すると見られるが、径を推定するまでには至っていない。ただ5の資料では平面図の右側面部分にも鋳型面があり、湾曲する体部からその一部分が直線的に外側へ突き出すような製品をイメージする必要があり、体部の形状をここでイメージするとおり鍋と想定すると、この部分は把手ということになろうか。

47SK205出土鋳型（Fig.74）

1～9は梵鐘の鋳型である。

龍頭（1～3）　1は大半が破損しているが目の部分が残存するものである。鋳型の下辺は巾木となっており、笠形の鋳型に接合していたものと思われる。外面も残存しており、側面には型合わせの溝（長さ1.7cm、幅1mm前後）が観察できる。また龍頭の鋳型同士が重なる巾木部分は下半が4mmほど削り込まれており、この部分も型合わせを意識したものと考えられる。鋳型面にはクロミが付着し、黒灰色を呈している。他は茶灰色で、胎土は細かな砂粒を含むものの精良で均質なものである。外面は縦方向のナデで仕上げられる。2は破損が甚だしいが、口の一部と目の部分が残存し、目はかなり大きく飛び出している。鋳型面はクロミにより暗灰色もしくは黒灰色を呈し、外面は明橙色で縦方向の粗いナデで仕上げられる。外面の上半部分が削り込まれ、くびれ状を呈している。胎土は細かな砂粒を含むものの精良で均質なもので、わずかに炭化物が混在している。3は鬣の一部と頂部にある火炎宝珠の部分で、宝珠の下は反花座風になっている。厚さは3.5cmである。鋳型面にはクロミが付着し、胎土中にはわずかながら炭化物がみられる。

縦帯・横帯（4～9）　4は資料の上辺に横帯の一部が残存するものである。5～7は資料の左側に縦帯の一部が残存するもので、それに直交して挽型の痕跡が観察される。いずれも小片のため径の計測はできない。胎土は7がやや不明瞭だが、上真土が厚さ約2cm前後観察され、表面の約2mmほどはクロミの付着で暗黒灰色を呈し硬質である。8は資料の上辺に横帯の一部が見えるもので、横断面作成位置付近での復原直径は28.4cmである。9も小片ながら横帯の一部と考えられ、2条の突帯が接して存在している。

10は2段になる鋳型で、段の上面と段以下にはクロミがみられるが、段以上にはなく、その部分が巾木とみられる。横断面はいずれの部分も湾曲しており、縦断面側の観察と合わせると椀状の器形をイメージさせる。鋳型自体は厚さ0.8～1.8cmで、外面は指圧とナデが観察されることから、小型の製品の鋳型と理解したい。11は屈曲部以下にクロミが安定的に残存することからこの範囲が鋳型面と認識され、図上部の平坦面はクロミが観察されるが風化が著しいことから巾木に該当するとみられる。屈曲部分での復原直径は120.3cmで、かなり大型の釜のような製品をイメージしたい。なお鋳型面には薄く鉄分が付着している。胎土は表面から2cmほどが上真土とみられ、かなり微細な砂粒を含むが精良なもので、表面から2mmほどはクロミによ

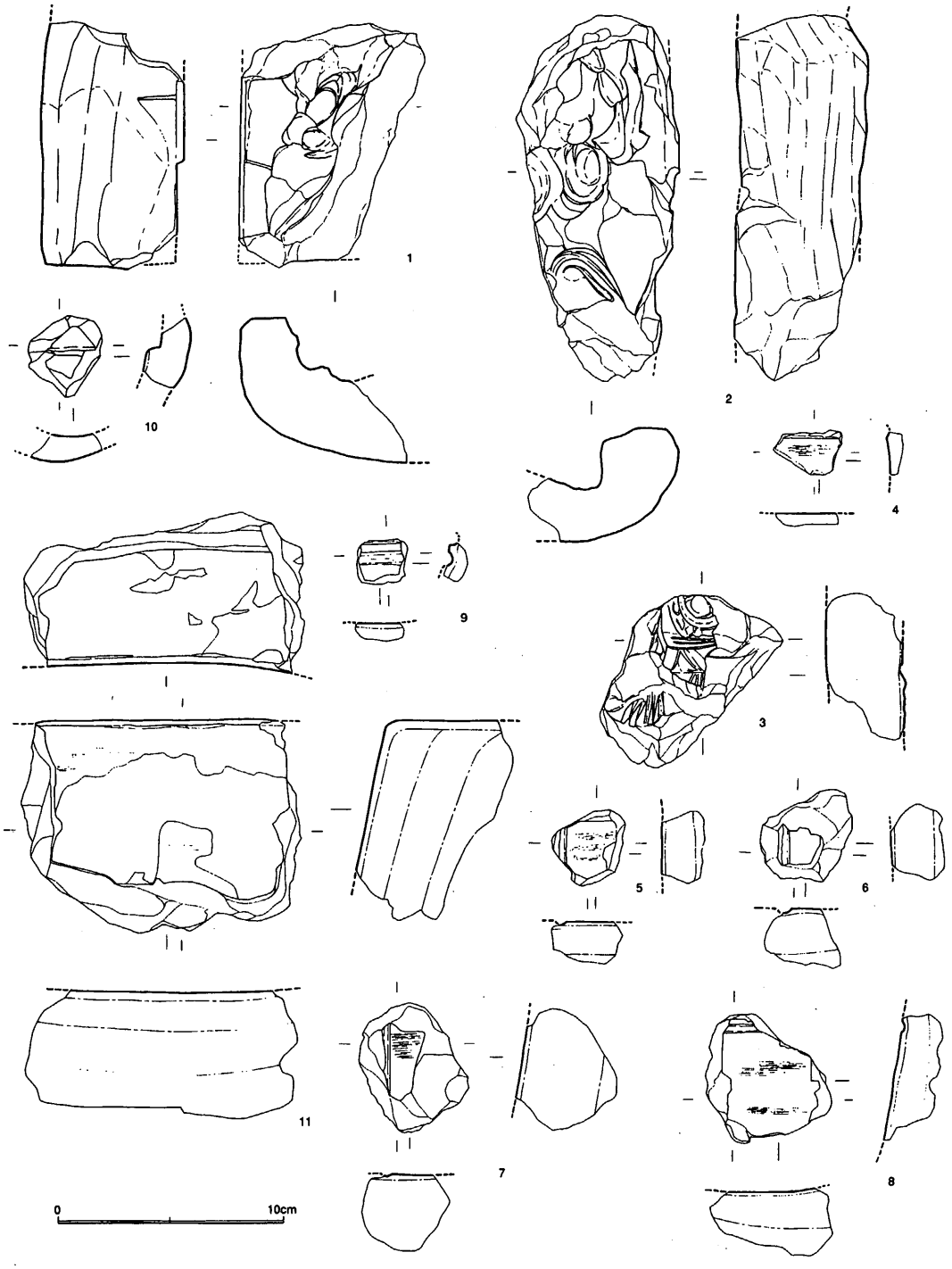


Fig.74　47SK205出土鋳型実測図（1/3）

って暗黒灰色になり硬質である。

47SK210出土鋳型（Fig.75）

鍋（1・2）　1は体部が直線的で口縁部が段状をなすもので、口縁端部での推定直径は104cmとかなり大きくなる。鋳型上面の平坦部は暗茶黄色を呈し、クロミがないことから巾木部分と考えられる。胎土は表面から3mmほどが細かくて精良な土であり、2層目がやや粗く、外型となる部分は炭化物やスサが混入するかなり粗いものである。2もほぼ同様の資料で、体部と底部の境目とみられる屈曲がわずかに観察される。それによる体部の高さは6.5cm、口縁端部までの高さは8.7cm、推定される口径は90.8cmで1よりもやや小さい。いずれの資料も小片であり数値には不安が残るが、1の資料では2以上に体部が延びていること、口縁部の高さがわずかながら異なることを踏まえると、胎土の構成は近似するものの別個体の可能性を考えたい。

笠形（3）　下部に突帯が巡る梵鐘の笠形と考えたが、上下逆に捉えて椀状製品とすることも可能であり、突帯部分の直径が26cm余りに復原できることを踏まえると、後者の可能性のほうが高い。

4は屈曲部を有する資料の破片で、すべてにクロミが観察できる。平坦部以下はわずかに湾曲する体部を有しており、平坦部以上にも若干の立ち上がりが観察できる。5は図上面の平坦部にもクロミが付着するが、その部分に限って剥落が目立つことからそこが巾木であると考えられる。体部と想定される部分は挽型の痕跡が明瞭で、その上端部（平坦部との境目）での推定直径は117.6cmとなる。大型の釜状製品とみられ、1のような資料と組み合う可能性も考えておきたい。

47SK460出土鋳型（Fig.76・77）

すべて梵鐘の鋳型と考えられる。

龍頭（1～4）　1は高さ27cm、残存する最大幅6.8cm、厚さ3cm内外の資料で、上部には火炎宝珠の火炎部分が見え、以下龍の鬣、角、目、鼻、口の一部が確認できる。口付近の破断部近くには牙の先端が観察できる。鋳型の下端は破損しているが当初面にきわめて近いものと判断され、龍頭本体の総高は24.5cm程度に復原できる。鋳型の外面はヘラケズリもしくは強いナデで仕上げられているようで、鬣と火炎宝珠の境目付近でケズリ込まれ、くびれ部を作り出している。型合わせの関係からであろうか。胎土は細かな砂粒を含む精良な土で構成され、特に分層はできない。鋳型面は黒灰色、巾木部分及び外面、断面は赤褐色を呈している。2は鋳型面の残存が悪く鬣部分が確認できる程度である。外面は1と同様の調整とみられ、側面にケズリ込みがありくびれ部を作り出す。1よりやや厚手だが、図に配置したように両者は同一個体の左右部分になるものと考えられる。3は目、鼻？、口及び牙の一部が残存するもので、ちょうど1の資料に重なるものではないかと考えている。色調や胎土も1とかわらない。4は宝珠部分で接合はしないが1の火炎につつまれる宝珠であることは確実である。宝珠は複弁の反華座に

Fig.75　47SK210出土鋳型実測図（1/3）

座し、ほぼ円形でわずかな膨らみを持ちその周囲には蓮子が巡っている。

乳（5～7）　すべて小片で全容を知り得ないが、5では辛うじて先端の突起が残っており、そこを中心とした直径は約3.6cmとなる。また47SK090でみた乳とは異なり、個々に鋳型としての独立性はなく、端部の鋳型を梵鐘本体に埋め込むのとは異なった方法で鋳込まれた可能性も考える必要がある。

銘文（8～19）　池の間に配されたであろう銘文の破片で、製品では当然陽鋳となる。8は「風」のような文字の一部分で、かなり小さくなった破片である。9は「月」で、周囲に空白が

Fig.76　47SK460出土鋳型実測図1（1/3）

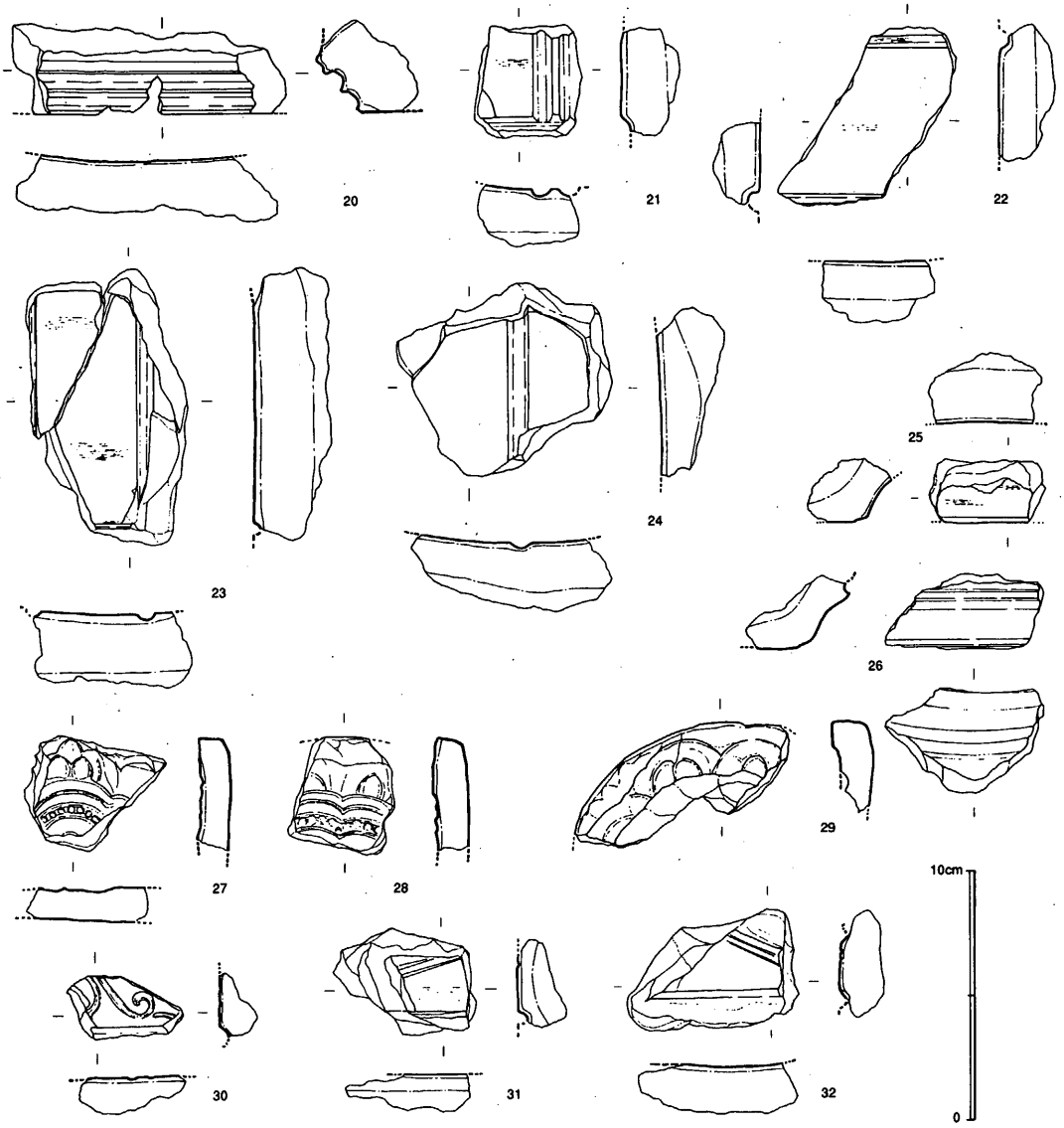


Fig.77　47SK460出土鋳型実測図2（1/3）

目立つことから、銘文本体をはずれた年号の部分にあたる可能性がある。10は3文字分見えているが、判読できない。字間がかなり詰まっている。11は2字分が判読でき、下の字は「奥」の異体字か。文字の左側（製品では右側）は空白になっている。12は3文字分が確認できるが判読不能。13は「禅」である。高さ2.3cm、幅2.5cm程度である。14は「刹之」と読める。「刹」字は高さ2.3cm、幅2.2cmの大きさで、左側（製品では右側）に文字は見えない。15は3字分確認できるが読めない。上下の文字間は約6mm、左右の文字間は1.0～1.2cmである。16～18は文字の断片が観察できる程度の資料で判読はできない。19は右上が「壇」の旁の下半、右下が

「おおざと」の上半部のようにみえる。想像を逞しくすると「檀那」と読める。

残念ながら具体的な文面を復原することはできず、確実に文字を特定できるものも少ないが、陽鋳銘文の減少する時期の資料だけに貴重である。なお現存資料の中には、判読できたこれらすべての文字を含む陽鋳の銘文は存在しない。

笠形（20）　3段の突帯が連続して巡り、それらは少しづつ内傾して配される。資料下位の平坦部は巾木とみられる。最上部に位置する突帯の最下端付近での直径は66.8cmに復原できるが、資料に歪みがあり、数値的にはやや不安定である。

縦帯・横帯（21～24）　21は縦方向の2条の突帯と横方向の突帯が交差する資料で、径の復原は苦しいがわずかに湾曲しており、挽型の痕跡も観察できる。22は上下に横方向の突帯が走る資料で、中帯部分の可能性が強い。突帯に挟まれた範囲は幅5.8cmで、挽型の痕跡が観察できるが、資料が小さく径の復原には至らない。23は縦帯部分の資料で、左右に縦方向の突帯が走り、それに挟まれた空間の幅は4.0cmである。右側の突帯は1条で、そのまま池の間に至るものとみられる。また資料の下端には横方向の突帯の一部も観察される。上下の傾斜が明確ではないためこのように配置したが、上下逆に捉えて横方向の突帯を上帯下端の突帯とみなすことも可能であろう。24は縦方向の突帯が1条確認できるもので、挽型の痕跡がわずかに見え、資料横断面作成部分付近での復原直径は44.6cmとなるが、破片が小さいため不安な数値である。

駒ノ爪（25・26）　資料の下端は平坦部分でクロミが付着せず、暗茶褐色を呈している。資料本体の形状はまず小さな段があり、その上部に大きく内湾する亀腹風の形状となり、26ではその上部に横方向の突帯が巡るものとみられる。また26では巾木との境目で直径が計測でき、復原直径は44.8cmとなるが、破片が小さいため不安な数値である。

撞座（27～29）　3点とも同じものとみられる。これらから推定できる撞座は、直径が約12.0cmで複弁八葉となり、中房の外周は蓮弁に対応して八葉の花弁状を呈した2重の突帯と、さらにその内側には同形に珠文を並べており、3重の外周になっている。中房内には竹管文風の蓮子があり、その痕跡から推測すると花弁に対応して外位置に8個あり、おそらく中央に1個を転じるものとみられる。資料の厚さは1.2～1.4cm程度を測りこれで完結していることから、梵鐘本体の鋳型に埋め込まれたものとみられる。胎土は上真土に近い均質で精良なものである。

下帯（30～32）　30は太い線で描かれた唐草文が明瞭に観察できるもので、資料の下端には横方向の突帯も走る。残存部分は上真土部分とみられ、表面はクロミの付着で黒灰色を呈している。次の31・32の資料の文様の状況からすると、あるいは上帯に該当するかも知れない。31・32はいずれも細線による施文（おそらく唐草文）が観察され、資料の下端には横方向の突帯も見える。挽型も観察され、資料もわずかに湾曲しているが、径の復原には至っていない。両者とも表面にクロミが付着し、淡灰色を呈している。

この遺構から出土した資料は1個体の梵鐘の鋳型と考えられる。ただし、一部数値的に不安

な要素もあり即断は慎まねばならないが、その可能性が高いことだけは強調しておきたい。

47SK605出土鋳型（Fig.78）

1～8は梵鐘の鋳型とみられる。

龍頭（1）　頂部にある宝珠の台座（反華座）とそれを龍の頸部に括りつける部分が観察され、図の右下には鬣が見える。鋳型の厚さは1.9cm前後で、鋳型の外側は面として認識できるが、調整は明らかでない。胎土は細かな砂粒を含んだ均質なもので、表面の2mmほどはクロミの付着により明灰色に変色している。

乳（2）　直径3～3.3cmで、隣接する乳間は約5mmと狭く、先端はあまり尖らない山形を呈している。資料は2個が並列しているもので、断面観察では不明瞭だがおそらく数個が並んで一つの鋳型となり、梵鐘鋳型本体に埋め込まれたものと考えられる。

笠形（3）　図のような傾斜になる資料で、縦断面は緩やかに逆反りしており、横断面方向はわずかに湾曲し、挽型の痕跡もみえるが小片のため径の計測は困難である。

縦帯・横帯（4～8）　4は縦方向の突帯に挟まれた資料で縦帯にあたる。突帯に挟まれた部分の幅は4.6cmで、挽型で製作され、推定直径56.4cmを測る。5は2条の突帯が並列するもので、挽型で作られる。6・7は同一の個体と考えられ、資料上面に2条の突帯がある。下段突帯の直下から1.0～1.2cmの範囲に限ってクロミの付着した表面部分が帯状に薄く剥落している。8は資料の上下に横方向の突帯があるもので、突帯に挟まれる部分の幅は3.6cmを測る。挽型で製作され、縦横断面ともにわずかに湾曲している。小片のため径は求められない。

9はわずかに湾曲する面を有する資料で、弧状の沈線（製品では突線）を入れるものである。沈線はきれいな円弧にはならない。10は鋳型面にヘラ彫りのような文様がある資料で、梵鐘の下帯の一部かも知れない。文様は浅く不明瞭である。表面はクロミの付着で明灰色、灰白色を呈しているほかは、胎土は黒灰色で細かな砂粒を含む程度の精良なものである。

鍋（11～13・16～18）　11は直線的な体部と斜めに取り付く口縁部の資料で、挽型によって製作される。資料は薄く剥離したような形状になっており、上真土部分のみが残存したとみられる。資料は歪みが著しく直径を求められない。12は平坦面とやや傾斜する部分からなる資料だが、表面にはクロミがほとんど見られないことから、巾木の部分と考えられる。資料の最下端は再び屈曲しているようであり、その部分の復原直径は64.2cmを測る。13は2段になる口縁部を有するもので、傾斜する体部は直線的である。クロミとみられる部分（灰色を呈する部分）は段の下5mm付近からはじまる。このためこれ以上が巾木になる可能性もある。ただ他遺構から出土する類似資料は段の上部まで鋳型面と捉えられるものを含んでいる。16～18は3面に鋳型面が残っている資料で、先述の47SK200出土資料に類似品がある。それを参考にすると、湾曲する体部からその一部分が直線的に外側へ突き出すような製品をイメージする必要があり、体部の形状をここでイメージするとおり鍋と想定すると、この部分は把手ということになろう

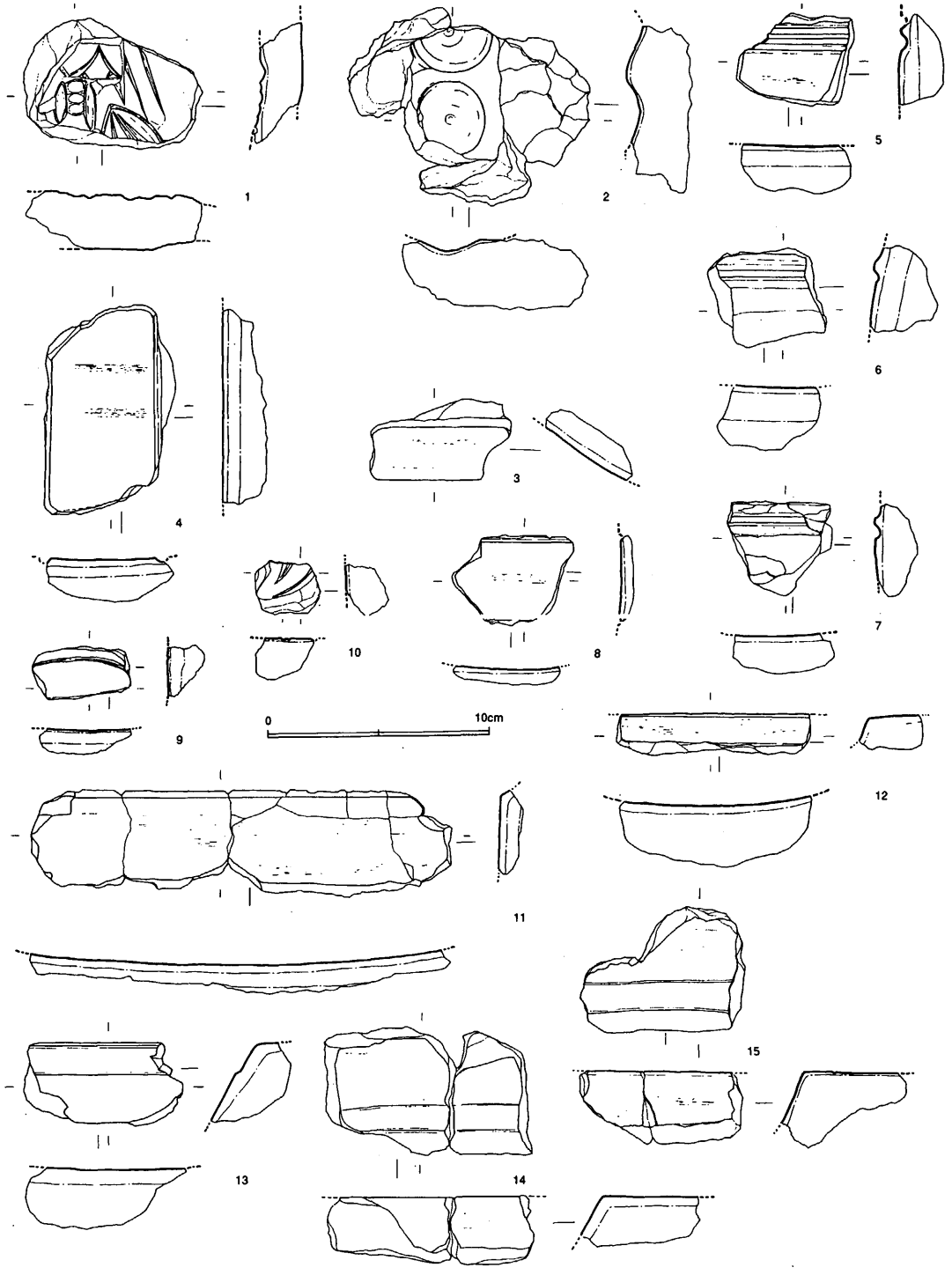


Fig.78　47SK605出土鋳型実測図（1/3）

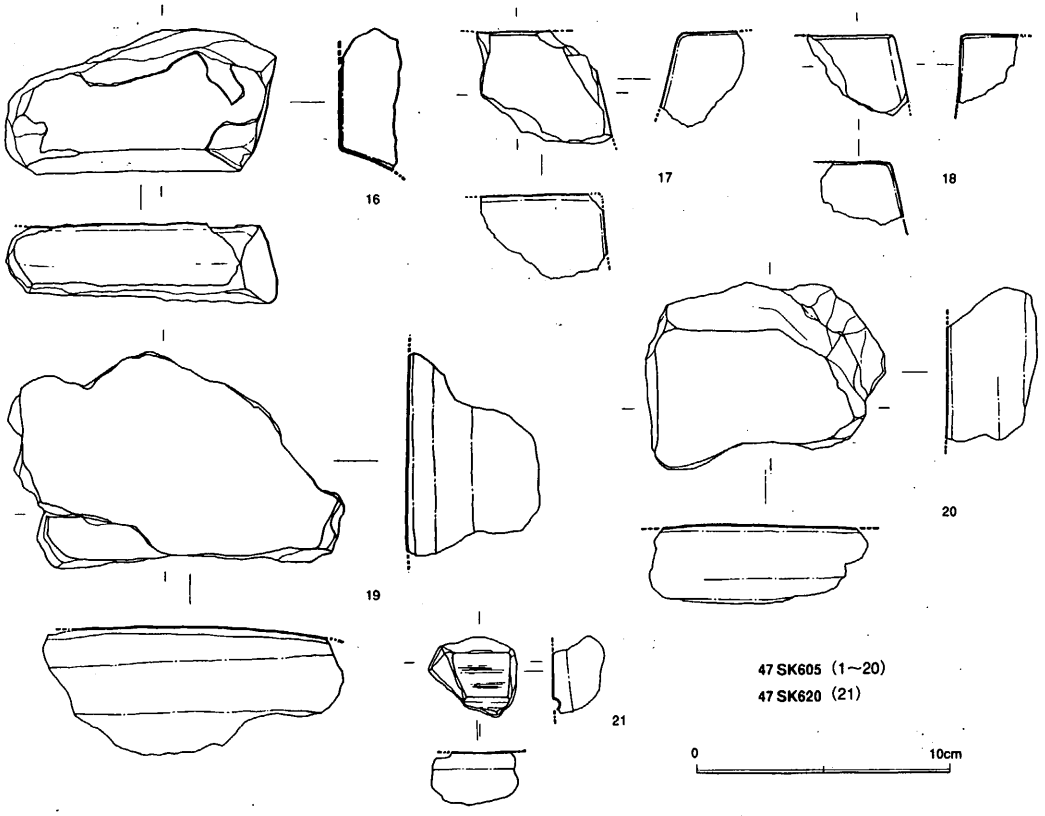


Fig.79　47SK605・620出土鋳型実測図（1/3）

か。

羽釜（14・15）　14は平坦部も含めてクロミが付着しており大きな平坦面を持つ製品をイメージする必要があり、羽釜の鍔部分と考えた。屈曲部に限ってクロミが剥落している。挽型で作られるが、かなり大きな直径になるようである。15もほぼ同様の資料で平坦部分の屈曲部から1.2cm付近に幅、深さとも1mm以下の細い沈線（製品では突線）がある。ただし挽き目の円弧には合わず、やや直線的である。故意に意識しているものかどうかは明らかでない。胎土は茶褐色を呈する細かく均質で精良な真土で、表面は1mm前後の厚さで硬化し、クロミによって暗灰色を呈している。

中子（19・20）　19は他の鋳型にくらべ逆反りした面を有している資料で、横断面部分での推定直径は67.8cmを測る。表面は黒灰色を呈しているが風化が著しく、挽き目は見えない。胎土は表面の2～3mmの範囲はクロミによる硬化部分で、上真土は1.5cm近くあり暗灰色を呈している。20は19に似る状況を示すが、縦断面方向が平面に近く、横断面方向はわずかに外反している。やはり表面は風化し荒れている。

47SK620出土鋳型（Fig.79）

横帯（21）　資料の下辺に横方向の突帯があるもので、挽型で製作された痕跡が見える。上真土は約5mmの厚さで観察される。

47SK630出土鋳型（Fig.80・81）

1・6は筒状を呈する体部に鍔状の平坦部分が付く製品である。平坦部分も含めてひとつの挽型で作られ、1では屈曲部分での復原直径は59.4cm、平坦部分の先端はわずかに上方に反るものとみられ、その部分での直径は75.0cmに復原できる。6も同様の資料と見られるが、体部の立ち上がりの湾曲が1とは逆で、（製品段階では）わずかに外反する資料である。なお両者とも上下逆に捉えて台状製品（例えば燭台の基盤部分など）と捉えることも可能であろう。

鍋（2・3）　2は直立する体部に内湾しながら立ち上がる口縁部を有する。挽型で作られ、残存する面にはクロミが観察され、鋳型面と認識できる。3はほぼ直立する体部を持ち、かなり大きな直径に復原できそうだが、小片のため良好な数値は得られない。屈曲部以上にもクロミが見られるが、暗灰色と茶褐色の縞状を成しており、この部分は巾木の可能性も捨てきれない。

縦帯（4）　図の右端に縦方向の2条の突帯を有するもので、挽型で作られている。梵鐘の一部分か。

5は馬蹄形を呈する浅い段が3段重なるもので、図の方向だと蓮弁風にも見えるが、上下逆にすると仏像の衣紋のようにも見える。ただし資料が平面的である点が気にかかる。胎土は茶褐色で白色粒子を含む精良なもので、表面はクロミが付着し暗灰色を呈している。

7はわずかに湾曲する面を有し、半球状になる製品かと思われる。表面は幅1cm前後の浅い段状を呈しているが、これが製品としての形状に反映されていたかどうかは明らかでない。なお鋳型は挽型によっており、横断面作成部分付近での直径は52.6cmに復原できる。

8は段状になる製品で、図上部は土が付着して不明瞭だが、屈曲部以下はやや斜めに傾斜して次の段になり、その部分の面にはクロミは観察されない。またこれにほぼ直交する鋳型面の下部には残存しており、径の異なる低い円筒状のものを重ねたような製品をイメージできる。なお下段の直立する部分での復原直径は49.8cmになる。胎土は真土部分が明灰白色で砂粒を多く含んでおりややザラついた感じがするもので、外型部分は炭化したスサが多く混じっている。

9は直立する部分が直径54.8cmに復原できる資料で、下位の屈曲部以下にもクロミがみられ、この部分も鋳型面の可能性が高い。さらにその端部の破損状況から下面は約3cmのところで下方へ折れ曲がるものとみられ、製品の形状は8に近いものが考えられる。

10は縦方向がほぼ垂直面で、横方向は挽型で製作される大型の筒状製品とみられ、体部の推定直径は63.2cmになる。表面から1cmほどが真土で、他は外型とみられ砂粒を多く含むほか炭化物も混入する。

中子（11）　縦断面での反りはわずかだが、横断面方向では外反しており、その直径は

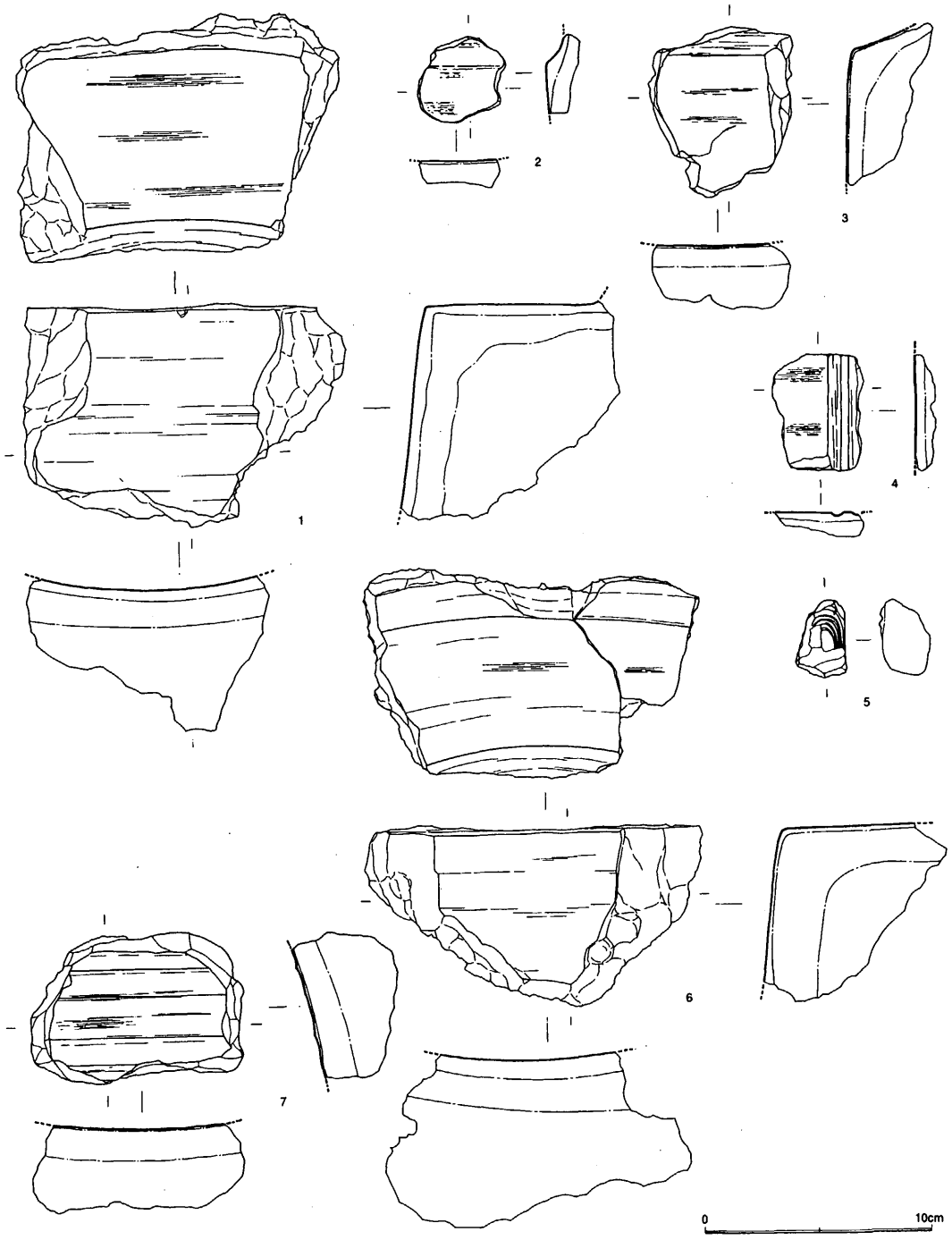


Fig.80　47SK630出土鋳型実測図1（1/3）

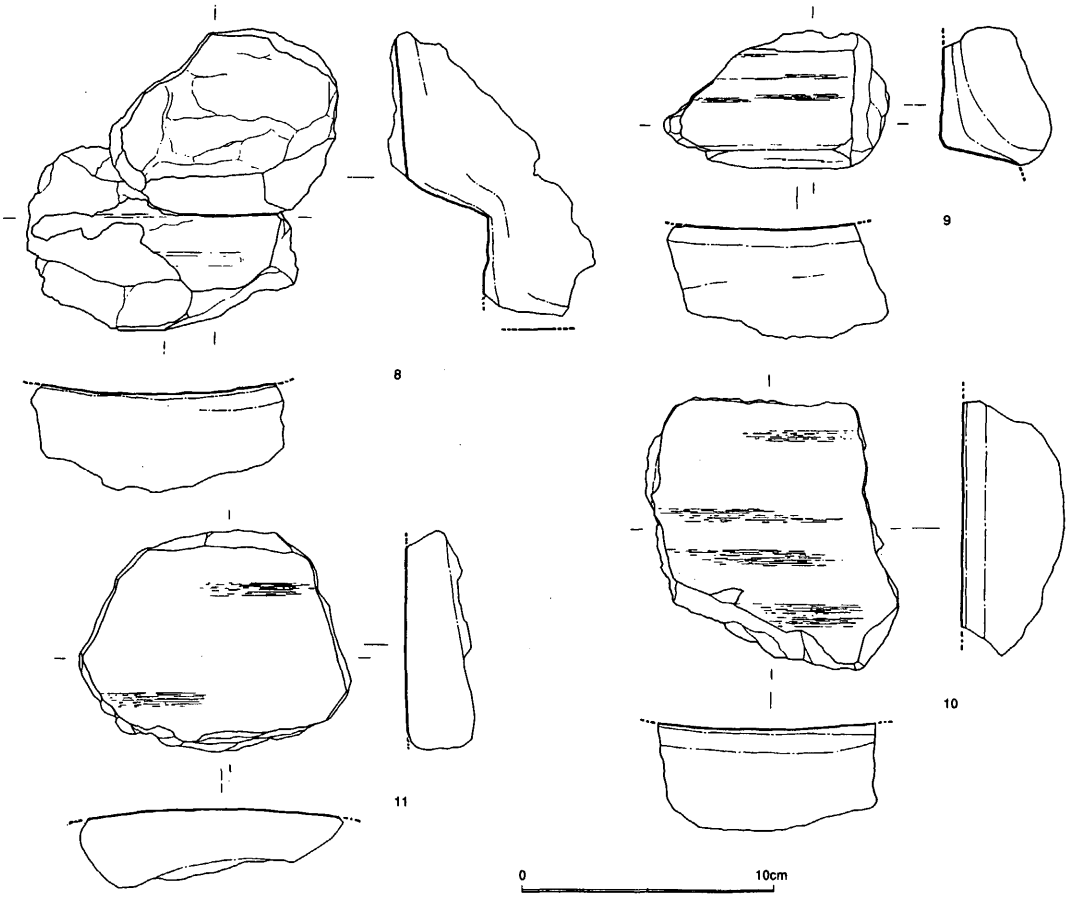


Fig.81　47SK630出土鋳型実測図2（1/3）

80.2cmにも復原できる。胎土は表面から1.5～2.7cmの範囲が明灰色で、砂質分が強くザラついたものである。わずかだがその外側（中子なら内側と表現すべきか）には炭化したスサが混じるやや粗めの土が観察される。

溝出土鋳型

47SD270出土鋳型（Fig.82）

坏状製品（1）　厚さ5mm前後しかない薄い鋳型で、鋳型面は風化しているが暗灰色を呈し、細い2条の突帯（製品では沈線）に挟まれた約1cmの帯状部分に米粒状の文様（製品では窪んでいる）がやや傾いた状態で不規則に並んでいる。外面及び下端面も風化するが当初の面を残している。胎土は細砂粒を含むが均質した精良なものである。

鍋（2）　直立する体部にやや湾曲する口縁部が付く資料で、体部と口縁部の境目付近での推定直径は75cmほどになる（かなり小片化しており、数値は不安な要素が多い）。

3は3方に幅1cmほどの平坦面があってそこが巾木となり、中央の盛り上がる部分が黒灰色を

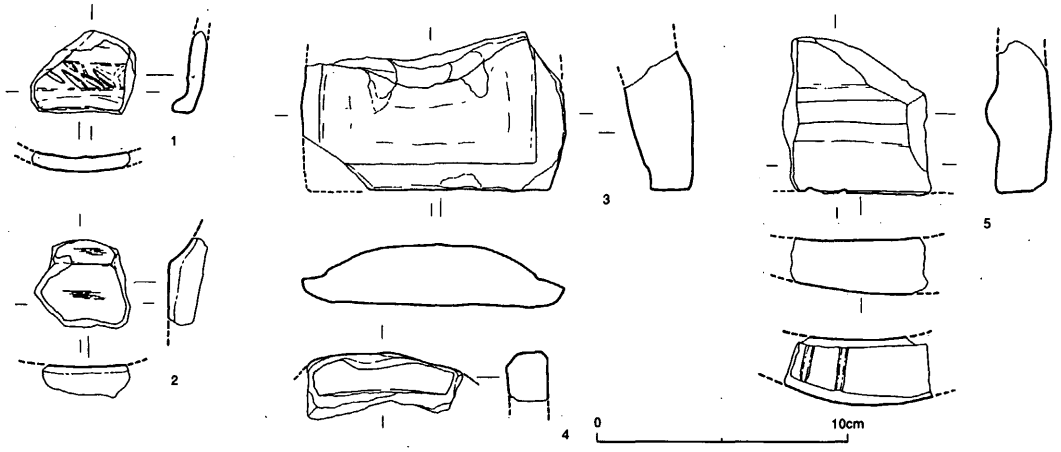


Fig.82　47SD270出土鋳型実測図（1/3）

呈し鋳型面となっている。製品との関係は明らかでないが、盛り上がった鋳型面（図面では上方にあたる部分）で2箇所の薄く剥落する部分があり、型持の可能性もあり注意される。鋳型は側面、裏面とも当初面を残しており、胎土は茶褐色を呈し均質で、小型製品特有の単一な土で作られる。

4は図の下側が破断面であるが、他の3面は鋳型面の可能性がある。

5はわずかに内湾している面に幅2cmほどの帯状の突帯が巡るもので、この面は淡褐色を呈しており、鋳型面として機能していたかどうかは疑わしい。ただし図の下面には2条の沈線があって、それが型合わせの目印とみられることから、鋳型であることは間違いなかろう。

井戸出土鋳型

47SE145出土鋳型（Fig.83）

鉢状製品（1）　鋳型面の剥落が著しく当初の形状は分かりにくいが、わずかに内湾する体部を有する鉢または椀のような製品になるとみられる。直径の算出は難しい。図の上面の平坦部は巾木で、淡茶褐色を呈している。第I層出土。

2は断面形状が台形状を呈するもので、破断面以外はクロミが付着している。平面的には緩やかな円弧を描くような形状をしているが正円にはならない。第III層出土。

椀状製品（3）　体部上位に細い2条の突線が巡るもので、体部はわずかに湾曲している。上面にある平坦部は巾木とみられ明茶色を呈している。平坦部との境目付近における復原直径は20.4cmを測る。47SX155出土鉄製香炉（Fig.127-1）の鋳型の可能性がある。第II層出土。

段状製品（4）　1段目の平坦部とそれ以下の傾斜する部分が鋳型面と捉えられ、いま1段は巾木とみられる。下段の傾斜部分もその下端の破損面は直線的で、表面の硬化部分も下方には続かないことから、その部分でさらに折れ曲がり、段になっている可能性がある。資料は挽型で作られ、製品として推定される最大径（下段平坦部外側）は31.6cmである。第I層出土。

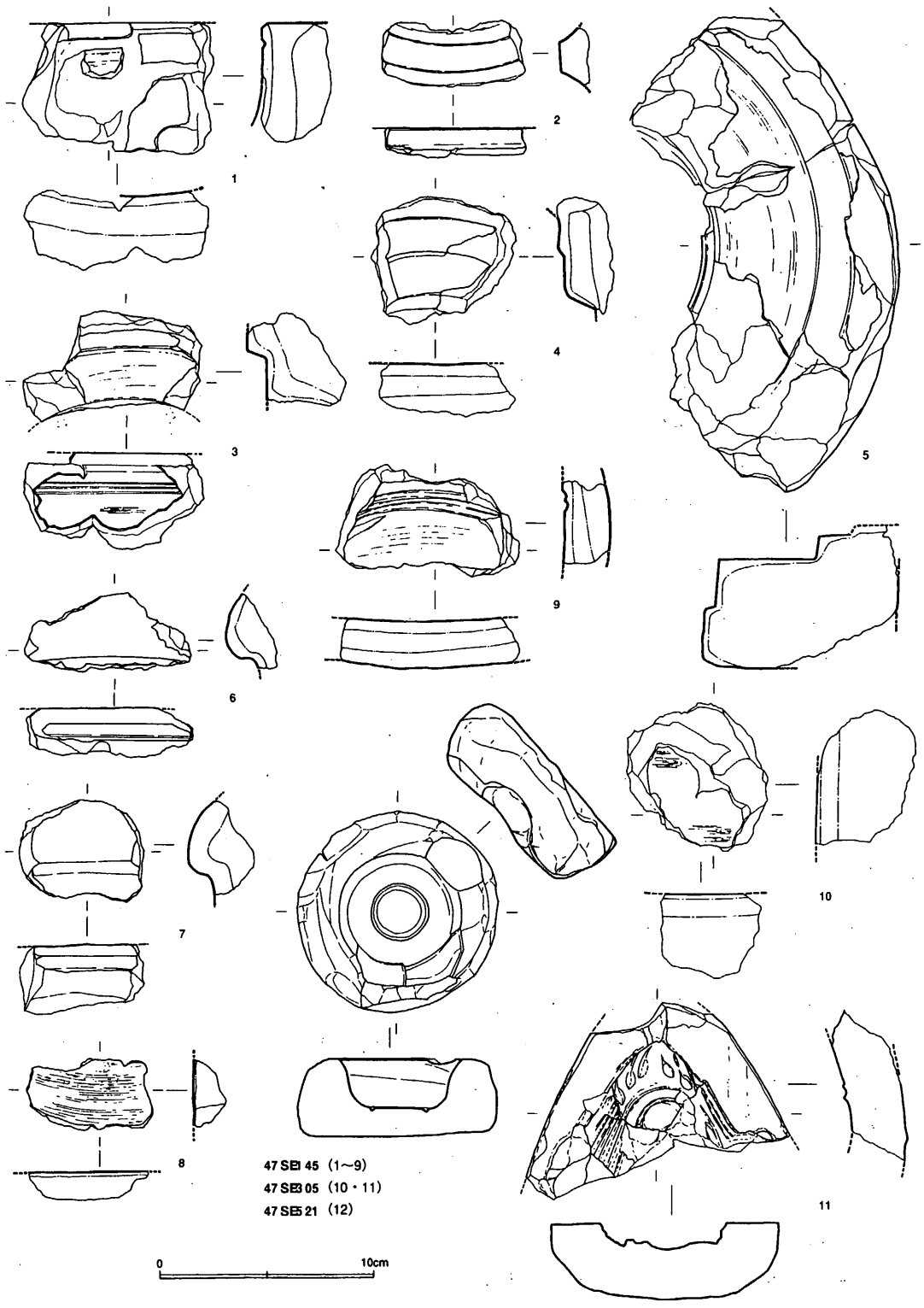


Fig.83　47SE145・305・521出土鋳型実測図（1/3）

台状製品（5）　円盤が4段重なったような形状に復原できるが、鋳型面として捉えられるのは中程の2段分である。広い平坦部を有する段の最大径は23.0cm、狭い方の段の最大径は13.6cmとなる。断面図の上下を逆転させたものが本来の形状とみられ、製品としては下段の直径23.0cm、高さ1.1cm、上段の直径13.6cm、高さ2.2cmとなる。鋳型の胎土は、表面の硬化部分が細かな砂粒を含む程度の精良なものであるが、外型部分は5mm以下の砂粒を多く含むほか、炭化物やスサもかなりの量が混じっている。第II層出土。

6・7はやや大きさが異なるが同じような形状を呈しているもので、湾曲する面及び突帯状の部分すべてが鋳型面と認識できる。小片のため不安定な数値だが、突帯部分での復原直径は6が40.0cm、7が42.8cmである。両者とも第III層出土。8は挽型でできた鋳型で円弧状の挽き目が明瞭に観察できる。第II層出土。

蓋状製品（9）　わずかに湾曲する体部の外側に近いところに幅4mm前後の沈線（製品時は突帯）が2条巡っている。2つの突帯の中心付近での直径は19.6cmとなり、完成品はさらに大きな口径となったであろう。鋳型は外面の一部も残存しており、厚さは約2.2cmである。第I層出土。

47SE305出土鋳型（Fig.83）

円筒状製品（10）　挽型で製作されたもので、小片のため直径は求められないが、かなり大型の製品とみられる。

龍頭（11）　左右に鬣が見え、それに挟まれる部分に火炎宝珠がある。火炎は上半分程度のみ作られ、宝珠は凸レンズ状を呈し、その外側には幅3～4mmの突帯が巡る。火炎の頂部に鋳型外に繋がる切り込みがあり、ガス抜き穴と考えられる。鋳型は外面も残存し厚さ2.5cm前後で、図ではわからないが外面に型合わせの溝がある。胎土は混入物の少ない精良で均質なものである。

47SE521出土鋳型（Fig.83）

小椀（六器）（12）　口径5.7cm、高さ2.5cm、高台径2.6cmで、低い高台が付き、体部がわずかに外反する製品に復原できる。鋳型上面に明確な巾木はなく、わずかに平坦部分が観察されるにすぎない。鋳型は底部が未調整（粘土塊を平板の上に置いた程度らしい）、側面は指圧痕が明瞭に観察でき、上面に幅2.2～2.8cm、深さ3mmのU字状を呈する溝があり、湯口とみられる（この部分まで鋳型として使えないとすれば椀の高さは2.2cm以下となる）。胎土は白色粒子を含むが精良で均質なものであり、鋳型面にはクロミは見られず、未使用の可能性も残される。

土坑出土鋳型

47SK010出土鋳型（Fig.84）

鍋（1・2）　両者とも上真土部分で剥離したようで、精良な土しか見えない。1はやや傾斜変化点以上が口縁部とみられ、わずかに膨らみをもって立ち上がる。歪みがあり部位によって

データにばらつきが見られたが、変化点付近での復原直径は約72cmである。2は体部が直線的なもので、傾斜変化点以上が口縁部とみられ、緩やかな膨らみをもって立ち上がるものである。変化点付近での復原直径は約44.0cmである。

47SK025出土鋳型（Fig.84）

仏像（3）　頭部の資料で、顔面部分は眉と目がわずかに確認される程度で、頭髪も額上部から顳顬までが観察され、その上には宝冠台（天冠台）も確認できる。さらに頭頂部には高く盛り上がった宝髻も確認できる。観音像のような菩薩形の頭部と認識できよう。鋳型は外面の一部も確認され、厚さは5.2cmを測り、鋳型面横の平坦部分は巾木で茶褐色を呈している。胎土は単一で小砂粒を含む程度の精良なものである。

47SK040出土鋳型（Fig.84）

横帯（4）　幅5mm程度の横方向の突帯が2条並行しているもので、挽型で作られる。

鍋（5）　体部は直線的で、傾斜変化点から4cm下方（破損面に接する付近）でわずかに内湾する傾向がみえ、この付近から底に至るものかと考えられる。直径を求めるには資料が小さすぎるが、大きめの直径を想定する必要があろう。

筒状製品（6）　クロミ付着部分はほぼ直線的に立ち上がるもので、図下面の平坦部は巾木と考えられ、明茶白色を呈している。また平坦部の最外部（変化点から外側に2.8cm）はさらに図下方向に折れ曲がっており、段状を呈して噛み合うようになっていたらしい。

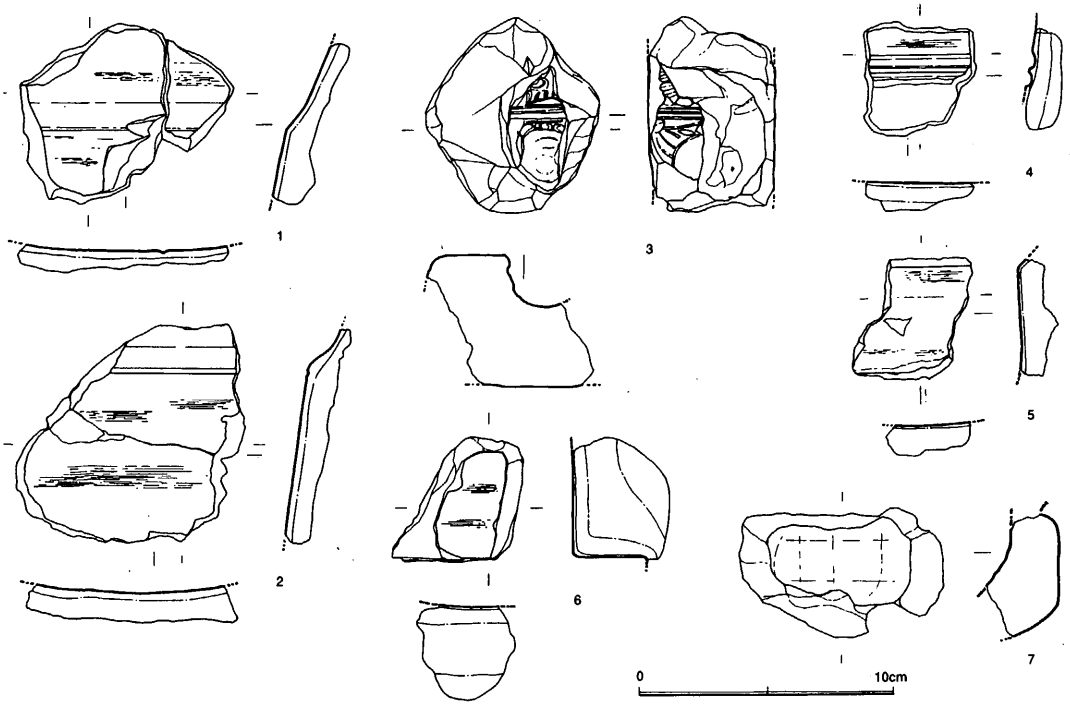


Fig.84　47SK010・025・040出土鋳型実測図（1/3）

椀状製品（7）　内面はクロミの付着もなく凹凸が見られ、鋳型面としての条件に欠けるが一応鋳型として取り扱っておく。その内面、椀形の最上部付近での直径は9.0cmで、鋳型の厚さは約2cm前後である。外面も残存しており、ヨコナデで調整される。外面は内面同様に弧を描くが内面とは同心円にならず、外面上位での直径は17cmとやや大きい。胎土は淡赤褐色で、精良な単一の土である。

47SK053出土鋳型（Fig.85）

1・2とも梵鐘の鋳型と考えられる。

下帯・駒ノ爪（1）　小さく2段になる駒ノ爪を有し、最下端の直径が43.6cmに復原できる。駒ノ爪直上には1条の突帯が巡り下帯に至り、草の間との境には幅4mmと6.5mmの2つの突帯があり、さらに中帯との境目にも2条の突帯が巡る。下帯の幅は2.4cm、草の間の幅は3.4cmで、両空間とも文様は確認できない。駒ノ爪以下はわずかに傾斜する平坦部で、クロミはなく明茶白色を呈しており巾木とみられる。真土は赤褐色を呈し小砂粒を多く含むものの精良で、表面の3mmほどは灰白色で硬化している。外型は5mm前後の砂粒を多く含む粗いものである。

横帯（2）　1に近似する資料で、図の下端に2条の突帯が走る。挽型で作られ、小片ながら体部中程での直径は約40cmになる。真土は厚さ約2cmで茶褐色を呈し、黄白色微粒子が混じる程度の精良なもので、表面の2mmほどが硬化している。外型はスサを多く含んだ粗いものである。

47SK080出土鋳型（Fig.85）

鍋（3）　直線的な体部に段差を作り口縁部としている。上面の平坦部にクロミはなく赤褐色乃至は茶褐色を呈しており、巾木とみられる。また口縁部と推定する部分の上半部は剥落、破損が目立ち、あるいは上半部まで巾木となる可能性も残される。なお資料は挽型で作られており、体部と口縁部の境目付近での復原直径は78.6cmである。

中子（4）　縦横断面ともに外湾している。図の横断面での復原直径は74.2cmを測る。鋳型面（表面）は風化してかなりザラついているが、クロミは観察でき、表面の5mm程は暗黒灰色乃至は暗灰色を呈している。胎土は小砂粒を含む程度の精良なものだが、通常の鋳型の上真土に比べるとやや粗めと言える。最も外側にわずかに観察される胎土は暗赤褐色で、やや大粒の砂粒のほかスサも混じる粗いものである。

47SK110出土鋳型（Fig.86・87）

鍋（1～6）　1はわずかに内湾する体部を有し、口縁部は2段になる。両段ともクロミが付着しているが、他の例から見ると上段は巾木の可能性がある。1段目と2段目の境目（推定される口縁端部）付近での復原直径は36.0cmを測る。胎土は上真土とみられるものは1～1.3cmの厚さがあり、赤褐色を呈して白色微粒子を多く含むが精良な土である。表面の2mmほどは明灰色を呈し硬化している。2は小片だが体部上半と口縁部の一部の鋳型とみられる。小片で不安定な

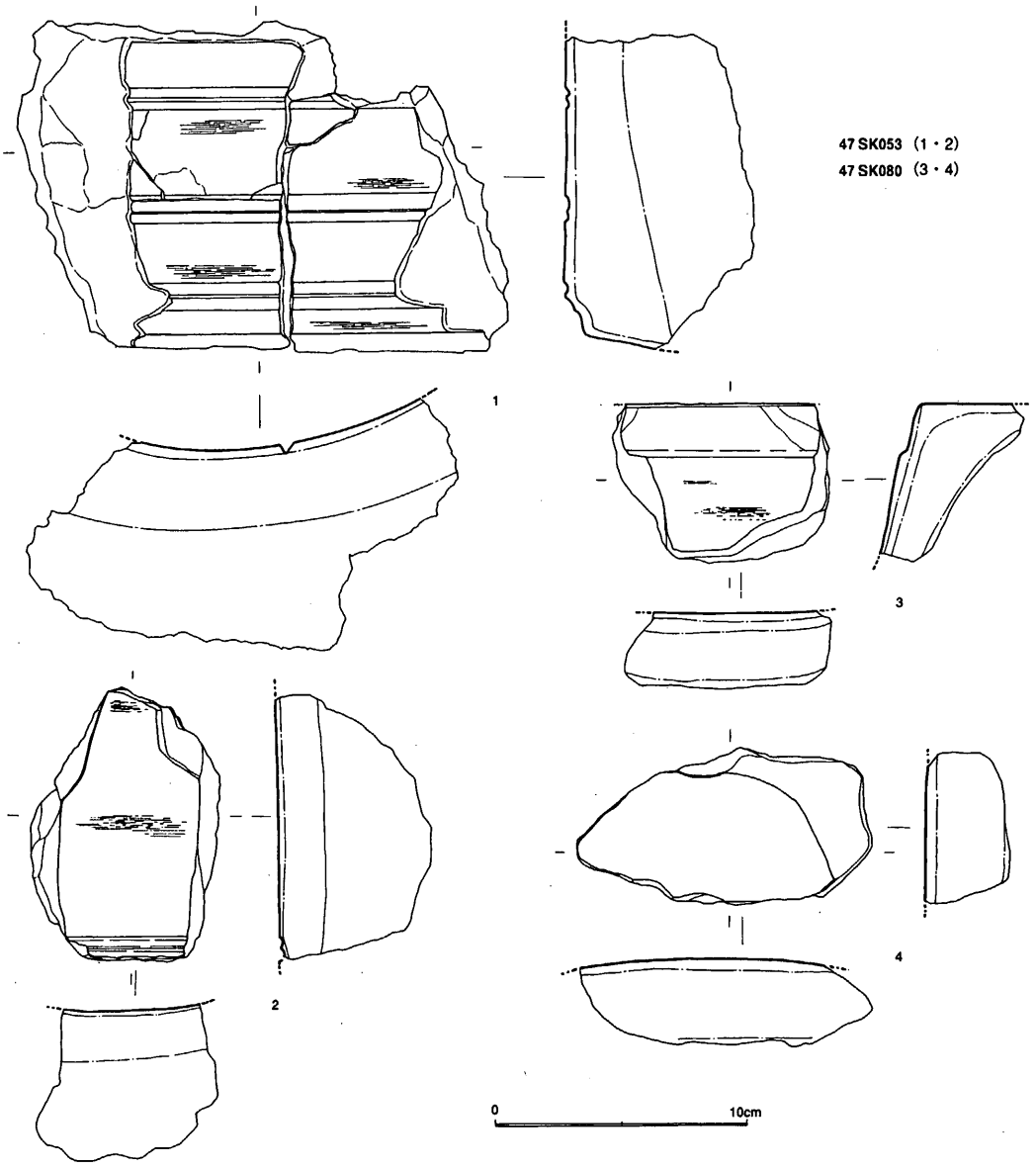


Fig.85　47SK053・080出土鋳型実測図（1/3）

数値だが、屈曲部分付近での復原直径は約22.8cmである。3はやや傾きに不安な要素があるが、直線的な体部とわずかな段差で外側に張り出す口縁部を有する資料で、上端の平坦部分及び上段部分はクロミの付着があるが巾木の可能性が高い。挽型で作られ、推定される口縁端部の復原口径は32.4cmである。4・5はほぼ同じような断面形状を呈している。4の体部下半に膨らみがあるのは鋳型の迫り出しによるもので当初の形状を示さない。また5の体部と口縁部の境目付近の復原直径は38.0cmを測る。6はやや湾曲する体部に若干張り出したような口縁部を有す

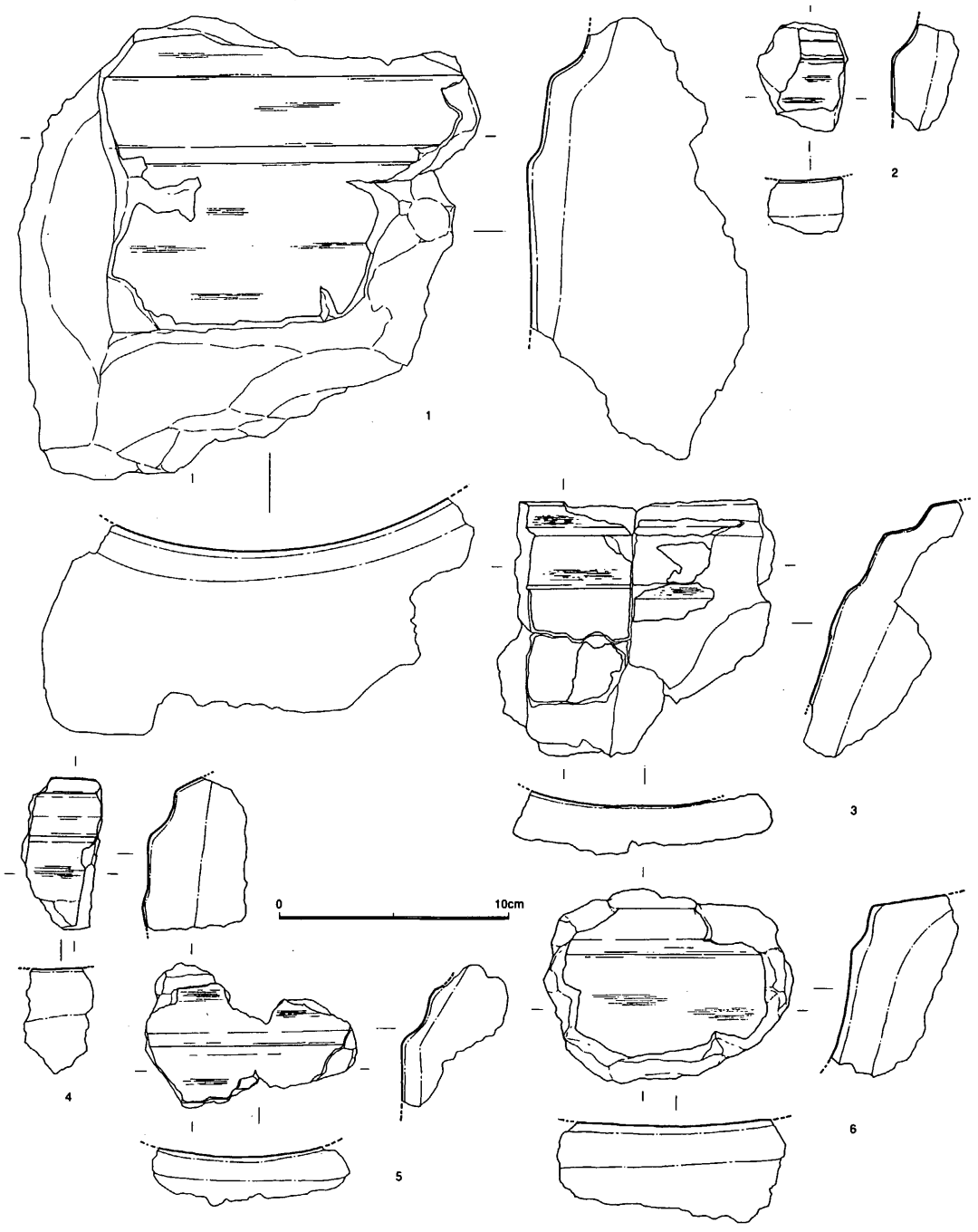


Fig.86　47SK110出土鋳型実測図1（1/3）

るもので、上面の平坦部分は赤褐色を呈しクロミがないため巾木と考えられる。挽型で製作され、推定される口縁端部での復原直径は82.8cmを測る。

7は断面形状が三角形を呈する突帯が3条以上並列し巡る資料で、最上段は2段の階段状を呈している。突帯は全周せず、図の右端で切れ、そこには縦方向の突帯が走るようである。最上面は広い平坦面で、クロミはほぼ全面に観察されるが、少なくとも平坦部分は巾木の可能性も考えておく必要があろう。平坦部と突帯との境目の復原直径は20.6cmである。胎土は表面から1cm程度が上真土で、灰白色を呈して砂粒細かく均質で精良なものである。表面の数mmはクロミによって青灰色を呈している。

8は小片で製品の形状が良く分からないが、上下逆に捉えて獣脚状のものと捉えることが出

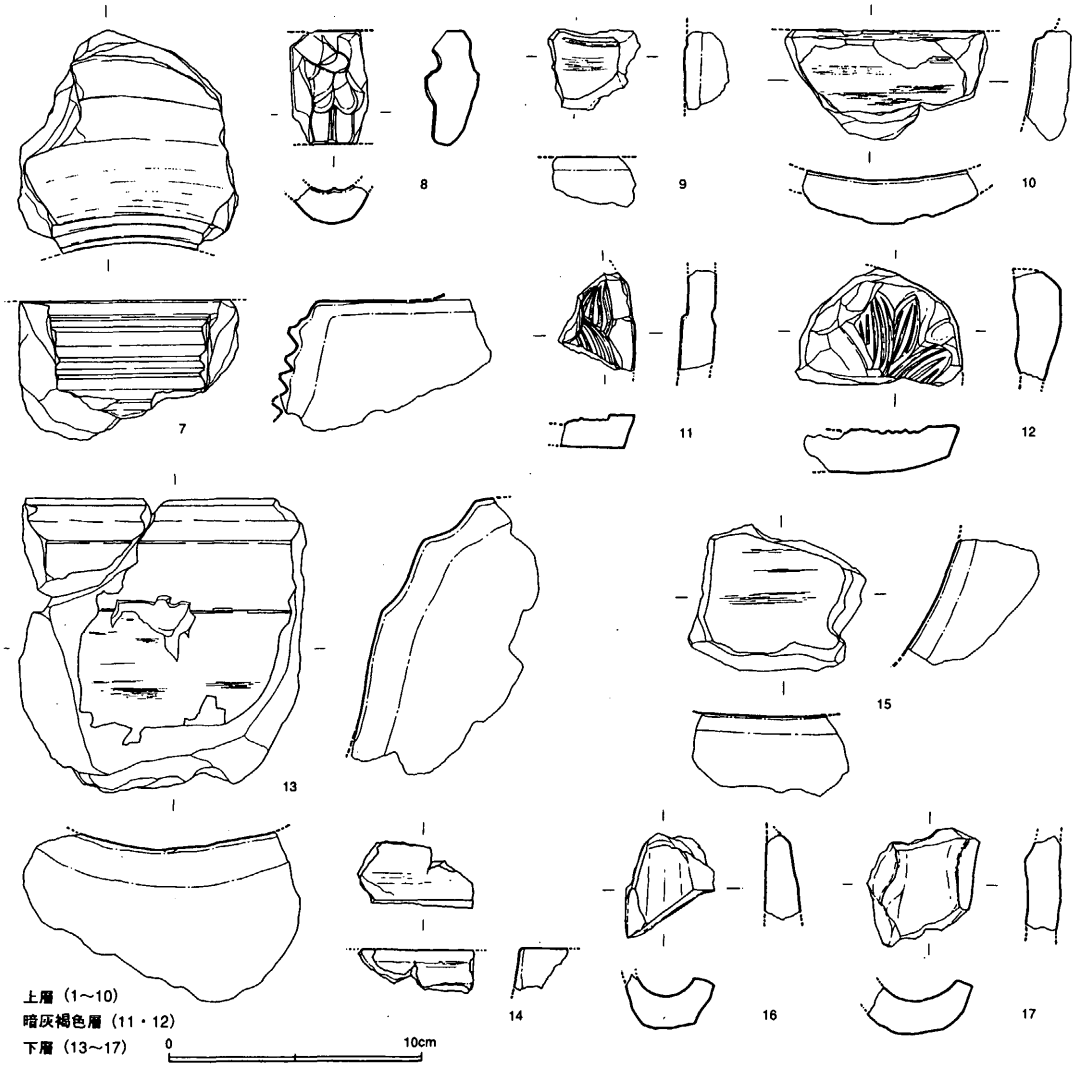


Fig.87　47SK110出土鋳型実測図2（1/3）

来そうである。脚の場合、2段以上の膨らみのある脚部の下は花弁状に大きく窪み、それが反転して手前に迫り出すように足先が出てくる資料かと思われる。鋳型は図の下端部が巾木で、上端面から外面も残存し、ケズリ調整される。破片のため断定はできないが、図の下端部では鋳型は別の鋳型に連続していたようであるが、上端はこの部分で完結していたようである。

9は同心円状に挽型の痕跡が確認できる資料で、一部に幅1mm前後の沈線（製品時は突線）が見えるが、全周はせず、模様か否か明らかでない。なお鋳型面は縦横断面ともに湾曲せず平坦である。

10は資料の上位にある段部分とその境目から1cmほどにクロミがみられ、他の湾曲面にはクロミがなく明茶色を呈する資料で、先述の釣燈籠のフレームのようなイメージである。階段状になる上端部での復原直径は26.6cmである。胎土は表面が硬化する部分を除けば単一層で、明茶白色を呈し、小さな気泡が若干観察出来る程度の精良なものである。

47SK110暗灰褐色土層出土鋳型（Fig.87）

撞座（11・12）　両者は同一資料の部位違いかと考える。通常の蓮弁とは異なり、縦筋が目立つ葉状のものが重なるタイプで、その方向性も一定しない。中心の中房も存在しないようである。鋳型の厚さは11が1.0～1.5cm、12が最大1.8cmで、外面はケズリによって調整される。11の巾木上半分は2mm程の深さで切り込まれており、型合わせのための段差の可能性がある。そうすると撞座の可能性は薄れ、花弁状を呈する単独の製品として理解する必要がある。

47SK110下層出土鋳型（Fig.87）

鍋（13・14）　13は直線的な体部を有するもので緩い段を経て口縁部に至る。クロミも全体にみられ口縁部は2段を呈するように窺えるが、他の例から見てこの部分は巾木と捉えるのが妥当であろう。推定される口縁端部の復原直径は28.0cmである。14はわずかに傾斜する体部に復原でき、その部分のみクロミが付着し明灰色を呈している。上面の平坦部は淡茶色で、ナデ状の痕跡が見え、巾木と捉えられる。

鉢状製品（15）　内湾する体部の資料で、中程部分の直径は55.2cmと大きめである。

円筒状製品（16・17）　16は直径3cm足らずの円筒状を呈するもので、図の右側に巾木が見える。外面はケズリと見られ、面取されたような形状を呈している。胎土は小型品特有の精良な単一土である。17は途中にくびれがありその部分での直径は約3.6cmで、華瓶の頸部を思わせるものである。図の右側に巾木の面が観察され、鋳型外面はケズリ調整され、精良な単一土で製作される。

47SK230出土鋳型（Fig.88）

鍋（1・2）　1は高さ25.5cm、幅31.5cm、厚さ12.5cmという大きな破片で、製品での体部はほぼ直線的でおよそ7cm分が残存している。これを真土の断面観察の状況と照らしてみると、真土は直線的には下降せず大きく内側に内湾しており、概ねこのあたりから底部が始まるもの

Fig.88　47SK230・235出土鋳型実測図（1/3）

と理解できる。体部上位は緩やかに開く口縁部に軽い段で繋がり、さらに上位に段がある。この上位の段の平坦部中程までクロミが付着するが、ここは巾木と考えられる。鋳型は挽型で作られるが資料の中程で欠損しやや開き気味で、復原される口縁端部での直径は65.2～79.8cmとややデータにばらつきが出る。胎土は真土部分が厚さ約2.8cm前後で、明茶白色を呈し肌理細かく、やや大粒の砂粒を若干含む程度の緻密なもので、表面の2mmほどが明灰色で硬化している。外型部分は厚く、暗茶褐色で大粒の砂粒を多く含み、炭化物も混じる粗いものである。2は1に類似する個体で、その形状と胎土の様相からやや直立気味の鋳型面が口縁部（傾きに問題ありか)、それ以上の段部分はクロミの残存状況が悪いことを踏まえると巾木と考えられる。また推定される口縁端部での直径は79.4cm前後で、これも1に近似するものである。

47SK235出土鋳型（Fig.88）

縦帯・横帯（4）　資料の上端に横方向の突帯、左側に縦方向の突帯が観察できる。挽型で作られるが、小片のため直径の計測は不可能である。

3は3面にクロミが付着するもので、1面は平坦面、いま1面はやや傾斜するがほぼ平面、さらなる1面は大きく湾曲する面を持っている。胎土は上真土部分が残存しており、小砂粒を含む程度の精良なものであり、胎土の情報から推定すると小型の製品ではなさそうである。

47SK240出土鋳型（Fig.89）

龍頭（1）　図の右下が鬣、左側が火炎宝珠の一部である。宝珠はおそらく円形で凸レンズ状を呈し、外周に幅3mmほどの圏線が巡る。火炎は全周せず、宝珠の中位以上にある。鋳型の右上部分は巾木で、外面も残存しているが調整は不明瞭である。厚さ2.5cm前後。

円盤状製品（2）　製品の外周に珠文帯が巡るもので、体部は平面的であるが珠文帯はやや外傾している。珠文は直径3mm前後で隙間なく詰まって並んでおり、珠文の外側には細い突線（製品では沈線）が巡り、その外周部分での直径は12.8cm前後である。鋳型は厚さ2.0～2.6cm程度で、外面は粗いナデ調整とみられる。珠文帯と鋳型外周との間に幅3cm、深さ2mmほどの切り込まれたような平坦部分が観察され、型合わせもしくは湯口の可能性を考えたい。胎土は白色砂粒を含むが精良で緻密なものであり、小型品特有の単一土で構成されている。

鍋（3・5）　両者とも体部と口縁部の境目部分を含む資料で、小片のため直径の計測は困難である。3の表面にはクロミが付着するが、斜め上がりのナデ様の痕跡が残っている。

4は2段の階段状を呈する資料で、挽型による資料とみられる。先述の釣燈籠のフレームに近いイメージを受けるが、胎土の様相が異なる。

47SK245出土鋳型（Fig.89）

円筒状製品（6・12）　6はほぼ直立する体部を有する資料で、復原直径は24.8cm前後である。真土は厚さ約6mmで、表面は灰色を呈し硬化している。12は直径8.8cmで直立するもので、経筒のような形状が思い浮かぶ。真土は厚さ6～7mmで、表面の1mmほどは硬化している。クロ

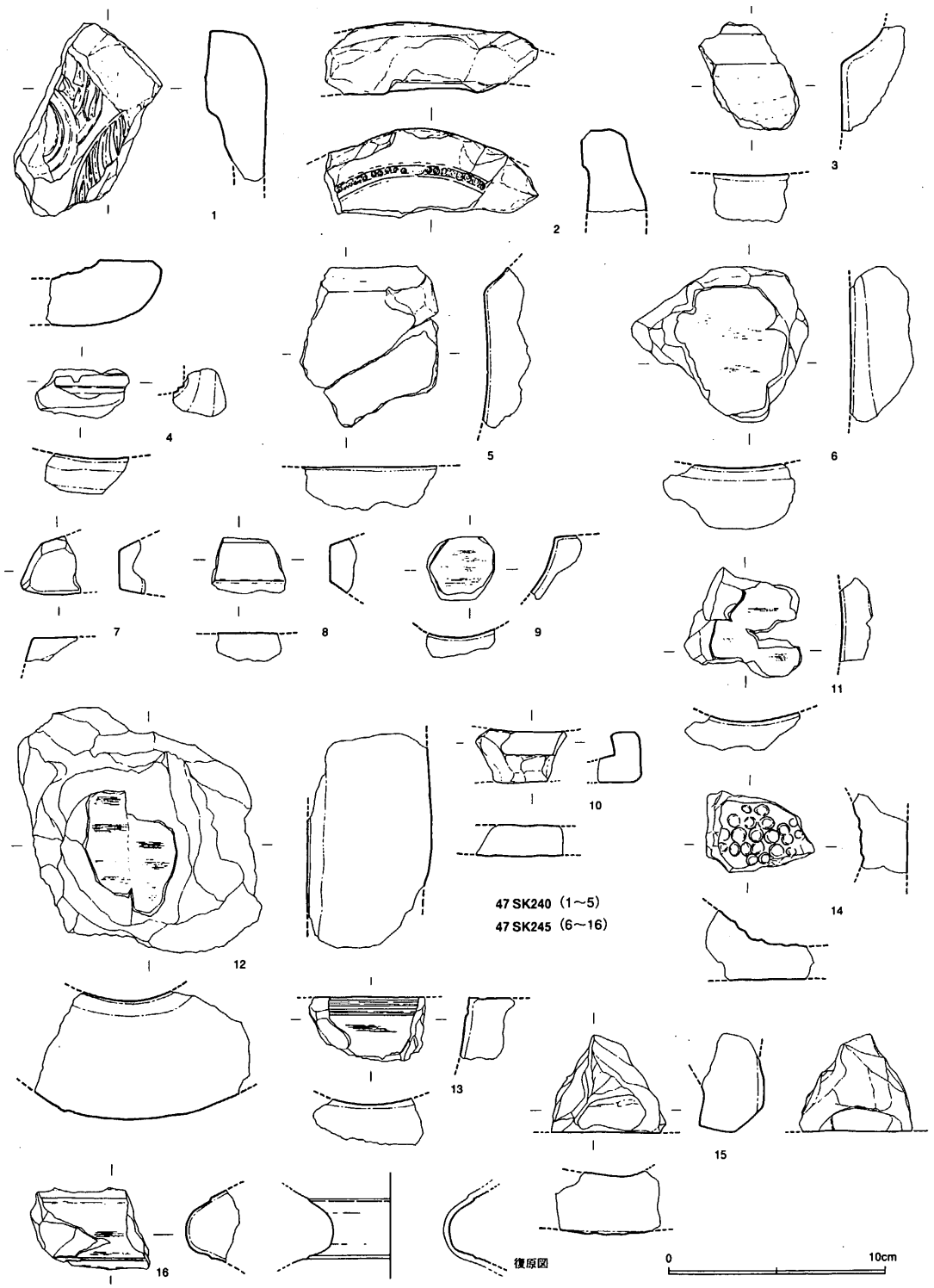


Fig.89　47SK240・245出土鋳型実測図（1/3）

ミの付着はみられず、鋳型面は淡白橙色を呈している。外型は気泡が目立ち炭化物を若干含む粗いもので、その外面は当初面とみられ、鋳型の厚さは5.6cm前後あったことがわかる。

7は台形状を呈する3面に加えていま1面も当初面とみられるが、いずれもクロミはなく、小型製品の鋳型の外側（外面）部分とみられる。8は断面台形状を呈するもので、破断面以外の3面にクロミが観察される。また平坦部分と図の下側の傾斜面は表面の風化が著しい。

小椀状製品（9・11）　9は挽型による製品で、上端部付近での直径は9.0cm前後である。図上部の平坦面は巾木とみられる。11は資料の中程での直径が12.4cmを測る資料で、胎土は茶褐色で白色粒子を含む精良なものである。表面は明灰色で硬化している。

10はL字部分が鋳型面で上面の平坦部分は巾木とみられ、しかもその部分は湾曲している。底面及び背面は鋳型の外面を残す。胎土は白色粒子を含むが精良な土である。

鉢状製品（13）　挽型によって製作されたもので、上端部での復原直径は12.4cm前後、上位に2条の沈線（製品では突線）が巡っている。上部の平坦面はクロミがなく淡灰橙色で、巾木とみられる。

螺髪状製品（14）　鋳型面は湾曲し、そこに直径5～7mm、深さ2mm前後の低い円盤状突起（鋳型では窪み）が多数みられる。突起は簡素な円盤であり、いわゆる螺髪とは異なる。鋳型外面は平坦で、目立った調整は観察できない。精良な胎土は単一で、小型品をイメージさせる。

15は図正面中央下位のわずかな部分が鋳型面である。背面には幅3.8cm、高さ1.2cm、奥行き1.5cmほどの切り込みがある。下面と背面は鋳型の外面で当初面である。

華瓶（16）　頸部の鋳型とみられ、口縁部及び体部との境目付近に軽い段がある。最も細くなった部分での復原直径は5.4cmである。

47SK280出土鋳型（Fig.90）

釣金具（1・2）　両者とも釣燈籠の釣金具部分とみられる。1はほぼ全容が知れるもので、製品時での座部分の最大径は7.5cmで、単弁八葉蓮華文の反華座となる。中央は一辺2.9cmの方形突起で切子になり、高さは2.6cm（反華座を含めると3.3cm）を測る。切子の対になる2面に径1cmほどの円形の剥落痕跡があり、ここに円筒状のものがあったことがわかり、製品としては環を通す穿孔があったものとみられる。鋳型は外面までよく残存しており逆円錐台形を呈し、最大径8.4cm、最小径5.4cm、高さ4.5cmで、体部はケズリ調整されている。胎土は細かな砂粒を含む程度の精良なもので、各部均一である。2は1とほぼ同じ大きさの資料で、やはり単弁蓮華文をあしらい中央に方形突起を持つが、突起と蓮弁の間には2条の圏線に挟まれた芯帯がある。方形突起は切子に作られ、その1面に径1.3cmほどの円形の剥落痕跡があり、1同様に環を通す穿孔があったものとみられる。製品としての高さは3.4cm、鋳型の高さは5.7cmを測る。

3は山形を呈する鋳型で正面図の左右と背面は剥離、欠損面であるが、上下及び正面は鋳型面である。ただし図の上面のみ暗灰色のクロミがみられ、他の面は灰橙色を呈していることか

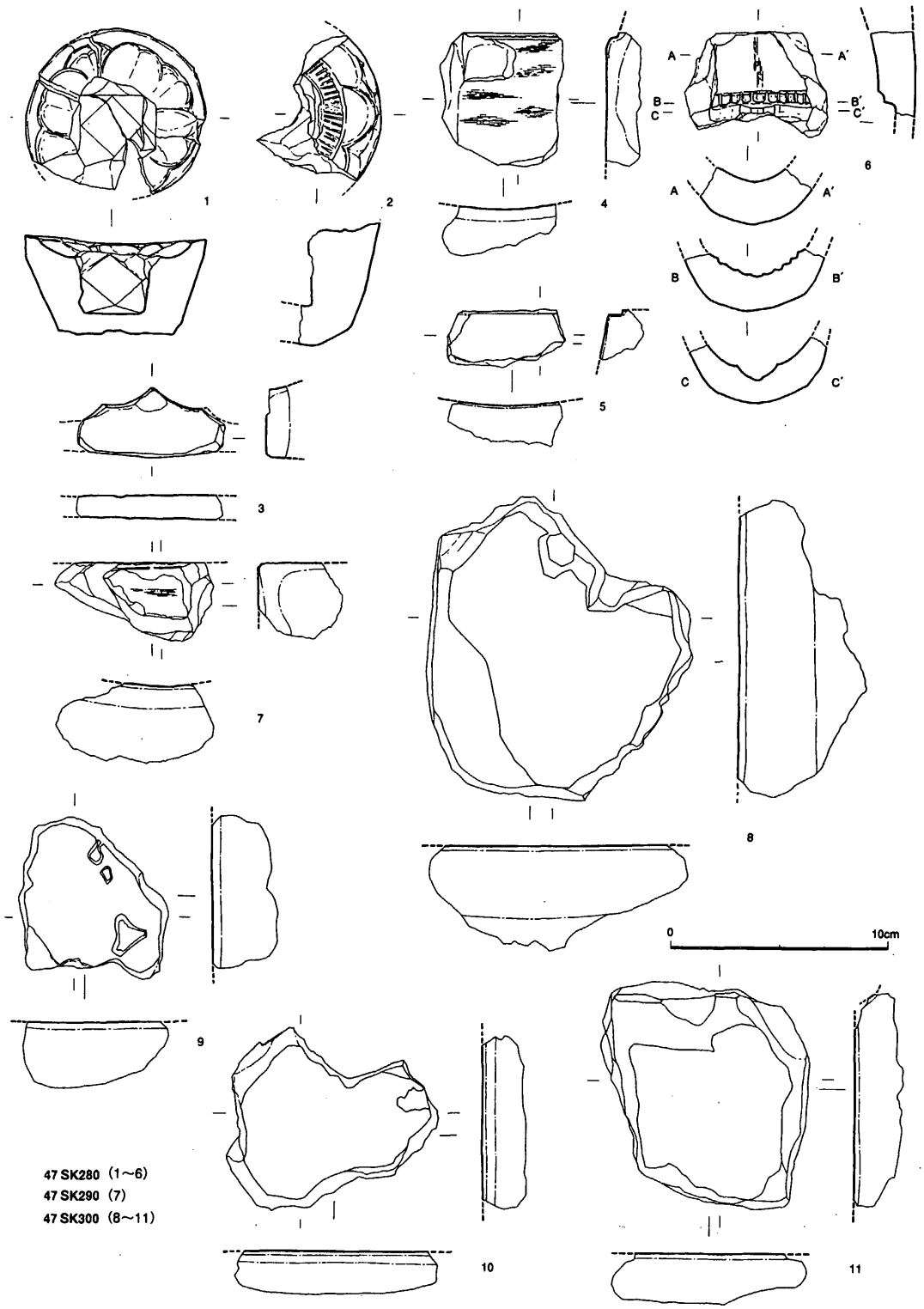


Fig.90　47SK280・290・300出土鋳型実測図（1/3）

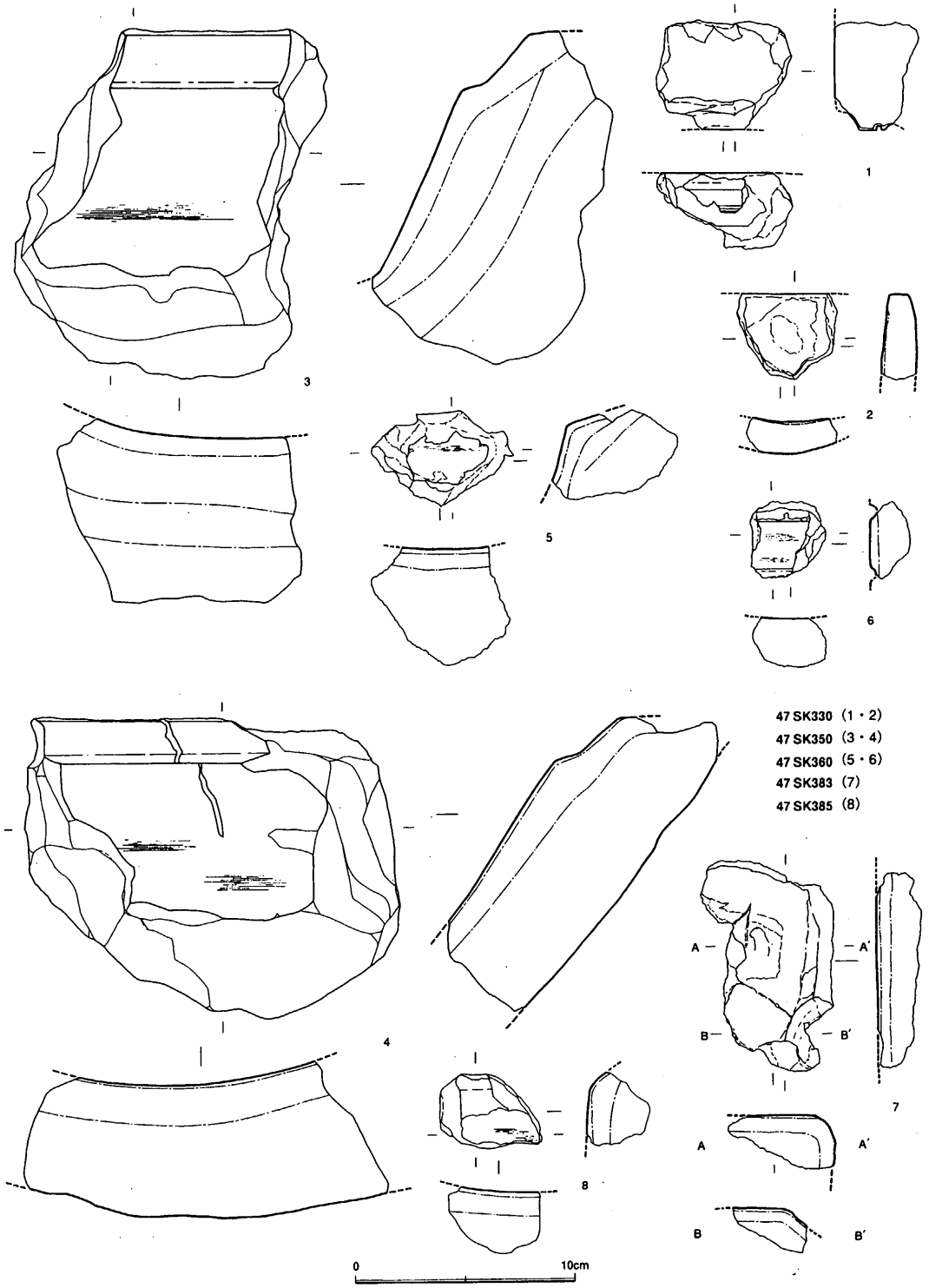


Fig.91　47SK330・350・360・383・385出土鋳型実測図（1/3）

らこの部分は巾木の可能性がある。

釣燈籠（4・5）　いずれも上面が階段状になりその部分にのみクロミが観察される。全体は挽型で作られるが、湾曲する面のほぼすべてが淡橙色を呈しており、その部分は巾木であることがわかる。釣燈籠のフレーム部分と理解したい。4の横断面観察部分での直径は約24.4cmである。

6は体部の中心が隅丸方形柱状を呈するもので、その下位に半円筒形の突起が環状に並ぶ突起帯があり、さらにその下位には低い半円筒形の座が取り付く資料である。具体的な製品名を特定できない。鋳型面は明橙色を呈し、使用した形跡はない。鋳型は外面も残存しており、粗いナデ状の調整を施す。胎土は均一で、白色粒子を含む程度の精良なものである。

47SK290出土鋳型（Fig.90）

7は挽型で作られた直径18.0cm程度に復原できる円筒形の資料で、図の上面にある平坦部分は明橙色を呈し、巾木とみられる。真土は厚さ1cm前後で明橙色を呈し、細かな砂粒を含む程度の精良なものである。外型はやや大粒の砂粒が含まれた粗めのものである。

47SK300出土鋳型（Fig.90）

8～11は残存する破片の大きさは異なるものの、縦断面、横断面ともに平面で、かなり大きな平坦面を持つ製品の一部とみられる。11に挽型様の痕跡がみえるが、ナデ調整の跡とみたい。いずれも表面はクロミの付着で暗黒灰色を呈し硬質。外型は灰褐色で大粒の砂粒や小礫も混入する粗いものである。

47SK330出土鋳型（Fig.91）

1は平坦部分が明茶色を呈しており巾木とみられ、わずかに残る鋳型面には突帯が巡っている。挽型で作られているが、小片のため直径は求められない。図の方向を変えると梵鐘の駒ノ爪から下帯の一部とみることもできる。

2は端部で直径14.0cm程度に復原できる円筒形の製品を作った鋳型と見なしたが、内側の表面には明確なクロミはなくタール状の付着物が観察される。外面は粗いナデである。生産用具の可能性も残される。

47SK350出土鋳型（Fig.91）

鍋（3・4）　3はかなり傾くがほぼ直線的な体部を有し、軽い段を経て口縁部を形成する。口縁部は1段のみでその上面に見える平坦部分にはクロミはなく巾木とみられる。口縁端部での推定される復原直径は45.6cmである。体部下端には小さな屈曲があり、この付近から底部に至るものとみられ、図の傾きが正しければ、底径約38.0cm、推定高11cm強の資料に復原できる。鋳型は厚さ9cm以上ある。4は3とほぼ同様の資料だが、鋳型は厚さ6.0cm前後で1より薄く、残る外面の観察では表面は粗い縦方向のケズリもしくはナデのような調整で終わる。資料の復原直径は54.2cmで1より大きいがその数値は小片から求めたもので参考程度にしかならない。逆

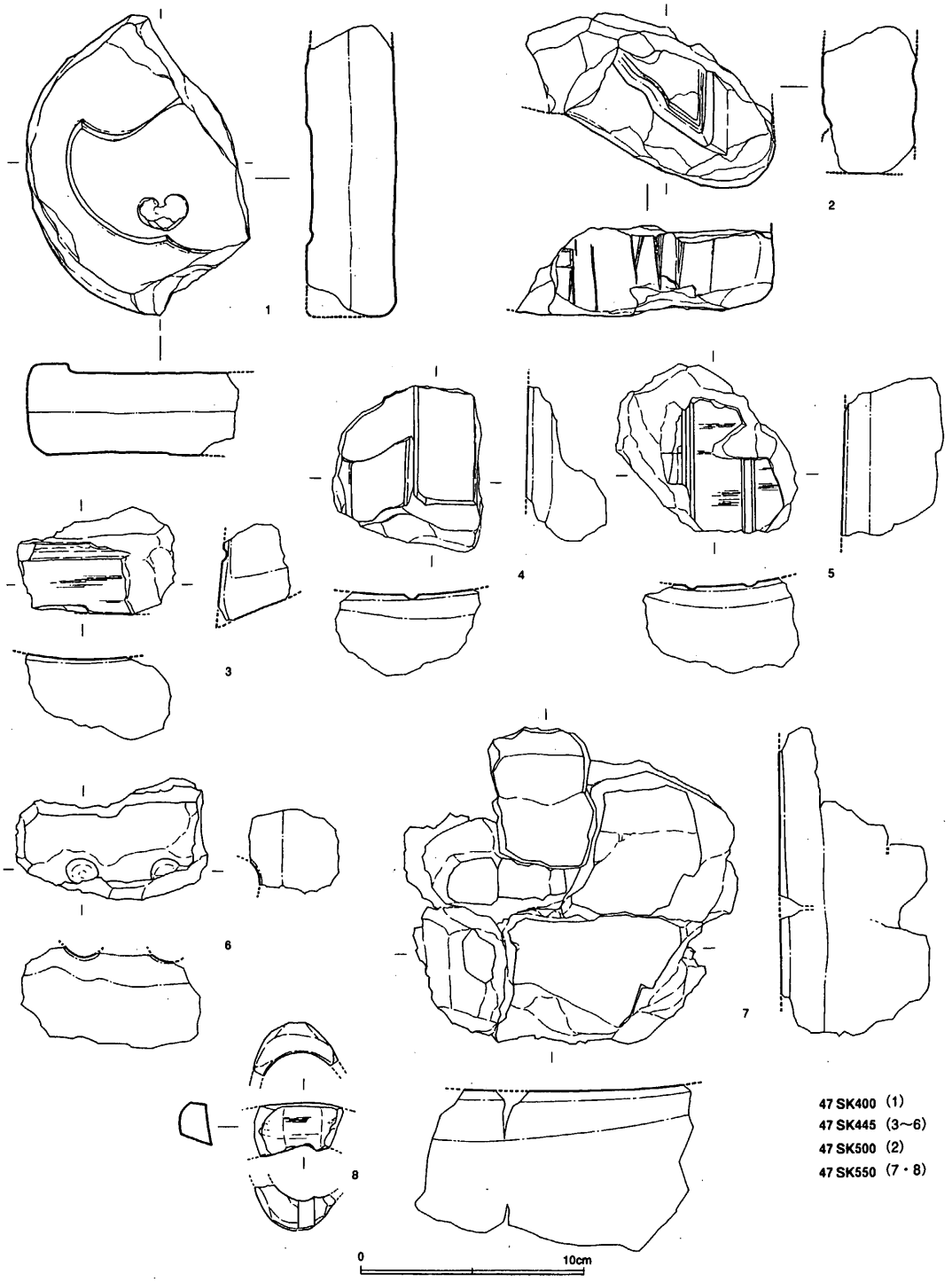


Fig.92　47SK400・445・500・550出土鋳型実測図（1/3）

に断面形状はかなり近似しており、あるいは同じ挽型で製作された可能性も残される。

47SK360出土鋳型（Fig.91）

5は屈曲部以下が鋳型面とみられ、それ以上の部分は表面の剥離が著しく、巾木の可能性がある。資料は挽型で製作されており、屈曲部分での直径は約38cmである。胎土は真土が約1cmの厚さで、細かな白色粒子を含む程度の精良なものであり、他は外型となり、やや大粒の砂粒に混じって炭化物が若干混在している。

横帯（6）　図の上下に横方向の突帯が巡るもので、突帯に挟まれた空間は2.1cmである。

47SK383出土鋳型（Fig.91）

7は縦横断面方向ともに主要面は平坦な資料で、平坦面の上部約2cmほどにはクロミはなく茶灰色を呈し、他は明灰色であるが、その境目は直線的である。横断面方向の観察では、図の上半部で側面がほぼ直立するのに対し、下半部分には半円形の抉りがあってその断面は傾斜している。製品は特定できないが、胎土に真土と外型の区別があり、小型品ではなさそうである。

47SK385出土鋳型（Fig.91）

8は鍋の口縁部分を思わすような資料だが、上半部のクロミが剥落しその部分が巾木として捉えられるものである。挽型で製作され、横断面を観察した付近での直径は30.4cm程度に復原できる。

47SK400出土鋳型（Fig.92）

風招（1）　鋳型の深さは2～5mmで鋳型面はほぼ平坦、周囲は巾木とみられる。資料下辺の雲形切り込み部分に接して猪目がある。猪目は剥落したような痕跡を示すことから型持の役目も果たしていた可能性がある。鋳型は厚さ約4cmで、外面も残存し、指圧による粗い調整痕が観察される。胎土は中程で変色するが小型品特有の均一なもので、白色粒子を含む程度の精良なものである。

47SK445出土鋳型（Fig.92）

この遺構から出土した鋳型は、いずれも梵鐘の鋳型とみられる。

縦帯・横帯（3～5）　3は資料の上部に横方向の突帯がみられるもので、その面はクロミがあって鋳型面と認識できる。挽型で作られ、復原される直径は突帯下付近で40.4cmを測る。図下面は斜めに切り上がる平坦面で、クロミはなく赤褐色を呈しており巾木とみられる。4は資料の中央付近に縦方向の突帯が走るもので、挽型で作られており推定される直径は45.6cmほどになる。真土は厚さ約1cmほどで赤褐色を呈し精良なもので、表面の2mmほどは灰白色で硬化している。5は2条の縦方向の突帯が残るもので、それに挟まれた空間の幅は2.2cmである。横断面の観察を行った付近での復原直径は93.8cmと大きくなり、縦断面方向はほぼ直線である。4・5とも質的には近似しており、直径の計測が資料の大きさに制約を受けていることを踏まえると、両者同一の資料である可能性も残される。

乳（6）　径1.4cm弱で円形に浅く窪む部分が鋳型面で、そこが乳の先端部分と考えられる。両者の中心間は3.7cmで、円形を呈する鋳型面以外の面は破損面である。鋳型の厚さは4.2cm以上と厚く、外型は暗赤褐色を呈し、砂粒を多く含む粗いものである。なお他の乳鋳型のように別に焼き上げた鋳型を埋め込んだ形跡は確認できない。

47SK500出土鋳型（Fig.92）

鞴（2）　隅部分の鋳型で、製品時の資料の周囲は4mmほど高くなり縁取りがなされている。鋳型は厚さ4cm前後で、背面は粗いナデ状の調整がなされ、側面（図の下面）には型合わせに用いたとみられる多数の溝状傷が観察できる。胎土は小型品特有の均一なもので白色粒子を含む程度の精良なものである。

47SK550出土鋳型（Fig.92）

7は復原直径39.2cm程度になる円筒形を呈する製品の鋳型で、縦断面はほぼ直線を呈している。鋳型は厚さ6.6cm以上あり、外型はスサ混じりの粗いもの、真土は明確には区分できないところもあるが概ね2cm程度の厚さで、表面の3mmほどがクロミの付着で暗黒灰色を呈し硬化している。

8は円錐台状になる製品の鋳型とみられ、上端での直径は4.0cmを測る。図下面には幅7mm、深さ2.5mmで箱形に切り込まれた溝があり、型合わせの痕跡とみられる。鋳型の外面はナデ調整、胎土は単一で白色粒子を含む程度の精良なものである。

その他の遺構出土鋳型

47SX045出土鋳型（Fig.93～95）

鍋（1～12）　1は体部から口縁部にかけての資料で、体部はごくわずかに内湾しているが、上方に至って少し外反するようである。製品時の直径は資料の歪みが著しいために求め得ない。鋳型面は残存しないが、クロミによる断面変色部分の観察によると、資料の上端付近以上に軽い段を有する口縁部がくるものと考えられる。真土は資料の厚さ（最大で7.6cm）からみると薄く1cm程度で、小砂粒を若干含むものである。外型は厚く、大粒の砂粒に混じってスサや炭化した籾殻等が混在している。2・3は口縁部とその上方にある巾木部分の破片で、胎土の状況は1に近似する。クロミは口縁部と推定するほぼ直立する範囲にのみ見られ、それより上位は表面の剥離が著しい。いずれも挽型で作られるが、2は小片のため径は求め難く、3は推定される口縁端部での直径が47.2cmである。4はほぼ直立する体部を有するもので、口縁部は緩やかな段を経てわずかに外反しつつ立ち上がる。さらにその上位に段があるが、この部分は巾木と考えたい。鋳型面は挽型で製作され、口縁端部と推定される位置での直径は42.4cmに復原される。鋳型は辛うじて外面も残存し厚さ6.5cmを測り、胎土の状況は1の資料に近似する。5はわずかに内湾する体部を有する資料で、口縁部との境目は明瞭な屈曲をなす。鋳型面は挽型で製作され、体部下位での直径は44.5cm程度に復原される。鋳型は厚めで厚さ8.5cm以上あるが、

Fig.93　47SX045出土鋳型実測図1（1/3）

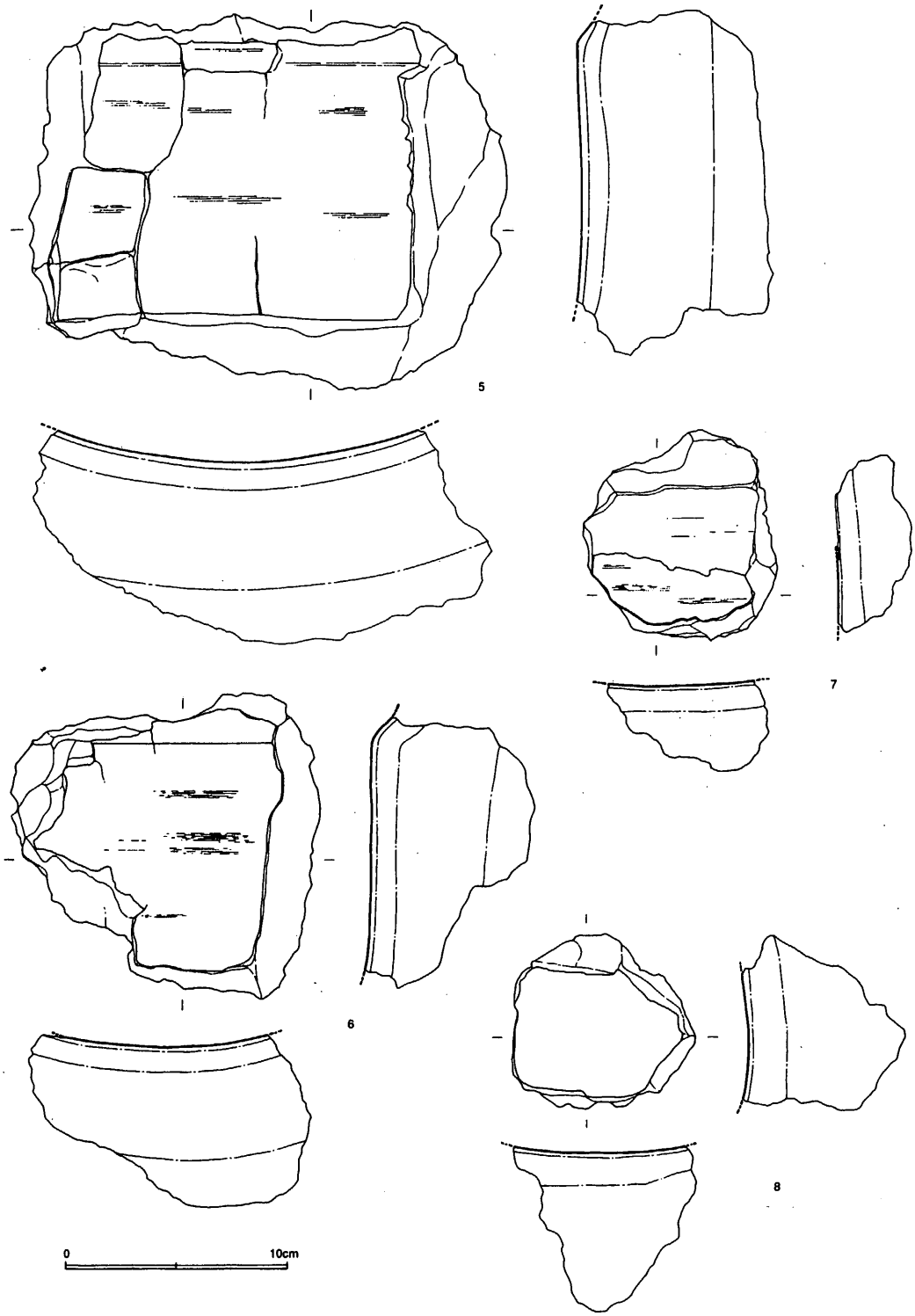


Fig.94　47SX045出土鋳型実測図2（1/3）

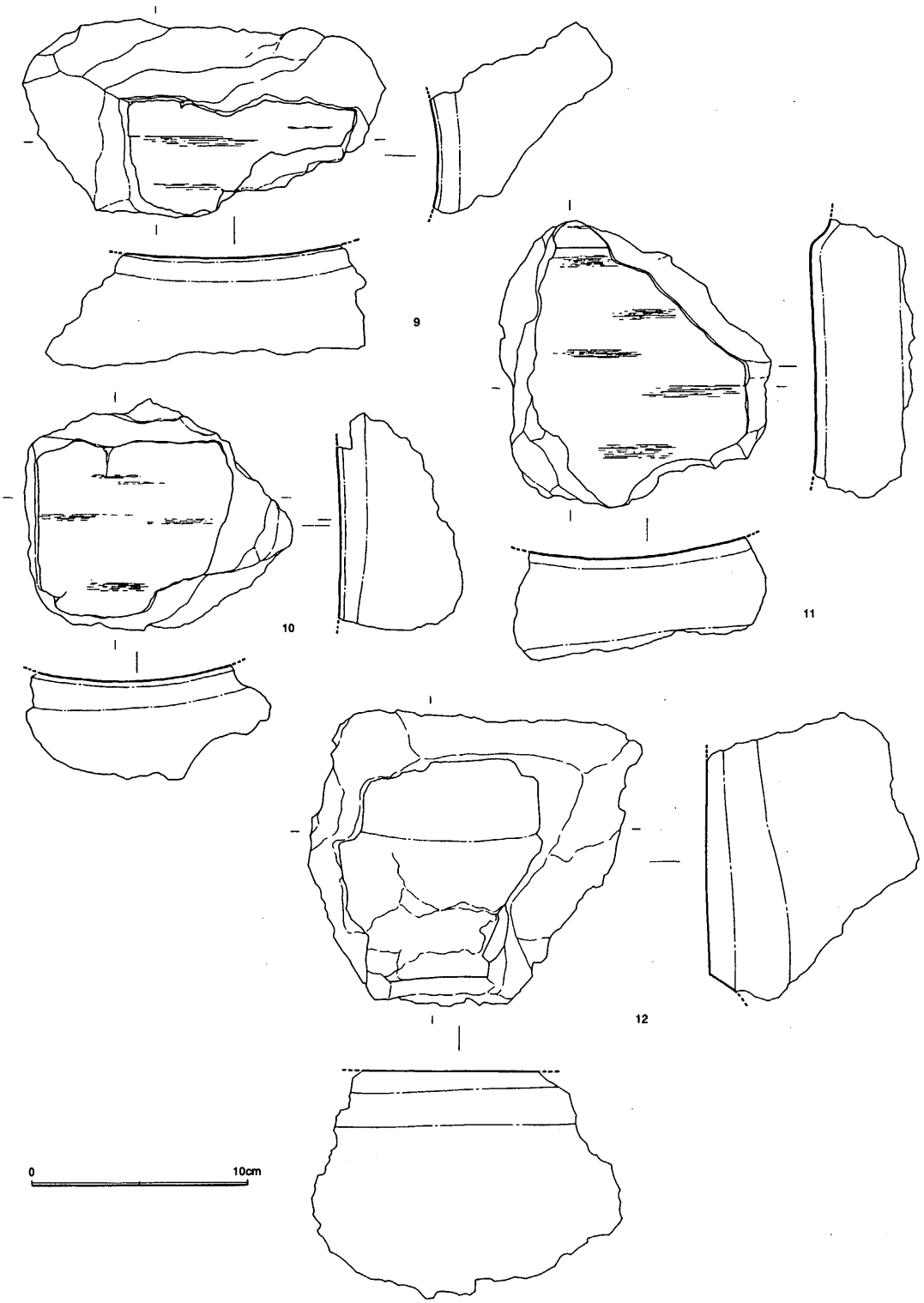


Fig.95　47SX045出土鋳型実測図3（1/3）

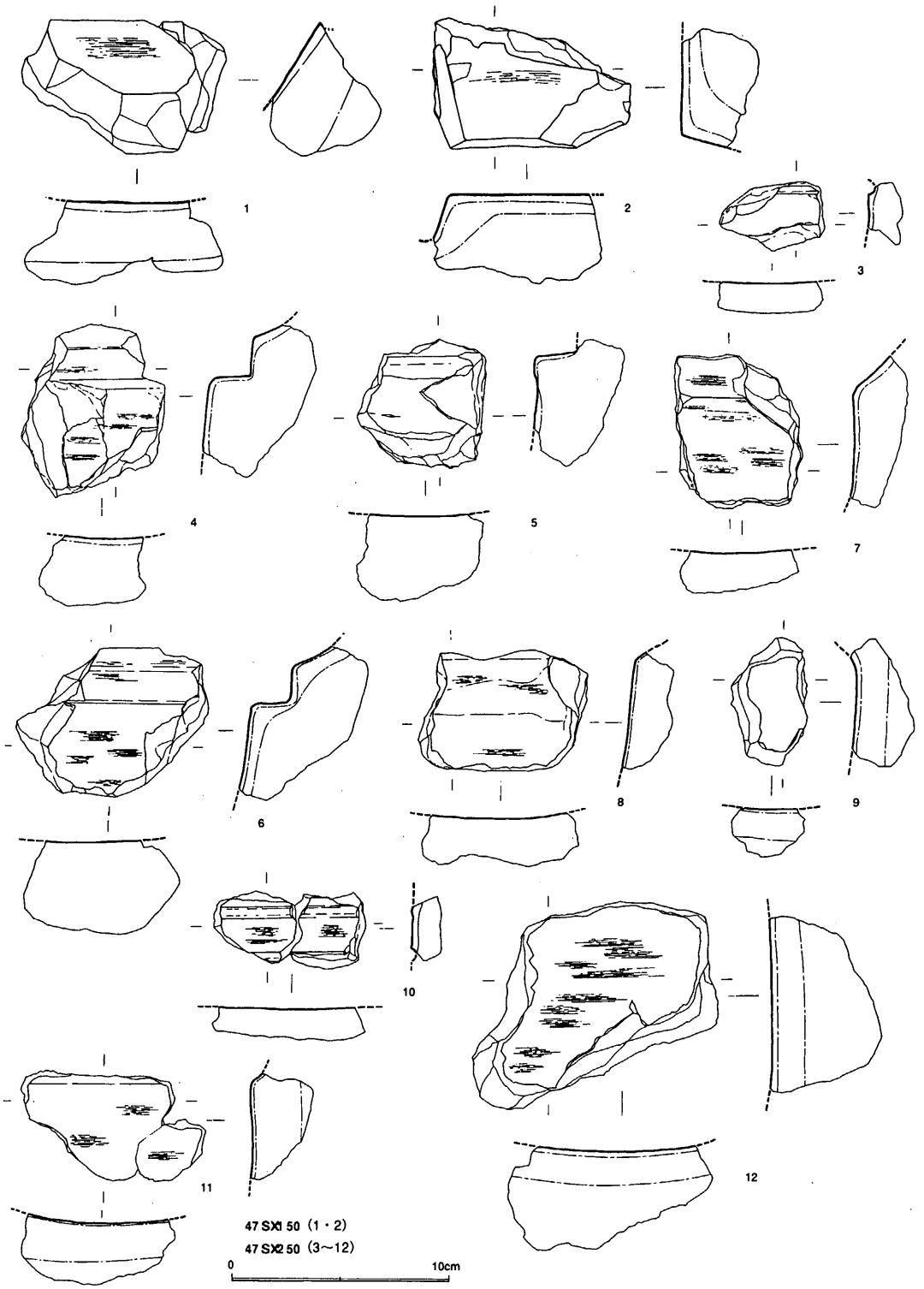


Fig.96　47SX150・250出土鋳型実測図（1/3）

胎土の構成は一部変色による分層可能な箇所もあるが、1に近い。6は5の体部と似るが、口縁部との境目は5より丸味が強い。挽型で作られており、口縁部と体部の境目付近での直径は39.2cmを測る。胎土は5に近い。7は体部片とみられる。8・9は縦断面方向も強めに内湾する資料である。両者とも挽型で作られ、8は中程での直径が44.2cmに復原でき、9は51.6cmに復原できる。胎土の状況はいずれも近似し、真土が厚さ1cm前後で表面はクロミによって変色硬化している。10は体部の資料で、縦断面方向はわずかに湾曲している。鋳型は挽型で作られ、資料上位で求められる直径は39.0cmである。11はごくわずかに内湾する体部の上位に大きく屈曲する口縁部を作るもので、体部と口縁部との境目は丸味を帯びている。鋳型は挽型で作られ、体部中程の直径は38.8cmで、10の資料に近似する。同一資料の可能性もある。12は他と図の作成方向が異なるもので、平面図下部がわずかに円弧を描く部分でここが体部あるいは口縁部となる部分である。図に示した平坦部は中央やや上位から以下がクロミ付着範囲で、それ以上はクロミはなく暗茶灰色を呈しているが、クロミのある平坦部分も亀裂が多くみられ荒れており、全体が巾木に相当する可能性が高い。鋳型は厚さ最大13cm程度もありかなり大きなものである。

47SX150出土鋳型（Fig.96）

1は強く傾斜する面を有する資料の一部とみられ、挽型で製作されており、横断面観察部分での直径は88.8cmを測る。2は3面に鋳型面のあるもので、うち2面は平面、1面は湾曲している。湾曲面の上端部での径は48.5cmに復原できる。それに直交する鋳型面は断面観察を考慮すると、現在の下端部分で外側（図の左側）に折れ曲がるようであり、逆台形状を呈していた可能性が高い。また上面の平坦部分は巾木とみられる。製品としては把手付きの鍋を考えたい。

47SX250出土鋳型（Fig.96）

横帯（3）　資料の上辺に横方向の突帯が走るもので、横断面方向はわずかに湾曲する。鋳型面にはクロミは観察されず、未使用品か巾木部分と考えたい。

4～6はおそらく同一の資料とみられる。やや内湾している体部の上位に大きな階段状の段を設け、さらにその上位に斜めに切り上がる面を有している。鋳型面はすべて風化しクロミはほとんどみられないことから、残存する部分を巾木と考え、製品になる部分ではない可能性も残しておかなければならない。資料は挽型で製作されており、階段状を呈する部分の最大径は44.4～49.0cmを測る。

鍋（7～9・11・12）　7・8は体部と口縁部との境目付近の資料で、体部はわずかに湾曲しており、境目は明瞭に屈曲する。7の体部中程での直径は80.8cmにもなり、8の体部中程での直径は36.0cmであるが、7の数値には不安な材料が多い。9は底部と体部の境目に相当する可能性が考えられる資料で、ごくわずかに湾曲する底部（図の縦方向）から大きく屈曲して立ち上がる体部がイメージされる。11はわずかに湾曲する体部と口縁部との境目の資料で、挽型で製作され、境目付近での直径は37.2cmに復原される。12は体部の資料と思われ、縦断面方向もわずか

に湾曲する。挽型で製作され、体部中程での復原直径は51.0cmである。

10は風化が進行しているが、資料の上位に幅5mm、高さ0.5mm程度の低い突帯（製品時は浅い沈線）がある（挽型の傷の可能性も残る）もので、横断面方向は挽型で作られることからわずかに湾曲している。鋳型面にクロミは観察されない。

47SX260出土鋳型（Fig.97～100）

1～55は一定の範囲内でしかも平面的に広がって出土した一群の鋳型で、ほとんどのもので胎土や形状に共通性がある。特に1～46はすべて鋳型面が平面で湾曲する箇所はなく、鋳型面側しか残存しないが厚さは2cm前後以下のものばかりであり、ほとんどが真土部分のみ残存していると言える。当初は外型もあったと思われるが、明確な資料は出土していない。胎土は残存するほとんどの部分が真土とみられ、暗茶灰色、茶褐色を呈し、白色粒子、黄白色粒子を含む程度の精良なものだが一部に気泡が目立つものもある。鋳型面から2mmほどはクロミの付着で硬化している。お互いに接合することはほとんどないが、文様構成や胎土の状況等を考慮すると少なくとも1～46に関しては本来一つの製品の鋳型として存在していたものと理解したい。その製品の特定はきわめて難しいが、波文を陽鋳する光背のようなものを想定したい。

なお波文は幅3～4mm、深さ1mm程度で、断面形は低い半円形になるものが多い。また波文の縁は破損し、ラインが不明瞭なものが多いが、鋳型から製品を外す際の破損と思われる。

さて1～46は文様の在り方で大きく5つに分けられる。

A）主として縦方向の幹が走り、それから斜めに波文が派生するもの（1～11）。幹の左右にある波文の傾斜方向は同一であり、樹木の枝のような派生の仕方はしない。1は波文が弧を描いており、次のBにつながるものであろう。また8は後述するDに含めるべきものかも知れない。

B）渦巻き文を持つもの（12・13）。Aの波文の先端が渦巻くようになったものとみられ、12では左中央付近から右下に流れる幹が認められ、13も資料の下端を左右に走る波文が幹の可能性を残す。

C）波文のみのもの（14～36）。波文は幹に交差するもの以外ではほとんど交差する部分はなく、破片も単純な並行する波文となる。20のような資料はきわめて少ない。

D）1本の幹の片方に波文が派生し、もう片方は無文となるもの（37～43）。資料の上下を知るのはこのDに限らず難しいが、空白部分は製品の縁になるのであろうか。光背をイメージした場合は逆に仏像の真後ろにあたる部分に相当するものと思われる。40では幹に直交してナデのような痕跡がわずかに観察される。

E）まったく無文のもの（44～46）。44・45には横方向のナデ様のものがみられ、46は13.9×8.7cmという大きな破片ながら無文である。

以上の資料は次に報告する47～52の資料とどのように関連するのかは定かでない。しかし鋳型の縁部分を示す資料としてこれらも同一個体の一部分と認識するのが妥当であろう。

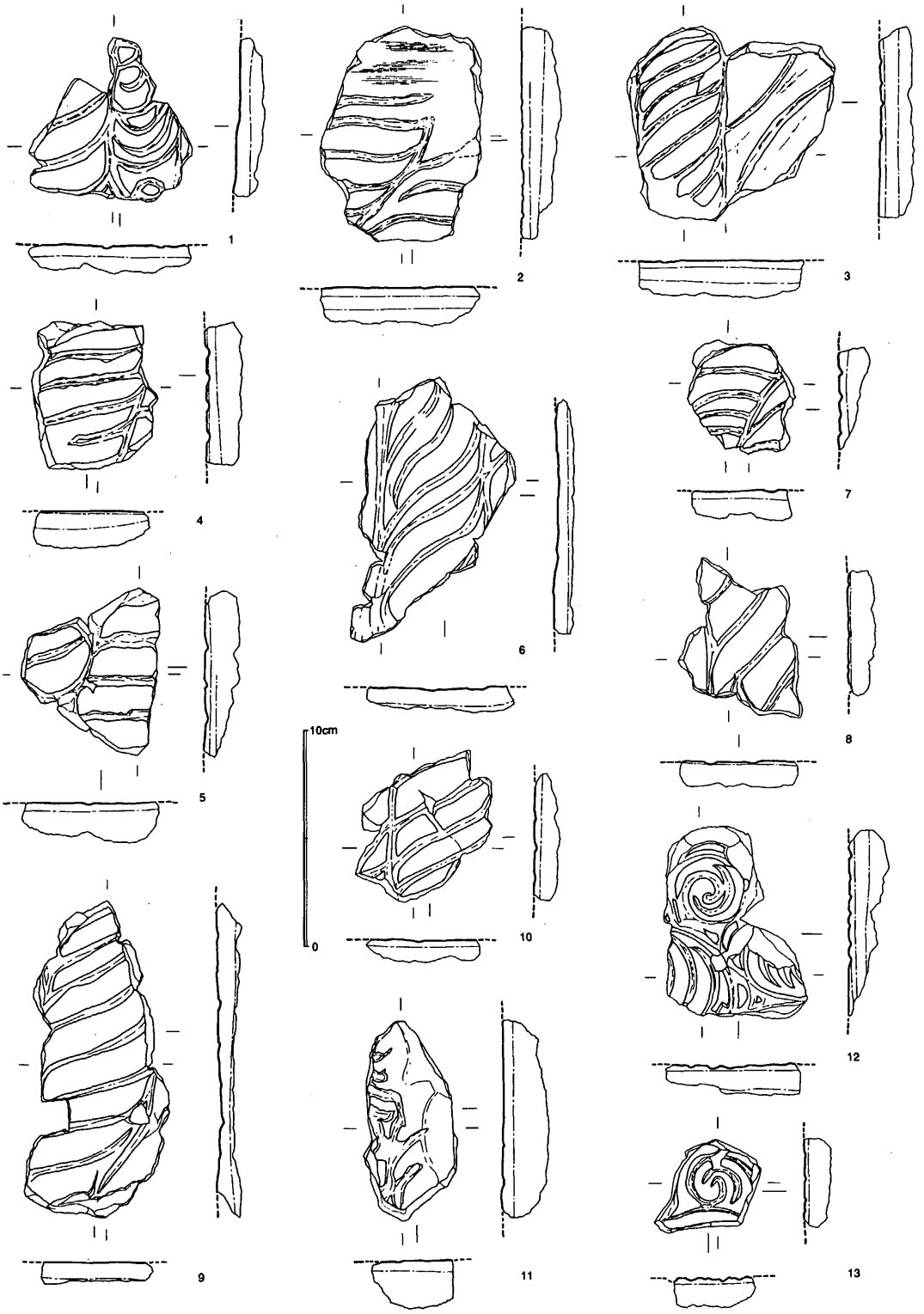


Fig.97　47SX260出土鋳型実測図1（1/3）

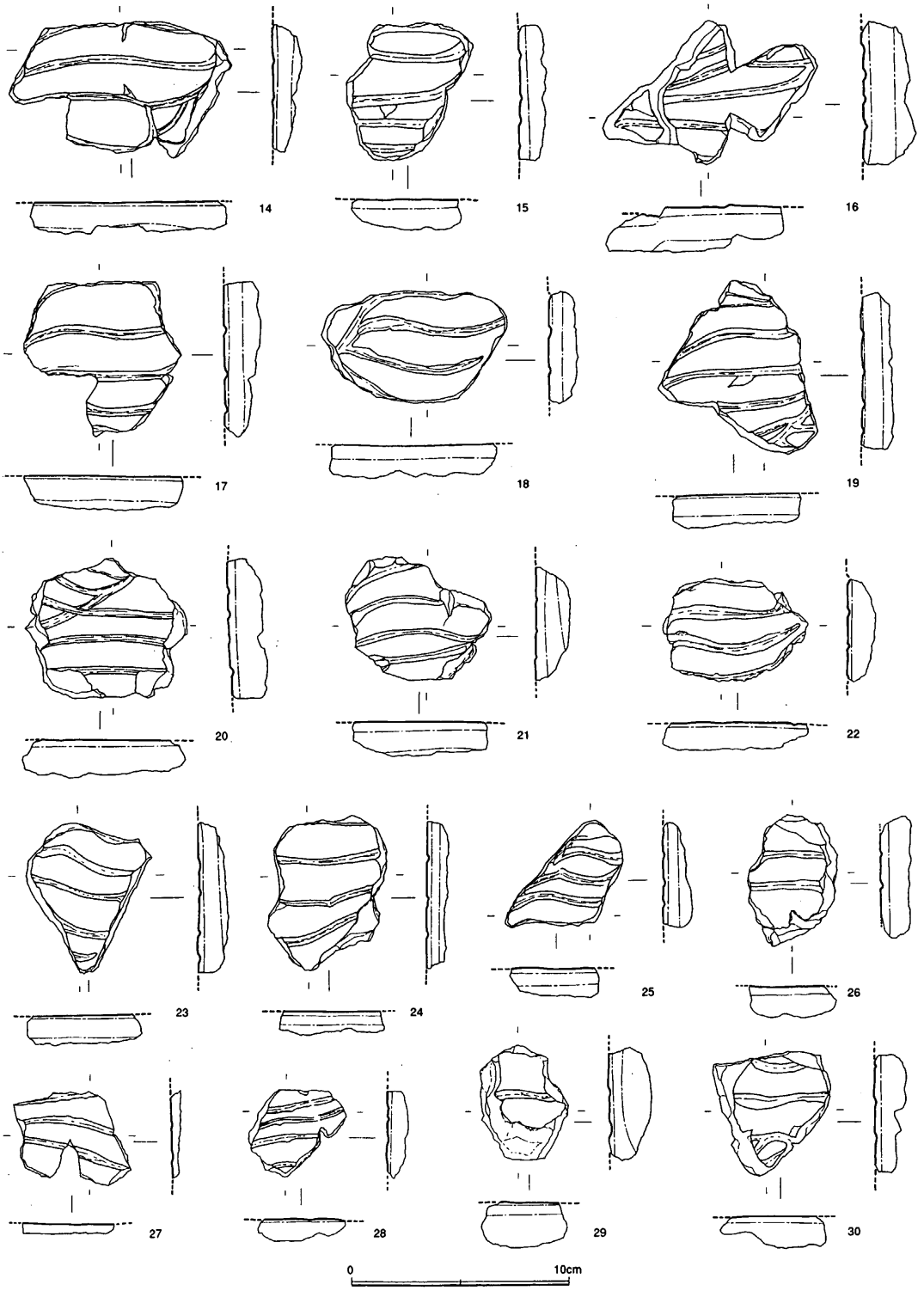


Fig.98　47SX260出土鋳型実測図2（1/3）

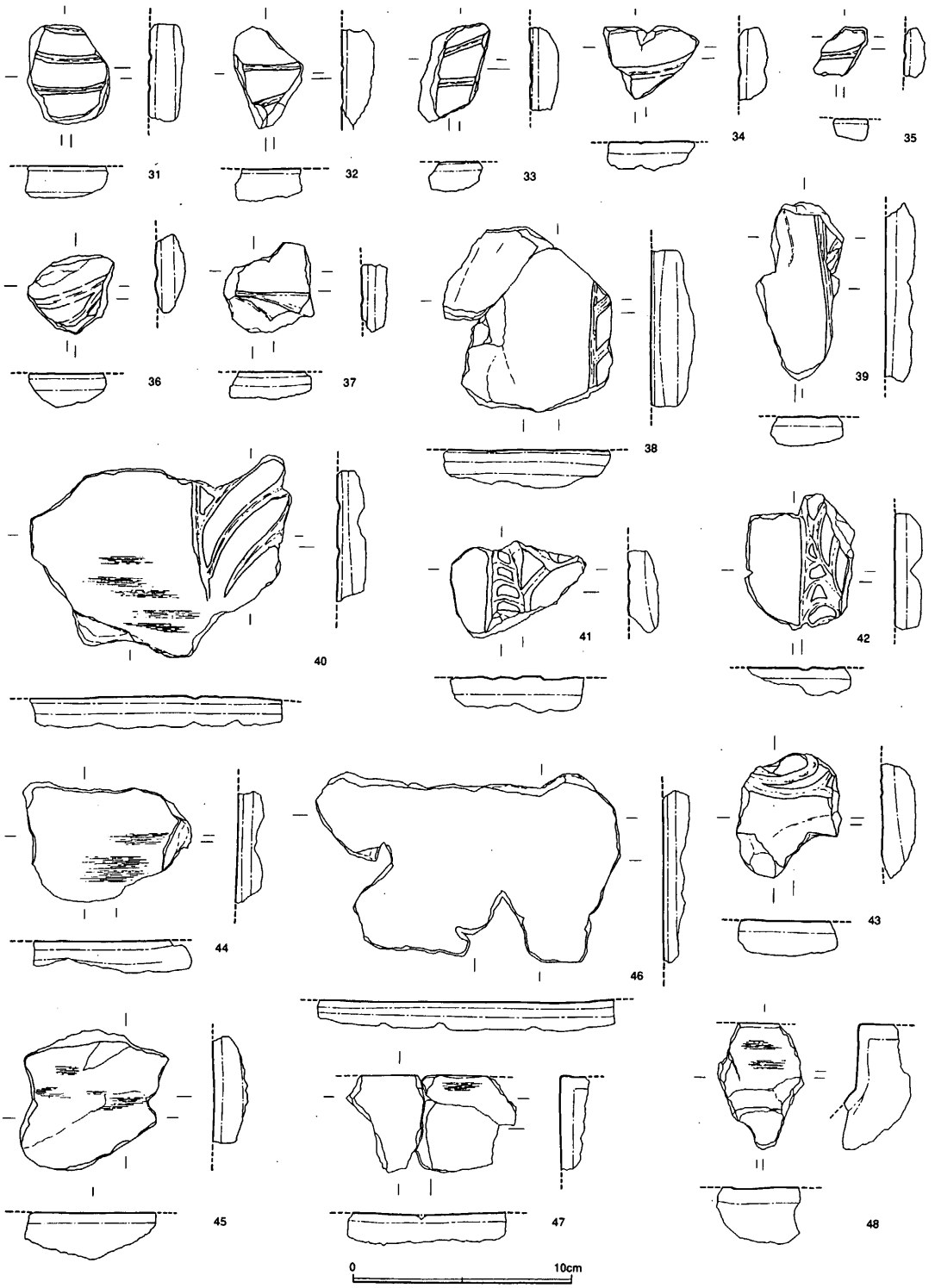


Fig.99　47SX260出土鋳型実測図3（1/3）

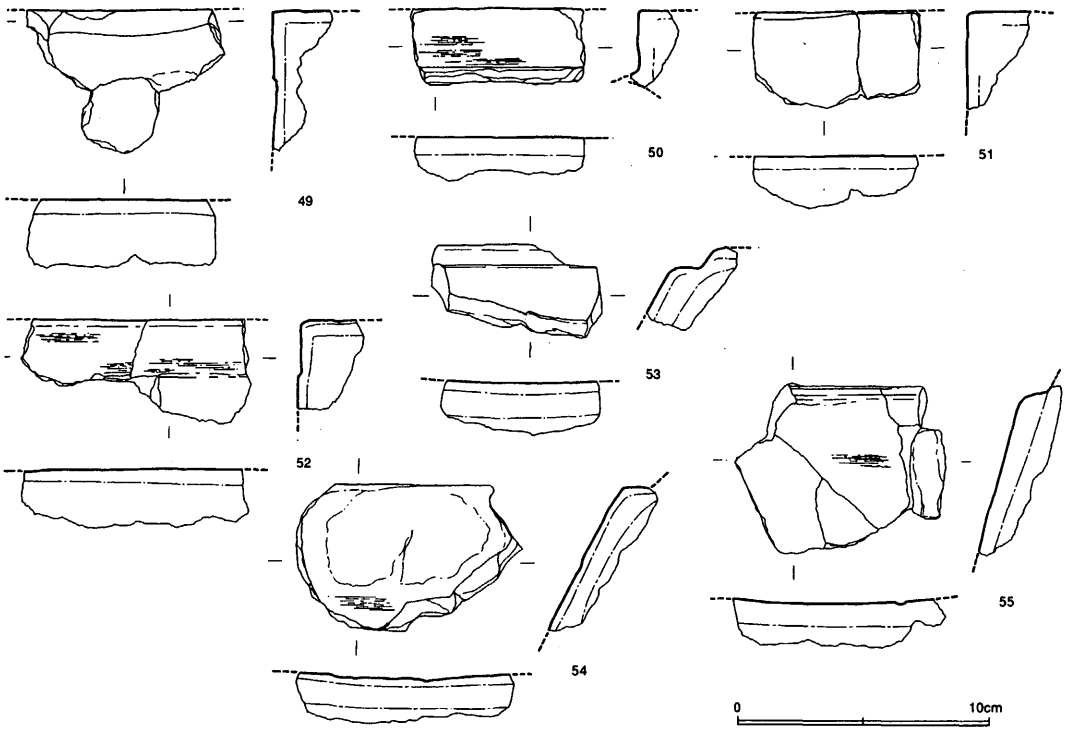


Fig.100　47SX260出土鋳型実測図4（1/3）

47・49は図の正面部分の下半部が劣化し、上半部から上面の平坦部にかけてクロミが付着する資料である。劣化した部分は茶褐色で凹凸が著しく、上部平坦面もやや風化気味である。クロミ付着部分の幅は約1cmにすぎない。48は図正面の下半がやや盛り上がっている資料だが、それが当初のものかどうか判断できない。鋳型面は図上面の平坦部分で、暗灰色を呈し、少々風化している。屈曲部以下の正面部分は赤褐色でクロミはなく、巾木部分と考えたい。51は48の盛り上がりがないだけで、同様の資料とみられる。50は図の下端で再度折れ曲がる鋳型で、さらにその下面にも鋳型面がある。52は51に近似する資料で、図の正面部分にはクロミはほとんどなく茶褐色で凹凸が著しい。上部平坦面にはクロミが付着し、明灰色を呈している。

鍋状製品（53～55）　他に報告している鍋とはやや形状を異にしており鍋とは断定できないが、いずれも挽型で作られており、円形の鉢状を呈する形状をイメージしたい。54は表面の風化が進行し、暗茶褐色で剥離が著しい。直線的で傾斜する体部の上位は大きく外側へ屈曲し、再び立ち上がるようである。横断面観察部分での直径は71.3cmに復原される。55は54と同様の形状で、やはり表面の剥離が著しい。横断面観察部分での直径は88.2cmに復原される。54・55ともに小片から導き出した数値であり不安定な要素も多々残るため、この数値的開きは両者が同一の個体である可能性を否定する材料とはならない。

47SX345出土鋳型（Fig.101・102）

鍋（1～6）　6点ともほぼ同じ挽型で作られた資料とみられ、同一個体の可能性も否定できない。体部は傾斜しつつ立ち上がるがわずかに内湾しており、口縁部とは軽い段差をもって区分され、ほぼ同じ角度で端部まで至るがごくわずかに外反し端部に至っている。端部の具体的な形状は特定できない。資料の上部は平坦面で茶褐色や黒灰色を呈し、表面の剥落が著しい。他の類例からみてこの部分が巾木である可能性が高い。口縁端部からおよそ6.6cm（垂直方向の深さ）付近で、体部は大きく屈曲し底部に至るものと考えられる。これは6の資料から窺えることであるが、他の資料もすべて6cm強のところで破損していることや、断面観察での胎土の変化、変色の状況もこれを裏付けている。胎土は真土部分が厚さ1～1.5cmで明～淡茶白色を呈し、細かな砂粒を含む程度の精良なもので、若干の炭化物とわずかに気泡が観察される。表面の2～3mm前後が暗灰色で硬化している。外型は淡灰茶色を呈し、真土よりもやや粗めのものである。復原される口縁端部の直径は、1が65.0cm、3が98.2cm、4が80.0cm、5が75.6cmとなり、他は歪みが大きく計測できない。このうち1は資料が小さいこともありデータに不安な要

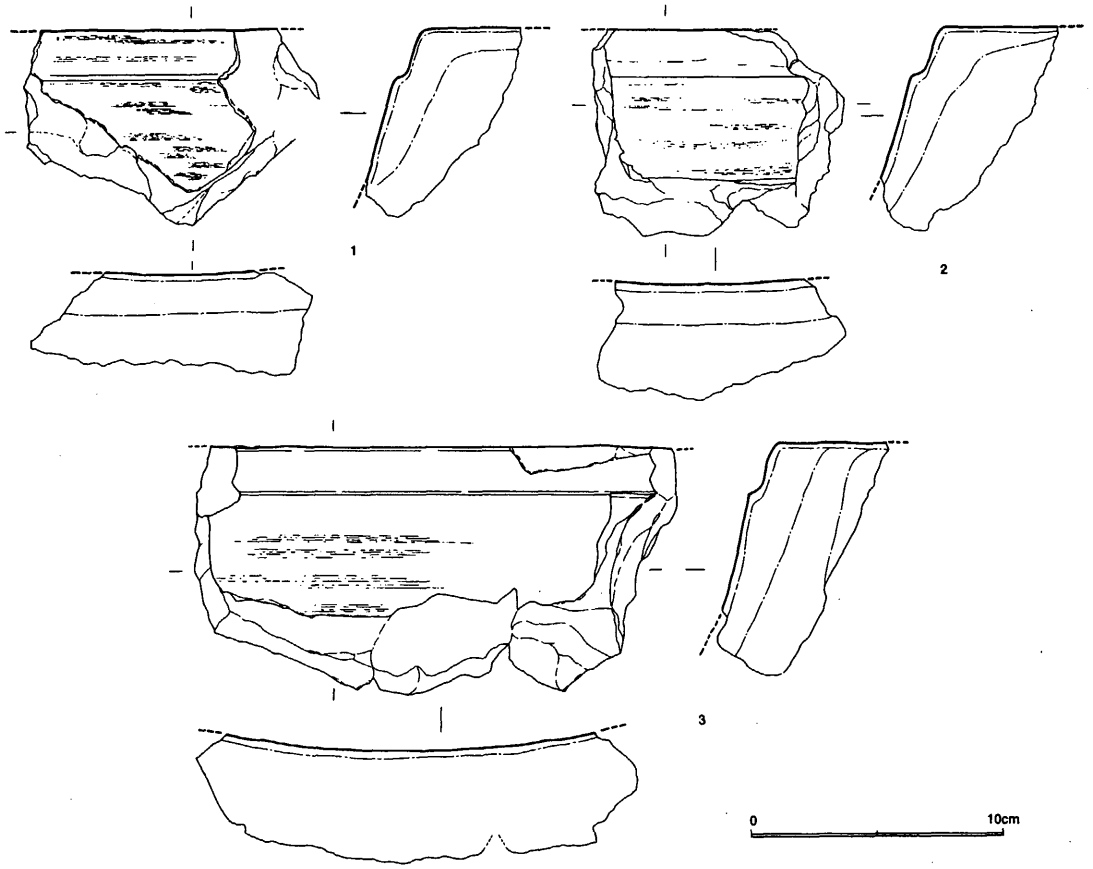


Fig.101　47SX345出土鋳型実測図1（1/3）

素が強く残るが、3～5がほぼ妥当な数値とみられ、当該製品の口径はおよそ80cm前後のものと認識しておきたい。なお、3の図右上の小面は円弧に対して直交する鋳型面として残存しており、把手部分に相当するものと考えられる。

建物A出土鋳型（Fig.103）

1はほぼ平坦な鋳型面を有するもので、わずかに弧を描く3条の沈線（製品では突線）文様がある。真土は厚さ5mm前後で、白色粒子を多く含むが精良なもの、外型は砂粒を多く含むとともに胎土中に気泡が目立つやや粗めのものである。2は弧を描く2条の沈線と向かい合う渦巻き状の文様とからなるもので、弧線は図の左端で切れている。いずれも柱穴b出土。

47SX095出土鋳型（Fig.103）

3は鉢状の製品の体部を思わせるもので、縦横断面ともにわずかに湾曲している。挽型で製作されたもので、横断面観察位置付近での直径は49.0cm程度に復原される。鋳型面は風化しクロミは失われている。真土は5mm程度とみられ精良なものだが、次の厚さ1cmほどはやや粗め、さらに外型部分はスサ入りの粗いものである。

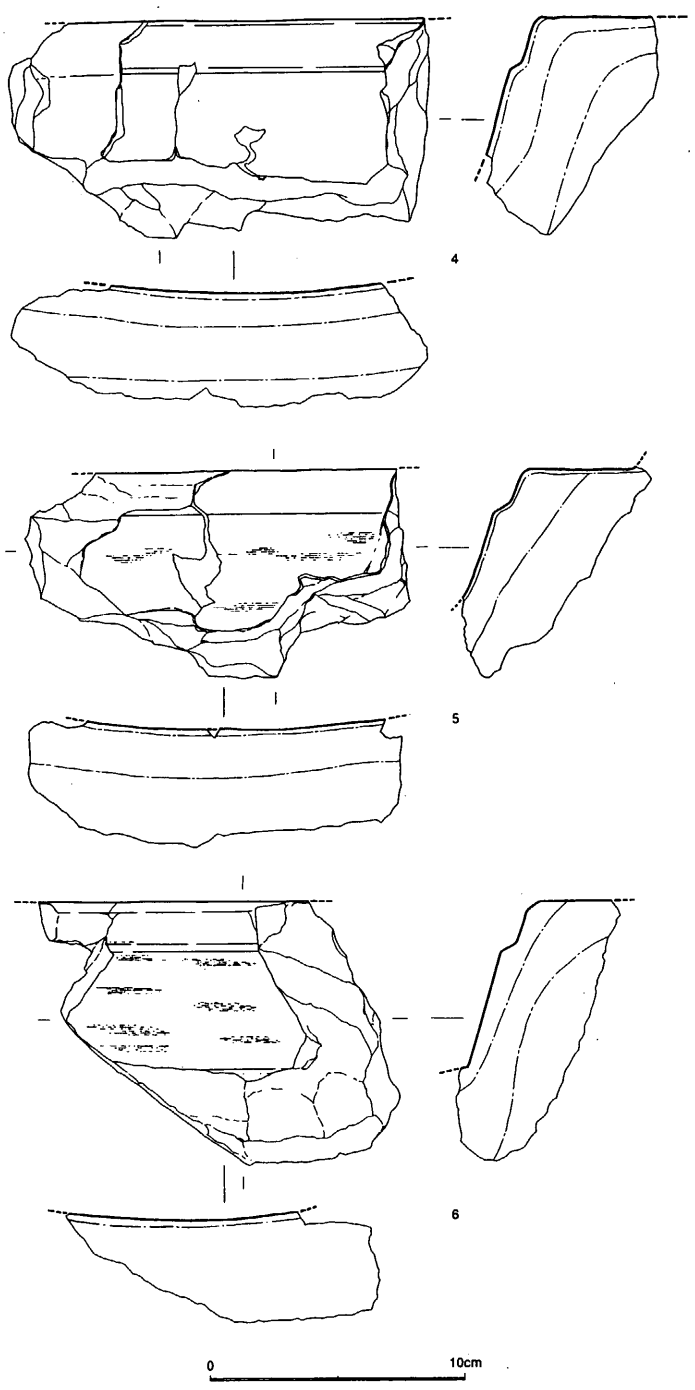


Fig.102　47SX345出土鋳型実測図2（1/3）

47SX119出土鋳型（Fig.103）

4は直径4cm前後に復原される小円筒状製品の鋳型とみられるが、クロミは残存していない。胎土は小型品特有の単一なもので、小砂粒を多く含むが精良なものである。

47SX131出土鋳型（Fig.103）

撞座（5）　中房部分のみの資料で全容は知れないが、径7mmの竹管文風（製品時）の蓮子が見え、周囲には珠文帯、さらにその外周には芯帯が巡っている。鋳型は厚さ1.3cmのもので、梵鐘本体に埋め込まれたものと考えられる。胎土は単一で、小砂粒を含むが精良なものである。

47SX134出土鋳型（Fig.103）

6は径のかなり大きな製品になるとみられ、直線的で傾斜する体部を有する。鋳型上面には平坦部があり、それとの境目は弧を描いている。いずれの面も鋳型面と思われる。推定体部上端（弧を描く直前付近）での直径は74.2～99.0cmに復原できる。胎土は黒褐色で砂粒を多めに含むがかなり硬く焼成され、表面の2mm程は暗灰白色を呈し硬化している。7はごくわずかに湾曲しながら立ち上がる体部を有し、上部の平坦面とはきわめて明瞭に屈曲する。いずれも鋳型面の可能性があり、挽型で製作され、屈曲部付近での直径は82.0cm程度に復原される。真土は厚さ0.8～1.0cmで灰色を呈し、表面の2mm程度が暗灰色で硬化している。8は7に近似する資料だが、直径はかなり大きくなりそうである。

47SX135出土鋳型（Fig.103）

9は挽型で製作され、直径47.0cm程度に復原される円筒形状を呈する資料で、共伴資料あるいは下位から出土した遺構・遺物から梵鐘体部の鋳型と考えたい。上部の平坦面は巾木とみられる。

龍頭（10）　図の正面は巾木で、龍の牙付近の破片とみられる。鋳型本体の外側にやや粗めの土が付着している。

47SX144出土鋳型（Fig.103）

11は湾曲しながら立ち上がる体部の上位（製品では下位の可能性もある）に階段状の部分が取り付くものである。挽型で製作され、弧を描く体部中程での直径は20.4cm程度に復原される。階段状になる境目の屈曲部分は剥離が著しい。胎土は表面の3～6mmほどが明橙色で硬化しており、外型部分は暗灰色で砂粒を多めに含むものである。鋳型外面も残存しており、外表面には棒の先端で叩きしめたためか半月状の痕跡が多数残存している。

47SX243出土鋳型（Fig.103）

12は挽型で製作されたもので、傾斜する体部はわずかに湾曲している。鋳型上面にある平坦部にはクロミはなく赤褐色を呈しており、巾木とみられる。小片のため径は抽出できない。

13は鋳型面が平坦で、反りは認められず、表面は風化して小さな凹凸が目立つ。表面の2mm程がクロミの付着で暗黒灰色を呈し硬化している。

Fig.103　建物及びその他の遺構出土鋳型実測図1（1/3）

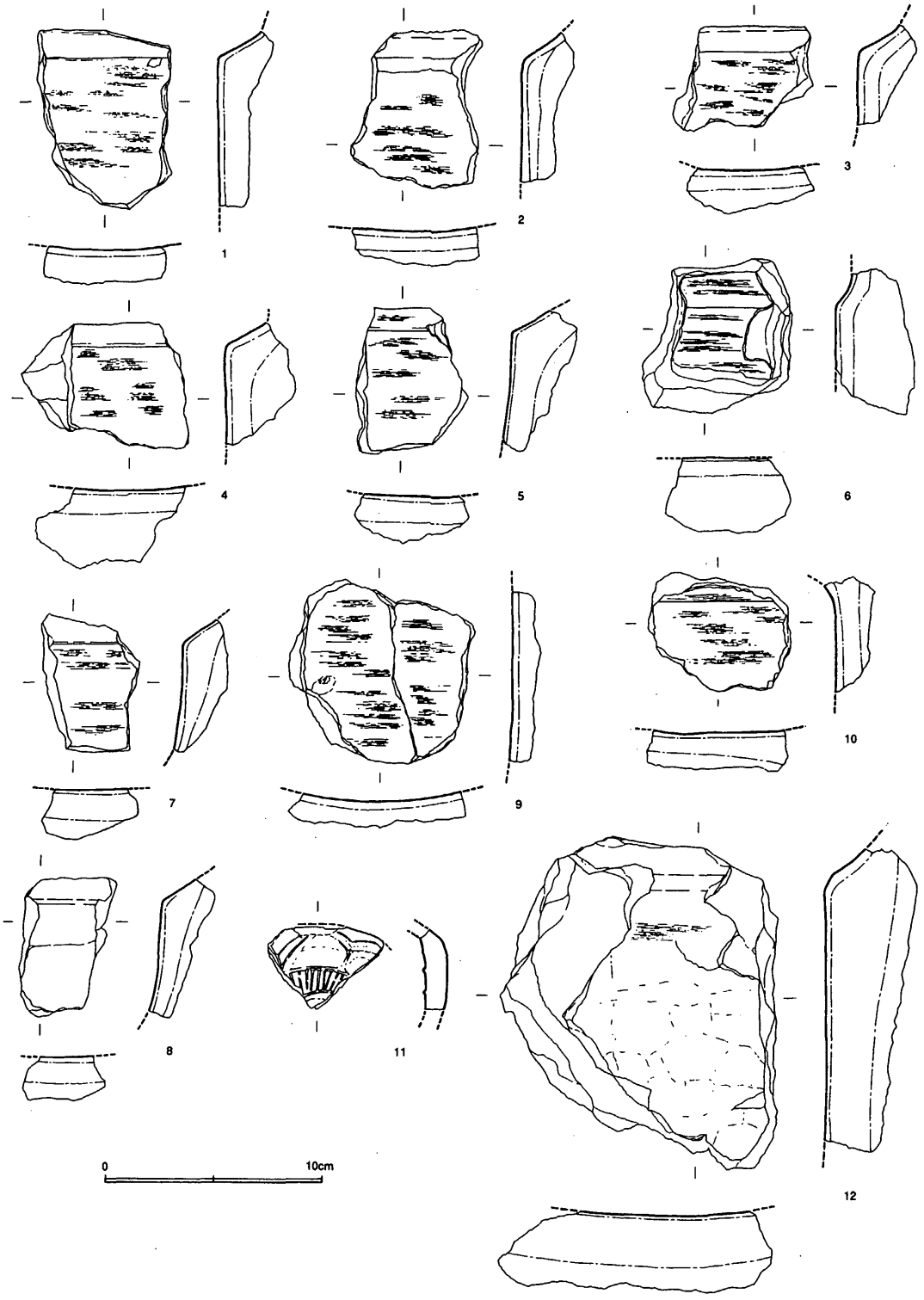


Fig.104　その他の遺構出土鋳型実測図2（1/3）

47SX255出土鋳型（Fig.104）

鍋（1～8）　いずれも体部と口縁部の境目を含んだ資料とみられ、体部の特徴では直線的なもの（1～4・6）とやや内湾するもの（5・7・8）があり、口縁部では、体部から強く屈曲し外側へ傾斜しながら立ち上がるもの（1～5・7・8）と内湾しながら立ち上がるもの（6）に分けられる。いずれも挽型で製作されており、体部と口縁部の境目での直径は、1が54.6cm、2が58.8cm、3が36.0cm、4が68.4cm、5が73.6cm、6が40.4cmという数値を得ている。表面にはクロミが付着し、約2mm前後の厚さで硬化している。

9は体部が直線的で、円筒形を呈する製品になるとみられる。挽型で製作され、直径は約33.0cmだが歪みがあり数値的には不安が残る。

10は挽型で製作されるが、図の上部で内湾する体部を有する。上下逆に捉えることも可能である。内湾する付近での直径は112.2cmを測るが、小片からの情報である。

撞座（11）　単弁蓮華文（おそらく八葉に復原できよう）で、内側に芯帯を巡らす。当初の大きさは鋳型外周で直径12cm前後、芯帯外周が直径8cm前後に復原できる。鋳型の厚さ1.0cm前後で外面も残存しており、梵鐘本体の鋳型に埋め込まれたものと考えられる。胎土は小型品特有の単一なもので、細かな砂粒を若干含むが精良なものである。

47SX259出土鋳型（Fig.104）

鍋（12）　ごくわずかに湾曲しながら立ち上がる体部を有し、口縁部との境目は湾曲していて不明瞭である。挽型で製作され、体部中程での直径は54cm前後である。真土は厚さ2～3cmほどと厚めで灰茶褐色を呈し、表面から2mmほどが暗灰色に変色し硬化している。外型は茶褐色で粗めの砂粒やスサ、炭化物が混在したやや粗めのものである。

47SX335出土鋳型（Fig.105）

1は鋳型面は風化して痕跡は掴みにくいが、挽型で製作されたもので、横断面観察位置での直径は47.6cm前後に復原される。真土は厚さ1cm弱で明茶褐色を呈し精良なものであるが、表面から2mm程度はクロミにより暗灰色を呈し硬化している。外型は赤褐色で砂粒を多く含む粗いものである。

47SX346出土鋳型（Fig.105）

2は、幅3.5cmで円弧を描くものだが、図の下方が製品の鋳型面、平坦面部分は巾木とみられる。鋳型面と考える部分はわずかに湾曲し、平坦部から約1.2cmのところで直線的に破損しておりここで体部が折れ曲がっていたことを示唆している。表面はクロミが付着して明灰色を呈している。製品上端部での直径は56.2cm前後に復原できる。

鍋（3）　体部と口縁部の境目の資料で、体部はごくわずかに内湾し、口縁部も大きく内湾しながら立ち上がる。口縁部と体部の境目付近での直径は34.9cm前後に復原できるが、資料が小片すぎる。

Fig.105　その他の遺構出土鋳型実測図3（1/3）

4は図の下端が小さな階段状（浅い沈線の連続）になる製品で、階段部分と体部の境目付近の直径が56.7cmに復原できる。真土部分は薄く5mm程度ですぐ外型になり、外型は赤褐色で炭化物が混じり気泡も目立つ粗めのものである。5は大きな円盤状製品の一部分かとみられるもので、浅い沈線状の円弧がいくつか観察され、製品時には薄い凹凸面をなすものとみられる。真土は約1cmで表面から1mmほどは暗灰色に変色し硬化している。6は梵鐘の駒ノ爪をイメージさせるような階段状の製品で、各段は柔らかな丸味を帯びている。挽型で製作され、最上段での直径が46.2cm程度に復原できる。

47SX355出土鋳型（Fig.105）

鍋（7）　直線的な体部を有し、外側へ大きく傾斜する口縁部を有するものとみられ、体部と口縁部との境目は明瞭に作られる。ただし口縁部とした傾斜面は明茶色を呈し表面が風化しており、直立する体部とした面とは大きな差があり、傾斜部分は巾木の可能性も残される。挽型で製作されるが、小片のため径は求められない。

8は挽型で製作された円筒状の製品とみられる。小片のため径は求められない。

47SX356出土鋳型（Fig.105）

9は、図表面が鋳型面とみられ、L字状の浅い溝（幅3～4mm、深さ2mm以内）が外周に沿うように存在する。それより外側（幅約5mm）は巾木となる可能性がある。鋳型は厚さ1.3cm程度で外面も残存しており、胎土は小型品特有の単一で精良なものである。低い縁のつく方形の製品がイメージされる。

47SX386出土鋳型（Fig.105）

鍋（10）　ほぼ直線的に立ち上がる体部を有し、口縁部は大きな段差を経てわずかに外側へ開き気味に立ち上がる。さらに上位にはわずかに傾斜する面が存在するが、巾木の可能性があり、その部分と口縁端部との境目表面は幅2～3mmの帯状に剥離している。鋳型表面はクロミにより黒灰色を呈するが、劣化して亀甲状の亀裂が目立つ。鋳型は挽型で製作され、口縁端部付近での直径は33.8cmほどに復原される。

47SX435出土鋳型（Fig.105）

11は円筒が2段重なったような形状の製品で、鋳型面にクロミは観察されず、明茶白色を呈している。風化による剥離か未使用かは不明。鋳型は挽型で製作され、体部中程での直径は13.6cmに復原される。鋳型の厚さは3.7～4.5cmで外面（及び上面）も残存し、縦方向の粗いケズリで仕上げられる。小型品ながら胎土は2分され、真土は厚さ0.5～1.0cm程度で淡橙色を呈し、細かな砂粒を含む程度の精良なものである。外型は赤褐色を呈し、スサ状の炭化物が混在するやや粗めのものである。

47SX481出土鋳型（Fig.106）

1は縦横断面方向ともに平坦面になる鋳型で、平坦部の（図右から）2/3付近までが暗灰色を

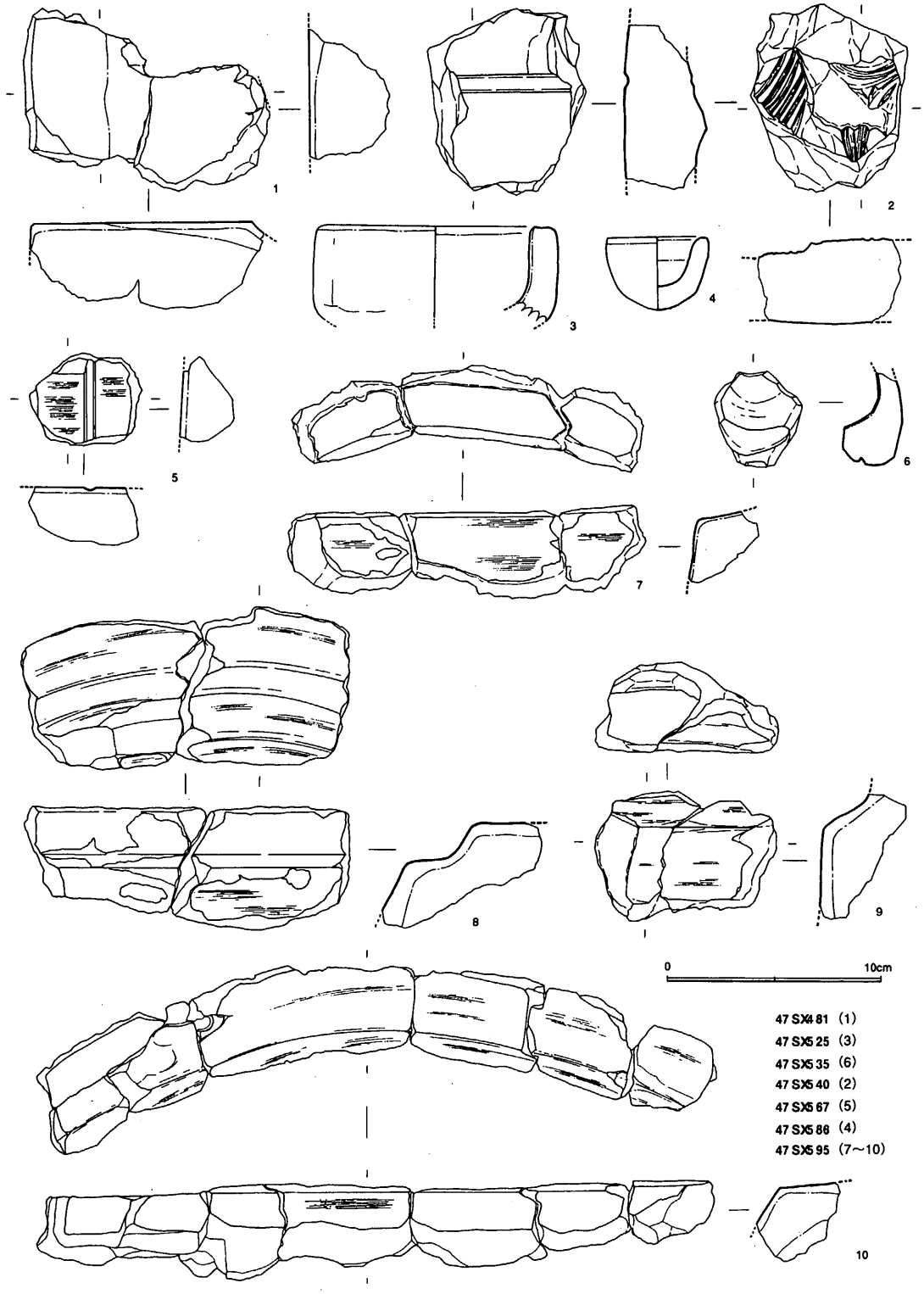


Fig.106　その他の遺構出土鋳型実測図4（1/3）

呈するが、残り部分は明茶白色となる。鋳型面はこの暗灰色部分から図右端にわずかに残る傾斜面に及び、傾斜面はわずかな弧を描く。図の左側にも面があるがクロミは付着せず、明茶白色部分を含めて巾木と捉えたい。胎土は、真土が平面の変色部付近からはじまるようで、赤褐色を呈し精良なもの。表面は厚さ2～3mmの範囲で硬化している。

47SX525出土鋳型（Fig.106）

椀状製品（3）　口径9.0cm程度に復原できる椀状を呈するもので、体部は直線的に立ち上がり、深さ3cmほどで底部に向かう。口縁端部はわずかに外側へ反っている。鋳型は厚さ1.2cm前後で外面はナデ調整を行い、胎土は表面がクロミにより変色するほかは小型品特有の単一なもので、微砂粒を含む程度の精良なものである。

47SX535出土鋳型（Fig.106）

6は椀状に窪んだ面にクロミがありそこが鋳型面とみられるが、平面では正円形に復原できず製品は特定できない。断面図左下の小さな平坦面は巾木と捉えられ、断面図下面には小さな窪みがある。断面図右側面は鋳型外面になり、ナデ調整される。

47SX540出土鋳型（Fig.106）

龍頭（2）　鬣の一部とみられるが、鋳型面の剥離が著しい。鋳型は厚さ3.8cm（最大）で、外面に横方向の幅7mm前後、深さ2mm弱でU字型の溝があり型合わせに関連するものと思われる。胎土は均一で砂粒を若干含む程度の精良なものである。

47SX567出土鋳型（Fig.106）

縦帯（5）　資料の中央に幅5mmの沈線（製品時は突帯）が走る。挽型で製作されるが、小片のため径の計測は難しい。

47SX586出土鋳型（Fig.106）

小椀（4）　鋳型の口径は4.8cm、高さ3.4cm、製品部分の口径は3.8cm前後、高さ2.3cmを測る。鋳型面は暗灰色を呈するが劣化が進む。外面は赤褐色で粗いナデ調整、胎土は単一で白色粒子を混入するが精良なものである。

47SX595出土鋳型（Fig.106）

鍋（7～10）　いずれも長さ5～10cm程度の断片化しているが、接合によってある程度の形状が窺える。7は残存する2面ともにクロミが付着するが、上面は剥落が著しい。挽型で製作され、屈曲部付近でも直径は27.8cm程度に復原される（接合の加減で数値はかなり変動する）。8は階段状になるものだが、最下段の傾斜面にのみクロミが残存し、その上の平坦部及び傾斜面にはわずかにクロミが残るがほとんど剥落し、最上面の平坦部にはクロミはなく明茶褐色を呈している。このことから最下段の傾斜部分のみ製品に関わる面（口縁端部）で、他は巾木とみられる。挽型で製作され、推定口縁端部での直径は41.0cmに復原される。9は直線的に立ち上がる体部部分と考えられ、傾斜面は口縁部下位に相当すると考えている。ただ傾斜面のクロミは剥

落が著しい。10は上面の平坦部にはクロミはほとんどなく剥落が目立つ。小片が多数接合するもので、径の計測はデータが安定しない。いずれの資料も真土は厚めで2cm以上あり、淡黄褐色、赤褐色を呈し砂粒を多めに含んでいる。真土としてはやや粗めである。表面の2～5mmは硬化している。10には外型とみられる胎土も残存しており、真土よりも粗めの土で形成されたことがわかる。

茶色土層出土鋳型（Fig.107～109）

鍋（1～6）　1はわずかに外側に開き気味に立ち上がる体部を有するもので、大きく湾曲しながら口縁部に至る挽型で製作され、横断面観察位置付近での直径は34.9cmを測る。残存部すべてにクロミが付着し、真土は厚さ1cm前後で明茶色を呈し精良で、表面の2mmほどが硬化している。外型は暗茶色で砂粒を多量に混在する粗いものである。P8区出土。2は直立する体部を有するもので、口縁部下位は湾曲しながら立ち上がる。挽型で製作され、体部中程の直径は64.4cmに復原できる。P9区出土。3はわずかに内湾する体部を有し、口縁部は傾斜して競り上がり、両者の境目は明瞭である。挽型で製作され、小片ながら求め得た直径は口縁部と体部の境目付近で40.2cm程である。P8区出土。4は直立する体部から、やや小さめに湾曲しながら口縁部に至る。口縁部は高さ3cmほどで、その上位にはさらなる屈曲部分があるがクロミは観察されず、この部分は巾木として捉えられる。巾木と口縁端部との境目は鋳型面の剥離が著しい。挽型で製作され、推定される口縁端部での直径は31.6cmに復原される。Q11区出土。5は緩やかに湾曲する2段の面を残し、全体にクロミが付着するがかなり風化している。挽型で製作され、横断面観察位置付近での直径は36.2cmほどになる。Q2区出土。6は直立する体部を有するもので、口縁部下位は湾曲しながら立ち上がる。挽型で製作され、体部での直径は100cmを若干越える数値を得たが、小片であり注意を要する。P9区出土。

7は縦横断面方向ともに平坦な鋳型で、図の下半にクロミは付着せず、赤褐色、暗灰色を呈しており、この部分は巾木の可能性がある。P8区出土。8も平坦面を有する鋳型で、真土は厚さ約1cmほどで、表面から2mmほどが硬化している。P16区出土。

龍頭（9～11）　9は火炎宝珠部分に相当し、宝珠は径2cm強の小さなもので製品時は低い凸レンズ状を呈するとみられる。火炎は先端の尖った米粒状を呈しており、かなり形式化して稚拙である。鋳型は厚さ2cm前後で、巾木は1.2cm、外面はケズリとみられるが調整は不明瞭で、タール状の付着物がある。火炎先端の巾木部分が若干切り込まれており、ガス抜き穴とみられる。R11区出土。10は口唇部、鼻、目及び巾木部分が残存するものである。鋳型は厚さは2cm強で、側面および底面の一部が残存する。鋳型面は風化が進むがクロミが残存し、胎土は単一で明茶色を呈し、白色粒子を混在するが精良なものである。R2区出土。11は鬣上部と火炎宝珠部分がみえるもので、宝珠は径2.8cm、厚さ2mmの薄い凸レンズ状を呈し、周囲に幅5mmほどの突帯が巡る。火炎は幅1.5～2cmの範囲にあって、基部は太く先端は鋭利に描かれており、形

Fig.107　茶色土層出土鋳型実測図1（1/3）

式化は進むが9の資料に比べると幾分写実的である。火炎の外側には幅2cm前後の平坦部があり巾木とみられる。鋳型は厚さ3cm前後で、鋳型面にはクロミが付着し、胎土は赤褐色で白色粒子を多く含むがきわめて精良なものである。

上帯（12）　資料の上下には幅4mmほどの横方向の突帯が走り、それに挟まれた幅2.4cmの空間に単純な唐草文を配する。下面の平坦部分にはクロミが無く巾木とみられるが、ここまで含めて挽型で製作されており、文様面に見える横方向の筋は挽き目である。S16区出土。

撞座（13）　47SK460出土の撞座と同文様とみられ、複弁八葉に復原できそうである。中房の外周は蓮弁に対応して八葉の花弁状を呈した2重の突帯になっている。鋳型の厚さは1.1cm程度で、梵鐘本体の鋳型に埋め込まれたものとみられる。胎土は上真土に近い均質で精良なものである。R2・3区出土。

横帯（14～16）　14は資料の上下に横方向の突帯があるもので、それに挟まれる空間の幅は2.0cmである。挽型で製作され、資料中程での直径は47.9cm前後に復原できる。なお図示できていないがごく一部に鋳型の外面と思しき部分が残存し、そこまでの厚さはおよそ4cmである。P8区出土。15は資料上部に横方向の突帯、下位は大きめの突帯もしくは段があるもので、鋳型面はやや内側に傾斜している。挽型で製作され、資料下端での直径は70.0cmに復原できるが小片のため不安な要素も多い。R13区出土。16は資料の上部に2条、下位に1条の突帯が巡り、それに挟まれる空間は狭く幅1.3cmにすぎない。挽型で製作されるが小片のため径は求められない。Q11区出土。

筒状製品（17）　挽型で製作され、直径は17.6cmを測る。体部は直立し円筒状を呈する。P9区出土。

18は平坦部分にクロミが観察されるもので、図の上側には直径9.2cmの円形の切り込みがあり、この面にはクロミは付着しない。真土は巾木部分にまで及び、赤茶色で白色粒子が多く含まれるが精良なもので、表面は平坦面側のみ厚さ2mmほどの範囲で硬化する。外型は暗茶灰色で炭化物やスサ状の繊維、やや大粒の砂粒等が混在する粗めのものである。S14区出土。

19はやや内湾する体部の上位（あくまでも図面の上での上下）に低く小さな突帯を2条巡らせるもので、挽型で製作され、突帯のやや下位で直径18.3cmを測る。下面には平坦部がありここにはクロミがなく巾木と考えられる。上下逆さにすると47SX155で出土した鉄製香炉の体部上位の側面観に近似する（口径も近い）。T15区出土。

20は幅5mm、高さ2mmの突帯とその外側に幅1mmほどの沈線3条を巡らせる製品の鋳型で、最も外側の沈線付近で求められる直径は17.6cmである。胎土は真土部分が5～7mm程度で、粗めの胎土を有する外型も存在する。製品時の表面はわずかに湾曲し膨らみ気味であることから、鰐口や銅鼓のような製品をイメージしたい。Q11出土。

21は若干の欠損はあるもののほぼ完存する資料で、内側に湾曲する部分が部分的に明青灰色

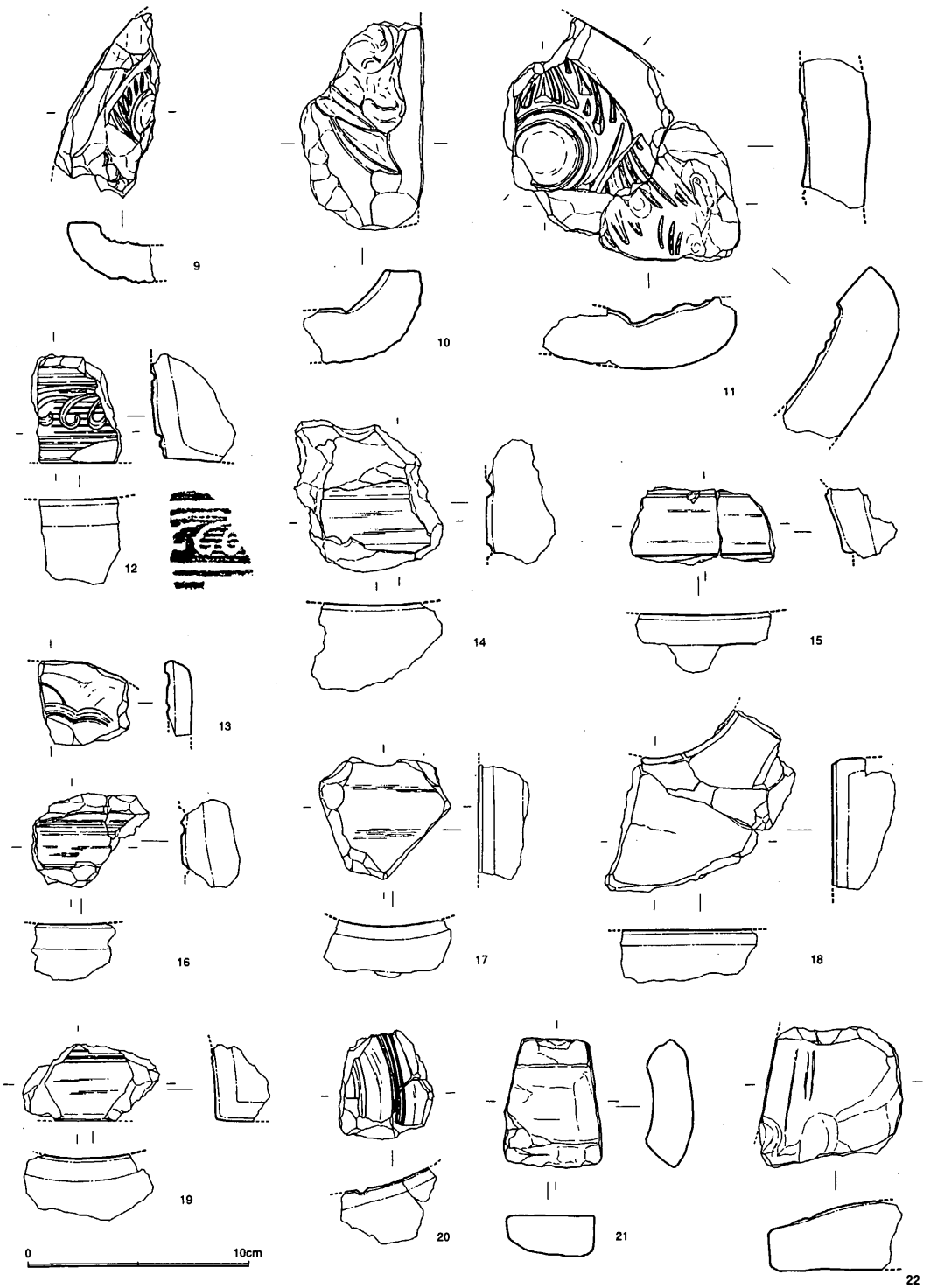


Fig.108　茶色土層出土鋳型実測図2（1/3）

を呈することからこの部分を鋳型面と考えた。そしてその両側にある平坦部を巾木と捉えたが、問題も残る。図の左右面はケズリ調整、背面（外面）は風化するが、ナデもしくはケズリ調整される。

22は図の左側の幅約1.1cmの範囲が巾木とみられ、そこから図右側（内側）に緩やかに盛り上がる部分にクロミがあり鋳型面とみられる。鋳型外面は平坦で特別な調整は行われていない。胎土は小型品特有の単一なもので、暗茶褐色を呈し小砂粒を若干混在する程度の精良なもので硬質に焼成される。Q8区出土。

風鐸？（23）　図右上部分が破損する他はすべて何らかの面である。まず製品の断面形状は1cm程度直立する側縁を有し、体部には緩やかな膨らみを持たせ、側縁近くに縦方向の2条の沈線（幅1mm）を入れる。平面的には側面が直立するのは確実だが、下側の端部付近のみ平坦部分が1cm ほどあり、そこから上方に向かって斜めに切り上がっている。巾木は幅0.8cm、鋳型の厚さは1.5cm（最大）で、外面上位に幅1cm程で断面略三角形になる溝状の切り込みがあり、型合わせに関連するものとみられる。S15区出土。

蓮台（24）　蓮弁を円形に配列した反花座で、蓮弁はやや形式化した複弁とみられ、弁央は緩やかな丸味を持っている。蓮弁下位付近での直径は12.8cm前後で、小型の蓮台が想定される。鋳型は外面まで残り厚さ2cm強で、表面はナデ調整され下面は巾木とみられる。外面下端に半円形の繰り込みがあるが鋳型面には到達していない。鋳型面にはクロミは付着せず、未使用品の可能性も残される。胎土は内側が明茶色、外側が淡灰色となるが同質であり、白色粒子を含む程度の精良なものであり単一の土で構成される。T11区出土。

円形皿状製品（25・26）　25は鋳型の厚さ0.7～1.0cm、胎土は茶褐色を呈し白色粒子を多く含むが精良なもので、鋳型面から1mmほどは明灰白色に変色している。P9区出土。26は凸レンズ状を呈する体部に直立する側縁部が取り付く。体部は平面円形に復原でき、その直径はおよそ4cm弱である。鋳型は厚さ0.7～0.9cmで製品に近似する形状を呈し、外面はナデによる調整を施す。胎土は茶褐色を呈する精良なもので、鋳型面側は暗黒灰色に変色している。P19区出土。両者とも釘隠のような製品か。

文様付小型製品（27）　資料の下半は2～3条の横方向の突帯（幅、高さとも1mm前後）があり、上半部はわずかな膨らみを有する花弁状の文様が並んでいる。文様面は平面的である。鋳型は厚さ1.5cm程度で、胎土は鋳型面付近の1mmほどは暗灰色に変色しているが、明茶色を呈する精良で均一なもので小型品特有の単一な胎土である。Q1区出土。

鞴（28）　厚さ3.4cmというやや厚めの鋳型ながら胎土は小型品特有の単一なもので、明茶色を呈する精良なものである。鞴の隅部分の鋳型とみられ、周囲は巾木である。巾木から鋳型面までは深さ5mm程度あり、わずかにクロミが観察される。Q14区出土。

29は鋳型面がごくわずかしか残らず製品は特定できない。図正面の大半は巾木で、背面（外

Fig.109　茶色土層出土鋳型実測図3（1/3）

側）は縦方向のケズリである。胎土は暗茶色で、白色粒子を含む程度の精良なもので単一である。S16区出土。30は一見鍋の鋳型に近似するが、傾斜した上面の先端に溝状の窪みがある。鋳型面の大半にクロミが付着しているが、立ち上がり部分の下部はクロミが剥離している。挽型で製作され、屈曲部付近での直径は39.0cmに復原される。胎土は外型とみられるものも残存し、ある程度の大きさの製品を想定する必要があろう。31は内湾する体部の中程に幅5mm、深さ2mmほどの突帯を有するものである。図下の平坦部はクロミの剥落が著しく、巾木の可能性が高い。挽型で製作されるが小片のため径は求められない。Q11区出土。32は挽型で製作されたもので、屈曲部分での直径が70.2cmに復原される。残存部すべてが鋳型面と思われるがクロミは観察できない。外型とみられる粗めの胎土も観察され、やや大型の製品らしい。33は18に近似する鋳型だが、円形切り込み部分の径が48cmと大きく異なる。鋳型面はクロミの観察される平坦部分で、円形の切り込み面から平坦部にかかる付近にはクロミは付着しない。真土は巾木部分にまで及び、赤茶色で白色粒子が多く含まれるが精良なもので、表面は厚さ5mmほどの範囲で硬化する。外型は暗茶褐色で炭化物やスサ状の繊維、やや大粒の砂粒等が混在するほか別の鋳型も混入しており（断面図に見える）かなり粗めのものである。R13区出土。34は高さ3mmほどの緩やかな膨らみがみえる鋳型であるが、製品は特定できない。真土は5mm前後あり、表面は淡灰色に変色し、硬化している。外型は淡茶褐色でスサ混じりの粗めのものである。S16区出土。

中子（35・36）　両者とも他の鋳型に比べて鋳型面が逆に反ることから中子の可能性を考えた。35は中程に稜があり上半部分は内湾しながら立ち上がる。下半部は直径14.8cm程度（断面観察位置）でやや下に窄まる円筒形を呈している。上半部はクロミが残り、胎土中にも厚さ2mm程度の変色部分があるが、下半部は暗黒褐色を呈するものの胎土中の変色部分は観察されず、この部分は巾木の可能性も残される。S16区出土。36は横断面方向が平面的、縦断面方向が湾曲する面を有する。鋳型面には横方向の擦痕があるがナデの痕跡らしい。Q2区出土。

排土採集鋳型（Fig.110）

鍋（1）

ほぼ直立する体部を有し、下半に至りわずかに内湾する。口縁部は内湾しながら立ち上がり、体部との境目は明瞭な稜をなす。その境目付近での直径は34.8cmを測る。真土は厚さ約1cmで、表面の2mmほどが変色、硬化している。外型はスサを含む粗めのものである。

表土出土鋳型（Fig.110）

円形皿状製品（2）　わずかに凸レンズ状の膨らみを有する体部で、平面は円形を呈しており直径4.4cmを測る。表面は風化するが鋳型の外側まで残存し、厚さ1cm強である。胎土は単一の精良なものである。

（イ）生産用具

溶解炉

(Fig.111～114)

1～7は口縁端部を含むかもしくはそれに近い部位の資料である。

1は口縁内側での直径が49.0cmを測り、口縁端部は幅2.5cmほどが平坦で、横方向の強いナデで仕

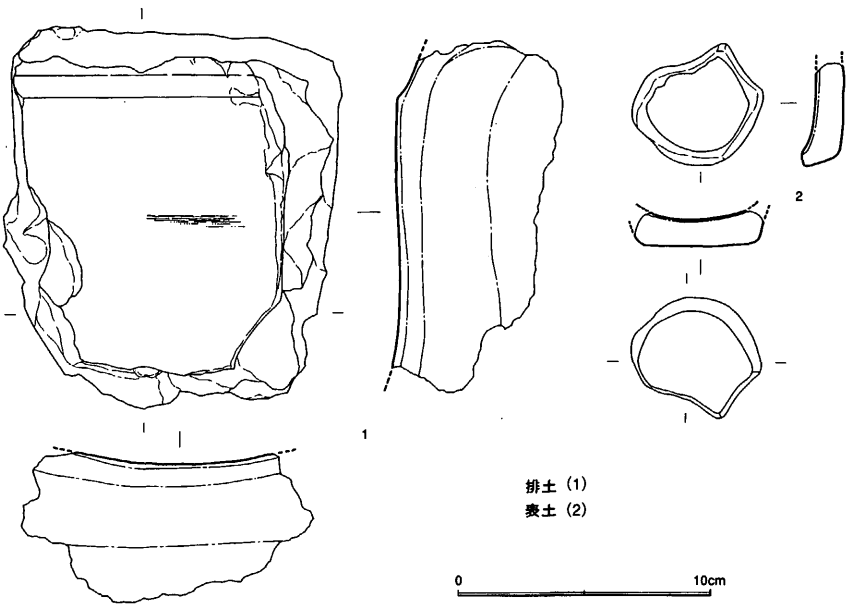


Fig.110　排土・表土出土鋳型実測図（1/3）

上げられる。内面は直立する体部を有するが、口縁端部から約10cmのところで屈曲し外側に開きながら立ち上がる。体部内面は横方向の条痕が目立ち、外面はおそらく当初面に近い部分とみられ、細い工具状のものを用いた縦方向のナデ痕がみられる。胎土は明赤褐色で、大粒の砂粒やスサを含む粗いものだが、内側の表面から1～3mmほどは赤褐色で精良な土が付着している。S20区の茶色土層出土。2は1に近い形状を呈するが、体部と口縁部の境目は不明瞭である。また口縁端部も当初面は完存せず、それに近い部分が辛うじて残存している状況である。内面も剥落が激しく、その形状は当初の様相を伝えるが本来の面は残存しない。胎土は籾殻やスサを多量に含むほか砂粒も多く含んでいるが、表面の2～3mm程度はやや精良な土が付着している。外面も当初面は残さないが、それに近い雰囲気は残している。47SE165出土。3はやはり先端部分を失うが口縁部の資料である。上に向かって開き気味に立ち上がることや、胎土が内側表面のみ精良になることなど、先述の1・2に共通する要素を持っている。基本となる胎土は暗褐色を呈し、籾殻、スサ等を多量に含んでいるもので、砂粒も大きめでかなり粗めである。47SK090出土。4は口縁端部の前半分程度は残存する資料とみられ、内側表面は溶解後硬化した面で2mm以下の気泡が多数見えるほか、銅粒（緑青の小塊）が散在的に付着している。胎土はスサ入りの粗いものである。47SX565出土。5は口縁端部の残存する資料だが、表面が溶解し膨張しているため内面の形状は失われている。外面は粗いナデで調整される。胎土は砂粒を多量に含み、スサも混在する粗いもので、部位により色調が大きく異なる。正確な数値は得ていないが内径がやや小さく感じられ、羽口の可能性も残される。47SK110下層出土。6は口縁端部に

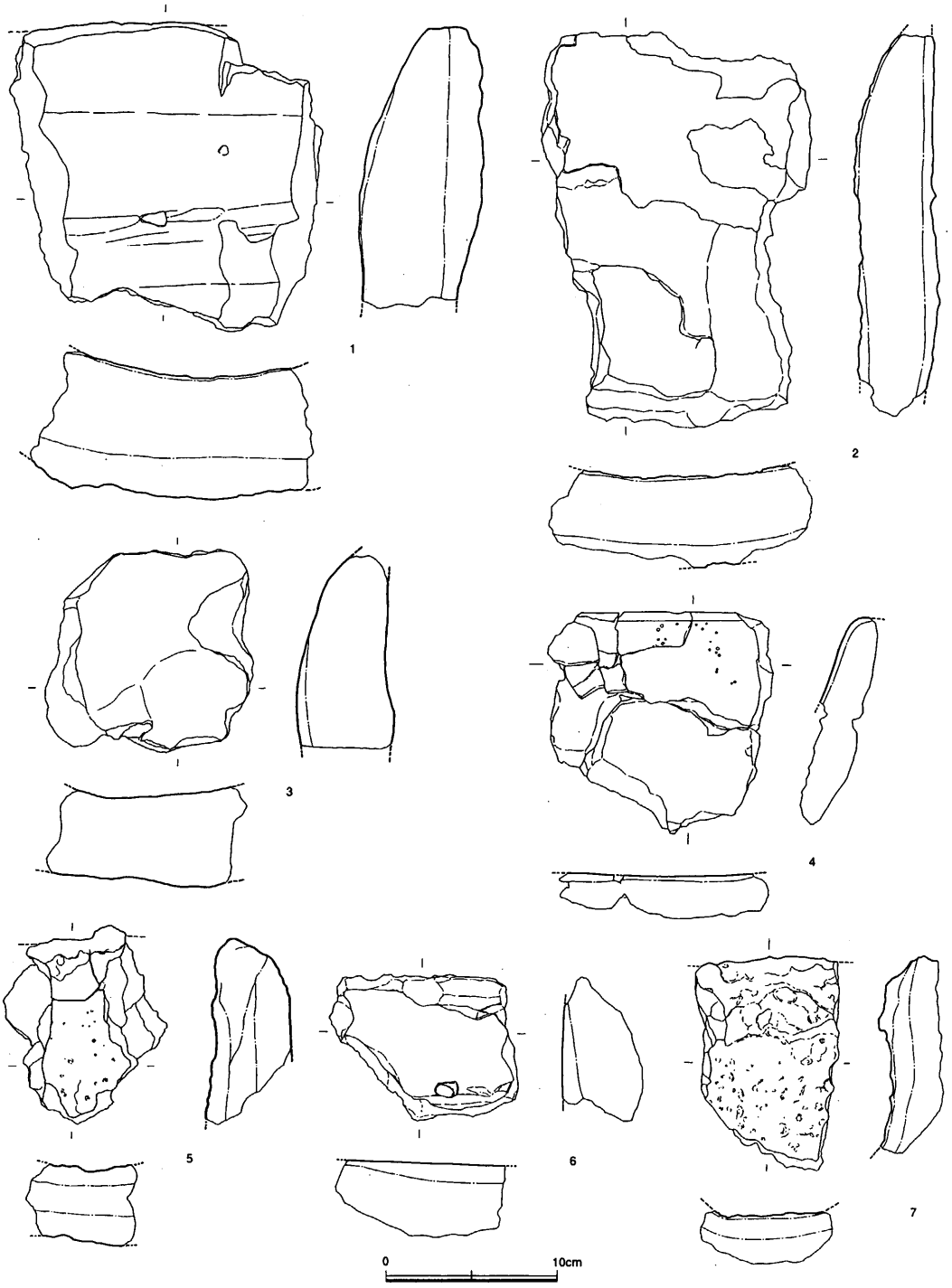


Fig.111　溶解炉実測図1（1/4）

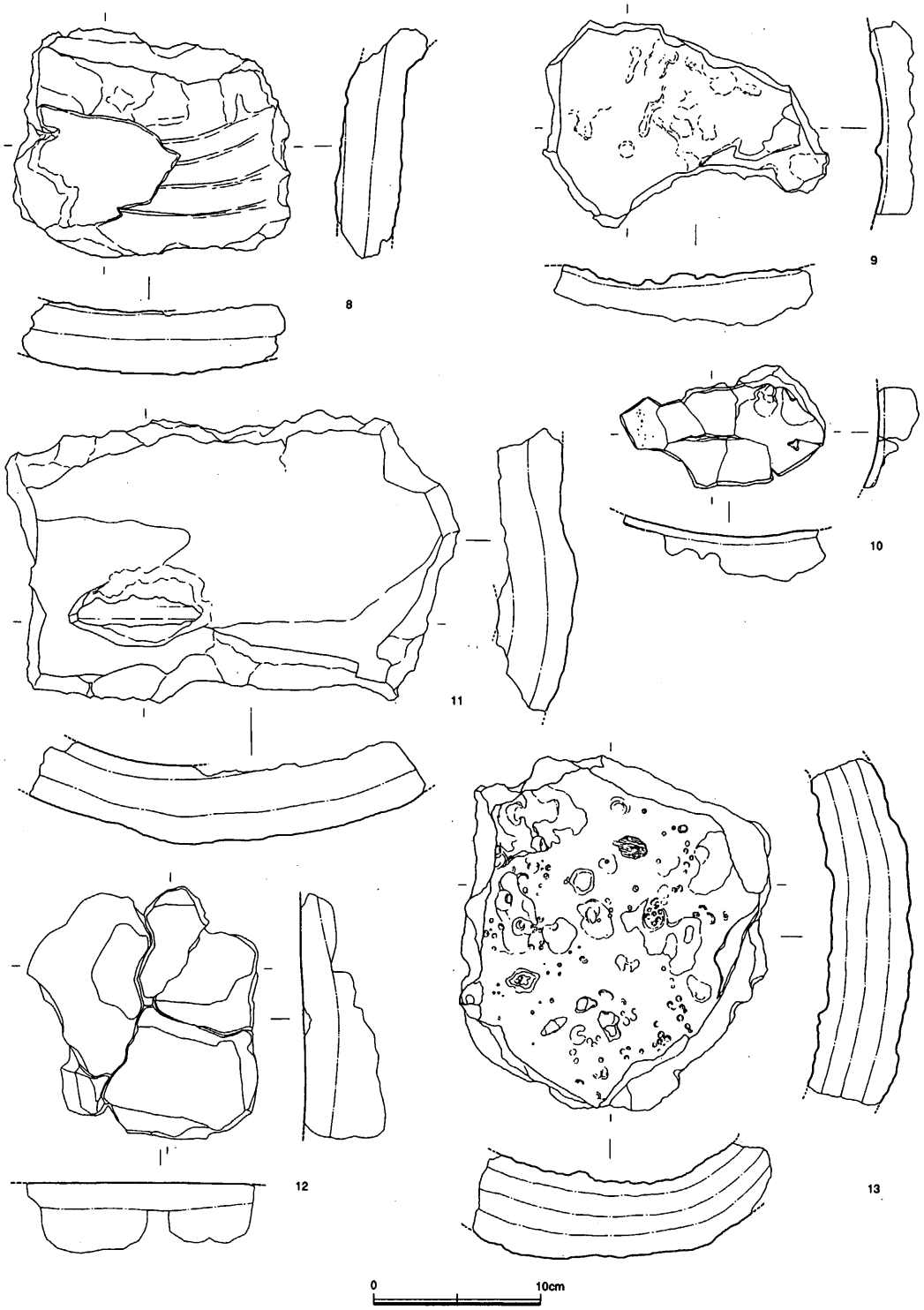


Fig.112　溶解炉実測図2（1/4）

近い資料で、表面はわずかに外側へ湾曲している。胎土は内面から1cm前後の範囲が淡灰褐色でやや細かめの土を用い、外側はやや粗めである。表土出土。7は口縁端部を残す資料と判断したが、内側表面は大きく溶解し当初の形状を失っている。胎土は大粒の砂粒を多量に含むほか、部分的ながらスサも混在する粗いもので、胎土中程から内側は被熱による溶解が始まり、変色、変質している。47SK236出土。

8は体部外面上位が大きく外側に反る資料で、口縁部近くの資料もしくは胴部の肥大化する部分ではないかと考えられる。外面は風化するが当初面に近い情報を持っていると思われ、内側は当初面がわずかに残るが大半が剥落している。ただ剥落面を観察すると指により横方向にナデられた痕跡が窺え、この段階で一旦簡易に成形し、さらにその内側に別の土を塗り重ねたことが分かる。47SE165出土。

9～17は胴部の破片である。

9は17.1×12.4cmの破片で、胎土は灰白色、黄褐色を呈し、大粒の砂粒を多量に含むほかスサも混じりかなり粗いものである。表面は被熱により大きく溶解、変質しており、起伏が激しく気泡も若干観察され、一面に鉄錆状の酸化物が付着している。47SK230出土。10は12.1×7.3cmの破片で、表面の5mmほどは溶解し硬化しているが、一部の膨張箇所を除くと滑らかな面を形成している。胎土は暗黒褐色で、大粒の砂粒やスサが混じる粗いものである。表面には緑青が粒状に付着しているほか、小気泡が集中して観察される部分がある。47SX085。11は表面の溶解し変質する部分の大半が剥落してしまった資料だが、その内側は当初の形状を推定させる湾曲面を示し、そこでの推定直径は50cm前後の数値を得ている。胎土は明茶白色、暗褐色と変色するが同質のもので、砂粒を多量に含んだかなり粗めのものである。外面も当初面そのものではないが、その形状を伝えるものと思われる。47SE165出土。12は縦横断面方向ともに平坦な資料で、表面は風化して情報が少ないが、胎土は表面から2cm余りのところで分けられ、外側がスサも混じるより粗い土である。鋳型の可能性も残される。47SK395出土。13は図の左側が上になる可能性が高い。胎土は色調から数層に分けられるが均一なもので、被熱による変色とみられる。表面の1cmほどは溶解面で起伏が激しく飴状を呈し、気泡が目立つ。さらに木片や酸化した鉄分が付着している。47SK550出土。14は16.3×17.5cmの破片で、内面は風化が進行し、表面には細かな亀甲状の亀裂が入るが大きく溶解した形跡はなく、鋳型の表面に似る。胎土は大きく二分できるが、いずれも砂粒やスサを多く含む粗いものである。外面は当初面で、横方向のナデ調整が施され、厚さは6.4cm（最大）を測る。47SE145第I層出土。15は20.0×15.2cm、厚さ5.8cmの破片で、内面は飴状に溶解し凹凸が著しく木片も混在し、灰黒色で一部ガラス状を呈して光沢がある。胎土は明茶灰色で砂粒やスサを多く含むが、中程から内側は被熱により変色、変質している。外面も残存するが調整は不明である。47SK330出土。16は22.0×9.5cm、厚さ6.0cmの破片で、内面は飴状に溶解し凹凸が著しく木片も混在し、黒灰色で

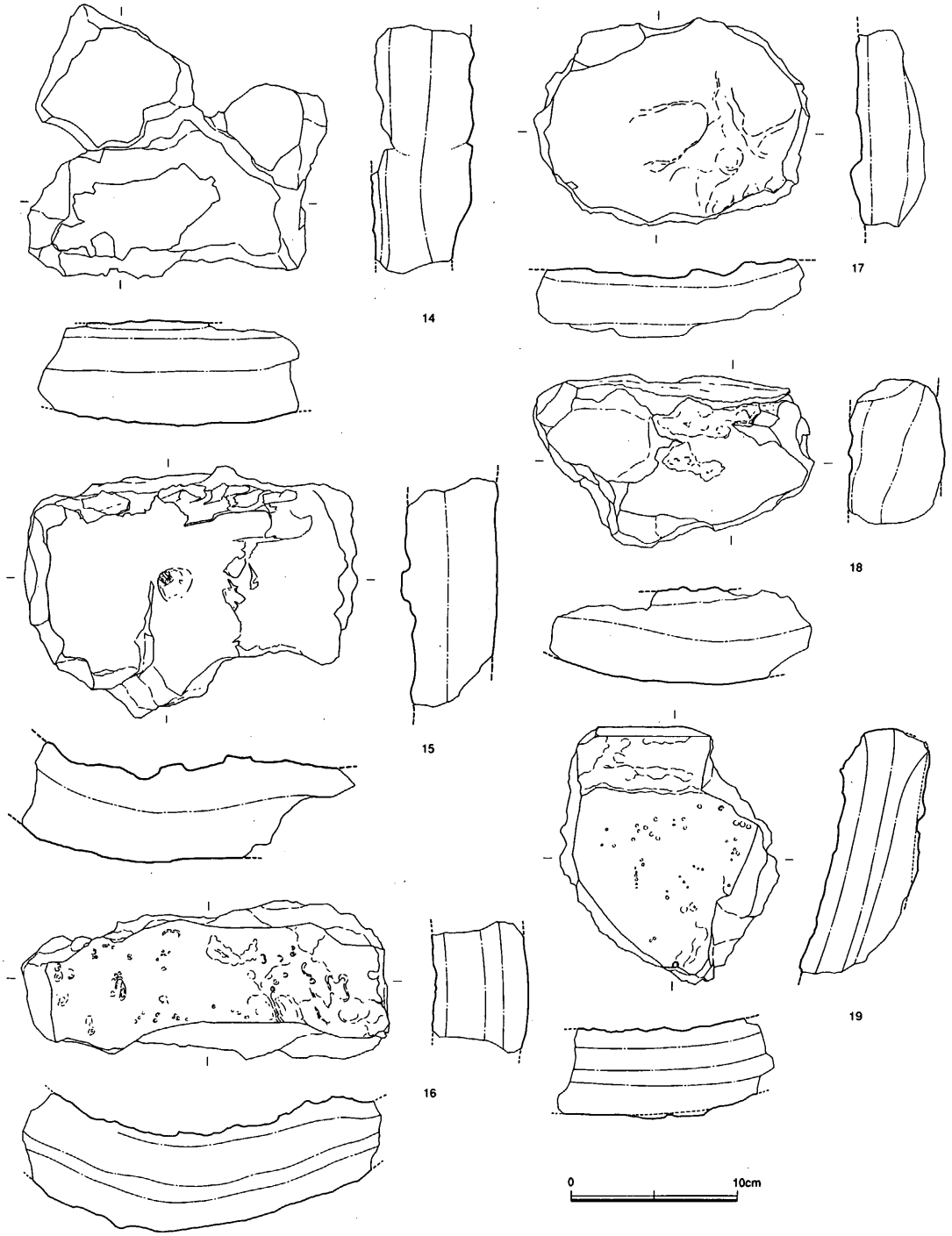


Fig.113　溶解炉実測図3（1/4）

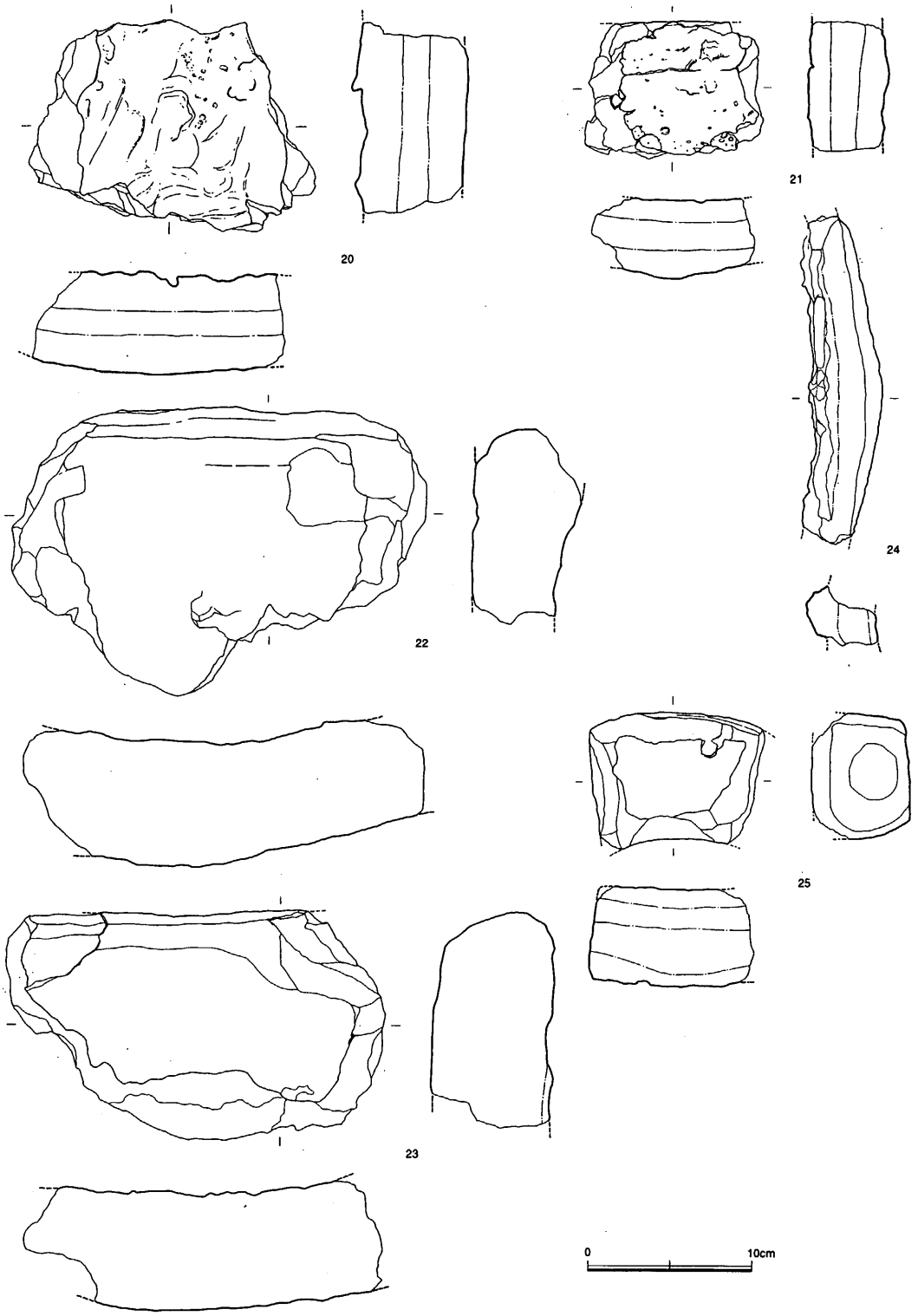


Fig.114　溶解炉実測図4（1/4）

一部ガラス状を呈するが、細かな気泡も多数観察される。胎土は被熱により数層に変色しているが単一のもので、大粒の砂粒を多量に含んだスサ混じりの粗いものである。表面の1cmほどは溶解し変質している。外面は風化が進行し調整は不明瞭だが、粗いナデのようである。47SK630出土。17は16.6×12.5cm程度の破片で、胎土は黒灰色、灰白色を呈し、大粒の砂粒やスサを多く含んでいる。表面の0.5～1cmほどは溶解し凹凸が著しく、断面では気泡も目立つ。47SK230出土。

18～23は胴部の破片だが、上下両面または片面に接合面（剥離面）が残存する資料である。

18は図の上面が接合面とみられ、丸味を帯びているが明らかに簡易な調整を施している。内面は溶解して暗灰色を呈し、光沢はないが気泡が目立つ。胎土は変色するがほぼ単一で、大粒の砂粒やスサを多く含んだものである。外面も当初面らしいが風化が進んでいる。47SK245出土。19は図の上面の前半分が接合面とみられ、丸味を帯びているが明らかに簡易な調整を施している。内面は溶解して灰緑色、灰白色を呈し、気泡が目立つほか砂粒の溶解したものが散乱している。また図の上から3.5cmの範囲は灰緑色でガラス質化している。胎土は数層に変色するがほぼ単一で、大粒の砂粒やスサを多く含んだ粗いもので、表面の1cmほどが溶解している。外面も当初面らしいが風化が進んでいる。S15区の茶色土層出土。20は図の上面が接合面だが、表面から1cmほどは溶解し癒着したらしく破断面となっている。表面の溶解部分は厚さ2～2.5cmにも及び、黒灰色を呈し細かな気泡が見える。胎土は本来単一のもので、5mm以下という大粒の砂粒を多量に含み、スサも混じるかなり粗いものである。外面は縦方向のナデ調整が施され、厚さ7cm（最大）に及ぶ。47SK110下層出土。21は図の上面が接合面で、平坦部分を簡易に調整したものである。内面近くの1cmほどは溶解し癒着したため破断面となっている。胎土は変色するが単一で、5mm以下の砂粒を多量に含むかなり粗めのもので、表面の1cmほどが溶解部分となり黒灰褐色を呈し、気泡が多数見られ亀裂も観察される。厚さは5cm前後で、外面も残存するが風化により調整は明らかでない。47SE165出土。22・23はいずれも図の上面が接合面（外面近くの1.5cmほどは破断面である）となる資料で、やや丸味を帯びているが簡易な調整を施している。表面は溶解しておらず、風化して調整は不明だが、外面は横方向のナデが観察できる。胎土は単一で変色もなく、大粒の砂粒を多量に含む粗いものである。未使用品の可能性もある。いずれも47SK245出土。

24・25は溶解炉を構成する部材の一部と考えられる。

24は図左面は溶解面で起伏が著しく、図右面は外面とみられ、何らかの調整が施されたようである。断面図の上下面はともに接合面（剥離面）で、表面の溶解部分のみ破断面となる。したがって資料は厚さ2cm程度の粘土紐状を呈していたことが分かり、内面の溶解部分の存在を考慮すると、溶解炉の部材の一部（クライ）と判断される。47SK110下層出土。

25は図下面が内面に当たるようで、弧を描いておりその直径は28.4cmを測る。右断面図で以

下説明すると、図の左面は平坦面で資料の外上面になる可能性がある（断面観察）。右面は小さな起伏がみられるが概ね平坦面であり、接合面（剥離面）として捉えられる。図の上は横方向の粗いナデが観察される面で外面にあたり、図の下面は内側になるようでやはり粗い横方向のナデが観察される。断面をみると略円形に変色しており、明褐色に変色する部分は内外面と上面にあたることから断面図左面は上面と考えた。溶解炉を構成する部材と考えたい。47SE165出土。

羽口（Fig.115～117）　1～10は大型の資料で、溶解炉に取り付いていた羽口の一部と考えている。

1は内面の表面部分（厚さ2～3mm）が著しく溶解したもので、表面は起伏がありガラス質を呈している。胎土は数層に変色するが、表面に近い厚さ2cm程の範囲は被熱による変質が始まっている。他は大粒の砂粒を多量に含む粗いもので、最外面は黄褐色を呈している。溶解面でデータは不正確だが、内径はおよそ18.5cm程度に推定できる。47SX250出土。2は外面部分が溶解した資料で、内面は縦方向の強いナデで仕上げられ、表面の4mmほどは茶褐色を呈し硬化している。やや歪みがあり精度は低いが、内径は12cm程度に復原できる。胎土は砂粒を多く含む粗いもので、外面から4.5cmほどは溶解し変質している。47SK450出土。3は端部の資料で、内面は直立して横方向のナデが明瞭に見える。外面は直立して立ち上がるが丸味をもって緩やかに端部に取り付く。外面は暗茶色で小さな凹凸があり、厚さ2mmほどまでは変色して気泡が目立ち飴状を呈している。小片のため径の復原は困難である。P6区茶色土層出土。4は内径14.0cmに復原できるもので、内面は横方向のナデで調整される。厚さは3cm程度だが外面の数mmは溶解し膨張しているため当初はもう少し薄手であったとみられる。溶解部分は端部から迫り出しており、図の上3cmほどは溶解部分のみであり本体には及んでいない。羽口本体の胎土は砂粒を多めに含む粗めのものである。47SX112出土。5は内径17.0cmを測るもので、内面は横方向のナデで仕上げられるが、それ以前に縦方向の強いナデ様のラインが観察できる。外面は溶解により変質し、黒灰色を呈し小さな起伏がある。熱による変色で分層できるが胎土は単一で、砂粒を多く含みスサも多く混じる粗いものである。47SE305出土。6は口縁端部が残存しており、そこが平坦面をなすことが分かる。内径12.6～13.4cmで、口縁部近くは横方向の不明瞭なナデ、主体は縦方向の板状工具によって施された強めのナデである。胎土は砂粒やスサが混じる粗めのもので、被熱により数層に変色し、外側の約1cmほどは溶解し飴状に変質している。当初の厚さは4cm程度とみられるがかなり肥大する部分がある。47SE145第I層出土。7は端部に近い資料とみられ、内径7.4cmほどに復原され（横断面観察位置）、表面はナデ調整される。胎土は明茶色を呈し、砂粒を多く含むとともにスサや籾殻痕もみられる粗めのもので、数層に変色するが本来は単一である。外側の0.5～1cmほどは溶解し変質しており、外面は凹凸が著しい。47SE145第I層出土。8は内径7.0cmで、厚さ3.3～6.5cmを測る。胎土は赤茶色で砂粒を多く

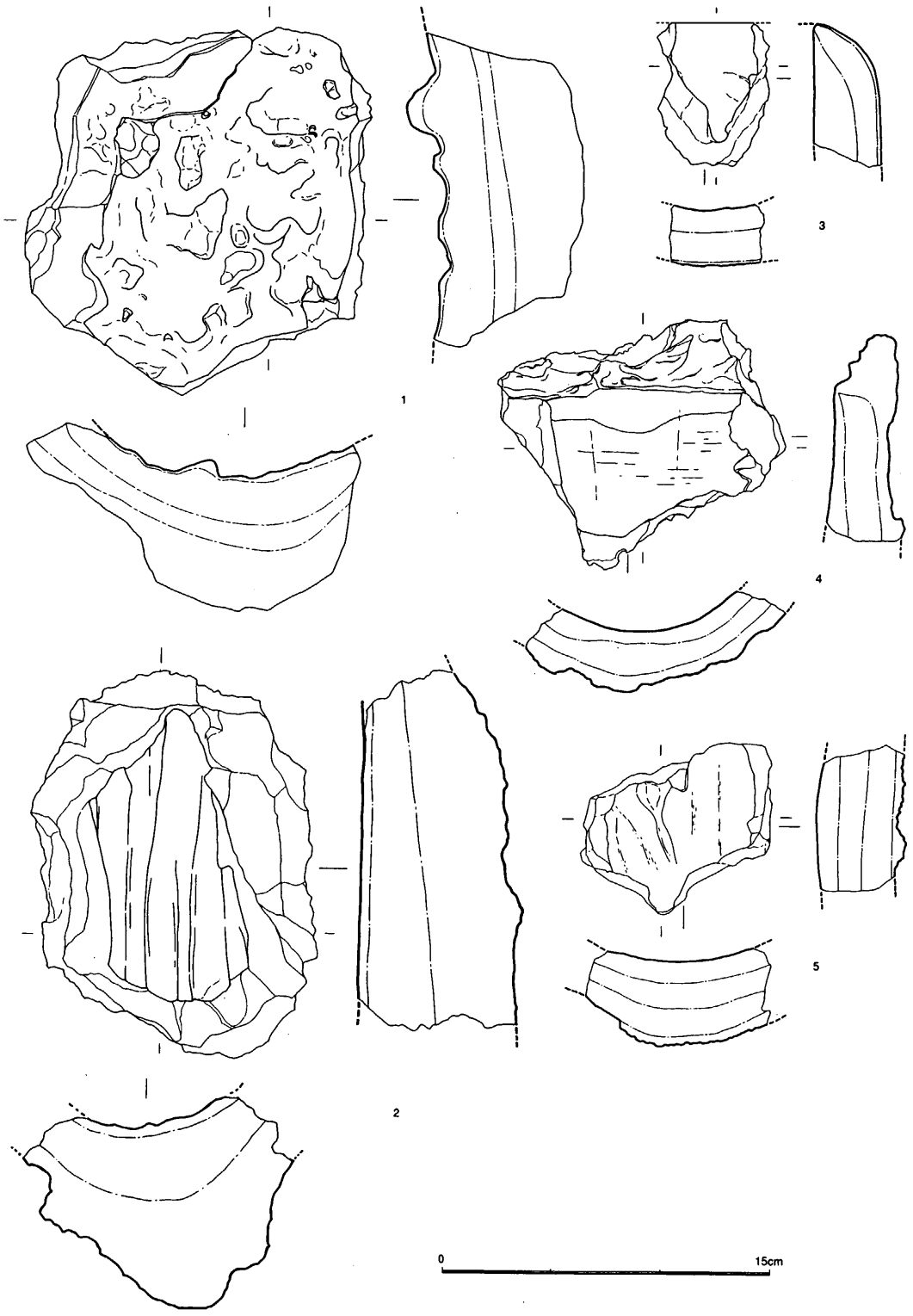


Fig.115　羽口実測図1（1/3）

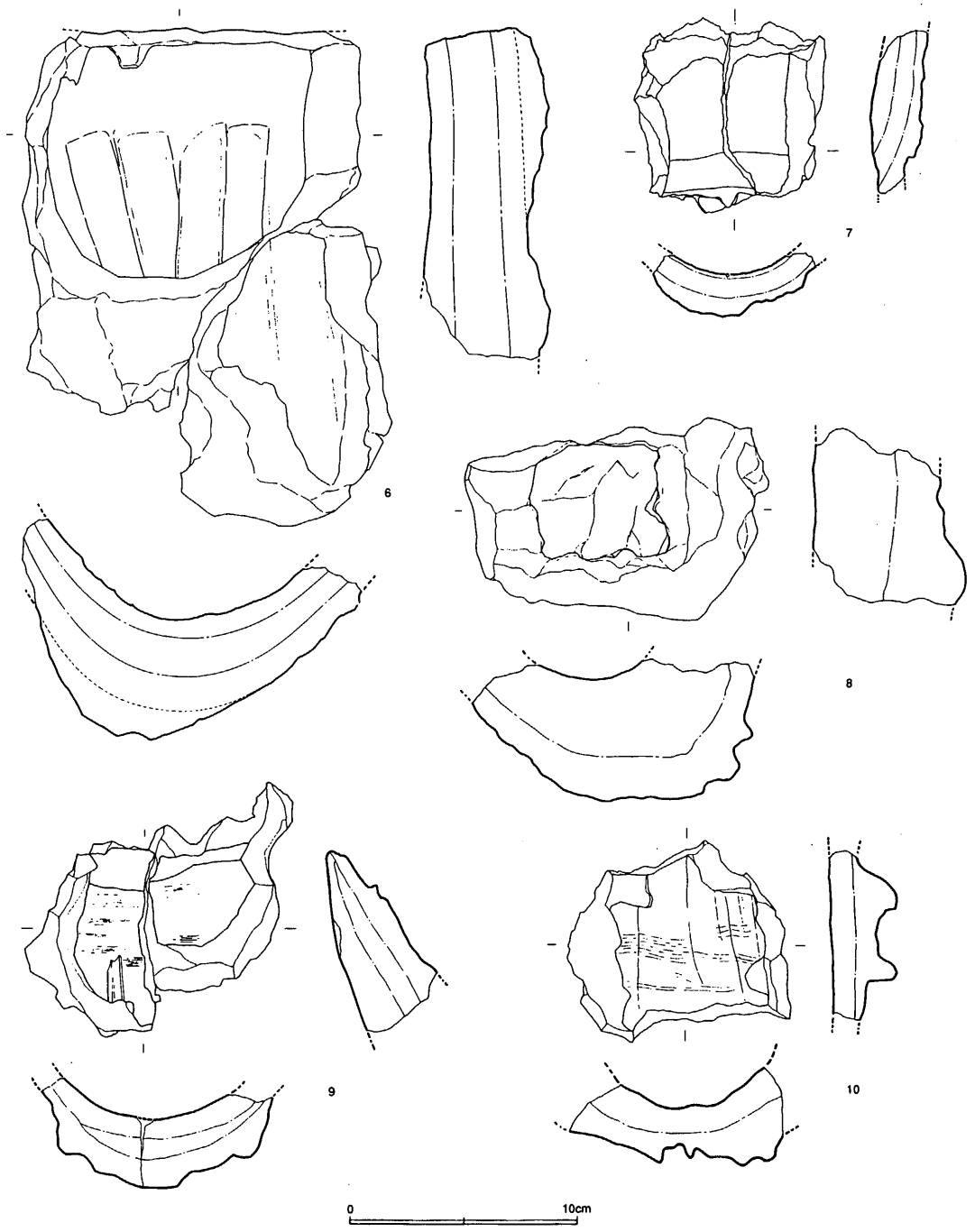


Fig.116　羽口実測図2（1/3）

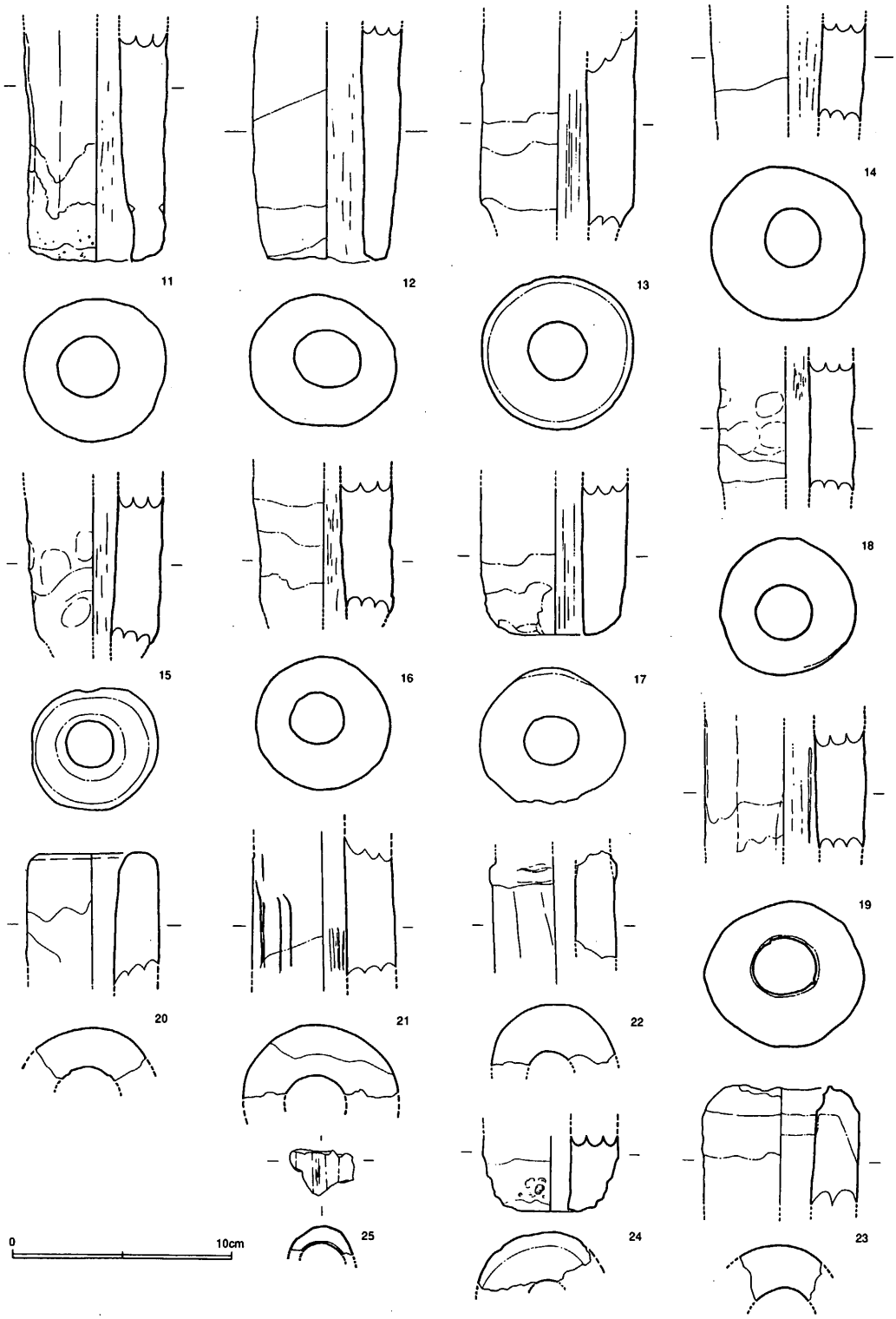


Fig.117　羽口実測図3（1/3）

含みスサも混じる粗めのもので、内表面はやや硬化している。外側の約半分ほどは被熱により溶解、変質し、暗黒褐色を呈し飴状で気泡が目立っている。外面は溶解面のため凹凸が著しい。47SE145第II層出土。9は端部近くでの内径が10.6cmに復原されるもので、内面は横方向のナデが施される。胎土は黄褐色を基調とし砂粒を多く含む粗めのもので、外に向かって変色し、外面近くは溶解しガラス質に変質し気泡が多く見え、黒褐色を呈している。端部（図上方）は尖り気味におさめられるものだが、溶解した胎土がはみ出して形状を損ねている。47SE170出土。10は内径8.4cm程度に復原されるが、内面の凹凸が著しくやや不安定な要素が多い。調整は横方向のナデが最終調整とみられるが、それ以前に縦方向の凹凸がみえ、粗いケズリで成形された可能性が窺える。胎土は赤褐色で砂粒やスサの混じる粗めのもので、外面の大半は溶解し、黒紫色に変色、気泡の多数あるガラス質に変質している。47SE170出土。

11～25は小型の羽口で、特に11～19は47SK440からまとまって出土したものである。

11は口径6.0cm、内径2.9cmを測るもので、体部外面は縦方向のケズリの後ナデを施し、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は淡茶褐色を呈し小砂粒を含むやや粗めのもので、先端は被熱により溶解している。12は口径5.4cm、内径2.6～3.1cmを測るもので、体部外面は縦方向のケズリの後ナデを施し、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は灰色及び淡茶褐色を呈し小砂粒を含むやや粗めのもので、先端は被熱により溶解、変質し、黒灰色を呈し光沢がある。13は体部の直径7.0cm、内径2.6cmを測るもので、体部外面は縦方向のケズリの後ナデを施し、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は部位により変色するが小砂粒を含むやや粗めのもので、口径が急激に小さくなる端部近くは被熱により溶解している。14は体部径7.1cm、内径2.6cmを測るもので、体部外面は縦方向の不統一なナデ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は淡茶褐色を呈し小砂粒を含むやや粗めのもので胎土中に気泡が目立つ。15は体部径6.0cm前後、内径2.2cmを測るもので、体部外面は粗いナデ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は数層に変色するが単一であり、小砂粒を含むやや粗めのもので、先端近くは被熱により暗灰色に変色し部分的に溶解している。16は体部径6.1cm、内径2.4cmを測るもので、体部外面はナデ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は小砂粒を含むやや粗めのもので、表面は数層に変色し、先端近くは被熱により溶解している。17は口径6.0cm、内径2.2～2.6cmを測るもので、体部外面はナデ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は赤褐色を呈し砂粒を含むやや粗めのもので、表面は数層に変色し、口縁端部は被熱により溶解、気泡が多数観察される。18は体部径6.1～6.3cm、内径2.5cmを測るもので、体部外面はナデ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は淡赤茶色を呈し小砂粒を含むやや粗めのもので、表面は数層に変色している。19は体部径6.7～7.3cm、内径2.6～2.9cmを測るもので、体部外面は縦方向のケズリの後ナデを施

し、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は暗灰褐色を呈し小砂粒を含むやや粗めのもので気泡が目立ち、先端近くは被熱により溶解し小さな気泡が見える。

20は口径5.9cm、内径3.4cmに復原できるもので、外面から端部内側にかけては不明瞭ながらナデが施され、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は砂粒を多く含む粗めのもので、表面は部位により変色している。47SK245出土。21は体部径6.6cm、内径3.4cmに復原できるもので、外面は板状の工具による縦方向のナデとみられ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は砂粒を多く含む粗めのもので、部位により変色している。47SK245出土。22は体部径5.6cm、内径2.0cmに復原できるもので、外面は縦方向のナデとみられ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は砂粒を多く含む粗めのもので、図上端部が溶解し変質している。先端に近い部位の可能性がある。47SK500出土。23は口径7.0cm、内径3.2cmに復原できるもので、外面はナデ、内面は円形棒状の芯を引き抜いたような擦痕が観察される。胎土は砂粒を多く含む粗めのもので、端部は被熱により溶解し、黒灰色を呈している。P8区茶色土層出土。24は口径4.2cm、体部径6.2cm、内径1.8cmに復原できる。胎土は砂粒を多く含む粗めのもので、端部は被熱により溶解、変質し、気泡が多くみられる。47SD175出土。25はきわめて小さな資料で、表面が被熱を受けているとみられることからここで報告したが、別の製品の可能性も残される。表面は縦方向のケズリで、内面は風化するが被熱により暗灰色を呈している。胎土は赤褐色で小砂粒を若干含む程度のものである。47SK139出土。

その他の生産用具（Fig.118・119）

三つ又土製品（1・2）　1は脚のほとんどを失うが、その欠損部分から三つ又になることが判明する。現存長7.5cmで、脚部は不整形ながら丸めに作ろうとした意識が窺え、幅は3cm前後である。表面は被熱により明灰色を呈しているが、指等でナデて仕上げた痕跡は明瞭に観察できる。胎土は若干砂粒を含むやや粗めのもの。47SK630出土。2は脚のひとつが残存し他は欠損するもので、現存長7.7cm。断面形状は不整円形で、径2.9～3.3cm。表面はナデによって仕上げられる。表面は被熱により灰茶色を呈している。胎土はやや粗めで、スサも混じる。47SK110出土。

こうした製品を『近江の鋳物師』ではエマラと称しており、炭をおこしやすくするための道具とされている。以下に報告する4～12の資料も表面の色調や状態、胎土、調整方法等で上記1・2に共通するものがあり、おそらくエマラの脚部分と考えて差し支えなかろう。

4は現存長6.2cm、径2.6cmで、表面はナデ調整され、被熱により片面に偏って淡灰白色に変色している。47SX144出土。5は現存長4.0cm、径3.2cmで、表面はナデ調整される。約半分の面が濁灰白色に変色している。47SE145第III層出土。6は現存長4.3cm、径2.2～2.4cmで、表面はナデ調整される。47SE145第I層出土。7は現存長8.8cm、径3.0cmで、表面はナデ調整される。

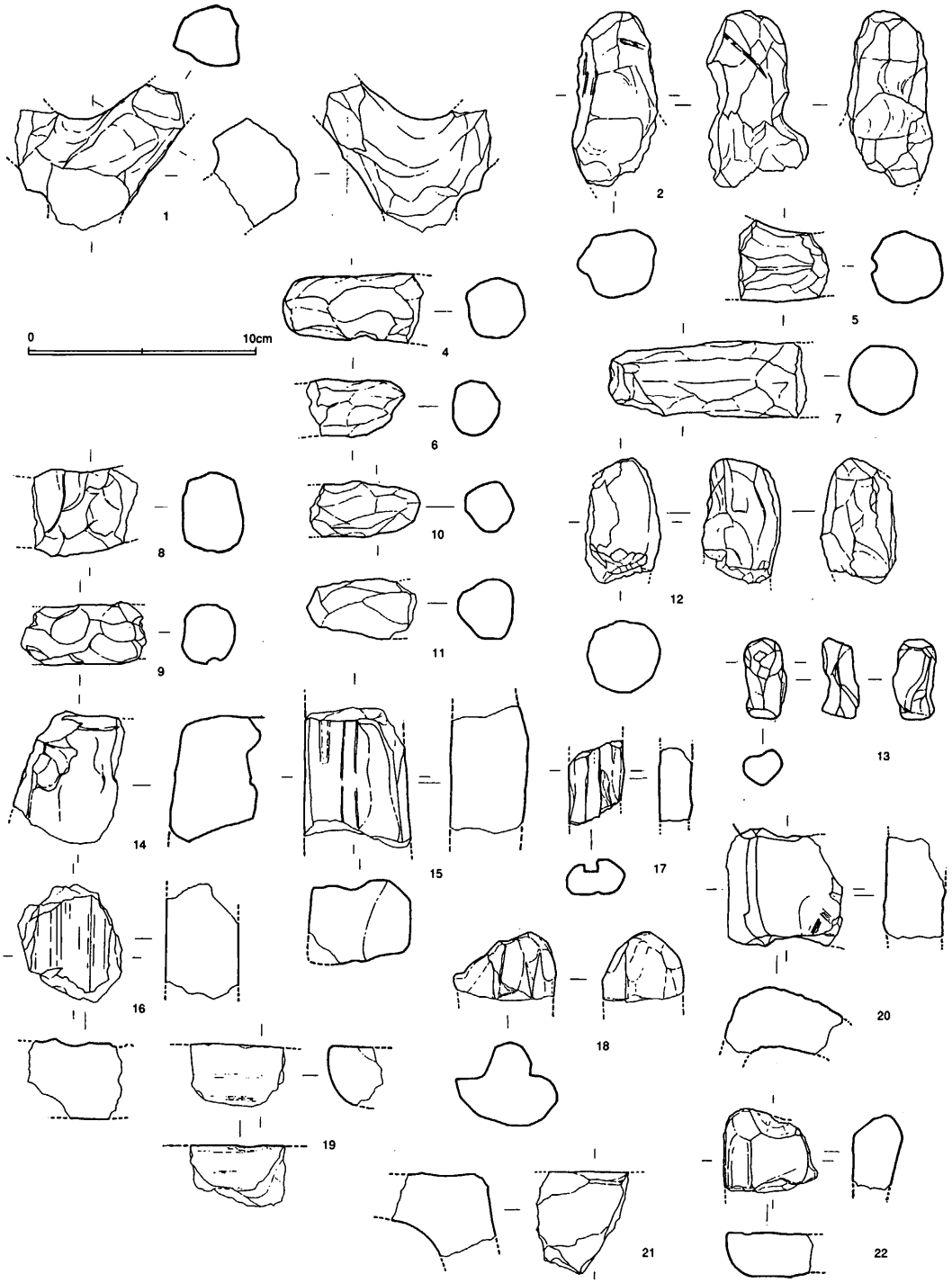


Fig.118　生産用具類実測図（1/3）

47SE145出土。8は現存長4.6cm、幅や厚さは2.7×3.5cmで、表面はナデ調整される。約半分の面が濁灰白色に変色している。47SE145第I層出土。9は両端を失う。現存長5.5cm、径2.2×2.6cmで、表面は指圧痕がよく残り、二次的な焼成による変色（赤茶白色）が著しい。47SK155出土。10は現存長4.9cm、径2.2cmで、表面はナデ調整される。47SE145第III層。11は現存長4.7cm、径2.4×2.6cmで、表面はナデ調整される。先端に鉄滓状のものが付着している。47SK620出土。12は現存長5.5cm、径3.3cmで、表面はナデ調整される。47SK110出土。

13～22も生産に関わる資料と推定されるが、当初の形状や用途を明らかにできるものはない。

13は長さ3.6cmで、断面形状は1.6×1.3cmの不整形なものである。表面はナデで仕上げられこれで完存品とみられる。47SK110出土。14は図の正面、上面、左側面の3面が残存するが、さらに大きな資料であったと思われ、表面は横方向の粗いナデで仕上げられる。現存値は5.8×4.3×3.6cmを測る。47SX292出土。15は4.6×3.5cmの角柱状製品で両端を失っており、現存長6.1cmを測る。表面は粗いナデで仕上げられる。47SX250出土。16は粗い胎土の製品で現存値は4.6×5.2×3.2cmであるが、当初はより大きな煉瓦状の製品であったとみられる。表面は縦方向に強くナデられたためか数条の溝状に窪んでいるが、裏面は未調整らしい。47SK510出土。17は1.5×2.5cmでややいびつな楕円形を呈する断面形状を有し、一つの面に箱形の断面形状を呈する溝状の彫り込みがある。これは角棒状のものに粘土塊を当てて棒を引き抜いて形成されたものである。両端部を失うが、現存長3.6cm。47SX148出土。18は図下半を欠失するもので、断面形状は凸形を呈する。断面図下半の丸味を帯びる部分はケズリ調整、図右の肩部分はナデ、突起部分は型押しによる造形の可能性がある。くびれ部分はヘラ状の工具を用いて境目を明瞭にしている。47SK280出土。19は当初の形状が蒲鉾型を呈していたとみられるもので、平坦部と円弧部分とからなる。平坦部は板上に置いて成形したのち未調整、円弧面は縦方向の強いナデである。胎土は赤茶色で、砂粒を多めに含むものである。47SX390出土。20は断面形状をみると略L字形を呈する製品だが、本来の形状は定かでない。表面は粗いナデとみられるが、被熱により変色し白濁化しており詳細は不明である。裏面は未調整らしい。R2区茶色土層出土。21は20同様に断面形状が略L字を呈する製品で、20より表面は平滑である。外面は被熱により変色し、内面は未調整だが型による成形の可能性も窺わせる。焼成は良好で、石のように硬化している。P12区茶色土層出土。22は平坦な面の隅部分で縦方向に剥離面が残り、幅1cm程の粘土板が貼り付いていたものと考えられる。側面、裏面も残り、ナデによる調整が施される。P8区茶色土層出土。

23は現存長17.5cm、幅9.0～10.6cm、厚さ8.0～8.5cmの角柱状の製品で、これよりやや大きめのピット内に立った状態で出土した。胎土は黄褐色で砂粒を多く含む粗いものである。下半も存在したが脆弱だったため取り上げに失敗した。47SX087出土。

24は外形が略円形で直径8.6～9.0cm、高さ3.8cmを測り、表面は粗いナデにより仕上げられる。

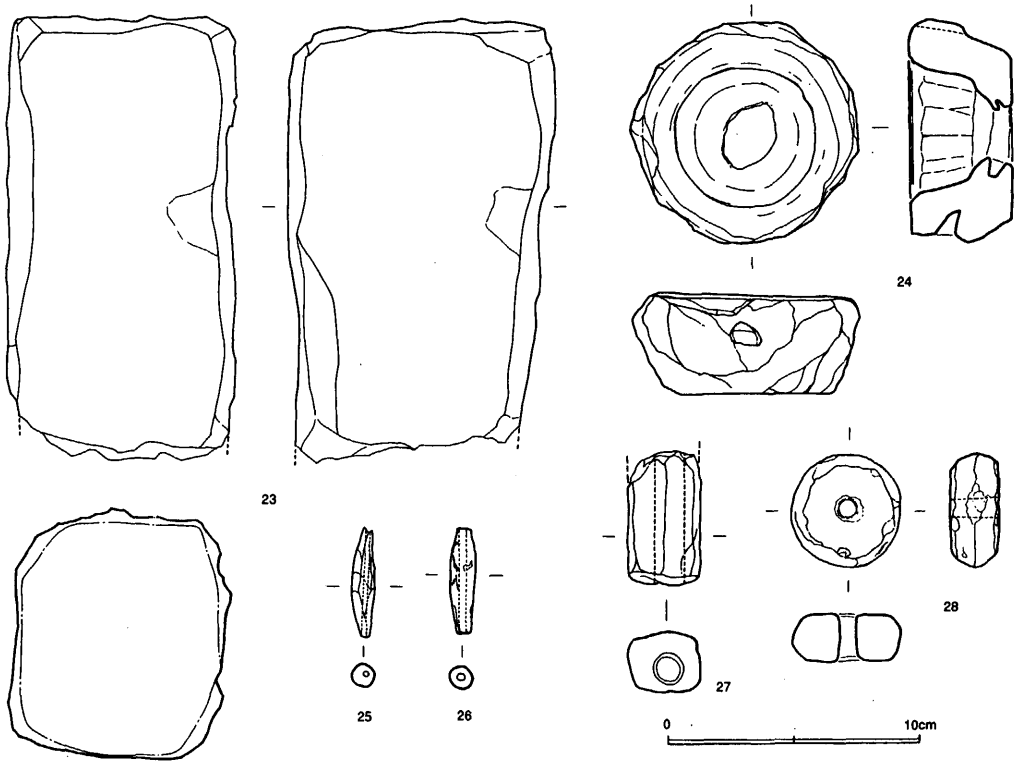


Fig.119　土製品実測図（1/3）

内面は直径5.7cmの整った円形の椀状を呈し、底中央部に不整形な穿孔がある。内側面は縦方向の強いナデを連続して施し成形する。体部側面に幅1.1cm、深さ1.0cmの穴があり、底の穿孔部にも同様の穴がある。両者は類似しており対になるものと見られ、火鋏の先端で挟み込むのに都合がよい位置に穿たれたものと推定したい。なお底部穿孔部の対面にも径2～3mmでピンホール状の穴があり、穿たれる角度は先のものに似るが、外面に対となる穴はない。

（ウ）その他の土製品（Fig.119）

土錘（25・26）　25は最大径0.9cm、長さ4.3cmで、中央に径2mmの穿孔がある。表面は磨滅が進行し調整は明らかでない。Q区茶色土層出土。26は最大径0.95cm、長さ4.2cmで、中央に径2.5mmの穿孔がある。表面はナデである。47SX542出土。

角筒状製品（27）　中央に径1.1cmの穿孔があり、表面はケズリにより面取りされ、略五角形の断面形状を呈する。棒状製品に粘土を巻き付け、それを引き抜いて製作したもので、製作工程は羽口に似る。器台の脚部の可能性がある。47SX587出土。

紡錘車（28）　直径4.4cm、厚さ1.9cmの円盤状を呈し、側面はわずかに稜を持っている。中央に径0.6cmの貫通する穿孔がある。表面は風化が進行し、調整は不明である。47SX540出土。

土器片加工品（Fig.120）　1は白磁椀VIII類の底部片を加工したもので、体部と底部の境目

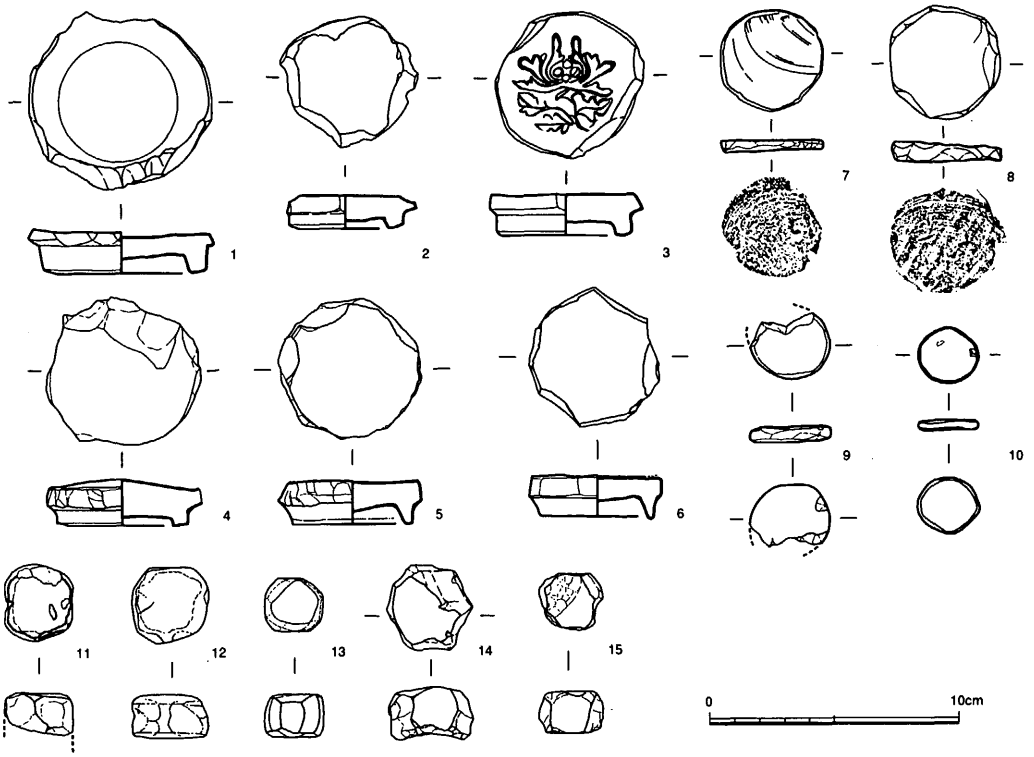


Fig.120　土器片加工品実測図（1/3）

部分を丁寧に打ち欠いて円形に仕上げている。見込み部分の最大径7.2cm、高台径6.4cm、高さ1.7cmで、茶色土層出土。2は白磁椀IX-1類の底部片を加工したもので、体部と底部の境目部分を丁寧に打ち欠いて円形に仕上げている。見込み部分の最大径5.2cm、高台径4.5cm、高さ1.3cmで、表土出土。3は龍泉窯系青磁椀I類の底部片を加工したもので、体部と底部の境目部分を丁寧に打ち欠いて円形に仕上げている。見込みに草花文のスタンプを押捺している。見込み部分の最大径5.8cm、高台径5.3cm、高さ1.6cmで、47SX237出土。4は龍泉窯系青磁椀I類の底部片を加工したもので、体部と底部の境目部分を丁寧に打ち欠いて円形に仕上げている。見込み部分の最大径6.2cm、高台径5.2cm、高さ1.8cmで、暗灰色土層出土。5は龍泉窯系青磁椀III類の底部片を加工したもので、体部と底部の境目部分を丁寧に打ち欠いて円形に仕上げている。見込み部分の最大径5.6cm、高台径4.7cm、高さ1.7cmで、47SK040出土。6は龍泉窯系青磁椀III類の底部片を加工したもので、体部と底部の境目部分を丁寧に打ち欠いて円形に仕上げている。見込み部分の最大径5.6cm、高台径4.5cm、高さ1.6cmで、47SX321出土。7は土師器坏または小皿の底部を加工したもので、径4.0cm、厚さ4～5mm。底部に糸切り痕及び板状圧痕がみられる。47SK520出土。8は土師器坏または小皿の底部を加工したもので、径4.3cm、厚さ5～6mm。底部に糸切り痕及び板状圧痕がみられる。47SK591出土。9は土師器坏または小皿の底部を加工し

たもので、周囲を研磨してかなり丸く作る。径3.0cm、厚さ6mmで、底部に糸切り痕がみられる。47SK520出土。10は土師器坏または小皿の底部を加工したもので、周囲を研磨してかなり丸く作る。径2.4cm、厚さ4mm。茶色土層出土。11は瓦玉で径2.6～3.0cm、厚さ1.7cm以上で、周囲を打ち欠きによって成形する。47SD078出土。12は瓦玉で径3.0cm、厚さ1.7cmで、周囲は風化のため調整不明だが、凹凸が目立つことから打ち欠きによるものと思われる。47SK245出土。13は瓦玉で径2.3cm、厚さ1.7cmで、周囲は打ち欠きによって成形されるがかなり丸みがある。片面には格子叩き目がわずかに残る。47SX503出土。14は瓦玉で径3.0～3.3cm、厚さ1.8cmで、片面に布目痕が観察される。茶色土層出土。15は須恵器甕の胴部片を加工したもので径2.3～2.5cm、厚さ1.7cmで、周囲は打ち欠きによって成形される。47SK205最下層出土。

(3) 瓦類 (FIg.121)

1は厚さ2.7cmの摶で、周囲はすべて破断面である。表面には文様があり、動物の後足と幅広の尻尾の一部が見えている。文様は型によっており、細部をヘラによって簡単に手を加えている。2は厚さ2.2cmの摶で、表面上半部分に剥落の跡があり、道具瓦の一部であった可能性もある。いずれも今時の調査遺構中最も新しい47SK217出土。

(4) 木製品

47SE145出土木製品 (Fig.122)

漆椀 (1)　小さく低く削り出される高台の径は8.3cmで、内面の全面及び外面の体部から高台全体にわたり黒漆が塗られ、見込みに朱漆による文様がある。文様は円の中に亀甲文を線描きし、さらにその内側に細線で縁取りしたうえに各亀甲内に花文？をあしらうものである。第II層出土。

木球 (2・3)　2は3.3×5.0cmの木を切断し、枝を切り落としさらに上下の切断部分に粗い加工を施したものである。表面には部分的に樹皮が残存している。第III層出土。3は多くを失

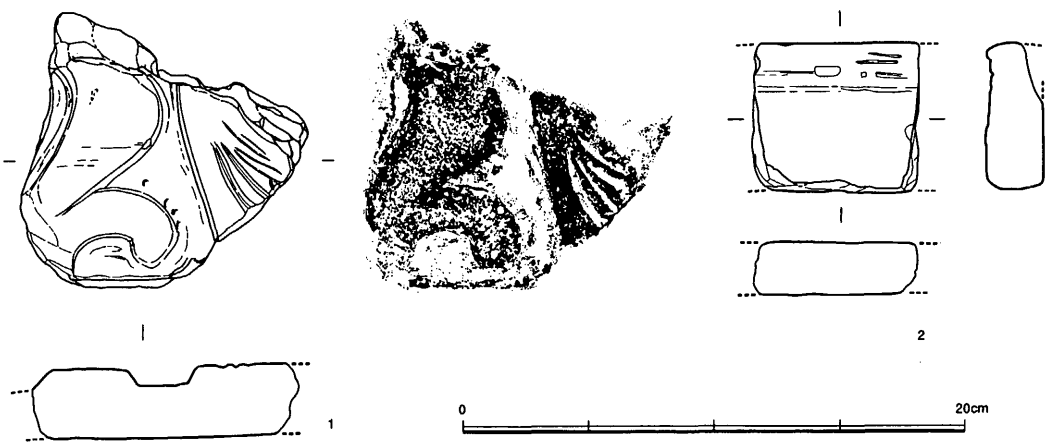


Fig.121　瓦類実測図 (1/3)

うが、復原すると直径7cm程度の球形を呈していたものと思われる。表面は風化するがケズリ加工を施したものと思われる。

47SE165出土木製品（Fig.122）

穿孔板材（4）　6.4×4.6cm、厚さ1.8cm（最大）の板材で、小口の一面は欠損している。材の隅に片寄って径1.3cmで円形の穿孔が斜めに貫通している。表面に焦げ面とみられる黒色で光沢を放つ部分がある。

下駄（5）　片方の後半約1/4の破片で、現存長12.0cm、現存幅5.2cm、最大厚2.3cmを測る。歯の差し込み部分の後側が残存し、紐通しの穿孔（推定径1.3cm）も1箇所確認できる。表面に焦げ面とみられる黒色で光沢を放つ部分がある。

桶部材（6～10）　6～9は桶側板で、長さ20.0～20.4cm、上端幅5.0～5.5cm、下端幅4.5～5.1cm、厚さ1.0cm前後を測る。すべてわずかに内湾しており、側面はいずれも内側に向かって傾斜している。このうち6は上半部を削り残すかたちで方形の突起（表面で5.3×4.6cm）を作り出し、その中央に2.3×2.6cmの方形で、深さ1.8cmの彫り込みがある。10は現存長15.0cmの棒状製品で、中央がくびれている。棒の表面は長軸方向のケズリで面調整を行い、断面形状は不整形な略円形（1.3×2.3cm）となる。くびれ部分は幅2.7cmの範囲で徐々に細くなり、最も狭い部分で1.7×1.8cmの略円形を呈し、表面は磨耗して調整は明らかでないが、おそらく使用による磨耗が要因であろう。

これらの部材から復原できる桶は、上端の直径が約25cmで、側板は16枚で構成され、そのうちの2枚には穿孔のある方形突起があって対面し、穿孔部には10の棒状製品がはめ込まれていたと考えられる。10の中程には紐（縄）が括りつけられていたとみられる。井戸出土という事実を踏まえると、水を汲み上げるための桶と見なして問題なかろう。

47SE227暗灰色粘質土層出土木製品（Fig.123）

箸（1～4）　表面は縦方向に面取りされ、断面形状は不整多角形（5～7面）となる。端部も簡易なケズリ調整が施される。1は長さ19.3cm、径0.5cm前後、2は長さ21.4cm、径0.4～0.5cm前後、3は長さ21.2cm、径0.4cm前後、4は長さ23.7cm、径0.5～0.6cm前後である。

板材（5・6）　5は現存長15.8cm、幅3.6cm、厚さ0.3cmで、頂部をケズリによって山形にするが、傾斜角が左右不統一であり、表面に墨痕もないことから卒塔婆ではなさそうである。頂部近くの隅に2mm角ほどの貫通する穿孔がある。6は現存長9.9cm、現存幅2.9cm、厚さ0.3cmで、頂部のみ当初面である。図左側の破損面に近い部分に穿孔があり、桜皮が残存している。何かを取り付けた痕跡とみられる。頂部はやや傾斜して削られており、その内側0.5cm付近に、幅0.2mmの板材とみられる当たりが残存する。側板を立てた痕跡らしい。

草履（7）　頂部を丸く作るもので、残存長17.1cm、残存幅5.5cm、厚さ0.3cmを測り、表面には横方向に藁が巻かれていた痕跡が残る。

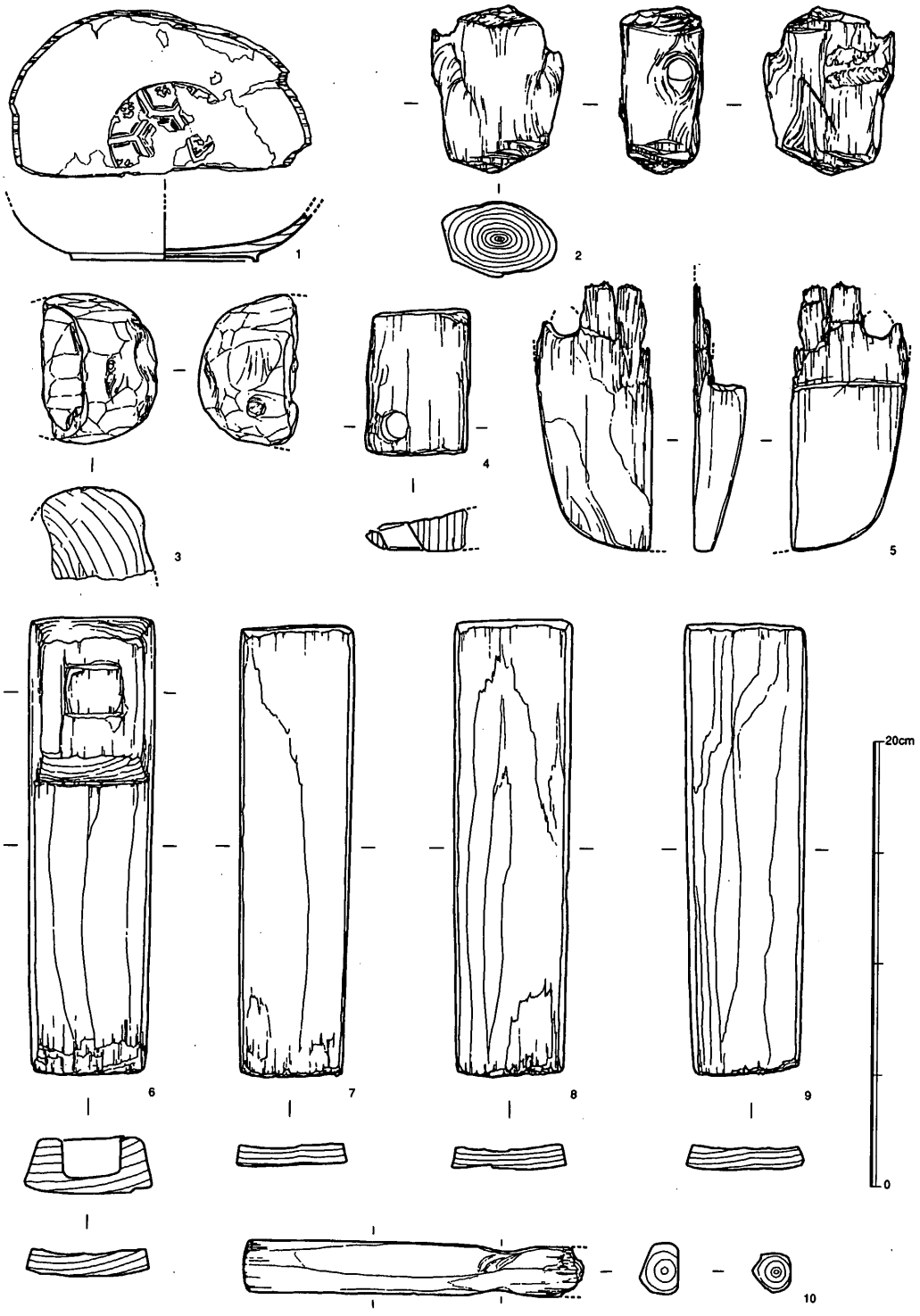


Fig.122　47SE145・165出土木製品実測図（1/3）

下駄（8）　差し込み式の歯で、下端幅9.6cm、高さ10.2cm、厚さ1.6cmを測る。上端を逆台形状に削り込み、臍とする。接地面の磨耗は少なく、当初の形状に近いものを伝えている。

往来軸（9）　長さ39.3cm、軸部幅1.9cm、頭部推定最大幅3.6cm、厚さ0.7cmを測り、頂部は茸状に加工し、先端の約10cmほどは徐々に削り込まれて細く作られる。表面に墨痕は確認できない。往来軸は経典名を記す題簽または消息を巻き付ける軸で、形態はやや異なるが奈良元興

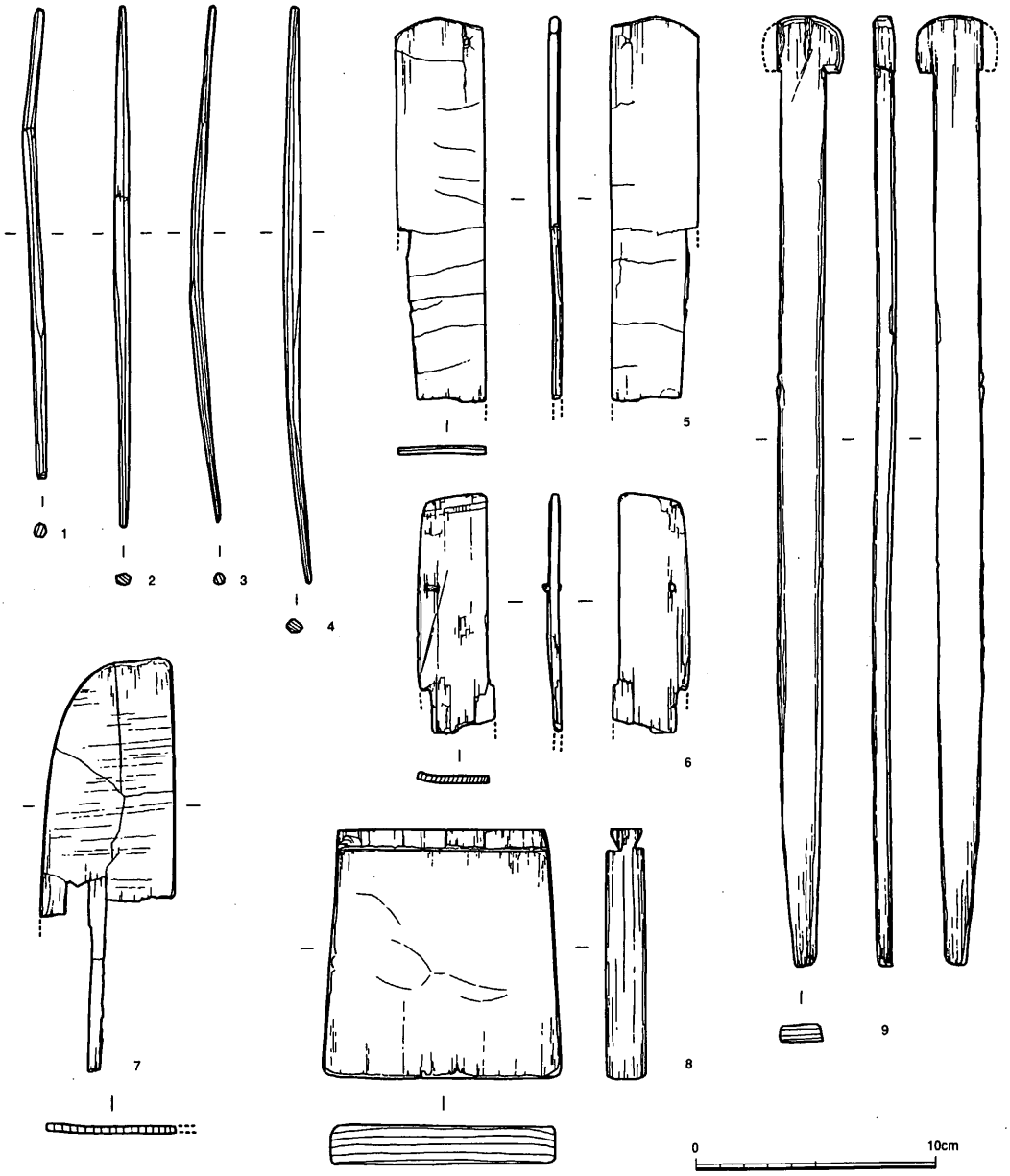


Fig.123　47SE227暗灰色粘質土層出土木製品実測図（1/3）

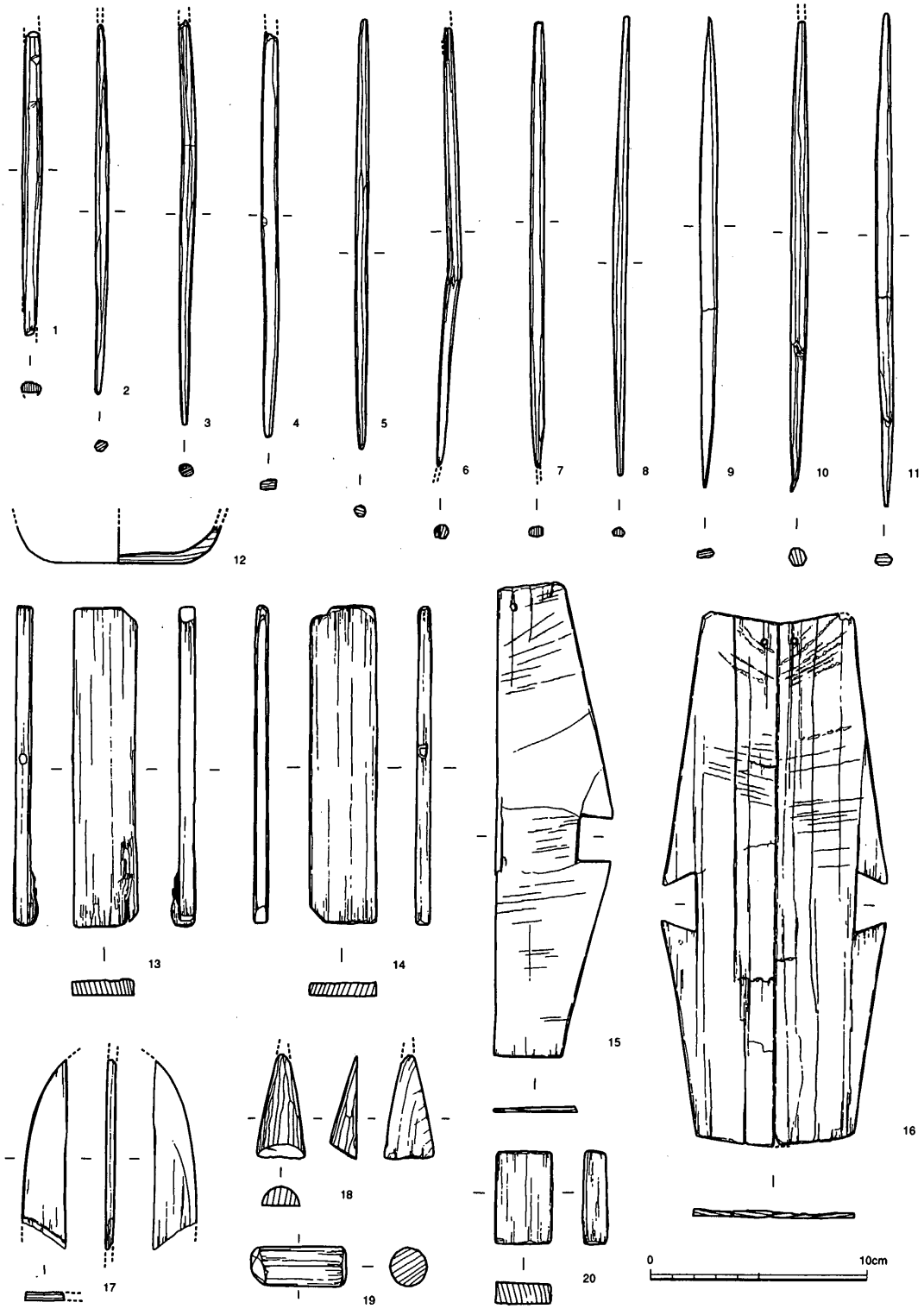


Fig.124　47SE227灰茶色粘質土層出土木製品実測図（1/3）

寺に鎌倉時代後期から室町時代初期の資料、当麻寺に平安時代初期と考えられる資料が伝わる。

47SE227灰茶色粘質土層出土木製品（Fig.124）

箸（1～11）　表面は縦方向に面取りされ、断面形状は不整多角形（5～7面）となる。端部も簡易なケズリ調整が施される。1は両端を失っており現存長13.8cm、径0.9cm前後、2は長さ16.9cm、径0.5cm、3は上端を欠落しており現存長18.5cm、幅等0.5×0.7cm、4は上端を欠落しており現存長18.4cm、幅等0.5×0.7cm、5は長さ19.5cm、径0.5cm、6は長さ20.0cm、径0.6cm、7は長さ20.4cm、幅等0.4×0.6cm、8は長さ20.8cm、径0.3～0.5cm、9は長さ21.4cm、幅等0.4×0.8cm、10は長さ21.4cm、径0.8cm、11は長さ22.4cm、幅等0.5×0.8cm。端部から1／3付近で折れるものが多い。

漆椀（12）　無高台の椀で底径6.6cmを測り、内面は朱漆（赤茶色）、外面は黒漆が全面に塗布されている。内外面とも無文である。

折敷（13・14）　両者とも折敷の底板とみられ、上下隅が斜めに切り込まれている。切り込みの無い側の側面の中央付近には、ダボ状に木釘を打ち込み別材とつないでいた痕跡がある。13は長さ14.6cm、幅3.0cm、厚さ0.7cm、14は長さ14.6cm、幅3.1cm、厚さ0.6cm。法量、形状の近似から本来一具のものであった可能性が高い。

草履（15・16）　15は長さ21.9cm、幅4.35cm、厚さ0.2cmでちょうど半分が残存する。傾斜する外側面の中程に、幅2.0～2.1cm、深さ1.5cmの台形状の切り込みがあり、上部隅近くに径3mmで円形の小穴が貫通している。表面には藁痕が認められる。16はほぼ完存する資料で、長さ24.5cm、最大幅10.3cm、厚さ0.2～0.3cmを測るもので、傾斜する外側面の中程に、幅2.0～2.1cm、深さ1.5cmの台形状の切り込みがあって左右対になり、上部隅近くには径3mmで円形の小穴がやはり対になって貫通している。鼻緒を括る穿孔及び切り込みと判断される。表面には藁痕と思われる痕跡が観察される。

板材（17・20）　17は円弧を描く面のみ当初面で他の側面は破損面である。現存長8.4cm、最大幅3.2cm、厚さ0.35cmを測る。20は長さ4.3cm、幅2.6cm、厚さ0.9～1.0cmを測る小板である。

栓状製品（18・19）　18は当初、円錐形を呈していたとみられるものが半裁状態になったものと考えられるが、平坦部はきわめて平滑である。外面は細かな縦方向のケズリ痕が残る。長さ4.8cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm（最大）を測る。19は径1.8cmほどの円筒形を呈するもので、両端はケズリにより面調整されるが、表面に特別な調整の痕跡はみられない。長さ4.4cm。

47SE227灰茶色粘質土下層出土木製品（Fig.125）

箸（1～17）　表面は縦方向に面取りされ、断面形状は不整多角形（5～7面）となる。端部も簡易なケズリ調整が施される。また端部から1／3付近で折れるものが多い。1は片方を欠損するもので現存長17.9cm、径0.5cm。2は上下端部を失うもので現在の長さ18.0cm、径0.3～0.5cm。3は上下を欠損するもので現存する長さ19.3cm、径0.5～0.7cm。4は片方を欠損するもの

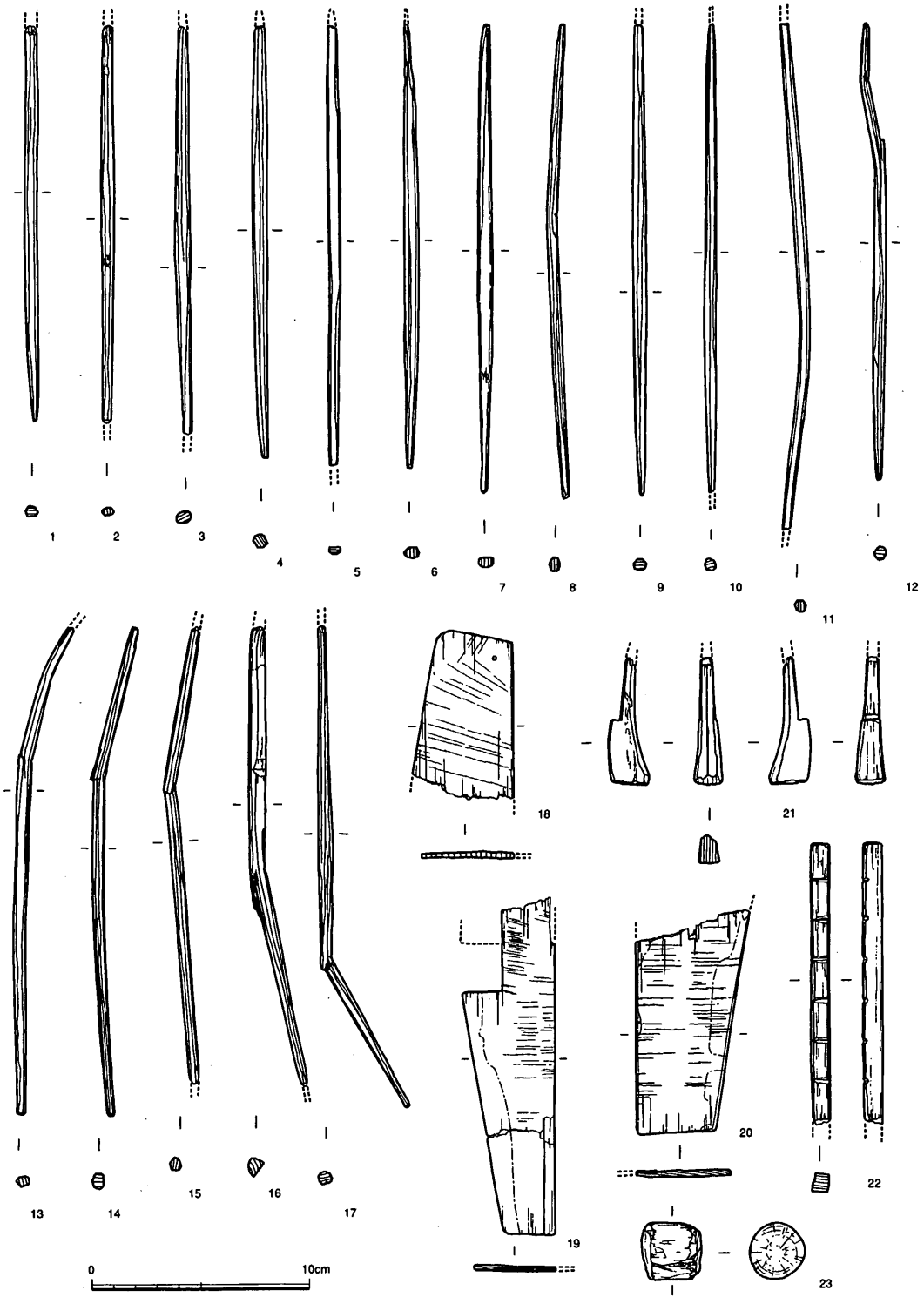


Fig.125　47SE227灰茶色粘質土下層出土木製品実測図（1/3）

で現存長19.7cm、径0.6cm。5は上下端部を失うもので現在の長さ20.0cm、径0.3～0.5cm。6は片方の先端を欠失するが長さ20.2cm、径0.5～0.7cmで欠損する側の先端が焦げている。7は長さ21.2cm、径0.4～0.65cm。8は長さ21.5cm、径0.5～0.6cm、9は片方の先端を失うもので現在の長さ21.4cm、径0.5～0.6cm。10は両方の先端をわずかに失っているもので、現在の長さ21.2cm、径0.5cm。11は中程で湾曲し（埋没環境によるとみられる）、両端部を失うもので現在の長さ23.0cm、径0.5cm、12は2箇所で折れているもので、長さ20.9cm、径0.5～0.6cm、13は中程で湾曲し（埋没環境によるとみられる）さらに折れており、片方の端部を失うもので長さ22.2cm、径0.5～0.6cm、14は中程で折れているもので長さ22.4cm、径0.5～0.7cm、15は中程で折れ両端部も失うが、長さ21.0cm、径0.5～0.6cm、16は中程で折れており両方の先端を失うもので長さ21.1cm、径0.6～0.8cm。片方の先端が焦げている。17は中程で折れており片方の先端を失うもので長さ22.1cm、径0.5cm。

草履（18～20）　18は片側上半部の資料で、厚さ0.2cm前後。内側辺寄りの上方隅部分に径2mmの貫通する穿孔がある。表面には藁の痕跡が残っている。19は片方の下半部の資料で、厚さ0.2cm。表面には藁の痕跡が確認され、側辺部分はわずかに火を受けて焦げている。20は片方の下半部の資料で、厚さ0.2～0.3cm。表面には横方向の藁の痕跡が残り、側辺部分は焦げている。

脚（21）　上先端はわずかに欠損するようだが、長さ5.8cm、最大幅1.8cm、厚さ1.3cm（最大）を測る。資料中程の背面部分はケズリ込まれ、さらに幅2mmほどの溝状の切り込みがある。折敷のようなものが噛み合う構造ではなかろうか。脚下部は使用により先端が磨耗している。

目盛竿（22）　片方が欠損するが、現存長12.8cm、幅0.8cm、厚さ0.8cmを測る。片面に現存7箇所（うち1箇所は破損部分で半分が残存）の刻み込みがある。刻み目の芯々距離は端部の刻み目から順に、1.8・1.8・1.8・1.9・1.8・1.9cmとなり規則性が看取されることから目盛と思われる。

木球（23）　長さ2.7cm、径2.5cmの円筒状を呈するもので、両小口部分は切断後に面調整が施される。表面は樹皮を剥いだ程度の調整で終わる。

47SE227粘土層（底）出土木製品（Fig.126）

草履（1）　草履の半分で内側の側辺が若干失われている。長さ21.8cm、最大幅4.5cm、厚さ0.3cmで、中程に台形状の切り込みがあり、上隅部分に径0.3cmほどの貫通する穿孔がある（半分現存）。表面には横方向の藁の痕跡が見える。

47SE475出土木製品（Fig.126）

角杭状製品（2）　長さ51.7cm、最大幅2.4cm、厚さ2.4cmの角杭状を呈している。頂部は削りによりほぼ平坦に調整され、各側面もケズリ調整される。

（5）金属製品

鉄製品（Fig.127～129）

香炉（1）　口径17.8cm、器高7.4cm、高台？径7.8cmを測る。口縁部下位には受け部があり、その端部の径は18.8cmである。体部上位と下半にはそれぞれ2条の低い凸線があり、底部近くには1条の凸線とそれ以下は軽い段状を呈している。高台は錆に覆われて当初の形状を大きく損ねているとみられるが、端部はやや肥大化するものの丸味を帯びたものである。底部と高台部は別に作られた後はめ込まれたようで、椀部の底部は円形にくり抜かれたようになっている。差し込まれたとみられる高台部の上面は破断面となっているが、底部の形状や構造は資料がなく知り得ない。47SK155出土。

紡錘車（2）　周囲の一部は錆により失われるが、直径4.1cm強の笠形を呈するもので、中央に径0.4cmで円形の鉄芯が長さ1.5cm分のみ残っている。47SX049出土。

金具（3）　幅0.8cm、厚さ0.4cm前後の小さな鉄板をC字状に折り曲げるもので、両端はいずれも尖っていたものとみられる。部材に打ち付けて使用した金具であろうか。47SK450出土。

小札（4）　長さ7.8cm、幅1.5cm、厚さ1mm前後で、図の右側がわずかに飛び出した、変形五角形を呈する鉄板（頂点までの最大幅は2.1cm）を重ね並べたもので、各片の60％近くは重複部分にあたる。各板の図上部には縦方向に2箇所、下部には1箇所の穿孔があり、いずれも略円形で径0.1cm前後を測り、板の左側に偏って穿たれている。穿孔部に通されていたであろう紐類は残存していない。10枚分が癒着している。Q6区茶色土層出土。

鋏（5）　図の下方が刃に至るものとみられ、図の中央はちょうど刃が重なっている部分である。47SK440出土。

刀子（6～9）　6は現存長9.5cm、幅1.9～2.3cmで、図の右側下方が刃とみられるが左側は刃部が明瞭ではな

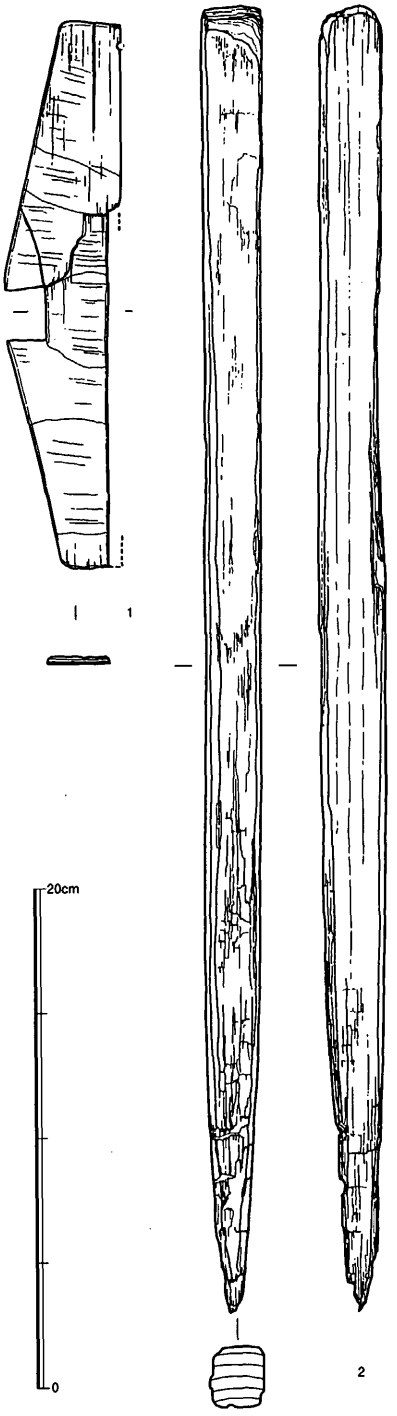


Fig.126　47SE227粘土層（底）・47SE475出土木製品実測図（1/3）

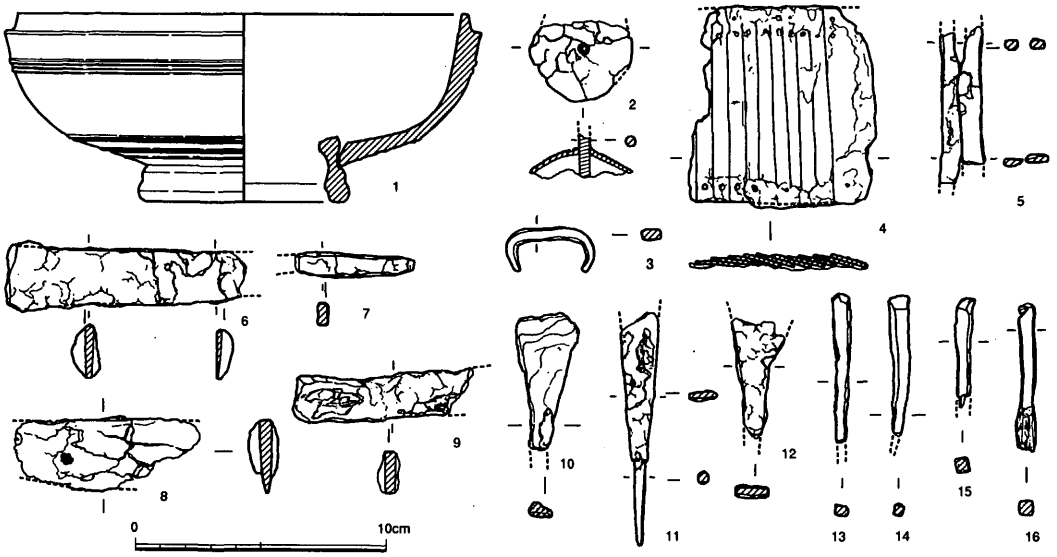


Fig.127　鉄製品実測図1（1/3）

い。鎌の可能性もある。47SK330出土。7は刀子の基部（中子）とみられ、断面形状は0.9×0.4cmの長方形で刃部はない。47SK514出土。8は現存長7.2cm、幅2.9cm、最大厚0.45cmで、図の下部が刃部分と考えられる。やや幅が広く包丁のような刃物を想定できるかも知れない。47SX248出土。9は刀子の基部（中子）の可能性を支持したい。断面形状は長方形で、0.4×1.6cm、表面の一部に木質が観察できる。47SK340出土。

鏃（10～12）　10は先端を山形にするタイプとみられ、現存長5.4cm、最大幅3.0cmを測る。資料は大きく湾曲している。47SK110第II層出土。11は頭部を平坦にするタイプとみられ、現存長9.2cm、最大幅1.4cmを測る。茎部は一辺0.4cmの方形で、長さ3.4cmを測る。12は10に似た形状の鉄鏃とみられるが、茎部もやや幅広の板状を呈している。破損が著しく詳細は不明である。47SX283出土。

釘（13～16）　13は現存長5.9cmだが下端を失うとともに頭部も欠失している。47SK240出土。14は現存長5.6cmで、先端を失うとともに頭部の平坦面を欠損するが、叩き込まれた傾斜面は残存する。47SK110出土。15は現存長4.3cmで、14と同様に先端を失うとともに頭部の平坦面を欠損するが、叩き込まれた傾斜面は残存する。47SK275出土。16は現存長5.9cmで、先端に木質が付着している。頭部は扁平に叩き伸ばされて、さらに折り曲げられているのがよく分かる。47SK450出土。

鉄片（17～94）　様々な形状や法量のものがあるが、以下ではいくつかにまとめて報告する。

17～29は形状が略三角形を呈するもので、各片はすべて破断面とみられるが錆により不明確なものも多い。個別の情報は次のとおりである。17は3.4×2.2cm、厚さ0.3cmで、47SK245出土。18は2.4×1.7cm、厚さ0.3～0.4cmで、47SK245出土。19は2.1×2.4cm、厚さ0.4で、47SX255出土。

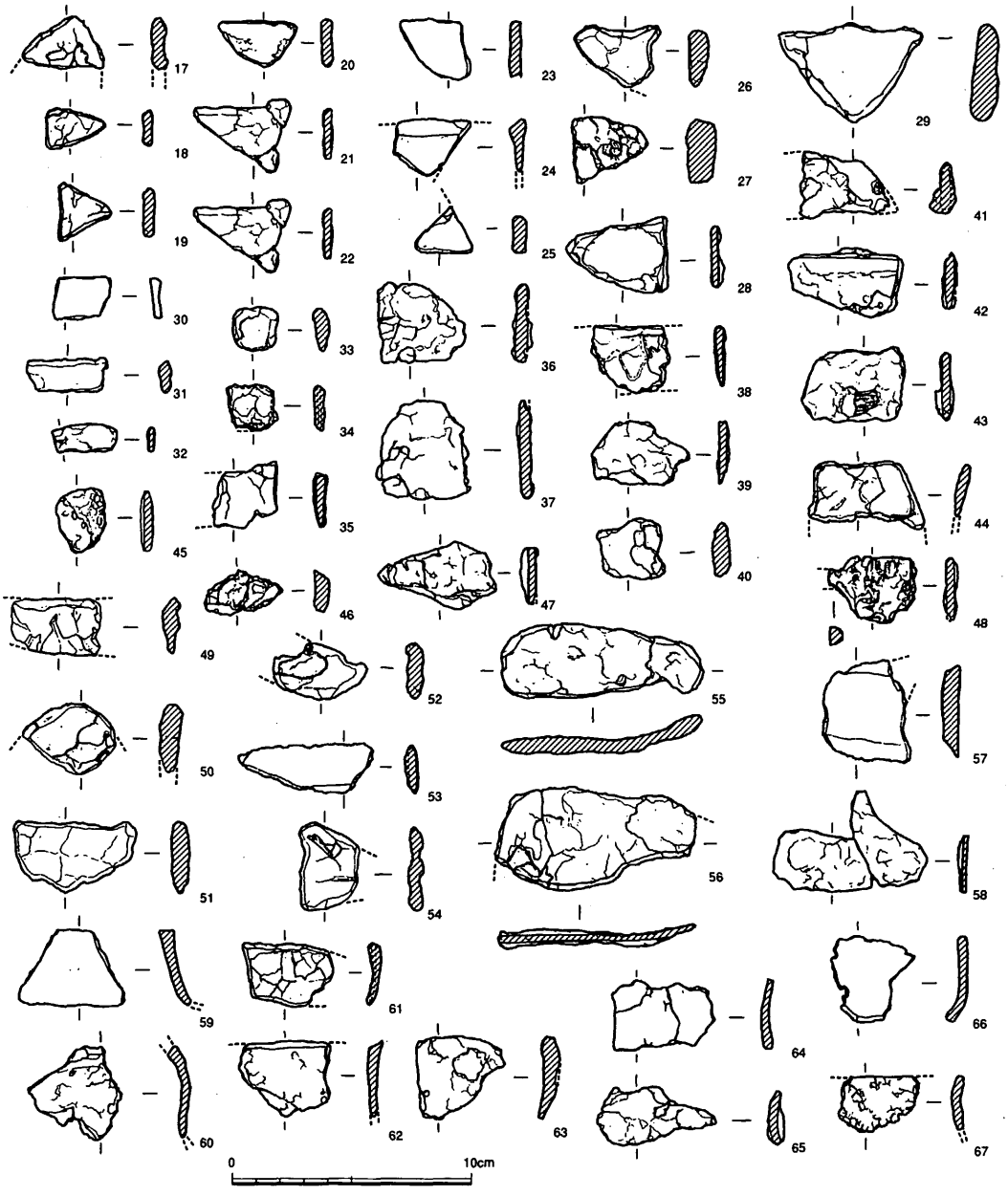


Fig.128　鉄製品実測図2（1/3）

20は3.2×1.9cm、厚さ0.4cmで、R13区茶色土層出土。21は3.5×2.7cm、厚さ0.3cmで、ごくわずかに湾曲しているようにも見えるが小片のためこれ以上の確認はできない。図の上端部は斜めに傾斜しており、当初面とみられる。47SK355出土。22は2.5×1.8cm、厚さ0.5～0.6cmで、47SX153出土。23は2.9×2.5cm、厚さ0.5cmで、図にないが横断面方向はわずかに湾曲しており、

椀や鉢のような容器状を呈していたものの断片とみられる。47SX447出土。24は3.2×2.4cm、厚さ0.3cmで、図上方に斜めにカットされたような面があり、元の製品の痕跡とみられる。47SK110出土。25は2.3×1.9cm、厚さ0.5～0.6cmで、47SX153出土。26は3.5×2.5cm、厚さ0.8cm（最大）で、47SX183出土。27は3.1×2.7cm、厚さ1.2cm（最大）で錆でかなり膨張したものと思われ、本来の厚さは定かでない。47SX424出土。28は4.2×3.2cm、厚さ0.3cmで、47SX356出土。29は5.9×4.1cm、厚さ1.1cm（最大）で、資料はやや湾曲している。47SK080出土。

30～44は略四角形を呈するもので、このうち30～34はかなり小さな破片である。各資料の周囲は破断面である。個別の情報は次のとおりである。30は2.4×1.7cm、厚さ0.3～0.4cmで、47SX335出土。31は3.3×1.4cm、厚さ0.4×0.5cmで、47SX392出土。32は2.7×1.2cm、厚さ0.2cmで、47SK080出土。33は1.8×1.8cm、厚さ0.6cm（最大）で、47SX425出土。34は2.1×1.8cm、厚さ0.4cmで、47SE165出土。35は2.7×2.7cm、厚さ0.3～0.6cmで、断面をみる限り当初の形状は刀子状のものであったと思われる。47SX457出土。36は3.3×3.6cm、厚さ0.4～0.5cmで、47SX356出土。37は4.1×3.9cm、厚さ0.4cmで、47SX457出土。38は2.3×3.2cm、厚さ0.3～0.5cmで刀子を破砕したものとみられ、図の下側が刃部にあたる。47SK245出土。39は2.7×4.0cm、厚さ0.3cmでかなり平滑な面をもった破片である。図左にみえる直線部分は当初面の可能性がある。47SK440出土。40は2.1×2.8cm、厚さ0.7cm（最大）で、47SK620出土。41は3.7×2.8cm、厚さ0.4cm前後で、47SK110出土。42は2.8×4.7cm、厚さ0.6cmで、薄く剥離しそれが再度重なっているため厚さの上ではやや膨張気味である。47SK495出土。43は3.1×4.2cm、厚さ0.3cmで表面の一部に木質が付着している。47SX341出土。44は2.8×4.8cm、厚さ0.4cm内外で、横断方向は若干湾曲している。47SK240出土。

45～48は不定形なものである。

45は2.7×2.1cm、厚さ0.3～0.4cmで、47SK275出土。46は1.9×3.2cm、厚さ0.6cm程度でやや厚めのものである。47SK235出土。47は2.8×4.9cm、厚さ0.6cmで、建物Cの柱穴g出土。48は2.8×3.6cm、厚さは0.3cmを測る。表面には木質が付着しているが、木目は図の向きで上下方向である。図左の茎部のように見える部分は錆とみられる。47SD270出土。

49～54はやや厚手ものをまとめた。

49は長方形になるもので2.4×3.7cm、厚さ0.7cm（最大）で、47SK010出土。50は2.9×3.8cm、厚さ0.7～0.9cmで、47SD175出土。51は3.0×5.0cm、厚さ0.6～0.8cmで、47SK110下層出土。52は2.3×3.9cm、厚さ0.7cmで、47SX131出土。53は2.1×5.6cm、厚さ0.5cm程度で、刃先のような形状を呈する。47SX525出土。54は2.6×3.7cm、厚さ0.6cm（最大）で、47SK110下層出土。

55・56は破片が大きくしかも湾曲しているもので、55は3.1×8.3cm、厚さ0.4～0.7cmで、47SE570出土。56は4.3×8.3cm、厚さ0.3cmで、47SX260出土。

57は図の上下辺近くが面取りされたような傾斜面を形成している資料で、3.6×4.3cm、厚さ

0.6cm前後を測る。47SX254出土。

58はきわめて薄い鉄板状製品で、縦横断面とも反りは観察されない。4.1×6.3cm、厚さ0.2cmを測る。47SX480出土。

59～67は資料が湾曲しているもので、破片になる以前は鉄鍋もしくは椀のような製品をイメージできるものである。55・56も破片の大きさは異なるがこれらと同類の可能性がある。

59は台形状を呈する上辺部分は当初面らしく平坦である。表面は平坦面で湾曲せず、下端部に至り折れ曲がる。傾斜辺はいずれも破断面とみられるが、すでに錆で覆われている。上辺1.5cm、下辺4.3cm、高さ3.1cm、厚さ0.3～0.6cmで、47SK455出土。60は不整形な破片で3.9×3.9cm、厚さ0.3～0.5cmを測る。図左にみえる直線部分は当初面らしい。資料は大きく波打ったようにゆがんでいる。47SK440出土。61は2.6×3.7cm、厚さ0.2～0.5cmで、47SK245出土。62は3.1×3.8cm、厚さ0.3～0.5cmで、平面的にわずかに湾曲しており鍋か鉢の口縁部片とみられる。断面図の上部平坦面が水平になるぐらいが本来の傾きと思われる。周囲の破損面は古く錆で覆われている。47SK275出土。63は3.4×3.6cm、厚さ0.3～0.7cmで、47SX473出土。64は2.9×4.2cm、厚さ0.2～0.4cmで、暗灰色土層（S15区）出土。65は2.4×4.8cm、厚さ0.3～0.4cmで、47SX356出土。66は3.5×3.4cm、厚さ0.3～0.4cmで、平坦部分は容器の底部とみられ、屈曲部分が体部との境目と考えられる。資料の残り具合から底径の計測は困難である。47SK385出土。67は2.3×3.3cm、厚さ0.4cmで、図上部が直線的になっているが、当初の面ではなく破損面と認

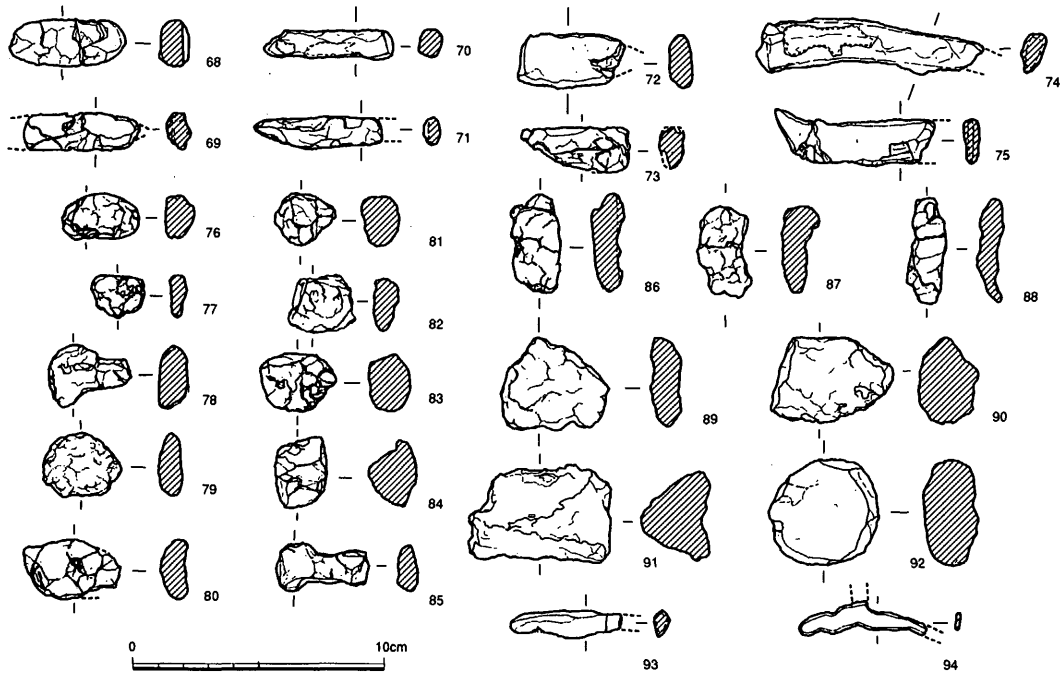


Fig.129　鉄製品実測図3（1/3）

識できる。47SK280出土。

68～75は形状にばらつきがあるが、棒状のものである。

68は砲弾状を呈し1.8×4.6cm、厚さ0.8cmで、47SX402出土。69は1.5×4.5cm、厚さ0.4～0.9cmで、47SK110出土。70は1.1×5.1cm、厚さ0.9cmで、47SX094出土。71は1.3×5.1cm、厚さ0.5cmで、47SD270出土。72は2.2×4.1cm、厚さ8.4cm（錆で膨張）で、47SK063出土。73は1.8×4.3cm、厚さ1.0cmで、47SX595出土。74は2.2×9.0cm、厚さ0.9cm（錆で膨張）で、47SX102出土。75は2.2×7.3cm、厚さ0.6cm（錆で膨張）で、47SX130出土。

76～85は不整形で厚みのある小鉄塊である。

76は1.8×3.1cm、厚さ1.1cmで、T18区の茶色土層出土。77は1.7×2.1cm、厚さ0.6cmで、図の右側は新しい欠損面である。47SK300出土。78は2.5×3.3cm、厚さ1.1cm前後で、47SK460出土。79は2.6×3.1cm、厚さ0.9cmで、47SX474出土。80は2.3×3.8cm、厚さ1.1cmで、47SX162出土。81は2.0×2.4cm、厚さ1.5cmで、47SX424出土。82は2.3×2.7cm、厚さ1.0cmで、図左右の各辺は破断面であるが、上下については当初面の可能性もある。47SX465出土。83は2.3×3.0cm、厚さ1.6cmで、47SX014出土。84は2.0×2.3cm、厚さ1.9cmで、47SK159出土。85は1.9×3.6cm、厚さ0.7cmで、一部が肥大化したように見えているが、資料の大半が錆の膨張によって形状を失っており、これが当初のものかどうかは明らかでない。47SX392出土。

86～88は不整形で縦長の小鉄塊である。

86は3.8×2.0cm、厚さ0.8～1.0cmで、特に図の裏面に当たる部分は錆により凹凸が著しく、当初の形状は知り得ない。47SX392出土。87は3.6×2.1cm、厚さ1.4cm（最大）で、わずかに湾曲している。47SK300出土。88は4.2×1.4cm、厚さ0.8cm（最大）で、47SK300出土。

89～92は大きめの鉄塊である。

89は3.7×4.3cm、厚さ0.9～1.2cmで、周囲はすべて破損面と思われるが厚い錆に覆われており、かなり古い破損であることがわかる。47SK300出土。90は3.5×4.8cm、厚さ2.3cm（最大）で、RQ1区の茶色土層出土。91は3.9×5.7cm、厚さ2.4cm（最大）で、三角柱状を呈している。47SK385出土。92は平面形がほぼ円形を呈するもので、径は4.2～4.3cm、厚さ2.2cm（最大）を測る。47SX098出土。

93・94は横長で不整形な鉄片で、93は1.1×4.4cm、厚さ0.6cm（最大）で、図右端から0.6cm付近までは茎部状になっており、図左側のやや肥大化する部分と対照的である。茎部を有する工具状のものの可能性がある。47SK400出土。94は蛇行する不定形な資料で、本来の形状は全く不明である。1.3×5.0cm、厚さ0.1～0.2cmで、47SK275出土。

以上見てきたように、鉄片のなかには本来何らかの製品であったものを故意に小さく破壊したとみられるものが多くあり、他の遺跡ではこうした資料がほとんど見出されないこととこの遺跡の性格を合わせ考えると、これらは鋳造に伴うインゴットとして当地に持ち込まれたもの

あるいは、不用になった製品を回収し当地で必要な大きさに破壊しインゴットとしたものと見なしたい。

銅製品（Fig.130～131）

鏡（1）　4.0×5.7cm、厚さ0.1cmの薄い破片で、周囲はすべて破断面である。鏡自体が平坦面ではなくわずかに波打っており、さらに断面近くは上下方向にゆがみがみられ、故意に引きちぎったようである。鏡面もかなり劣化している。鏡背面には陽刻の文様があり、中央に鳥文、周囲に草文（萩葉文あるいは水草文か）が見える。47SX498出土。

銅板片（2）　1.1×3.1cm、厚さ0.1cmで、端部は円弧を描くようであるがわずかに波打っている。また端部から0.7cmの間は平坦な面を作るが、それ以下は横方向の条痕が観察される。裏面も同様の位置以下が面取りされたようになっており、厚さも減少している。なお条痕部分も面取り部分も境目は波打っており、円弧は描かない。一見鏡の周縁部分を思わせるが別の製品も視野に入れる必要がある。P18・19区の茶色土層出土。

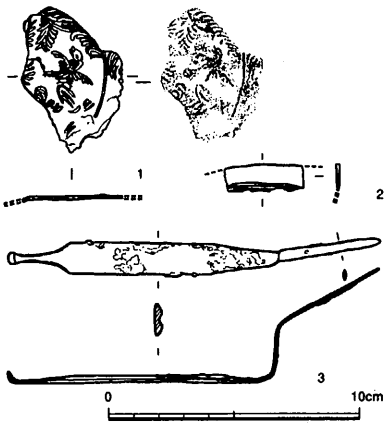


Fig.130　銅製品実測図（1/3）

笄（3）　先端は大きく折れ曲がるが、現存長14.8cm。いま一方の端部は耳掻きとなる。内側は平坦な面で構成されるが、外面は耳掻き部分から先端に至るまでわずかに湾曲する面を有する。その面で最も幅の広い部分に長さ4.5cm、幅0.4cm、深さ0.1cm（断面U字形）の長い楕円形を呈する溝を彫り込む。他に装飾はない。47SE145第III層。

銭（4～16）　4は「開元通宝」で、Q14区の茶色土層出土。5は「治平元宝」で、暗灰色土層（S15区）出土。6は「治平元宝」で、R18区の茶色土層出土。7は「元豊通宝」で、Q12区の茶色土層出土。8は「□豊通宝」で、47SX471出土。9は「□□元宝」で、T15区の茶色土層出土。10は「太平通宝」で、47SX425出土。11は「元祐通宝」で、排土中採集。12は「政和□宝」で、暗灰色土層（S15区）出土。13は「天聖元宝」で、47SX037出土。14は「□豊通□」で、OP11・12区の茶色土層

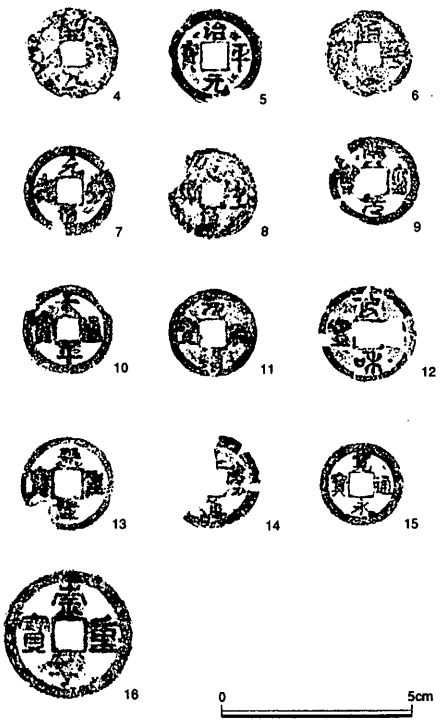


Fig.131　銅銭拓影（1/2）

出土。15は「寛永通宝」で、47SK217出土。16は径3.3cmと大きめのもので「崇寧重宝」。R15区の茶色土層出土。

鉱滓（Fig.132）

椀形滓（1～4）

1は9.2×9.1cm、厚さ4.0cm（最大）で、平面形は不整形な形状を呈するが周囲に破断面がなく、断面形状をみるときれいな曲面が見出されることから、椀形滓と見なしこれでほぼ完形に近いものと判断した。表面は中央部がやや窪み気味の滑らかな凹凸があり、小さな気泡が目立つ。47SE228出土。2は9.3×6.7cm、厚さ2.6cm（最大）で、平面形は不整形な形状を呈するが周囲に破断面がなく、断面形状をみるとやや小さな凹凸が見られるものの曲面がよく観察される。O17区茶色土層出土。3は図の左片のみが当初面だが、断面の形状から底部が丸味を帯びておりこれも椀形滓と判断しここで報告した。現存長5.9cm、現存幅3.3cm、厚さ2.2cm（最大）を測り、酸化して茶褐色を呈するが、表面には気泡が多数観察されるとともに木質の混入もある。4は8.3×5.6cm、厚さ2.9cm（最大）を測り、図の上辺が欠損するが断面形状をみると底部が見事な曲面を呈するものである。表面は凹凸が著しく、黒灰色を呈してガラス質になり気泡が目立つ部分がある。47SK500出土。

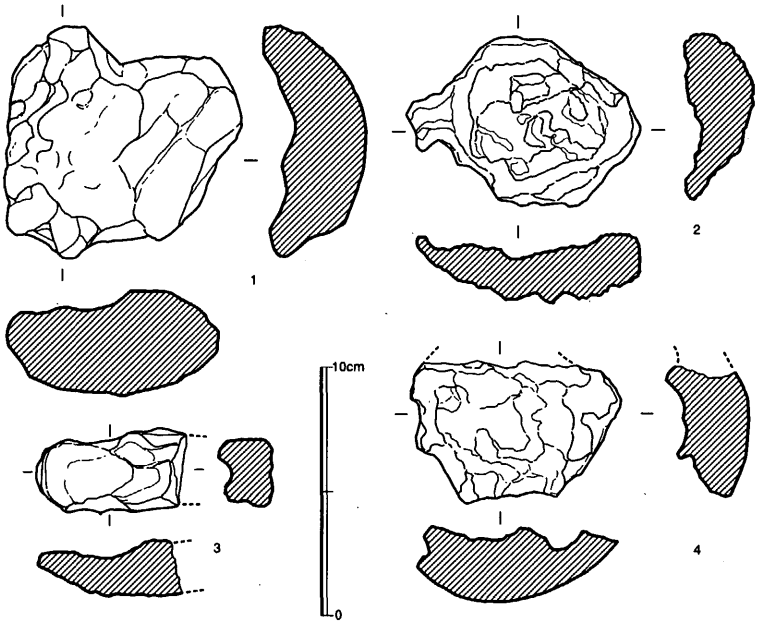


Fig.132　椀形滓実測図（1/3）

（F）石製品

（ア）滑石製品（FIg.133～135）

石鍋（1～19）　1は底部の資料で、底径21cm程度に復元できる。残存部中の2カ所に穿孔があり、うち1カ所に略円形を呈した鉄製の棒（径約0.8cm）が詰まっている。内外面ともに煤が付着している。47SX503出土。2は底径12.0cmで、体部にはケズリ痕がよく観察できる。外面には煤が付着しているが、大きく剥落した部分にも煤がみられ、早くから表面は使用によって

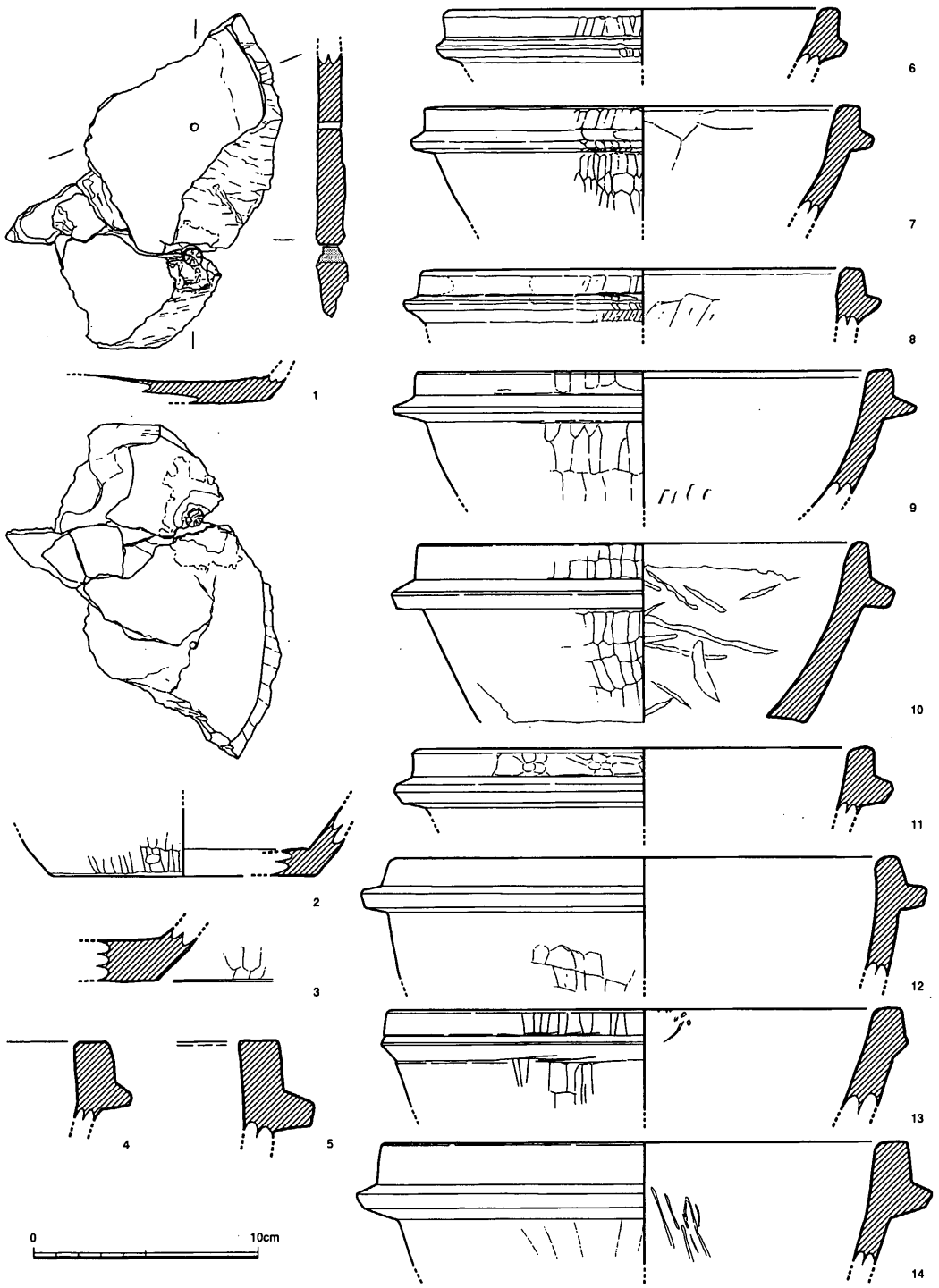


Fig.133　石製品実測図1（1/3）

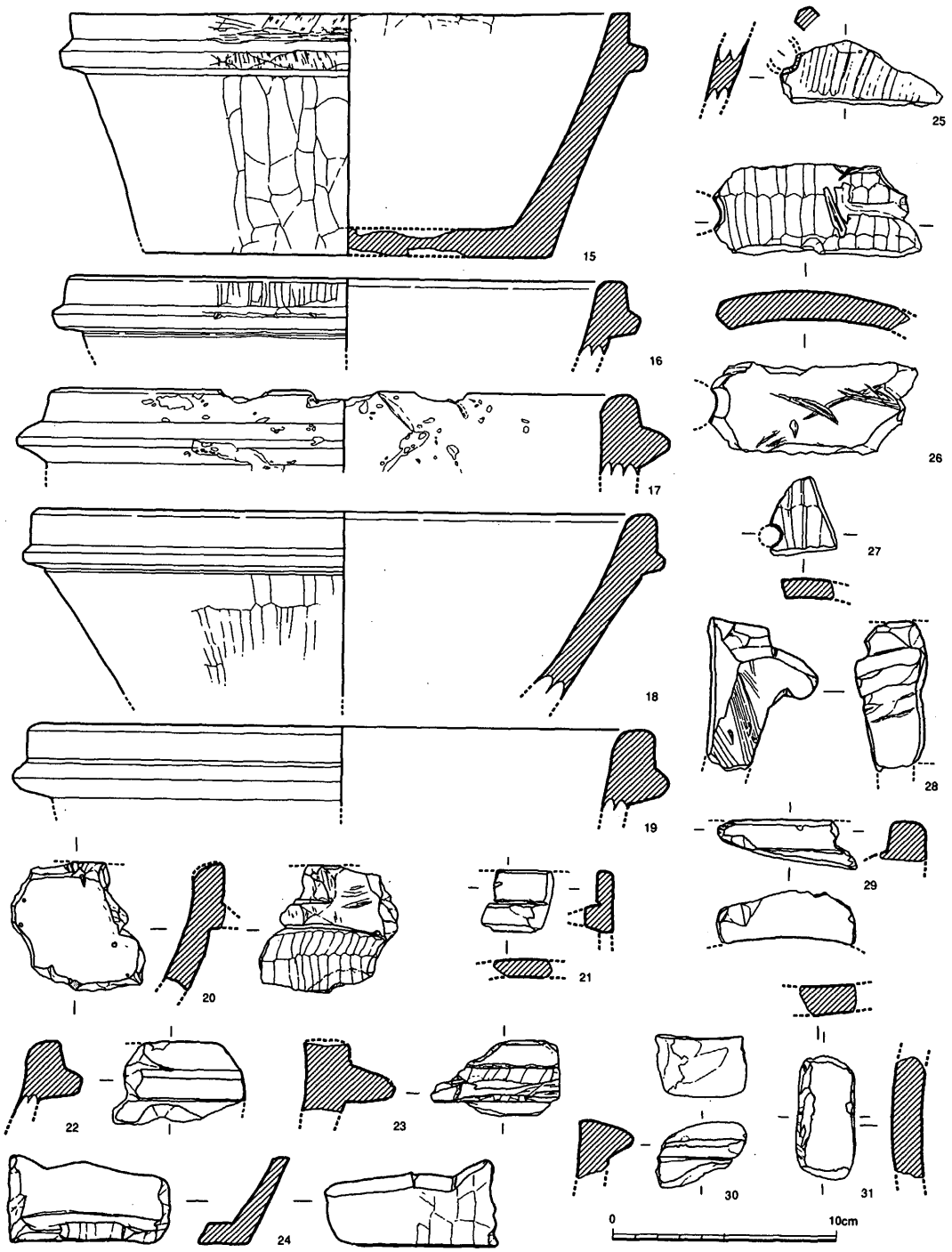


Fig.134　石製品実測図2（1/3）

劣化していたことが窺える。暗灰色土層出土。3は47SK550出土の底部片。4は口縁部片で、47SX536出土。5は47SX304出土。6～19は口径17.4～27.85cm。いずれも鍔が巡るタイプで、外面はケズリ痕を残し、内面は縦もしくは横方向に走る擦痕を残すものが多い。また外面には煤が付着している。これらの資料のうち10は底部近くの破断面を研磨しており2次的に加工する目的があったようである。15は底部まで残存する数少ない資料で、口径24.8cm、器高10.8cm、底径18.0cm。底部は平底で、内外面ともに火熱が加えられる使用方法であったためか劣化が進み、剥落が著しい。6は47SE570、8は調査区壁面清掃中に発見した資料、9は47SD307、12は47SK330、13は表土、15は47SK440、16は47SK110、17は47SK500、19は47SK560、7・10・11・14・18は茶色土層から各々出土した。

石鍋加工品（20～31）　20は口縁部付近の破片（5.7×6.0cm）を加工したもので、口縁端部を斜めに内側に削り込み、さらに鍔部分をすべて削り取っているが完成品ではなさそうである。。表面の随所に煤がふちゃくしている。47SX204出土。21は口縁部片を加工したもので、3.2×2.8cmの大きさ。鍔の下部のみ当初の形状を残すが他はすべて削り込まれている。破断面も図の右側以外は研磨されている。茶色土層出土。22・23はいずれも口縁部の破片で、図の右側の破断面を研磨する。未完成品か。22は3.5×5.8cmで、建物Bの柱穴j出土。23は3.1×5.7cmで、47SK275出土。24は底部の破片で3.9×7.6cm。体部の表面は未加工だが破断面の一部に2次的な加工（研磨）を加える。47SK330出土。25～28はいずれも体部に穿孔を有する資料である。まず25は2.8×7.1cmの破片で、四周は破断面のままである。穿孔は両面から穿たれ、推定で径1.8cm程度である。47SX587出土。26は3.9×9.2cmの破片で、推定径2.5cmの穿孔がある。47SX567。27は3.4×3.0cmで三角形を呈する破片で、径1.0cmの穿孔がある。内外面は鍋の時のままであるが、破断面のうち2面は2次的に削られている。茶色土層出土。28はほぼ全周が加工され、本来の形状をとどめるのは鍔下位の一部に煤が付着する範囲のみである。鍔の痕跡も大きく扱われており、その上位に径1cm余の穿孔がある。47SX547。29は2.2×6.2cmを測る鍋の口縁端部の残欠で、破断面のうち図の下面は研磨されている。茶色土層出土。30は鍔部分の破片で、2.6×4.0cm。鍔部上面は研磨されているが、鍋内面は当初のままである。茶色土層出土。31は5.6×2.6cmの体部片で、四周とも研磨される。茶色土層出土。

蓋状製品（32～38）　32は6.5×3.8cmで、片面に高さ5～8mmで幅広（破片のため全容不明）の摘み状の突起がある。端部の一方は加工後の製品としての面が残存しており、両面から削り込んで周囲が他より薄くなるように仕上げている。摘み状部分の裏側がわずかにくぼんでおり、鍋であったころの痕跡とみられる。茶色土層出土。33は高さ1.3cmの摘みが削り出されるもので、加工後の製品としての端部は、他より薄めに仕上げられる。47SD307出土。34は高さ1.1cmの摘みが削り出され、そこに径1cm余（中程では径5mm程度）の穿孔がある。47SK510出土。35は4.0×3.0cmの破片で半球状の摘みがあり、径3mmほどの穿孔がある。穿孔部の中程に

鉄芯が詰まっている。47SX368出土。36は鍋の鍔部分を加工したとみられる摘み部分で、径3mm程度の穿孔があり、内部には鉄芯が詰まっている。37は形状が水滴状を呈しているもので、摘みが削り出される。47SK514出土。38は高さ1.6cmの摘みを有するもので、径3mmほどの穿孔が斜めに貫通し、内部には何も残存しないが鉄錆の付着が観察される。47SK245出土。

温石状製品（39）　6.5×3.4cmが残存しており、当初は略方形状を呈していたと思われる。周囲はケズリによって仕上げられる。47SX436出土。

舟形状製品（40）　長さ6.3cm、幅2.9cm、厚さ0.6～1.2cmの不整形な舟形を呈するもので、鍋内面を平坦に研磨し、その中程に幅1mm前後の沈線で長さ3.85cm、幅1.4cmの舟形を刻み込む。裏面は鍋の面を残すが鍔部分が見事に削り取られており、その周囲は煤が付着したままで元の鍔部分が帯状を呈していることから認識できる。47SE228淡茶色粘質土層出土。

容器状製品（41）　長さ2.9cm、幅2.7cm以上、深さ0.8mmを測る方形の容器状を呈している。

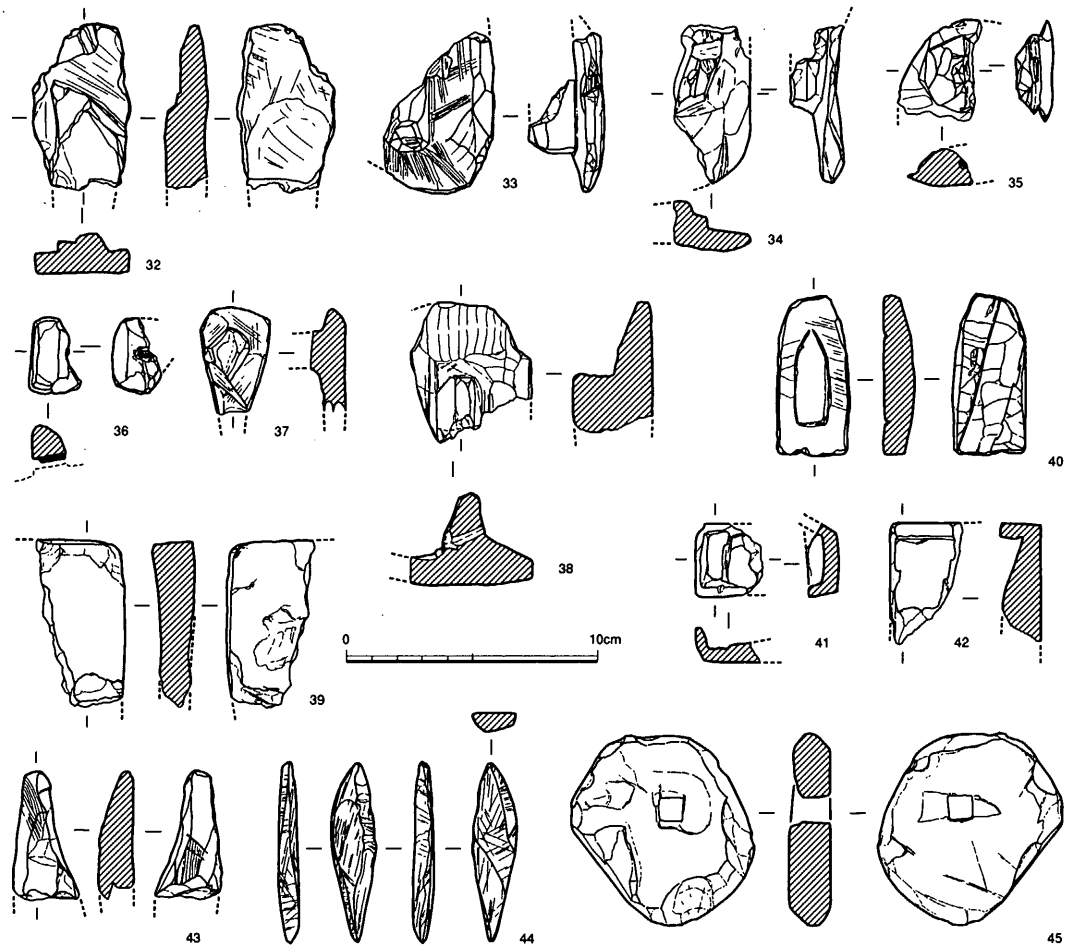


Fig.135　石製品実測図3（1/3）

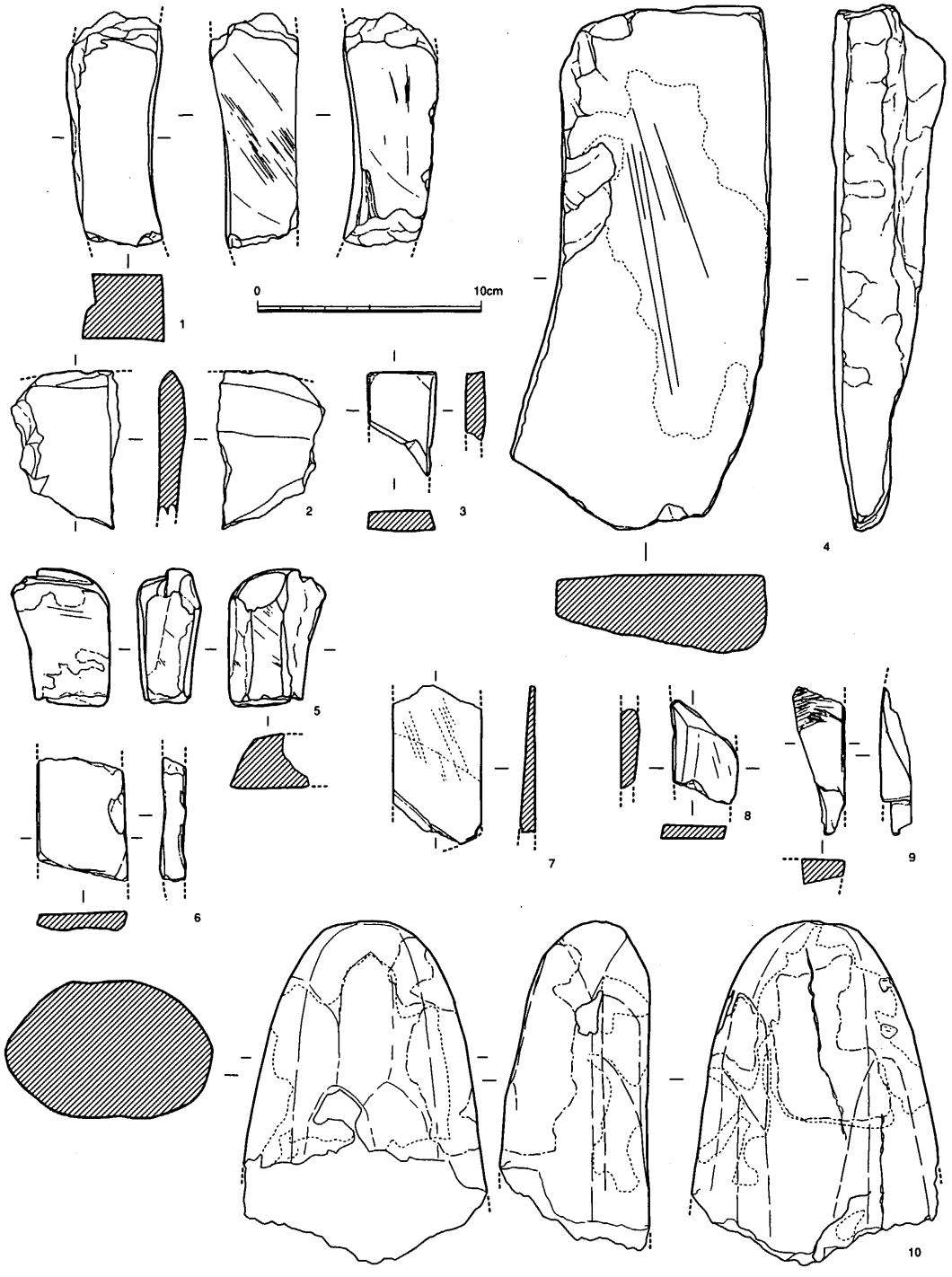


Fig.136　石製品実測図4（1/3）

47SK510出土。

硯状製品（42）　長さ4.8cm以上、幅2.9cm以上で、最大厚1.6cm。一見硯を思わせる形状を呈しているが、側面に枠がなくこれでは海部が全く機能しない。小型でもあり硯形とみるのが妥当かも知れない。茶色土層出土。

剥片加工品（43・44）　43は5.0×2.6cm、厚さ1.4cm。47SK240出土。44はナイフ形を呈するもので、長さ7.1cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm。47SK485出土。

円盤状製品（45）　7.5×7.3cm、厚さ1.7cmで不定形な円形を呈している。中央付近に一辺0.9cmで方形の穿孔がある。周囲は図左側の面が打ち欠き、その裏面では研磨である。茶色土層出土。

（イ）その他の石製品（Fig.136）

砥石（1～9）　1は砂岩製で長さ10.3cm、幅3.5cm、厚さ2.9cm。上下両端は欠損している（これを人為的な欠損面とみると非使用面となる）。残る4面のうち3面は使用面で研磨によって平滑になっており、細かな擦痕も多数観察される。他の1面は粗いケズリ調整で非使用面である。47SK190出土。2は7.0×4.7cm以上、厚さ1.1cm。3面は破断面だが残る1面は両面から削り込まれ刃部状を呈している。砂岩製で、47SK510出土。3は長さ4.5cm以上、幅3.0cm、厚さ0.9cm。図の下半は欠損するが他は使用面で、小口面も丁寧に研磨されている。安山岩製とみられ、47SX526出土。4は長さ23.0cm、幅9.2～9.7cm、厚さ2.2～5.0cm。資料の両小口部分は自然面であるが凹凸は少なく、両側面は打ち欠きによる成形がなされ、部分的に研磨して面を整えている。裏面は凹凸が著しい自然面である。このことから本資料はほぼ完存するものと理解され、砥石としての使用面は1面である。砂岩製で、47SE521出土。5は長さ6.0cm、幅3.3～4.2cm、厚さ2.4cm。両小口部分が自然面、他は1面が欠損するほかは使用面である。47SK058出土。6は長さ5.0cm以上、幅3.8cm、厚さ1.0cm。上下端は欠損、1側面と表面が研磨面、残る1側面は粗く削る程度の調整で終わる。裏面は自然面のままである。47SK300出土。7は長さ7.0cm以上、幅3.9cm、厚さ0.2～0.6cm。上下両小口部分は欠損するが、残る4面は研磨され、使用面とみられる。表面には多数の擦痕が観察できる。47SD270出土。8は長さ3.6cm以上、幅2.8cm、厚さ0.6～0.8cm。両小口部分は欠損しているが、他は研磨面である。47SK400出土。9は2面が辛うじて残存する資料だが、表面には細かな擦痕が観察できる。47SX195出土。

10は長さ15.1cm以上、幅10.7cm、厚さ6.5cmの砲弾状を呈するもので、表面は火熱を受けて変色した部分が多数あり、一部は煤が付着している。石自体には特別な加工痕もなく自然石である。暗灰色土層出土。

4、小　結

(1) 遺構の年代

今回の調査で検出した遺構からは、各種生産道具類の他に、土師器、瓦質土器など在地生産と考えられる製品、東播系須恵器、常滑系陶器、備前系陶器などの国産陶器、さらには中国産、韓国産陶磁器も多種出土しており、鋳物工房の生活を考える上で貴重な成果を納めることができた。ここではこれら遺物が有する年代的な位置付けについて考えてゆく。

出土遺物の有する年代には、様々な要因が重なり、積極的に主張できる年代から、消極的な主張に留まらざるを得ない年代の両者が存在している。今回出土した資料群には、直接的に年代を示す紀年銘資料は存在していない。また広域流通品である国産陶器の中にも、紀年銘資料と共伴したものは東播磨系須恵器の中の一型式のみが有しているだけである。これとて二次共伴資料であることから、型式の存続幅にどれほどの時間幅を見込めるのかは前後型式の存続幅から検討するしか方法はないものと考えられる。

したがって年代を推定する方法として、土師器坏aおよび小皿aの法量変化に注目し、付加条件として様相比較に基づく年代推定を行う。各遺構から出土した遺物の定性分析結果は、「出土遺物一覧」(付録のCD内に格納) に記載されており、そちらを参照していただきたい。

出土した遺物から47次調査で検出された遺構は、大きく平安後期と鎌倉末期～室町初期および室町期以降の3時期に区分できる。ただし出土遺物のみからは大宰府III期に位置付けられる奈良期の遺物も散見され、さらに隣接する111次調査地では古墳期の遺物もみられることから近隣における古代以前の生活痕跡が埋没している可能性も窺える。

ここでは47次調査地で検出された遺構の時間軸上での位置付けを、先の三時期に区分して考えてみる。

I期：平安後期～末期

平安後期に位置付けられる主な遺構には、47SE600があり、他の遺構としても47SX067・47SX412・47SX414・47SX427などがある。当該時期に埋没したと考えられる遺構は、検出された遺構数から見ると極めて少ない。井戸が確認できていることから生活空間としての土地利用を考え得るものの、遺構数の少なさから判然としない。47SE600は土師器丸底杯a、華南産白磁の出土から大宰府XII期、他の4遺構はXV期を埋没時期として考えられる。

II期：鎌倉末期～室町初期

この時期に埋没時期を想定できる遺構数は、検出された遺構の大半が属しており、鋳造工房としての隆盛期として考えることができる。この時期を特徴づける遺物として、龍泉窯系青磁椀I-5-b類、III類、白磁椀IX類、皿IX類などがあり、大宰府F期に属するものと考えられる。輸入陶磁器の出土傾向では、上記製品が主体を占めており、僅かに次期様相としてのG期製品で

Tab.1-1　鉾ノ浦遺跡出土土器の様相（1）

様相	遺構番号	土層	遺構種別	土師器					
				坏	坏【ave】	小皿a	小皿a【ave】	小皿b	小皿b【ave】
II-1期	591		土坑	13.40	13.40	9.0～9.2	9.10		
	040		土坑	12.4～14.0	13.20	7.50			
	240	灰色土	土坑	13.0～13.2	13.13	7.8～8.6	8.20		
	200	最下層	鋳造土坑	13.00	13.00				
	010		土坑	11.8～15.4	12.95	7.4～8.6	8.15		
	190	下層	鋳造土坑	12.6～13.0	12.80	8.0～8.6	8.30		
	245		土坑	12.4～12.8	12.70	7.8～9.2	8.40		
	230		土坑	12.6～12.8	12.70	8.0～8.2	8.10		
	190	上層	鋳造土坑	12.2～13.8	12.68	8.0～8.6	8.44		
	385		土坑	12.2～13.0	12.66	8.60	8.60		
	275		方形竪穴状遺構	11.8～13.5	12.65	7.6～8.4	8.05		
	550		土坑	12.3～12.9	12.60	7.6～8.7	8.01		
	058		土坑	12.60	12.60	6.9～7.6	7.25		
	495		土坑	12.1～13.6	12.58	7.4～8.7	8.20		
II-2期	378		土坑	12.50	12.50	8.60	8.60		
	053		土坑	12.2～13.2	12.50	8.2～9.0	8.47		
	555		土坑	11.7～13.0	12.48	7.2～8.0	7.45	6.60	6.60
	350		土坑	12.40	12.40				
	110	上層	土坑	11.7～13.0	12.39	7.4～8.8	8.04		
	300		土坑	12.2～14.0	12.33	7.6～10.0	8.04		
	450		土坑	12.0～12.6	12.33	6.7～9.4	7.85	6.80	
	240	底	土坑	12.2～12.4	12.30	8.00	8.00		
	455		土坑	12.20	12.20	7.4～8.6	8.00	6.80	6.80
	355		土坑	11.8～12.6	12.20	7.80	7.80		
	110	下層	土坑	11.6～12.8	12.19	7.5～8.7	7.90		
	110	II層	土坑	11.9～12.2	12.10	7.8～8.2	8.00		
	285		土坑	11.8～12.3	12.07	7.8～8.5	8.01	7.20	7.20
	440		土坑	11.4～12.6	12.04	7.6～8.5	8.02	7.60	7.60
	420		土坑	12.00	12.00	8.0～8.1			
	434		土坑	11.2～12.6	11.97	7.1～9.0	8.10	6.3～6.8	6.55
	395		土坑	11.7～12.2	11.95				
	155		鋳造土坑	11.90	11.90				
	240	埋土	土坑	10.8～13.0	11.85	7.2～8.8	8.18		
	510		土坑	11.6～13.6	11.80	7.4～8.6	7.97	7.00	7.00
	500		土坑	11.2～12.0	11.67	7.2～8.8	7.95		
	110	暗灰褐色土	土坑	11.60	11.60	7.5～8.4	7.93		
II-1期	050		土坑			8.70	8.70		
II-2期	280		土坑			8.1～9.0	8.44		
	360		土坑			8.0～8.6	8.33		
	560		土坑			7.8～8.5	8.18		
	524		土坑			8.00	8.00		
	221		鋳造土坑			7.7～8.0	7.83		
	320		土坑			7.80	7.80		
	502		土坑			7.7～7.8	7.75		
III期	121		土坑			7.60	7.60		
	156		鋳造土坑			7.60	7.60		
	330		土坑			7.40	7.40		
	470		土坑			7.40	7.40		

Tab.1-2　鉾ノ浦遺跡出土土器の様相（2）

様相	遺構番号	土層	遺構種別	土師器					
				坏	坏【ave】	小皿a	小皿a【ave】	小皿b	小皿b【ave】
II-1期	530		井戸	11.4～16.4	16.03	7.4～8.2	7.68		
	145	第III層	井戸	13.80	13.80	7.4～8.2	7.80	6.80	6.80
	145	第I層	井戸	12.4～14.0	13.29	7.6～8.6	8.10		
	227	灰茶色粘質土	井戸	12.2～13.1	12.70				
	521		井戸	12.0～13.4	12.60	7.4～8.8	8.19		
II-2期	227	灰茶色粘質土下層	井戸	11.6～13.6	12.31	7.1～8.6	7.74	7.0～8.0	7.69
	227	暗灰色粘質土	井戸	11.1～12.8	12.17	7.4～7.7	7.55	8.00	8.00
	165		井戸	11.7～12.6	12.04	7.2～8.1	7.78		
	227	粘土層（底）	井戸	11.6～12.2	11.83	8.40	8.40	7.50	
	475		井戸	11.60	11.60				
	305		井戸			9.00	9.00		
	227	埋土	井戸			8.20	8.20		
	170		井戸			7.80	7.80		
III期	570		井戸			7.60	7.60		
	228		井戸			7.60			
II-1期	建物C		掘立柱建物						
	建物G		掘立柱建物			8.0～8.05	8.03		
II-2期	175		溝	12.9～13.2	13.05	8.00	8.00		
	270		溝	11.80	11.80	7.8～8.2	7.93		
II-2期	185	上面	埋納遺構	12.0～13.5	12.75	7.80	7.80		
	185		埋納遺構	11.95～13.1	12.53	8.0～8.3	8.15		
	160		埋納遺構	11.9～12.4	12.13	8.15～8.3	8.23		
II-2期	150		溶解炉						
	180		溶解炉						
	250		溶解炉	11.60	11.60				

ある龍泉窯系青磁IV類や象嵌青磁が出土しており、若干時期が下降するものも見受けられる。

多くを占める大宰府F期に位置付けられる遺構群の中で、共伴ないしは一緒に出土した土師器坏a、小皿aに法量変化および小皿bの共伴の有無が看取でき、この差異から二様相に便宜的に細分した（Tab.1）。

II-1期

土師器坏a（口径12.5cn以上13.5cm）、小皿a（口径8.5cm前後）、小皿bの欠如。

II-2期

土師器坏a（口径11.5cm以上12.4cm）、小皿a（口径8.0cm前後）、小皿bあり。

これら二期の中で、口径の大小によって細分できる可能性が認められるが、ここでは可能性の指摘にとどめておく。これら二様相は、大宰府XVIII期およびXIX期にそれぞれ対応している。現在、各様相に付与されている推定年代は、大宰府XVIII期が13世紀後半、XIX期が13世紀末から14世紀初頭が付与されているが、食器様相と実年代観について、以下に若干の検討を行う。

この時期の様相への実年代を付与する資料としては、大宰府史跡109・111次SD3200（九州歴史資料館、1989）および大宰府史跡130次SD3840（九州歴史資料館、1993）がある。いずれも

紀年記載資料が伴出しており、食器様相の分析とともに実年代が付与できる基準資料として取り扱われてきた。大宰府史跡109・111次SD3200は、土師器坏a、小皿aとともに小皿bが安定的に出土し、さらに伴出する陶磁器は龍泉窯系青磁IV類が安定的に出土するなど大宰府XIX期の資料として位置付けられてきた。一方大宰府史跡130次SD3840は、土師器坏a、小皿aが安定的に出土しているのに対し、小皿bが僅かに出土している。輸入陶磁器については、絶対量が乏しく直接的な比較はできない。これら両者の様相からみて、大宰府史跡130次SD3840が先行し、大宰府史跡109・111次SD3200が新規様相であると考えられる。しかし伴出している紀年記載資料をみると、様相上古相と考えられる大宰府史跡130次SD3840には元亨三【1332】年記載木札が伴出し、新相と考えられる大宰府史跡109・111次SD3200には嘉元二【1304】年記載卒塔婆が伴出している。したがって様相上から導かれる前後関係と、そこに付与される実年代観に逆転現象が生じることになり、その真偽について前後様相を含めた出土遺物の詳細な定性分析による詳細な検討が必要となってくる。ここでは紙数の関係から詳述することはできないが、端的に述べると紀年記載資料の有する資料有効性に還元できるものと考えられる。言い換えるならば、造立期間を考慮しなければならない卒塔婆と記載年号と埋没時期に一定の期間を考慮しなくてもよいと考えられる木札との差が、食器様相変化に矛盾をきたす原因となっているものと考えられ、新規様相へ古期の卒塔婆が混入したと解することで、後出する様相への変化がヒアタスなく理解が可能となる。

では47次調査にて検出できた遺構の廃絶時期を考える手がかりとしては、土師器坏a、小皿aの法量および小皿bの存否、さらに陶磁器様相F期であるのかG期であるのかを考えた場合、2期とした遺構の食器様相は大宰府史跡130次SD3840出土食器相に近似しており、当該時期に廃絶した遺構群として考えられる。実年代としては元亨三【1332】年が一定点をなすが、初現を考える資料群の抽出ができていないことから、学史上述べられている13世紀末ごろを想定しておく。1期については、定点把握ができないことから、やはり学史上の期間を想定しておく(1)。

検出された遺構の廃絶年代をTab.1に整理しておいた。

遺構埋没時期からみた傾向としては、1期および2期の二時期にそれぞれ廃絶した遺構があるが、1期に比して2期に廃絶した遺構が多いことから、操業開始期を1期の存続期間のどこかに求め、次期様相下において工房としての隆盛期を迎え、その後急速に廃絶していったものと考えられる。後述するIII期に入ると工房に関わる遺構の確認はなされず、実年代観のみからいえば50年から80年程度の操業期間が想定できることになる。

III期：室町期以降

先の土師器供膳具の法量に合致せず、縮小化が進んだものを出土した遺構がある。具体的には47SK121、47SK156、47SK330、47SK470があり、いずれも小皿a単体の出土であることから様相として提示するまでには至っていない。これら小さい法量の小皿とともに瓦質摺り鉢が出

土しており、先述したII期より新相を呈するものと考えられる。具体的な年代については、年代付与資料の検討が行えていないことから、判然としないが、小野分類染付椀B群が47SX085から出土していることを考えると14世紀末から15世紀にかけてのどこかに下限を求めることが可能と考えられる（小野、1982）。これは、隣接する111次調査地においても15世紀代に位置付けられる常滑系大甕が廃棄された土壙が検出されていることから傍証できる。

【引用文献】
九州歴史資料館（1989）『大宰府史跡　－昭和63年度発掘調査概報－』
九州歴史資料館（1993）『大宰府史跡　－平成４年度発掘調査概報－』
小野正敏（1982）「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究　No.2』

(1) 大宰府史跡130次SD3840出土食器様相を、木札が示す元亨三（1332）年まで下降させた場合、後出様相である大宰府史跡109・111次SD3200および大宰府史跡45次SX1200フショク土出土食器様相の実年代観も同時に下降することになる。後者の食器様相は14世紀前半に沈没したとされる新安海底沈没船出土様相に近似するとされていることから、実年代観の下降は安易には行えない。この問題については、国内における広域流通品の共伴事例の検討を踏まえて詳述し別稿を用意したい。

(2) 遺跡の構造

民俗例などからみて鋳物生産には次のような施設が必要である。工場は生活空間（母家・職人宅）と作業空間に大別され、作業場は鋳型や炉の製作、道具づくり、溶解炉と鋳造施設、製品や材料置場、倉庫などに分かれる。そしてこれらの規模の程度や使用する道具の数量は、生産力の高低を示すものと思われる。また、定着的な大型の工場は施設が数ブロックに及ぶ場合もあるが、出吹きと称して職人が鋳物需要地に出かけて行き、臨時的に仮設的な作業場を設ける場合もある。

さて、検出された遺構は建物跡、柵、溝、鋳造施設（炉、鋳造土坑）、工作用土坑（方形竪穴遺構47SK275）、廃棄用土坑（47SK110・240ほか）、井戸などである。これらの遺構は1セットで一つの作業場ブロックに検出される傾向にあり、全体では数ブロックの集合した大型鋳造工場と解釈できる。また遺構は調査区の全体に分布するが、調査区東側では疎らになる。地形的には東が高く西に低くなり、東側は花崗岩風化土の地山が露見していることから後世に削平を受けている可能性も残される。ただし東端の井戸47SE227の深さは3m余りあって、これは調査範囲中のどの井戸よりも深いことを考慮すると極端な削平を受けたとは考えられない。したがって東側の遺構が疎らである状況は、遺構分布の東の限界を示すものと考えたい。

ところで先に指摘したブロックは概ね南北の溝によって区画されていると考えられ、今次の

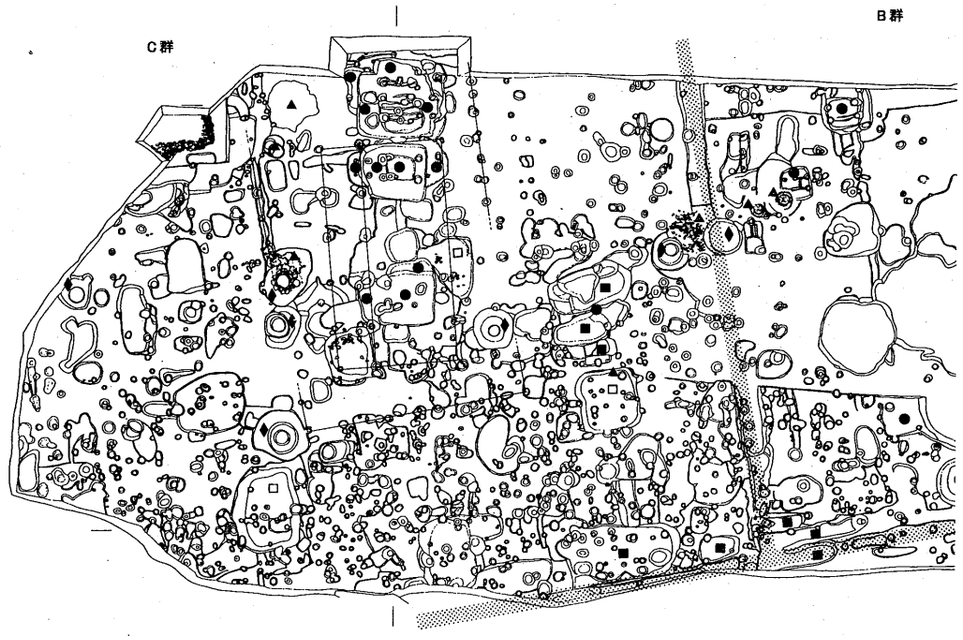


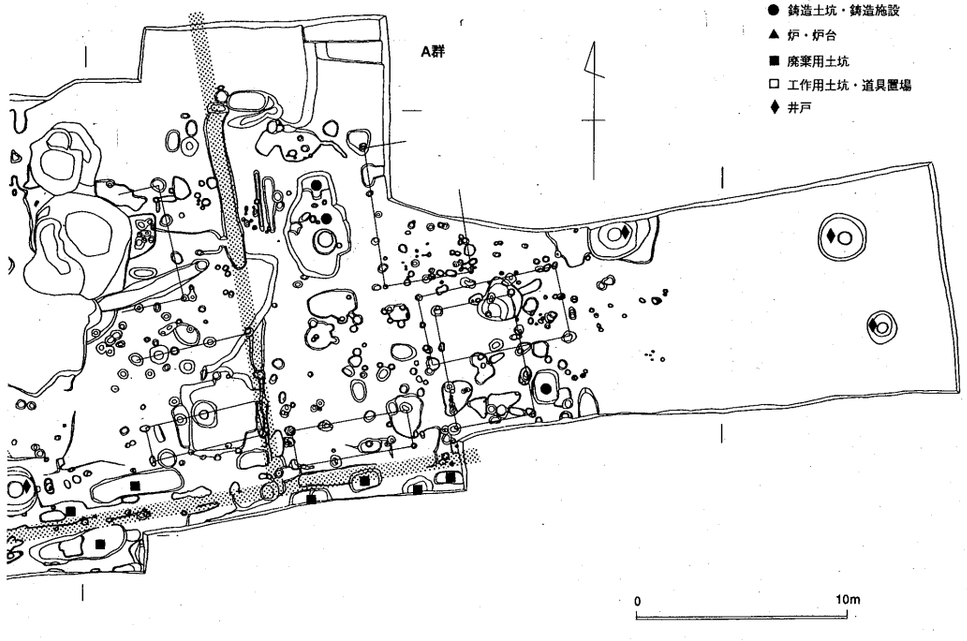
Fig.137　鉾ノ浦遺跡生産関連遺構配置図

調査区では47SD029・030、47SD175・270の溝を境として大きく3つのブロックに分けることが可能である。ここではこのブロックを仮に東からA・B・C群と呼称する。なお東西溝47SD061・066等によってさらに南にある未知のブロックと分離されているが、C群ではそれが不明瞭である（調査区外にある可能性が高い）。今回はこの溝以南については言及しない。

（A群）

47SD029・030以東、47SD061以北の空間を指す。遺構密度の高い範囲を捉えると東西幅は概ね20m程度となる。遺構の削平が考えられるより東側に関しては、連続するか否かを決定できる要素が全くないため、ここでは一応除外し遺構分布の濃密な部分で検討しておく。

まず区画西側に重複した鋳造土坑47SK020・460があり、020が新しい。明確な炉跡は確認できていないが、他のブロックの状況を考慮すると鋳造土坑の近くに設置されたものと思われる。区画南東隅と考えられる位置には土器や灰とともに大形鍋の鋳型が出土した47SK230があり、何かの作業用土坑と捉えることができよう。掘立柱建物は鋳造土坑の東側と南側にあり、東面に庇を有する中形の建物Cのほか小形の建物が多く、しかも重複がみられることから少なくとも2時期以上に区分することが可能である。ただ建物の振れは細かな数値の上では一定しないが、概ね北で西にわずかに傾く傾向は一致している。さらに溝47SD061と066は重複関係にあるがほぼ同様の位置や振れを踏襲している。



このうち47SD066は茶色土層上面から切り込んでいることが確認できており、鋳造工房が廃絶したのちもこの段階の区割りは残されていた可能性が強い。

（B群）

区画の中央に大きな撹乱があり詳細は知り得ないが、東を47SD029・030、西を47SD175・270・307で区画されるものと考えられる。西を限る47SD270は茶色土層上面から切り込むことが確認されており、鋳造土抗群が存在する時期の区画は47SD307とみるのが妥当であろう。ただA群同様に時期が下っても区画は踏襲されていることが窺える。南は先述の東西溝47SD066の延長部分がありこの付近が南限とみられる。さらに東西方向に軸を有する土坑群（47SK245ほか）が47SD066に重複して存在し、しかもこの付近に集中しており、区画の南辺部分に廃棄施設が集められたことがわかる。したがってその規模は東西21m、南北方向はさらに北に延びるが判明する範囲で22m以上となり、面積は460m²以上を測る。

建物は東側に集中して検出されたが、いずれも小規模なものである。これらもA群同様に溝の振れに近似して若干北で西に振れており、一連の遺構であることが理解できる。

さて工房の中枢をなす部分は区画の北西部分で、鋳造土坑2基、炉跡2基、土坑などが検出され、鋳造土坑47SK090からは多量の梵鐘鋳型が出土した。この鋳造土坑に近接して炉跡47SX580があり、そのすぐ南側に埋土上面に2条の溝を有する土坑47SK601が存在する。一つの

作業単位を考える上で重要な一群と言える。また炉跡47SX100は鋳造土抗47SK090廃絶後に構築されたもので、位置関係を考慮すると距離的な問題は残るが鋳造土抗47SK605と関係するものと考えられる。

さらに群内中央南寄りで検出された鋳型集中地点47SX260は、仏像の光背を思わせる鋳型が遺構面上に集中して広がるように検出されたもので、大型で平面的な製品の鋳造方法を示唆するものである。

（C群）

東側は先述の47SD175等で区切られるが、西側は調査区の外にまで延びているようで、その規模は35m以上ということになる。南側は47SK355が東西方向に長く穿たれるものだが約半分を検出したのみで詳細は不明なままである。しかしその方向性はこれまで見てきた溝や建物、廃棄土抗等が示す方位に近いものであり、一連の施設と見て差し支えなかろう。したがってC群の南限は概ねこの付近に求められ、南北は27m以上の規模となる。これを総合すると面積は945m²以上という広大なものとなり、今回検出できた区画中で最も大きなものということなる。

さて、区画内部の様相だが、区画中央北寄りに鋳造土坑3～5基が重複し、かつそれらが南北に並んで検出された部分がある。最も北側の集中部分では5基が重複し、そのすぐ南側に接して4基が、そこから少し空間をおいて南側に3基が重複して構築されている。これらの鋳造土坑は一辺1.5～3.5mの隅丸方形を呈し、深さは0.3～0.5mを測る。土坑底部には並行する小溝2条ないしは方形の浅い窪みが認められ、その四隅には円形できわめて浅いピットがある。溝や窪みは掛木の痕跡とみられ、ピットは掛木を紐や縄で固定する際に手を通すためのものと理解できる。また土坑内の堆積土層の詳細が観察できた47SK200では1～4層が鋳造終了後に埋没した土層で3層に鋳型が集中して検出されている。これに対してその周囲で確認した5～9層には鋳型はほとんど含まれず、鋳造前に掛木や定盤を固定するための裏込め土と理解できる（Fig.10参照）。

鋳造土坑群の西側には炉跡が3つ切り合った47SK380A・B・Cがあり、鋳造土坑の切り合い数に類似しており興味深い（ただし同一個体が破損して片付けられたものの可能性もある／本文中に指摘）。炉跡の南側に近接して長方形土坑47SK218がある。この配置はB群の47SK090・601・47SX580の関係と類似しており注目される。この長方形土坑はその位置関係から踏鞴と予想されるが、検討の余地も残っている。またこれらのすぐ北側には炉床と考えられる焼成硬化面47SX610があり、さらに井戸47SE145に重複して炉壁が集中して検出された地点47SX150があり、これも炉跡とみてよさそうである。鋳造土抗群の集中する群が3箇所あるのに対応するような配置であり、ここにも注目しておきたい。

さらに鋳造土坑群の中程には鞴羽口が集中して出土した土坑47SK440があり、羽口は並んだ状態で出土していることから備品管理用の土坑の可能性がある（ただし完存する羽口はなく、

途中で折れているものばかりである)。

また廃棄用とみられる土坑は区画中程に大きなものがあり、47SK110・240・280の3基が南北に並んでいる。とくに47SK110・240は炭や灰が南側から多量に捨てられているのが観察され、同様の堆積が複数回繰り返されている点にも注意しておきたい。また方形竪穴遺構47SK275は深さもあり床面で検出されたピットはおそらくこの土抗に伴うものと理解でき、子細にみるとやや軸を振るが土抗内にピットが2列に並ぶことが分かり、土抗内に柱があり屋根が被っていた可能性も考えられる。何らかの工作用土坑の可能性があろう。さらに47SK550では灰と粘土が多量に検出され、これの備蓄に利用された土坑と考えられよう。

この土抗の検出前(上面)には壊れた炉跡とみられる47SX250があり、そのすぐ北側には残存状態はよくなかったが鋳造土抗47SK190が検出されている。区画内ではやや南に寄っているが、炉と土抗のセットと認定できればここにも1箇所の鋳造施設が見いだせることになる。

さらにこの区画内の南半部分は小ピットに混じって浅めの土抗がいくつか検出されている。この中で47SK550としたものは土抗内に粘土塊が集中して残存しており、粘土を貯蔵したものとみられる。

建物は区画北側にあり、西側に庇の付く建物Iは鋳造土抗群を覆っておりおそらく深く関係する建物と思われる。しかも炉の集中する西側に面して庇があることも注目しておく必要がある。また一連の鋳造土抗全体を区画するかのように柵(柱列)が3条確認できている(建物H)。このうち建物H-1とした鋳造土抗の西側に見られるものは、47SD147溝埋土上面に小ピットを並べるもので、溝とともに建物の下部構造の一部と見なされ、生産関連遺跡で見受けられる方形に溝を巡らせた建物と構造の類似性が指摘でき、炉跡に接するように検出された点も見逃せないだろう。このほか小ピットの存在から区画南側にも建てられていたようであるが、具体的な復原はできていない。

こうした点を踏まえて鉾ノ浦遺跡全体を検討したところ、次のようなことが判明したので列記する。

(ア)全体は溝などで区画されたA・B・C群のブロックに分けられ、東西に並ぶ。A・B群は東西20m、南北27m以上の長方形の範囲を持つ。これに対しC群は範囲が広く遺跡の中心部と思われる。このように当該遺跡は、作業場が数ブロック集合した大型鋳造工場と考えられる。

(イ)各ブロック内には炉、鋳造土坑、長方形土抗、工作用土坑、廃棄用土坑(ゴミ捨て)、井戸、作業場、柵などがある。

(ウ)炉、鋳造土坑、長方形土坑は各ブロックの西側に位置する傾向がある。長方形土坑は踏みタタラの位置を示す可能性がある。

(エ)C群は大型作業場と多数の柱穴があり、数度建て替えが行われていると推定される。

(オ)遺跡は西、北、南へ延びているが、今回調査された地域は密集する遺構からみて遺跡

の中心部とみて差し支えなかろう。

（カ）工場は出吹きのような仮設的、一時的なものでなく、ある期間定着化した施設である。

このように鉾ノ浦遺跡は全国でも発見例が少ない中世の大規模な鋳物工場であることは確実であり、中世の鋳物生産を解明する上で重要な遺跡であるだけでなく、未だ不鮮明な部分の多い中世の太宰府を解明するうえできわめて重要な位置を与えられることは明らかである。

(3) 中世大宰府の鋳物生産

大宰府における中世の生産遺跡は、観世音寺の南前面区域、観世音寺から南へ御笠川を越えた所に位置する御笠川南条坊遺跡、そして今回報告した鉾ノ浦遺跡などが知られている。このうち鉾ノ浦遺跡を除く2遺跡では生産遺構に明確なものは見つかっていないため、鋳型を通してこれら3遺跡の様相を整理しておきたい。

観世音寺前面　古代の範囲で捉えられる鋳型は伽藍近くと寺院東辺部周辺に集中して検出されるが、中世では寺院南面一帯（寺域外／南辺築地の外側）に鋳型をはじめとする鋳造関連遺物がまとまって出土している。鋳型から想定される製品は、華瓶、如意形の雲文を配する柄状製品、磬、錫杖、十一面観音菩薩頭部、如来形化仏などの仏具や仏像が中心であるが、それに混じって刀装具（鞘尻など）や帯金具、蓋（または皿）、三巴文飾り玉、鉤形製品などがある。これらの鋳型は、出土した遺構や層位の年代から13世紀前半頃のものと考えられている。なお鋳造に直接関連する遺構がないことと鋳型の規模から見て、小型の製品が主体を占めていたようである。また立地から観世音寺との関係を切り離して考えることはできないであろう。

さらに寺域東辺部にも中世で捉えられる鋳型の出土を見ており、錫杖及びその環、瓔珞など仏具にかかわるものが中心である。

御笠川南条坊遺跡　遺跡は観世音寺の南正面約500mに位置する。その第2次調査で鋳造に関係すると思われる建物とともに鋳型が多く出土している。鋳型は、華瓶、錫杖及びその環、鉢、瓔珞、雲形状金具、釣手状金具などが知られており、やはり仏具がその中心と言える。遺構や遺物の年代は13世紀前半から中頃と考えられている。

鉾ノ浦遺跡　出土した鋳型はその中心が梵鐘で、龍頭だけでも7種類確認され、梵鐘の一部分と見られる駒ノ爪や縦帯、横帯、乳、撞座などもある。さらに銘文の一部も出土しており「禅」「月」「刹」などが判読できる。他の大型品では仏像の光背とみられる流文や蕨手文を配した板状製品や鍋などの日常品がある。他の鋳型でその形状を知れるものに釣金具があり、別の鋳型と組み合って釣燈篭になるものと思われる。また菩薩頭部や蓮台状製品（華瓶の台座か）、椀（六器）、風招など小型の製品も認められる。このように鋳型の状況からはやはり仏具が中心であるが、鍋を中心とした生活用品もかなりの数量が生産されていたようである。なお遺跡の中心となる時期は、13世紀後半から14世紀初頭である。

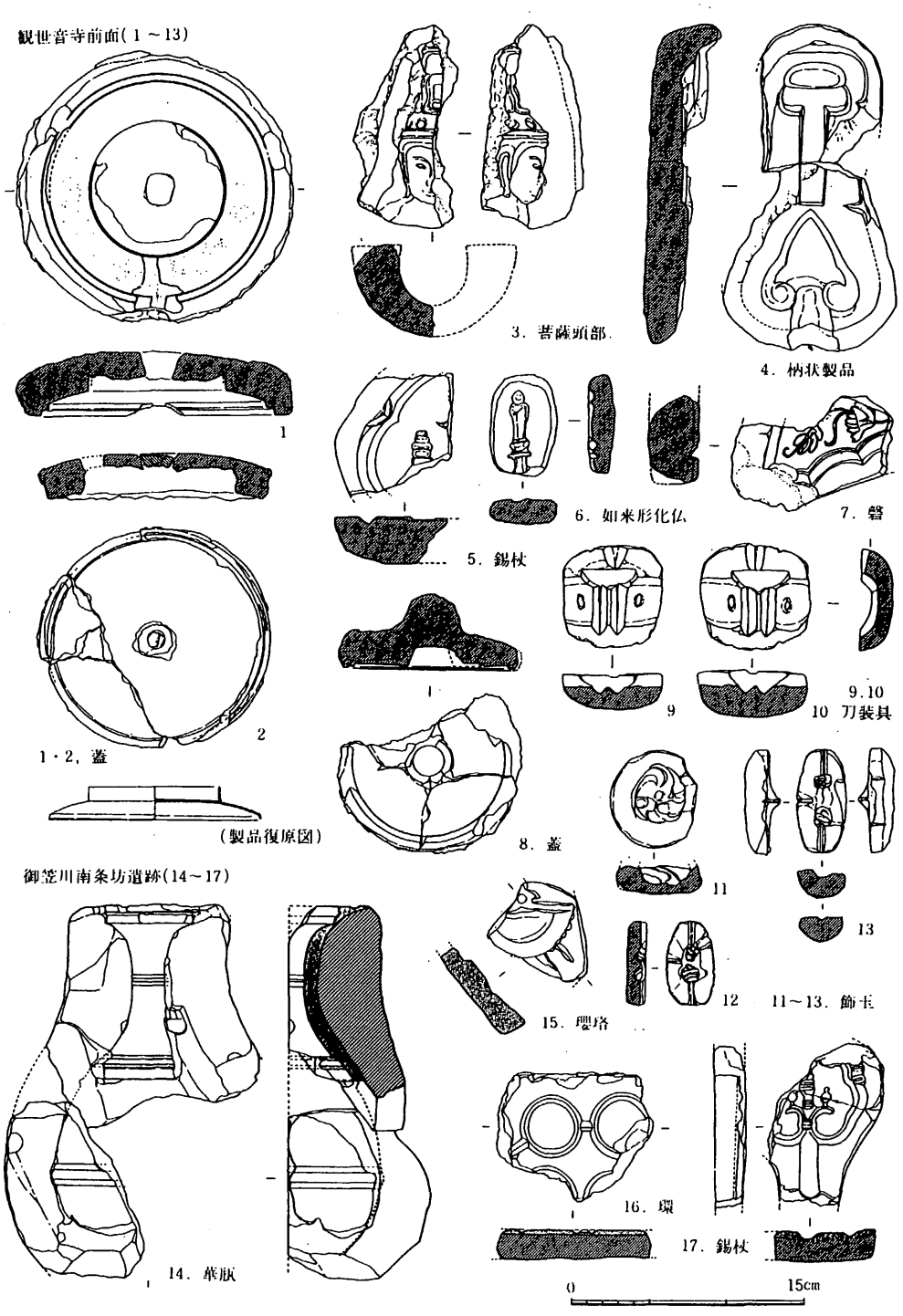


Fig.138　大宰府出土の鋳型（中世）

これら3地点のほかに観世音寺と御笠川南条坊遺跡の中間点付近で調査された、大宰府条坊跡第71次調査地点からも中世の鋳型が多数出土している。ここでは小型の製品が中心で、和鏡、磬、鰐口、三鈷剣、三鈷杵、飾り金具などが出土している。また、政庁正面の広場と考えられている地点にも中世（室町時代か）の火焔文鋳型が出土している。形状から龍頭の可能性も考えられ、それが出土した土壙に近接してH形を呈する遺構があり、梵鐘鋳造土壙の底部分の形状に似ることからここでも鋳造を行った可能性が考えられている。さらにこの地点から川を渡って南へ約300mの条坊跡でも独鈷杵の鋳型が発見されている。

以上を踏まえて中世大宰府の様相を簡単にまとめておくこととしたい。

中世の生産関係遺物がまとまって見出される地点は、観世音寺南面から御笠川南条坊遺跡まで、途中の条坊跡第71次地点を含めて南北約500mの範囲に集中している。古代末期までは寺域内での生産活動が中心であったことと比較すると、律令制崩壊とともに外へ飛び出し生産集団の自立への傾向が窺えるものと言えよう。しかし未だ寺院に対して付かず離れずといった位置に居住し、生産活動を行なっているような状況が想定される。これらが一連のものかどうかは明確ではないが、鋳型から想定される製品の種類が近似していることや、観世音寺から南へ延びる道路に沿って集中的に認められることは、製品運搬の利便性はもちろんのことながら、生産集団が自立へ向かう過程で未だ観世音寺の勢力を必要としていたか、あるいは観世音寺がここで働く鋳物師達を古代とは異なった形で掌握していたかのいずれかが想定されるところである。どうあれ観世音寺とこれらの工房に強い繋がりがあったことは否定できないだろう。

これに対して鉾ノ浦遺跡では、いくつかの工房が集中してひとつの大きな工房を形成していたような景観を呈している。立地の上では先の観世音寺から東へ約700mに位置し、大宰府で中世に勢力を誇っていた安楽寺（太宰府天満宮）からは南へ約1.1kmほど離れている。両者を見据えた位置とも受け取れそうである。ここでの在り方は、梵鐘（龍頭）の鋳型が少なくとも7種類あるという事実から一箇所の供給先を目的にして生産していたとは考えられず、多数の相手にその需要に応じた製品を供給していたものと理解したい。この想定が肯定されるなら、この段階をもって鋳物師たちの真の自立が認められると言えるのではなかろうか。

なお近年の調査成果では、鉾ノ浦遺跡と御笠川の間で15世紀以降の鋳造遺構（大宰府条坊跡第100次調査）が発見されている。この付近は近世に入って六座と称する手工業者集団が活動していたところに近く、六座の中には「平井」という鋳物師が存在していたことが知られている。この「平井」とこれまで紹介してきた各遺跡との関係は未だ明確ではないが、連綿と続く大宰府鋳物師たちの活動が窺えて興味深い。

(2) は本書p5掲載の山本信夫1990、(3) は同じく狭川真一1994をベースにして抜粋、加筆したものである。なお文責は狭川が負う。

Tab2-1　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1	47SK001	土坑　焼土混	R1
2		ピット	S1
3	47SX003	ピット	S1
4		ピット	S1
5		土坑	S1
6		ピット	S1
7	建物B-c	ピット	S1
8	建物C-b	ピット	S1
9	建物D-g	ピット	R2
10	47SK010	土坑　炉か？　焼土混　14c前	R4
11		ピット	R2
12	建物D-h	ピット	R3
13		ピット	S2
14	47SX014	ピット	S2
15		土坑	S3
16	47SX016	ピット	T2
17		ピット	T2
18		ピット	T2
19		ピット	T2
20	47SK020	鋳造土坑　焼土混　460→20と推定　V3区は47SK460	U3
21		ピット	T3
22		ピット	T3
23		ピット	T2
24		ピット	T3
25	47SK025	土坑　焼土混	U3
26		ピット	T3
27		ピット	S3
28		ピット	S3
29	47SD029	溝　S-30と同一遺構と判断される	RS4
30	47SD030	溝　S-29と同一遺構と判断される	5ライン
31		ピット　黄色土埋土	W4
32		ピット　黄色土埋土	W4
33		ピット　黄色土埋土	W4
34	47SX034	ピット　黄色土埋土	W4
35		ピット　黄色土埋土	W3
36	建物A-b	ピット　赤褐色土埋土　焼土混	V2
37	47SX037	ピット	V2
38		土坑	V2
39		ピット	R2
40	47SK040	土坑　40→10	R4
41		ピット	S2
42	建物A-c	ピット	U2
43	建物A-d	ピット	T2
44		ピット	S2
45	47SX045	鋳型集積地　廃棄用？　鋳型片集積、炉壁状片混在　56→61→66→45	R1
46		ピット	S2
47		ピット	Q4
48	建物G-e	ピット　焼土混	R4
49	47SX049	ピット群　建物G-a・bを含む	R5
50	47SK050	土坑	Q2

Tab2-2　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別			地区
51		ピット群	建物F-a・bを含む		S5
52	47SD052	溝	新期　茶色土上面から切り込む		Q1～5
53	47SK053	土坑	炉片		Q1
54		ピット	焼土混		Q1
55	47SK055	土坑	60→55	近世	STU6・7
56		土坑			R1
57		ピット群	建物D-cを含む		Q2
58	47SK058	土坑			Q3
59		ピット群			Q3
60	47SK060	土坑	砂埋土	近世	V7
61	47SD061	溝	61→66		Q1～5
62	47SX062	窪み	62→61		Q4
63	47SK063	土坑	63→49・52、64→63→61		Q5
64		ピット群			Q5
65	47SX065	窪み	黄色粘土埋土　70→65		V10
66	47SD066	溝	45←66→50、61→66		Q1～3
67	47SX067	溝状窪み			T5・6
68		ピット群	建物E-a・bを含む		T5・6
69	47SX069	窪み			U5
70		土坑	焼土混　70下→70→65・85		V9・10
70下	47SK605	鋳造土坑	70下→70→65・85		V9・10
71		ピット			V5
72		ピット群			UV5
73	47SX073	ピット			T6
74	47SX074	ピット			T5
75	47SX075	ピット群	85→75		W11
76	47SD076	小溝	新期の畝状遺構　55→76		T7～8
77	47SD077	小溝	新期の畝状遺構　121→77		T7～8
78	47SD078	小溝	新期の畝状遺構　121→78		S7～8
79		ピット群			R1～5
80	47SK080	土坑	焼土混		TU9・10
81	47SX081	ピット群			UV8
82		ピット			U9
83		ピット			U9
84		ピット	茶褐色土（焼土？）埋土		V8・9
85	47SX085	落ち込み			W8～13
86		ピット群			U9
87	47SX087	ピット			V9
88		ピット群	85→88		W9・10
89		ピット群	70の下層で検出したピット群		V9
90	47SK090	鋳造土坑			U10
91		ピット群			U11
92		ピット群			T10
93		ピット	黄色土埋土		TU11
94	47SX094	ピット	黄色土埋土		U12
95	47SX095	溜まり	鉱滓多量出土　95→100　47SK585の上に被る土		U11
96		土坑	鉱滓多量出土　96→95		V11
97		ピット			V11
98	47SX098	ピット群			U10
99		土坑	99→80		T9

Tab2-3　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別	地区
100	47SX100	炉　95→90→100	U10
101		ピット	T9
102	47SX102	ピット群　黄色土埋土	V13
103	47SX103	ピット　黄色土埋土	T12
104		ピット	T12
105		ピット	V15
106		ピット群	T14
107	47SX107	ピット群	T14
108		ピット	T14
109		ピット群	U15
110	47SK110	土坑　廃棄用　110eは東側に溜まる暗灰褐色土	S13・14
111	47SX111	ピット　110←111←112（114）←113	T13
112	47SX112	ピット	T13
113		ピット	T13
114	(47SX112)	ピット　112の下層と判断	T13
115		土坑　黄色土埋土	V13
116		ピット群　黄色土埋土	T13
117		ピット群　茶色土埋土	U13
118	47SX118	ピット群　茶色土埋土	U13
119	47SX119	ピット群	U13他
120	47SK120	鋳造土坑　220→210→135下→120　この付近では最新	V17
121	47SK121	大土坑　近世の撹乱？　121→201・55→76	U8
122	47SX122	土坑	R18
123		ピット　黄色土埋土	U18
124		ピット群	ST18
125	47SK125	鋳造土坑　200で大半が壊れる　225→125→200→130下	U17
126	47SX126	ピット群　建物H-1-bを含む	TU19
127		溝	U16・17
128		ピット	V18
129		ピット	T16
130	47SX130	窪み　土坑群上面の堆積　130→131→120	TU17
130下	47SK620	鋳造土坑　131←130←130下	U16・17
131	47SX131	窪み　土坑群上面の堆積　130→131→120	UV16
132		ピット	V17
133		ピット	U17
134	(47SX135)	堆積土　135の埋土の一部で色調の違いと判断	V18
135	47SX135	堆積土　135下→135→134・131・120	V16・17
135下	47SK630	鋳造土坑　135下→135→134・131・120	V16・17
136	47SX136	ピット　131→136	V16
137		ピット　黄色土埋土	U16
138		ピット	T16
139	47SK139	土坑　130→139	T16
140		土坑　炉か？　157→130→140	S17
141		ピット　130→141	ST17
142		ピット　140の下に検出	S17
143	47SX143	ピット群	RS17
144	47SX144	ピット	S15
145	47SE145	井戸　石組＋桶　151→145	S18
146		ピット	S16
147	47SD147	溝　焼土、黄色砂入る　147→126	TU19

Tab2-4　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別	地区
148	47SX148	窪み　148→147	ST19
149		ピット	S19
150	47SX150	炉？　150→152、150→145	S18
151	(47SE145)	井戸の一部　151→145	S18
152	47SX152	炉？	T19
153	47SX153	ピット	S13
154		ピット	S12
155	47SK155	鋳造土坑　130→155	S16
156	47SK156	鋳造土坑　156→130→155	S16・17
157		窪み　157→130　157→140	T17
158		ピット	T17
159	47SK159	土坑　159→130	T16
160	47SX160	土坑　土師器坏等埋置　地鎮遺構？	S12
161	建物H-3-b	ピット	V15
162	47SX162	窪み　162→129　162→159	T16
163		ピット群　建物H-3-d・eを含む	T15
164		ピット	S15
165	47SE165	井戸　炉壁出土　180→165	T12
166		ピット	S15
167	47SX167	ピット	S14
168		ピット　168→165	T12
169		ピット	T12
170	47SE170	井戸　180→170	T11
171		ピット　黄色土埋土	S12
172		ピット群　建物E-d・eを含む	S12
173		ピット	S12
174		ピット	S11
175	47SD175	溝　175→180→170、175→85	UV12
176		ピット群	R12
177		ピット　黄色土埋土　176→177	R12
178		ピット	S11
179		ピット　暗灰色土埋土　110→182→179	S13
180	47SX180	礫溜まり　炉床か？	T12
181		ピット群　暗灰色土埋土　110→182→181	S14
182		窪み　110上面の窪みに溜まる堆積土と判断	S13
183	47SX183	ピット　110→183	S13
184	47SX184	ピット　黄色土埋土　110→184→182	S13
185	47SX185	土坑　土師器坏等埋置　地鎮遺構？	R15
186	47SX186	ピット	R15
187		ピット　188→187	R15
188		ピット	R15
189		ピット群	R14
190	47SK190	鋳造土坑　280→240→190	RS14
191		ピット　黄色土埋土	R13
192		ピット　190→192	R13
193		ピット群	V13
194		ピット　黄色土埋土	R11
195	47SX195	窪み	R11
196		ピット	R11
197		ピット　黄色土埋土	R10

Tab2-5　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別			地区
198		ピット			R10
199		ピット群			R10
200	47SK200	鋳造土坑	200→130下		U17
201	47SK201	大土坑	砂溜め？　201→121		S9
202		落ち込み	202→130		U17
203		ピット			U1
204	47SX204	ピット群			T1
205	47SK205	鋳造土坑	205→135下→120		V16・17
206		ピット群			U1
207		ピット群	建物B-c、建物C-a・jを含む		T1
208	建物B-j	ピット	砂埋土		T1
209	建物C-h	ピット			T99
210	47SK210	鋳造土坑	220→210→135下→120		V17
211		ピット群	浅い。建物B-iを含む		T99
212	建物C-m	ピット群			T98
213	建物B-f	ピット群			T98
214		ピット			T99
215		ピット	底面に焼土		U18
216		ピット群			U98
217	47SX217	ピット群		近世	V16
218	47SK218	土坑	焼土詰まる	近世	U19
219		ピット群			U19
220	47SK220	鋳造土坑	220→210→135下→120		V17
221	47SK221	鋳造土坑	221→156→130→155		S16・17
222	47SE222	井戸			U97
223		小溝	黄色土埋土		T99
224		土坑			T99
225	47SK225	鋳造土坑	225→200→130下→130		U17
226	(47SE227)	井戸裏込土			UV94
227	47SE227	井戸	枠内埋土6層に分層、祭祀行為か		UV94
228	47SE228	井戸			T93
229	(47SE228)	井戸裏込土			T93
230	47SK230	土坑	上面黒色土		S98
231		ピット群			S98
232	建物C-l	ピット			S98
233		ピット群	建物B-eを含む		S98
234	建物C-g	ピット			S99
235	47SK235	土坑	焼土埋土　上層は灰白色土が薄く被る		R13
235下	(47SK235)	土坑	235の下から検出、鋳型の溜まり		SR13
236	47SK236	土坑			R98
237	47SX237	ピット			R98
238		ピット群	建物C-eを含む		R99
239	建物B-d	ピット群			S99
240	47SK240	土坑	焼土埋土　280→240→190		S13
241		ピット群	建物C-kを含む		S98
242		ピット群	建物C-dを含む		R1
243	47SX243	窪み			R14
244		ピット			S13
245	47SK245	土坑	焼土埋土		P6
246		ピット群			R13

Tab2-6　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別		地区
247		ピット		Q13
248	47SX248	ピット群	aピットから土錘	Q14
249	47SX249	ピット群		Q14
250	47SX250	炉跡？	炉壁や鋳型が詰まる　炉の底部？	R13
251	47SX251	窪み	焼土詰まる　251→243	R15
252		土坑		R15
253	47SK253	土坑		P7
254	47SX254	ピット群		R14
255	47SX255	溜まり	275上面に薄く被る焼土の堆積	QR13
256	47SX256	ピット群	黄色土埋土	Q15
257		ピット群		R15
258	47SK258	土坑	焼土埋土	P6
259	47SX259	溜まり	上層焼土	Q14
260	47SX260	鋳型集積地	茶色土中にある光背状鋳型の面的な集積地	PQ9
261	47SX261	窪み	焼土埋土、浅い	R15
262	47SX262	ピット	262→259	Q14
263		ピット	261→263	Q15
264		ピット	黄色土埋土	R9
265	47SX265	ピット		Q10
266		ピット群		QR10
267		ピット群		Q10
268		ピット	黄色土埋土	Q9
269		ピット群		Q10
270	47SD270	溝	茶褐色土埋土　茶色土上面から切り込む	Q11
271	47SD271	溝		QR10
272	47SX272	ピット		R10
273		ピット	黄色土埋土	Q11
274		ピット	茶色土上面から切り込む	Q11
275	47SK275	竪穴遺構	灰色土等埋土、床面にピット列あり	Q13
276	47SX276	ピット		Q12
277		ピット群		R12
278		ピット		R12
279	47SX279	ピット		R12
280	47SK280	土坑	280→240→190	R13
281		ピット		R12
282	47SX282	ピット	灰色土埋土　255と一連	R13
283	47SX283	段落ち状	トレンチにより全容不明	QR8
284		ピット		R12
285	47SK285	土坑		Q12
286		ピット		Q13
287		ピット群		Q12
288		ピット群		Q12
289		ピット群		Q12
290	47SK290	土坑		P6
291		ピット	褐色土埋土	Q7
292	47SX292	ピット群		P8
293		ピット群	茶色土上面から切り込む	Q11
294		ピット	茶色土上面から切り込む　294→273	Q11
295		土坑	灰色土・炭埋土	P7
296		窪み		R11

Tab2-7　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別		地区
297		ピット群		R10
298		ピット		R10
299		ピット		R13
300	47SK300	土坑	褐色土埋土	Q9
301		窪み	井戸埋土の窪み　黒斑混灰色土埋土　305→301	Q8
302	47SK302	土坑	灰褐色土埋土	P5
303	47SX303	窪み		Q11
304	47SX304	窪み		Q11
305	47SE305	井戸	焼土埋土	Q8
306	47SX306	ピット群		Q11
307	47SD307	溝	307→270	Q11
308	47SX308	落ち込み	308→307	QR11
309		ピット群		Q11
310	(47SK240)	土坑	S-240の一部分、褐色土及び灰色土埋土	S13
311		ピット群		P8・Q7
312		ピット群	312→260	Q10
313	47SX313	ピット群	313→260	Q8・9
314		窪み	褐色土埋土	R9
315	(47SE305)	井戸裏込土	S-305井戸の裏込土	Q7・8
316	47SX316	ピット		R9
317		ピット	317→316	R9
318		ピット		R9
319		ピット群		Q9
320	47SK320	土坑	灰茶色粘質土埋土	P8・9
321	47SX321	ピット群		R9
322		窪み		Q8
323	47SK323	土坑	褐色土埋土	P9
324		ピット群		P9
325		窪み	茶色土埋土	P8・9
326		ピット	325→326	P9
327		ピット	325→327	P9
328	47SX328	ピット群		P9
329		ピット群		P9
330	47SK330	土坑	廃棄用土坑	P9
331		ピット群		Q8
332		ピット群		Q8
333		窪み	茶色土混入	Q8
334		窪み	灰褐色土混入	Q9
335	47SX335	ピット		Q9
336		ピット群		Q9
337		ピット群		Q10
338		ピット	灰褐色土埋土　344→338→339→270	P10
339		ピット	灰褐色土埋土　344→338→339→270	P10
340	47SK340	土坑	茶褐色土埋土　340→330→342→343→270	O10
341	47SX341	ピット	黒灰色土埋土　343→341	P10
342	47SK342	土坑	茶褐色土埋土	P10
343		窪み	灰黒色土埋土　343→341	P11
344		ピット	灰色土埋土　344→338→339→270	P10
345	47SX345	鋳型集積地	茶色土中における鋳型の集中部分	P12
346	47SX346	溜まり	灰混入	P12

Tab2-8　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別			地区
347		ピット	黄色土埋土		O11・12
348		ピット	黄色土埋土		P11・12
349		ピット			P11
350	47SK350	土坑		350→356	O11
351	47SX351	ピット			P12
352	47SX352	窪み	茶色土埋土		P11
353	47SX353	ピット		354→353	O12
354		ピット			P12
355	47SK355	土坑			O12～14
356	47SX356	ピット			O11
357		ピット			O11
358		ピット			O11
359		ピット			O11
360	47SK360	土坑	茶褐色土埋土	360→387→382（埋土堆積順）	O12
361		溜まり状		360→361	P12
362	47SX362	ピット群	暗灰色土埋土		P12
363		土坑	底部に小窪み	363→364	P12
364		土坑	褐色土埋土		P12
365	47SK365	土坑			P11
366		ピット			P11
367	47SX367	ピット			O12
368	47SX368	ピット	黄色土埋土		T20
369		ピット	黄色土埋土		V19
370		ピット			Q7
371		ピット群			T19
372		ピット	黄色土埋土		U20
373		ピット		374→373	U20
374	47SX374	礫詰遺構	建物の雨落ち溝？		U20
375	47SX375	土坑状	浅い　一部に集石あり		T20
376	47SX376	ピット群			T20
377		ピット群			P13
378	47SK378	土坑			T20
379		ピット群			P13
380	47SX380	炉	3基切り合う	A→B→C	U19
381		ピット群		381→384	P12
382	(47SK360)	土坑	茶褐色土埋土	360の埋土の一部	O13
383	47SK383	土坑	暗灰褐色土埋土（混褐色ブロック）		Q12
384		土坑	暗灰色土埋土	383→384→385	P12
385	47SK385	土坑	暗灰褐色土埋土		P13
386	47SX386	ピット	暗灰色粘質土埋土	386→384→385	Q12
387	(47SK360)	土坑	灰色砂質土埋土	360の埋土の一部	O13
388		窪み	灰色土埋土		P13
389		窪み	浅い堆積	389→388	P12
390	47SX390	溝状の窪み	灰色粘質土埋土	390→388	P13
391		ピット群		391→389	P12
392	47SX392	ピット群		392→390	P13
393		ピット			T20
394		土坑		394→400	S20
395	47SK395	土坑	茶褐色土埋土		S20
396		ピット群		396→400	T21

Tab2-9　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別		地区
397		ピット	397→400	S19
398		ピット群		S19
399		ピット	黄色土埋土	S19
400	47SK400	土坑		S20
401		ピット群		P13
402	47SX402	ピット	茶褐色土埋土　360埋土除去後に検出	012・13
403	47SX403	ピット	灰色粘質土埋土　360埋土除去後に検出	O12
404	47SX404	ピット	灰色粘質土埋土　360埋土除去後に検出	O13
405	47SX405	土坑	浅く、窪み状　429→405→408	P14
406		ピット群		P14
407		溝		P14
408		ピット群		P14
409		ピット群		O14
410	47SX410	ピット	鉱滓つまる	P14
411		ピット群	黄色土埋土	N14
412	47SX412	窪み	灰色粘質土埋土　360←412→405	O14
413		ピット	黄灰白色土埋土	O14
414	47SX414	ピット		O14
415		ピット群	褐色土埋土	O14
416		ピット		Q14
417		ピット群		Q14
418		ピット		Q14
419		ピット	茶褐色土埋土	R15
420	47SK420	土坑	黒褐色土埋土　420下は暗灰色土埋土部分を指す	Q14
421		ピット群	建物H-2-iを含む	R15
422		土坑		R14
423	47SX423	ピット群	建物H-2-jを含む	R14
424	47SX424	ピット		R14
425	47SX425	ピット		N14
426	47SX426	ピット		P14
427	47SX427	ピット	427→426	P14
428		窪み		P14
429		ピット群	429→405	P14
430	47SX430	ピット		Q14
431		ピット群	鉱滓つまる	O16
432	47SX432	ピット		O15
433		ピット群		O15
434	47SK434	土坑	暗灰褐色土・茶褐色土混在する埋土、北辺に炭層	O15
435	47SX435	ピット		T15
436	47SX436	窪み		T14
437		ピット		T14
438		ピット		T14
439		ピット		R13
440	47SK440	土坑		S15
441		ピット		R14
442	47SX442	ピット群		R14
443		ピット		R14
444	47SX444	ピット群		R15
445	47SK445	土坑	焼土埋土	O14
446	47SX446	ピット群		R16

Tab2-10　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別			地区
447	47SX447	ピット			Q15
448		窪み	445の一部（埋土の違い）		O14
449		ピット			Q15
450	47SK450	土坑	下層は灰を含む		Q15
451		ピット群			Q15
452		ピット			Q15
453	47SX453	ピット群			R16
454	47SX454	ピット			R16
455	47SK455	土坑	暗茶褐色土埋土		O15
456		土坑			R16
457	47SX457	ピット群	建物H-2-e・fを含む		Q16
458	47SX458	ピット			Q16
459	47SX459	ピット			P15
460	47SK460	鋳造土坑	遺物ラベルは「V3　S-20」で表示		V3
461	47SX461	ピット群			P15
462	47SX462	ピット	462→434	11c後～	O15
463		ピット群	S-455他の下層ピット		P15
464		ピット群			P16
465	47SX465	窪み	465→469		P17
466		ピット	466→464		P16
467	47SX467	ピット			P16
468	47SX468	ピット群			O16
469		ピット群			P17
470	47SK470	土坑			R18
471	47SX471	ピット			R16
472		ピット			R17
473	47SX473	窪み	472→473		R16
474	47SX474	ピット			Q17
475	47SE475	井戸			Q18
476		ピット群	建物H-2-c・dを含む		Q17
477		ピット			R18
478		ピット			R18
479	47SX479	ピット			R19
480	47SX480	ピット			R20
481		ピット			R19
482		ピット群			R19
483		ピット群			Q19
484	47SX484	ピット			Q19
485	47SK485	土坑	西半分に灰層あり　510→485		Q20
486		ピット群	510→486		Q19
487		土坑	510→487		Q19
488	47SX488	ピット群	510→488		Q19
489		ピット群			Q20
490	47SX490	窪み			Q17
491		ピット群			Q20
492		ピット群	480の下層ピット		R20
493	47SX493	ピット群			R20
494		ピット群	510→494		Q19
495	47SK495	土坑	灰層あり		R16
496	47SX496	ピット群	496→490		Q16・17

Tab2-11　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別			地区
497		ピット群		502→497　建物H-2-bを含む	Q18
498		ピット群		498→473→456	R16
499		土坑			R16
500	47SK500	土坑	黒灰色土埋土	500→472→473→456	R17
501		ピット群		500→501	R17
502	47SK502	土坑		502→475	Q18
503	47SX503	ピット		503→502	Q18
504	47SX504	ピット		510→504→503→502	Q18
505	47SX505	ピット		155←（440→505→495）	S16
506		ピット群		506→515	R19
507		ピット群		507→505	S16
508		土坑		508→500	S17
509		ピット群		509→510	Q19
510	47SK510	土坑			Q19
511		土坑		511→515→482	Q19
512		土坑		512→520	R20
513		ピット群			R21
514	47SK514	土坑			R21
515		土坑		506→515、479→515→481	R19
516	47SX516	ピット群			R21
517	47SX517	ピット群			Q21
518		ピット群			Q2122
519		ピット群			Q22
520	47SK520	土坑			R21
521	47SE521	井戸			R18
522		ピット群			P22
523		土坑	褐色土埋土		P22
524	47SK524	土坑	暗灰色土埋土	下層から奈良期の遺物（灰色砂層）	P22
525	47SX525	ピット			P19
526	47SX526	ピット	暗灰色土埋土		P22
527		ピット群		527→523	P22
528	47SX528	ピット群			P21
529	47SX529	窪み			P21
530	47SE530	井戸			S22
531		ピット群			P19
532	47SX532	ピット群			P19
533		ピット群			P20
534		ピット群			P20
535	47SX535	窪み			P18
536	47SX536	ピット群			P22
537	47SX537	ピット群			P21
538	47SX538	ピット		538→523	P21
539		ピット群			P21
540	47SX540	窪み	550の上に被る堆積土		O18
541	47SX541	ピット群			P21
542	47SX542	窪み			O20
543	47SX543	窪み			O19
544	47SX544	ピット			O20
545	47SX545	窪み	550の上に被る堆積土		P18
546		ピット群			O20

Tab2-12　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別			地区
547	47SX547	ピット群			O20
548		ピット群			O19
549		ピット群			N19
550	47SK550	土坑	黒灰色土埋土	540←550→545→554	OP18・19
551		ピット群		540→552	N18
552		ピット群			O18
553	47SX553	ピット		553→543	N19
554		ピット群			P18
555	47SK555	土坑			O19
556		ピット群		556→540	O19
557		ピット			V19
558		ピット			V19
559		ピット			V19
560	47SK560	土坑			P17
561	47SX561	窪み		561→369	U19
562		ピット群			U19
563		ピット		563→561	U19
564	47SX564	窪み		564→555	O19
565	47SX565	鋳型集積地		565→85	W12
566		ピット		566→545	P18
567	47SX567	窪み		568→567　両者は同一のものか	W17
568		窪み			W17
569		ピット群		569→550	P18
570	47SE570	井戸			S15
571	47SX571	窪み			P17
572	47SX572	ピット群			P17
573	47SX573	ピット群			P17
574		ピット群			O17
575		土坑			N17
576		ピット群			O17
577		ピット群			O17
578		ピット群			O17
579		土坑			O16
580	47SX580	炉		580→95	U11
581		小溝	焼土	581→93	V11
582		ピット	焼土	582→175	U12
583		ピット		583→131	V16
584		土坑		584→420	Q15
585	47SK585	土坑	上層に焼土	585→95	U11
586	47SX586	ピット			Q16
587	47SX587	ピット群	S-500下層ピット		R17
588		ピット群			R17・18
589		ピット			R16
590		土坑	上層に焼土	590→100	U10
591	47SK591	土坑	S-20下層		U3
592		ピット群	褐色土埋土		U3
593		土坑	褐色焼土埋土、下層ピットは建物A-a		V3
594		土坑	594→595→34		V3
595	47SX595	窪み	焼土埋土		V3
595下P	47SX602	ピット群	S-595下面検出		V3

Tab2-13　鉾ノ浦遺跡遺構番号一覧表（別添付図に対応）

S-番号	遺構番号	種　別		地区
596		ピット		V3
597		ピット	S-206床面にあるピット	V17
598	47SX598	ピット	建物C-cを含む	S1
599		ピット	599→581	V11
600	47SE600	井戸	11c後～	R5
601	47SK601	土坑	埋土上面に2条の細い溝が並行する	T11
602～609　欠番				
610	47SX610	炉？	厚く焼けた硬化面	V18

謝辞

本遺跡の調査及び整理、報告書作成にあたって、調査当初から今日まで約18年の歳月が流れるなか実に多くの方々からご援助、ご教示、ご指導等をいただいた。すでに鬼籍に入られた方もあるが、次にご芳名を記して感謝の意を表するものである。しかしあまりにも長い時間を経過しているため、できる限り様々な記録をたどって思い出すよう勉めたが失念してしまった方々も多いと思われる。そうした方々に対しお詫び申し上げるとともに、ご寛恕いただければ幸いである。また調査当初の感激や意欲を持続するのは難しく、多くのご教示をいただいたにも関わらずこうした拙い冊子に留まるを得なかったのは、偏に編者の力量不足によるものであり、この点に関してもお許しいただけることを願うばかりである。

（順不同、敬称略、所属はすべてご指導当時）

坪井清足・山中敏史・杉山洋（奈良国立文化財研究所）　阪田宗彦（奈良国立博物館）
中井一夫（奈良県立橿原考古学研究所）　福岡澄男・山本彰・鋤柄俊夫・江浦洋・中村淳磯・三好孝一・長谷川一英（(財）大阪文化財センター）　包丁道明（美原町教育委員会）
五十川伸矢（京都大学文学部埋蔵文化財研究センター）　西大由（東京芸術大学）　原田一敏（東京国立博物館）　西谷正（九州大学）　田村圓澄・石松好雄・横田義章・横田賢次郎・森田勉・高倉洋彰・高橋章・倉住靖彦（九州歴史資料館）　内田俊秀（京都造形芸術大学）　久保寿一郎（九州大学大学院）　小田和利（福岡県教育委員会）　小西信二（太宰府天満宮文化研究所）　赤熊浩一・浅野晴樹（(財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）　富山直人（神戸市教育委員会）　三宅俊隆、平川清弐（枚方市文化財研究調査会）　塩地潤一・河野史郎（大分市教育委員会）　廉永夏（ソウル大学名誉教授）　片山清（梵鐘研究家）

大宰府条坊跡XVII

太宰府市の文化財　第53集

平成13（2001）年3月

発行　太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺1丁目1番1号

編集　株式会社　海援社

印刷　株式会社　海援社
福岡市博多区光丘町1丁目3番5号

付図　大宰府条坊跡XVIII—鉾ノ浦遺跡（大宰府条坊跡第47次調査）— 略測図（1／150）

太宰府市の文化財第53集　2001年　太宰府市教育委員会